

鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 26

平成 21 年度発掘調査報告 (第 1 分冊)

宇津宮辻子幕府跡

北条時房・顯時邸跡

北条小町邸跡

下馬周辺遺跡

覚園寺旧境内遺跡

平成 22 年 3 月

鎌倉市教育委員会

鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 26

平成 21 年度発掘調査報告

(第 1 分冊)

宇津宮辻子幕府跡

北条時房・頼時邸跡

北条小町邸跡

下馬周辺遺跡

覚園寺旧境内遺跡

平成 22 年 3 月

鎌倉市教育委員会



北条時房・頸時邸跡 第2面全景（西から）



北条小町邸跡 溝5、平場全景（南から）

ごあいさつ

近年、鎌倉の街では古い家屋や店舗の建て替えが相次いでいます。その中で、埋蔵文化財に影響のある工事も多くなっています。このため、個人専用住宅等の建設に際しては、昭和59年度から国・県の補助を受けて鎌倉市教育委員会が調査主体となって発掘調査の実施にあたってまいりました。

先人の遺産である文化財を守ることは、現在に生きる我々の責務であり、市内のおよそ6割の地域が埋蔵文化財包蔵地となっている本市の場合、特に市民の皆様のご理解とご協力なくしては、埋蔵文化財の保存や発掘調査の実施が困難であることは言うまでもありません。

本書は平成15、16及び17年度に国・県の補助を受けて鎌倉市教育委員会が実施した個人専用住宅等の建築に伴う発掘調査の記録として12ヶ所の調査成果を掲載しました。

調査の実施にあたり埋蔵文化財に対する深い御理解をいただくとともに、調査の期間中、物心両面にわたり多大なご協力をいただきました事業者・工事関係者の皆様に心からお礼を申しあげます。

平成22年3月31日

鎌倉市教育委員会

例　　言

- 1 本書は平成21年度の国庫補助事業埋蔵文化財緊急調査に
　　係る発掘調査報告書（第1分冊及び第2分冊）である。
- 2 本書所収の調査地点及び所収分冊は別表・別図のとおり
　　である。
- 3 現地調査及び出土資料の整理は、鎌倉市教育委員会文化
　　財課が実施した。
- 4 出土遺物及び調査に関する図面及び写真等は、鎌倉市教
　　育委員会文化財課が保管している。
- 5 各調査の成果は、それぞれの報告を参照されたい。

総目次

(第1分冊)

ごあいさつ	I
例言	II
本誌掲載の平成15・16・17年度発掘調査地点一覧	IV
平成21年度調査の概観	V
平成21年度発掘調査地点一覧	IX
調査地点位置図	X
1 宇津宮辻子幕府跡 (No. 239) 小町二丁目 390 番 2 外地点	
第1章 遺跡の位置と歴史的環境	5
第2章 調査の概要	9
第3章 検出遺構と出土遺物	14
第4章 まとめ	43
2 北条時房・頼時邸跡 (No. 278) 雪ノ下 236 番 1 地点	
第1章 遺跡の位置と歴史的環境	61
第2章 調査の概要	65
第3章 検出遺構と出土遺物	69
第4章 まとめ	88
3 北条小町邸跡 (No. 282) 雪ノ下一丁目 440 番の一部地点	
第1章 遺跡と調査地点の概観	113
第2章 調査の概略	121
第3章 調査結果	122
第4章 まとめと考察	159
第5章 北条小町邸跡の花粉化石	167
4 下馬周辺遺跡 (No. 200) 由比ガ浜二丁目 39 番 14 地点	
第1章 遺跡の位置と歴史的環境	187
第2章 調査の概要	190
第3章 検出遺構と出土遺物	194
第4章 まとめ	214
5 覚園寺旧境内遺跡 (No. 435) 二階堂字会下 531 番 3 外地点	
第1章 遺跡の位置と歴史的環境	228
第2章 調査の概要	231
第3章 発見した遺構と遺物	233
第4章 まとめ	247

(第2分冊)

例言	II
調査地点位置図	IV
6 長谷小路周辺遺跡 (No. 236) 長谷一丁目 265 番 19 地点	
第1章 遺跡の位置と歴史的環境	5
第2章 調査の経緯と経過	7
第3章 発見した遺構と遺物	9
第4章 まとめ	28
7 円覚寺旧境内遺跡 (No. 434) 山ノ内字西管領屋敷 377 番 1 地点	
第1章 遺跡の位置と歴史的環境	52
第2章 調査の概要	55
第3章 検出遺構と出土遺物	58
第4章 まとめ	80
8 大楽寺跡 (No. 262) 淨明寺四丁目 246 番 1 地点	
第1章 遺跡の位置と歴史的環境	98
第2章 調査の概要	101
第3章 検出遺構と出土遺物	106
第4章 まとめ	127
9 円覚寺旧境内遺跡 (No. 434) 山ノ内字瑞庭山 393 番地点	
第1章 調査に至る経緯	145
第2章 遺跡概観	146
第3章 調査経過	153
第4章 発見された遺構と遺物	156
第5章 まとめ	175
10 笹目遺跡 (No. 207) 笹目町 423 番 2 外地点	
第1章 調査概観	191
第2章 検出された遺構と出土遺物	195
第3章 まとめ	215
11 淨妙寺旧境内遺跡 (No. 408) 淨明寺三丁目 115 番 14 外地点	
第1章 遺跡の立地と環境	233
第2章 調査の経緯と方法	235
第3章 検出された遺構と遺物	238
第4章 まとめ	252
12 円覚寺門前遺跡 (No. 287) 山ノ内字藤源治 947 番 8 地点	
第1章 調査の経緯	267
第2章 遺跡概観	268
第3章 調査経過	274
第4章 発見された遺構と遺物	277
第5章 まとめ	294

本誌掲載の平成15・16・17年度発掘調査地点一覧

第1分冊

遺跡名	所在地	調査原因	遺跡種別	調査面積	調査期間
① 宇津宮辻子幕府跡 ★ (No. 239)	小町二丁目390番2外	個人専用住宅 (地下室)	官衙	62.62m ²	平成16年2月26日 ～平成16年4月3日
② 北条時房・頼時邸跡 ★ (No. 278)	雪ノ下一丁目236番1	個人専用住宅 (杭基礎構造)	城館	22.50m ²	平成16年3月3日 ～平成16年4月5日
③ 北条小町邸跡 ★ (No. 282)	雪ノ下一丁目440番の一部	個人専用住宅 (杭基礎構造)	城館	56.00m ²	平成16年1月16日 ～平成16年2月19日
④ 下馬周辺遺跡 ⑤ (No. 200)	由比ガ浜二丁目39番14	個人専用住宅 (杭基礎構造)	都市	20.60m ²	平成16年5月11日 ～平成16年5月31日
⑥ 覚園寺旧境内遺跡 ⑦ (No. 453)	二階堂字会下351番3外	個人専用住宅 (杭基礎構造)	社寺	30.40m ²	平成16年10月27日 ～平成16年12月10日

第2分冊

遺跡名	所在地	調査原因	遺跡種別	調査面積	調査期間
⑧ 長谷小路周辺遺跡 ⑨ (No. 236)	長谷一丁目265番19	個人専用住宅 (杭基礎構造)	都市	56.00m ²	平成17年2月25日 ～平成17年4月11日
⑩ 円覚寺旧境内遺跡 ⑪ (No. 434)	山ノ内字西管領屋敷377番1	個人専用住宅 (地下室)	社寺	67.34m ²	平成16年7月22日 ～平成16年9月13日
⑫ 大乗寺跡 ⑬ (No. 262)	淨明寺四丁目246番1	個人専用住宅 (杭基礎構造)	社寺	41.50m ²	平成17年2月22日 ～平成17年4月21日
⑭ 円覚寺旧境内遺跡 ⑮ (No. 434)	山ノ内字瑞鹿山393番	個人専用住宅 (杭基礎構造)	社寺	45.00m ²	平成17年1月11日 ～平成17年2月28日
⑯ 笹目遺跡 ▲ (No. 207)	笹目町423番2外	個人専用住宅 (杭基礎構造)	都市	144.75m ²	平成17年12月1日 ～平成18年3月31日
⑰ 淨妙寺旧境内遺跡 ▲ (No. 408)	淨明寺三丁目115番14外	個人専用住宅 (車庫・櫻壁築造)	社寺	28.50m ²	平成17年7月25日 ～平成17年9月2日
⑲ 円覚寺門前遺跡 ▲ (No. 434)	山ノ内字藤原治947番8	個人専用住宅 (杭基礎構造)	都市	36.00m ²	平成17年4月5日 ～平成17年5月13日

★印は平成15年度実施の発掘調査

◎印は平成16年度実施の発掘調査

▲印は平成17年度実施の発掘調査

平成 21 年度調査の概観

平成 21 年度の緊急調査実施件数は、前年度からの継続調査 2 件を含む 20 件であり、調査面積は 808.25 m² であった。これを前年度の 25 件、977.72 m² と比較してみると件数は 5 件の減少となり、調査面積も 169.47 m² の減少となった。しかし調査面積は平均で 1 件あたり 40.41 m² (前年度は 39.10 m²) であり、1 件あたりの調査面積はわずかではあるが、前年度より増加している。

調査原因は個人専用住宅の建設が 17 件、店舗併用住宅の建設が 3 件である。これらの工種別内訳は、鋼管杭打ち工事が 8 件 (40%)、地盤改良工事が 10 件 (50%)、地下室の建設が 1 件、その他が 1 件となっている。今年度も鋼管杭打ち工事や地盤改良工事が発掘調査の主体的な原因 (18 件 : 90%) になっている傾向が顕著にみられた。以下、各地点の調査成果の概要を紹介する。(調査面積及び調査期間等については「平成 21 年度調査地点一覧」を参照。)

1 上杉定正邸跡 (No. 188)

扇ガ谷二丁目に位置し、史跡寿福寺境内の東側に所在している。地盤の柱状改良工事を内容とする個人専用住宅の建築にともなって発掘調査を実施した。

調査の結果、調査区内に幅 1.5m 程度の東西方向の道路状遺構が発見された。当該地の東側山裾にはやぐらが存在しており、やぐら前面の土地利用を考えるうえで重要な発見となった。また出土遺物のなかには板に梵字を記した資料や橋などの貴重な資料も認められている。

2 弁ヶ谷遺跡 (No. 249)

材木座四丁目に位置し、地元で弁ヶ谷と呼ばれる谷戸のうち、西側に展開する支谷の奥まった場所に所在している。当該地は谷戸の入り口部分に比べ、10 メートル程高い場所である。鋼管杭の設置工事を内容とする個人専用住宅の建築にともない発掘調査を実施した。

調査の結果、現況の敷地は近現代の造成によって大きく嵩上げされたものの、谷戸の中腹部にも中世には礎石を用いた建物が作られていたことが明らかになった。

3 若宮大路周辺遺跡群 (No. 242)

小町二丁目に位置し、扇ガ谷と小町の間を南へ流下する扇川の左岸に接している。鋼管杭の設置工事を内容とする個人専用住宅の建築にともない、発掘調査を実施した。

調査の結果、中世の整地層上に柱穴列や土坑、溝などが発見された。溝は幅約 1.5m で東西方向に走っており、中世には扇川へ流下していたらしいことが明らかになった。

4 新善光寺跡 (No. 284)

材木座四丁目に位置し、弁ヶ谷と呼ばれる谷戸の中央にある過去に行われた宅地造成地の一画を占めている。地盤の柱状改良工事を内容とする個人専用住宅の建築にともない、発掘調査を実施した。

調査の結果、大型の泥岩塊を用いた中世の整地層が発見された。その上には柱穴などの生活痕跡が確認でき、谷戸の中の土地利用の一端が明らかになった。

5 若宮大路周辺遺跡群 (No. 242)

小町二丁目に位置し、若宮大路東側に平行して通る道路 (小町大路) に面している。鋼管杭の設置工事を内容とする個人専用住宅の建築にともない、発掘調査を実施した。

調査の結果、柱穴などの建物跡のほか、小町大路に並行する木組みの溝が発見された。その位置などから中世小町大路の側溝と考えられる。

6 田楽辻子周辺遺跡 (No. 33)

浄明寺一丁目に位置する。滑川左岸にあり、北へ開口する谷戸から流下してきた支流との間にあたる。鋼管杭の設置工事を内容とする個人専用住宅の建築にともない、発掘調査を実施した。

調査の結果、中世の柱穴などが発見されたほか、その下層からは古墳時代以前の流路跡が出土した。

7 弁ヶ谷遺跡 (No. 249)

材木座六丁目に位置する。弁ヶ谷と呼ばれる谷戸の中央、豆腐川の右岸に接している。地盤の柱状改良工事を内容とする個人専用住宅の建築にともない、発掘調査を実施した。

調査の結果、泥岩による整地層上に 13 世紀半ばから 14 世紀にかけて作られた礎石列や柱痕の残る柱穴が発見され、大型の建物が存在していたことが明らかになった。豆腐川の護岸や、木樋も出土した。

8 米町遺跡 (No. 245)

大町二丁目に位置し、県道鎌倉・葉山線の南に接している。深基礎工事を行う個人専用住宅の建築にともない、発掘調査を実施した。

調査の結果、14 世紀の板壁建物などが出土し、整地層は 3 面を確認することができた。中世「米町」の様子を知る上で貴重な遺構である。

9 川越重頼邸跡 (No. 270)

浄明寺五丁目に位置し、秋迦堂谷と呼ばれる谷戸の入り口付近にある。鋼管杭の設置工事を内容とする個人専用住宅の建築にともない、発掘調査を実施した。

調査の結果、14 世紀から 15 世紀にかけての整地層と、その上面で柱穴やかわらけ溜などの遺構を確認した。調査区を南北方向に通る溝も出土している。調査地の地盤面は西側に接する道路面から 1 m 以上高く、遺構面も道路面より高い位置で確認した。

10 材木座町屋遺跡 (No. 261)

材木座六丁目に位置する。地盤の柱状改良を行う個人住宅の建築に伴い、発掘調査を実施した。

調査の結果、13 世紀後半から 15 世紀にかけての遺構・遺物が出土した。整地層は 3 面存在し、上面では土坑や柱穴列、礎石など、中世の生活痕跡を確認した。

11 大倉幕府跡 (No. 253)

雪ノ下三丁目に位置する。鶴岡八幡宮の東側にあたり、中世鎌倉の中心地であった場所である。地盤の柱状改良工事を行う個人専用住宅の建築にともない、発掘調査を実施した。

調査の結果、中世の整地層が 10 面にわたり確認でき、礎板をもつ柱穴や煮地境と思しき木組みの構などが発見された。開炉裏の跡や格子戸の材なども出土している。開幕時の遺構は確認できなかつたが、15 世紀代のかわらけが多く出土した。当該期の良好な資料である。

12 下馬周辺遺跡 (No. 200)

由比ガ浜二丁目に位置する。県道鎌倉・葉山線に面した場所にある。地盤の柱状改良を行いう自己用店舗併用住宅の建築に伴い、発掘調査を実施した。

調査の結果、13 世紀から 14 世紀にかけての 4 時期にわたる生活面が発見でき、土坑のほか、方形竪穴建物の痕跡が出土した。方形竪穴建物は数基が切り合っており、中世にこの場所が商業地としての機能をもつ町並みの一画であることが明らかとなった。

13 若宮大路周辺遺跡群 (No. 242)

小町一丁目に位置する。小町通り沿いの、北西から流下して来た扇川が暗渠化する場所にある。鋼管杭の設置工事を行う自己用店舗併用住宅の建築に伴い、発掘調査を実施した。

調査の結果、現地表下 1.2m の深さから砂礫層が出土した。出土遺物の様相から、古墳時代から古代にかけて流れていた河道と考えられる。当時の鎌倉の自然地形を考える上で貴重な発見である。

14 横小路周辺遺跡 (No. 259)

二階堂字稻葉越に位置する。二階堂川の南岸、浄明寺側より延びる丘陵の裾にある。地盤の柱状改良を行う個人住宅の建築に伴い、発掘調査を実施した。

調査の結果、13世紀後半から14世紀代にかけての整地層が確認でき、かわらけ溜りや柱穴列などが発見された。調査区南側では丘陵裾の岩盤を平らに削った上に柱穴が複数穿たれており、居住地の拡張の様子も明らかになった。

15 大倉幕府跡 (No. 253)

雪ノ下三丁目に位置する。県道金沢鎌倉線の北側にあり、地盤の柱状改良を行う個人住宅の建築に伴い、発掘調査を実施した。

調査の結果、中世では13世紀前半から14世紀代にかけての整地層・生活面が15層以上確認され、常滑の大甕埋設構造のほか、凝灰質砂岩（鎌倉石）の切石で周囲を囲んだ墓壇状の整地層も発見された。最下層では古墳時代の土器も出土し、古代以前の土地利用の一端が明らかとなった。

16 台山遺跡 (No. 29)

山ノ内宇藤原治の丘陵中腹に位置する。地下室を設置する個人住宅の建築に伴い、発掘調査を実施した。

調査の結果、13世紀後半から14世紀代にかけての遺構・遺物が出土した。丘陵の岩盤上に盛土を行つて斜面を平らにし、建物を建てていたことが明らかとなった。中世に行われた丘陵地の造成の好例である。

17 若宮大路周辺遺跡群 (No. 242)

小町三丁目に位置する。小町大路の東側、史跡東勝寺跡への入り口付近にある。地盤の柱状改良を行う個人住宅の建築に伴い、発掘調査を実施した。

調査の結果、中世の整地層や柱穴などの遺構・遺物が出土した。中世の石組みの井戸や、大型の泥岩塊による厚い地形も確認できている。なお、現況地盤面から60cmほどで地山が検出された。

18 安国寺跡 (No. 174)

山ノ内宇東管領屋敷に位置する。主要地方道横浜鎌倉線の北側に面する場所にある。鋼管杭工事を行う個人住宅の建築に伴い、発掘調査を実施した。

調査地の地盤面は現況道路面から約1mほど高いが、約30cmの深さから遺構・遺物が検出できる。13世紀後半から15世紀にかけての遺構・遺物が出土した。整地層は4面存在し、上面では土坑や柱穴など、生活の痕跡を確認した。

19 北条小町邸跡 (No. 262)

雪ノ下一丁目に位置する。若宮大路から若干東側へ離れた場所にある。地盤の柱状改良を行う個人住宅の建築に伴い、発掘調査を実施した。

20 法泉寺跡 (No. 182)

扇ガ谷四丁目に位置する。海藏寺の存する谷戸内にあり、鋼管杭工事を行う個人住宅の建築に伴い、発掘調査を実施した。

平成21年度発掘調査地点一覧

	遺跡名	所在地	調査原因	遺跡種別	調査面積	調査期間
1 ★	上杉定正邸跡 (NO.188)	福力谷二丁目19番2	店舗併用住宅 (地盤の柱状改良)	城館	25.00m ²	平成21年4月16日 ～平成21年4月10日
2 ★	舟ヶ谷遺跡 (NO.249)	材木座四丁目59番8	個人専用住宅 (鋼管杭構造)	都市	58.75m ²	平成21年2月17日 ～平成21年4月14日
3	若宮大路周辺遺跡群 (NO.242)	小町二丁目19番外	個人専用住宅 (鋼管杭構造)	都市	35.00m ²	平成21年4月5日 ～平成21年5月12日
4	新善光寺跡 (NO.284)	材木座四丁目57番4	個人専用住宅 (地盤の柱状改良)	都市	50.00m ²	平成21年4月14日 ～平成21年6月10日
5	若宮大路周辺遺跡群 (NO.242)	小町二丁目36番17	個人専用住宅 (鋼管杭構造)	都市	30.00m ²	平成21年4月17日 ～平成21年6月1日
6	田楽辻子周辺遺跡 (NO.33)	淨明寺一丁目55番6外	個人専用住宅 (鋼管杭構造)	都市	39.00m ²	平成21年4月22日 ～平成21年5月19日
7	舟ヶ谷遺跡 (NO.249)	材木座六丁目64番2	個人専用住宅 (柱状改良工事)	都市	49.50m ²	平成21年6月15日 ～平成21年8月28日
8	米町遺跡 (NO.245)	大町二丁目23番5	個人専用住宅 (深基盤)	都市	55.00m ²	平成21年6月22日 ～平成21年8月31日
9	川越重姫跡 (NO.270)	淨明寺五丁目318番1の一部	個人専用住宅 (鋼管杭構造)	城館	74.00m ²	平成21年6月30日 ～平成21年9月30日
10	材木座町屋遺跡 (NO.261)	材木座六丁目74番4外	個人専用住宅 (地盤の柱状改良)	都市	45.00m ²	平成21年7月21日 ～平成21年8月26日
11	大倉幕府跡 (NO.253)	雪之下三丁目693番8	個人専用住宅 (柱状改良工事)	官衙	33.00m ²	平成21年9月14日 ～平成21年11月20日
12	下馬周辺遺跡 (NO.206)	由比ガ浜二丁目113番5外	自己用店舗併用住宅 (地盤の柱状改良)	都市	12.00m ²	平成21年10月13日 ～平成21年11月13日
13	若宮大路周辺遺跡群 (NO.242)	小町一丁目65番28	自己用店舗併用住宅 (鋼管杭構造)	都市	20.00m ²	平成21年11月4日 ～平成21年11月24日
14	横小路周辺遺跡 (NO.259)	二階堂字新葉越856番5	個人専用住宅 (地盤の柱状改良)	都市	41.00m ²	平成21年11月4日 ～平成21年12月28日
15	大倉幕府跡 (NO.253)	雪之下三丁目648番3	個人専用住宅 (柱状改良工事)	官衙	42.00m ²	平成21年11月24日 ～平成22年2月19日
16	台山遺跡 (NO.29)	山ノ内字藤原治860番1	個人専用住宅 (地下室)	集落	30.00m ²	平成22年1月12日 ～平成22年2月17日
17	若宮大路周辺遺跡群 (NO.242)	小町三丁目418番5	個人専用住宅 (地盤の柱状改良)	都市	58.00m ²	平成22年1月21日 ～平成22年3月24日
18 ◎	安國寺跡 (NO.174)	山ノ内字東菅原147番9外	個人専用住宅 (鋼管杭構造)	社寺	46.00m ²	平成22年2月12日 ～平成22年3月31日
19 ◎	北条小町邸跡 (NO.262)	雪之下一丁目421番1	個人専用住宅 (柱状改良工事)	城館	27.00m ²	平成22年3月29日 ～平成22年3月31日
20 ◎	法泉寺跡 (NO.182)	丽力谷四丁目518番8	個人専用住宅 (鋼管杭構造)	社寺	38.00m ²	平成22年3月29日 ～平成22年3月31日

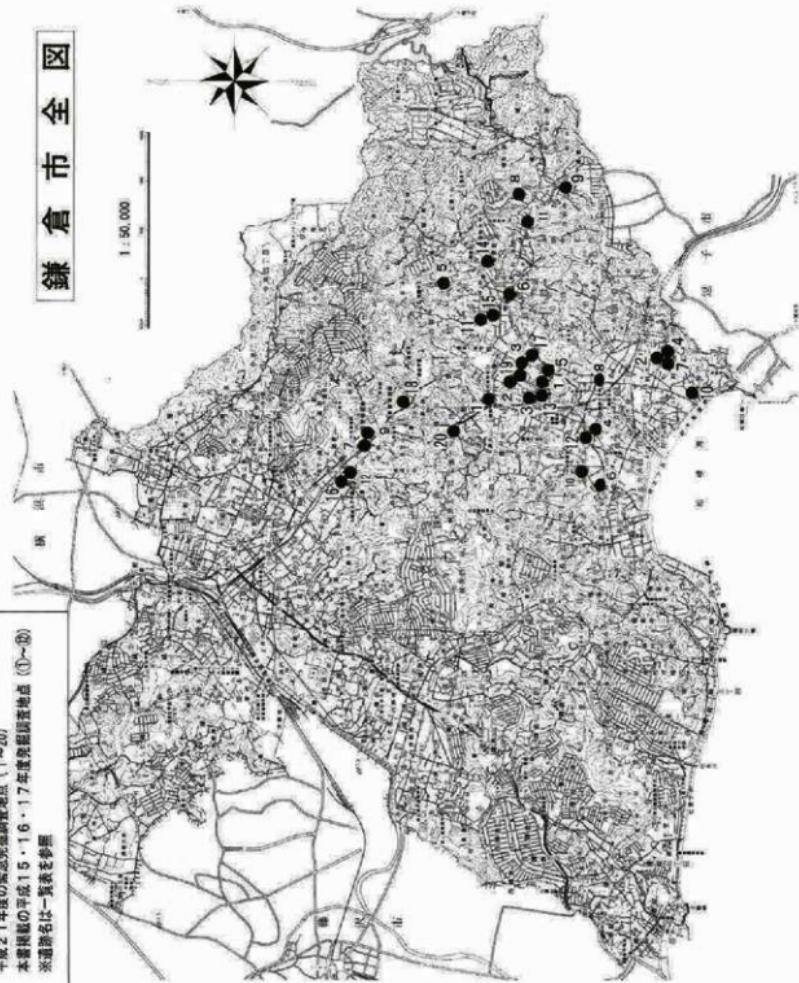
★印は平成20年度からの継続調査を示す。

◎印は平成22年度への継続調査を示す。

鎌倉市全図

平成21年度の監視点調査地点（1～20）
本書掲載の平成15・16・17年度監視調査地点（①～⑫）
※地名は一覧表を参照

1 : 50,000



う つのみやす しばく ふあと
宇津宮辻子幕府跡 (No. 239)

小町二丁目390番2外

例　　言

1. 本報文は、宇津宮辻子幕府跡（No.239）の所在する遺跡内、小町二丁目390番2外地点における個人専用住宅（地下室）建設に伴う緊急調査報告書である。
2. 発掘調査は、平成16年2月26日から同年4月3日にかけて、調査面積62.62 m²を対象に鎌倉市教育委員会が実施した。
3. 調査体制は以下の通りである。
現地調査
調査担当者：原　廣志
調査員：本城　裕・須佐仁和・早坂伸市・中川健二
調査補助員：古田士俊一・宇都洋平・高橋拓也・小野夏菜・佐原恵美子・嶋田久恵・野崎美帆・山口正紀（鶴見大学）・橋本和之・原　考史（国士館大学）・鎌苅春也・福田淳史
整理作業
調査員：宇都洋平・菊川　泉・須佐直子・梅岡ケイト・小野夏菜・山口正紀
調査補助員：高橋奈美・平井里永子（鶴見大学生）
協力機関名：鎌倉考古学研究所
4. 本報の執筆は、第1章～第3章を宇都が行い、第4章については調査員協議のもと宇都が稿を草した。また遺物実測、挿図、写真図版作成は菊川・須佐（直）、梅岡・小野・山口・高橋・平井が行った。
5. 本報掲載の写真は全景・遺構を須佐（仁）・宇都・野崎があたり、出土遺物を須佐（仁）が撮影した。
6. 発掘調査における出土遺物・図面類・写真などの資料は、鎌倉市教育委員会が保管している。
7. 本報の凡例は以下の通りである。
 - ・図版縮尺　全測図：1/80 遺構図：1/40 遺物図：1/3
 - ・遺構図版　遺構のレベルは海抜標高の数値を示している。
 - ・遺物図版　――は軸測の範囲を示す。黒塗りは主に灯明皿に付着の油煤煙や漆器の朱漆文様を表現している。遺物観察表における手捏ねかわらけ底径計測値は外底指頭痕と口縁部の稜部の数値を表している。
 - ・使用名称　本報中の「土丹」は三浦・葉山岩層の泥岩のことである。
8. 現地調査及び資料整理においては、多くの方々からご助言、並びにご協力を賜った。記して感謝の意を表したい。（敬称略、五十音順）
秋山哲雄・池谷初恵・伊丹まさか・岡　陽一郎・小野正敏・河野兼知郎・菊川英政・五味文彦・佐藤仁彦・汐見一夫・宗義秀明・宗義富貴子・鈴木絵美・鈴木弘太・閑　幸彦・手塚直樹・野本賢二・鈴盛旭・福田　誠・松尾宣方・松吉人樹・馬渕和雄・宮田　眞

本文目次

第1章 遺跡の位置と歴史的環境	5
1. 遺跡の位置	5
2. 遺跡の歴史的環境	5
第2章 調査の概要	9
1. 調査の経緯と経過	9
2. 測量軸の設定	9
3. 層序と生活面	11
第3章 検出遺構と出土遺物	14
1. 検出した遺構	14
2. 出土した遺物	25
第4章 まとめ	43

挿図目次

図1 調査地点と周辺遺跡	6
図2 グリッド配置図	10
図3 国土座標位置図	11
図4 調査区中央土層堆積図	12
図5 上層遺構全測図	13
図6 下層遺構全測図	14
図7 土坑1・2・5、溝1	15
図8 土坑4、ピット14・15	16
図9 土坑9・10・12・13・18	17
図10 土坑16・17・20～22	18
図11 土坑19・27	19
図12 各土坑・ピット	20
図13 井戸1	21
図14 井戸2上層遺物出土状況	22
図15 井戸3・4、土坑33・34	23
図16 ピット6～9・17	24
図17 土坑1・2・4出土遺物	26
図18 土坑5・6・8出土遺物	27
図19 土坑9～15・17・18出土遺物	28
図20 土坑19出土遺物(1)	30
図21 土坑19出土遺物(2)	31
図22 土坑20・22～24・27出土遺物	33
図23 土坑30・32・34・35出土遺物	34
図24 井戸1出土遺物	35
図25 井戸2出土遺物(1)	36
図26 井戸2出土遺物(2)	37
図27 井戸2出土遺物(3)	38
図28 井戸3出土遺物	39
図29 溝1出土遺物	40
図30 ピット11・22・32・34・37～39出土遺物	41
図31 遺構外出土遺物	42

図 版 目 次

図版 1	1. 上・下層遺構全景（北から） 2. 同上調査区北西域（西から） 3. 同上調査区 南西域（西から）	45
図版 2	1. 土坑2遺物出土状況 2. 土坑8 3. 土坑5遺物出土状況 4. 同左土層断面 5. 土坑11 6. 同上土層断面 7. 土坑12 8. 同上土層断面	46
図版 3	1. 土坑15遺物出土状況 2. 土坑18 3. 土坑19遺物出土状況 4. 土坑20土層断面 5. 土坑22 6. 同左土層断面 7. 井戸1・2、溝8、P15	47
図版 4	1. 井戸1（井戸木枠上層） 2. 同上（井戸木枠下層） 3. 井戸1（井戸枠組方） 4. 井戸2 5. 井戸2（中層出土遺物） 6. 井戸2土層断面 7. 井戸4	48
図版 5	1. 土坑1 2. 土坑2 3. 土坑4 4. 土坑6	49
図版 6	1. 土坑5 2. 土坑8 3. 土坑9 4. 土坑12 5. 土坑13 6. 土坑14 7. 土坑15	50
図版 7	1. 土坑19	51
図版 8	1. 土坑20 2. 土坑22 3. 土坑23 4. 土坑24 5. 土坑27 6. 土坑30 7. 土坑35 8. 土坑34	52
図版 9	1. 井戸1上層 2. 井戸1下層 3. 井戸2上層 4. 井戸2中層	53
図版 10	1. 井戸2中層 2. 井戸2下層 3. 井戸3	54
図版 11	1. 溝1 2. P11 3. P22 4. P32 5. P34 6. P37 7. 遺構外	55

第1章 遺跡の位置と歴史的環境

1. 遺跡の位置

本調査地点は旧鎌倉市街地を形成する平野地の東端に位置し、JR 鎌倉駅より北東方に約470m、小町二丁目390番2外に所在する（図1）。

鎌倉旧市街は鶴岡八幡宮から由比ガ浜にかけて伸びる若宮大路を中心として、南北に今小路・小町大路、またこれらに直行するように横大路など数本の道路により区画されている。これらの周辺地域を神奈川県遺跡台帳では「若宮大路周辺遺跡群（No.242）」として登録されているが、この内に囲まれるように「北条時房・頼時邸跡（No.278）」、「北条小町邸跡（No.282）」、「宇津宮辻子幕府跡（No.239）」が別登録されている。

本調査地点の遺跡名である「宇津宮辻子幕府跡」は「北条小町邸跡」に南接するかたちで、若宮大路二ノ鳥居までの南北約300m、若宮大路東側から小町大路西側までの東西約150mの範囲が遺跡登録されており、調査地点はこの遺跡の南東隅に位置している。

2. 遺跡の歴史的環境

源頼朝の開府時、幕府政庁は大倉の地に置かれた。『吾妻鏡』によれば、治承四年（1180）年十月六日に鎌倉入りを果たした頼朝は九日には懐島景能を奉行として御所の作事を命じており、十五日には御所入りしている（註1）。この大倉の地に作られた「大倉御所」は頼朝・頼家・実朝の源氏三代の御所として使用されており、大倉に開府当初の幕府が置かれた理由としては、四神相応の地であった事や、古代から中世初めにおいての六浦道の重要性が指摘されている（松尾1993・山村1997）。

しかし実朝が公暁により暗殺され、鎌倉幕府第四代將軍として藤原頼経が承久元（1219）年七月十九日に鎌倉入りをすると、同じ大倉にある北条義時邸内に新造された御所へ入ることとなり、大倉御所は頼朝の妻である政子の居住の場となるが、同年十二月二十四日に失火により大倉御所は灰燼に帰してしまう（註2）。この後大倉御所はこの後再建されることなく頼経は義時邸南御所で居住するが、嘉祐元（1225）年十月三日に北条泰時・時房により宇津宮辻子付近に御所を移転する話が論議され、同年十二月五日に上棟式、同月二十日に頼経が宇津宮辻子御所へ移っている（註3）。

宇津宮辻子御所については松尾剛次（1993）によりその範囲が想定されている。これによると伊賀朝行勝長寿院前邸内に存在した頼経の寝所から宇津宮辻子御所の北西隅まで東西二百五十六丈五尺、南北六十一丈とし、御所の範囲を東西二十二丈八尺五寸以上、南北十六丈八尺以上としている。また御所の西頬が若宮大路と接していない可能性を挙げている。なおこの宇津宮辻子御所の名前にもある「辻子」についてであるが、鎌倉内に存在した辻子について狹義では様々な見解があるが（註5）、広義においては「東西にはしる小さな道」と解釈しても差し支えはないであろう。また「宇津宮」については鎌倉において葛西ヶ谷や比企ヶ谷・千葉地のようにそこに屋敷地を領していた御家人の苗字を地名として残しているところがある（註6）。よってこの辻子に面した一角に宇都宮一族の屋敷地（もしくは跡地）が存在していたものと考えられる。

『吾妻鏡』によると宇津宮辻子御所には「南門」・「東御門」・「中門」・「北土門」などの門や「寝殿」・「二棟御所」・「小御所」・「竹御所」・「持仏堂」・「東小侍所」・「西侍所」・「車寄戸」・「納殿」・「釜殿」・「馬場殿」・「贊殿」・「渡殿」・「御台所」・「進物所」・「休所」・「御車宿」・「御厩」などの施設、「南庭」・「北小庭」が存在

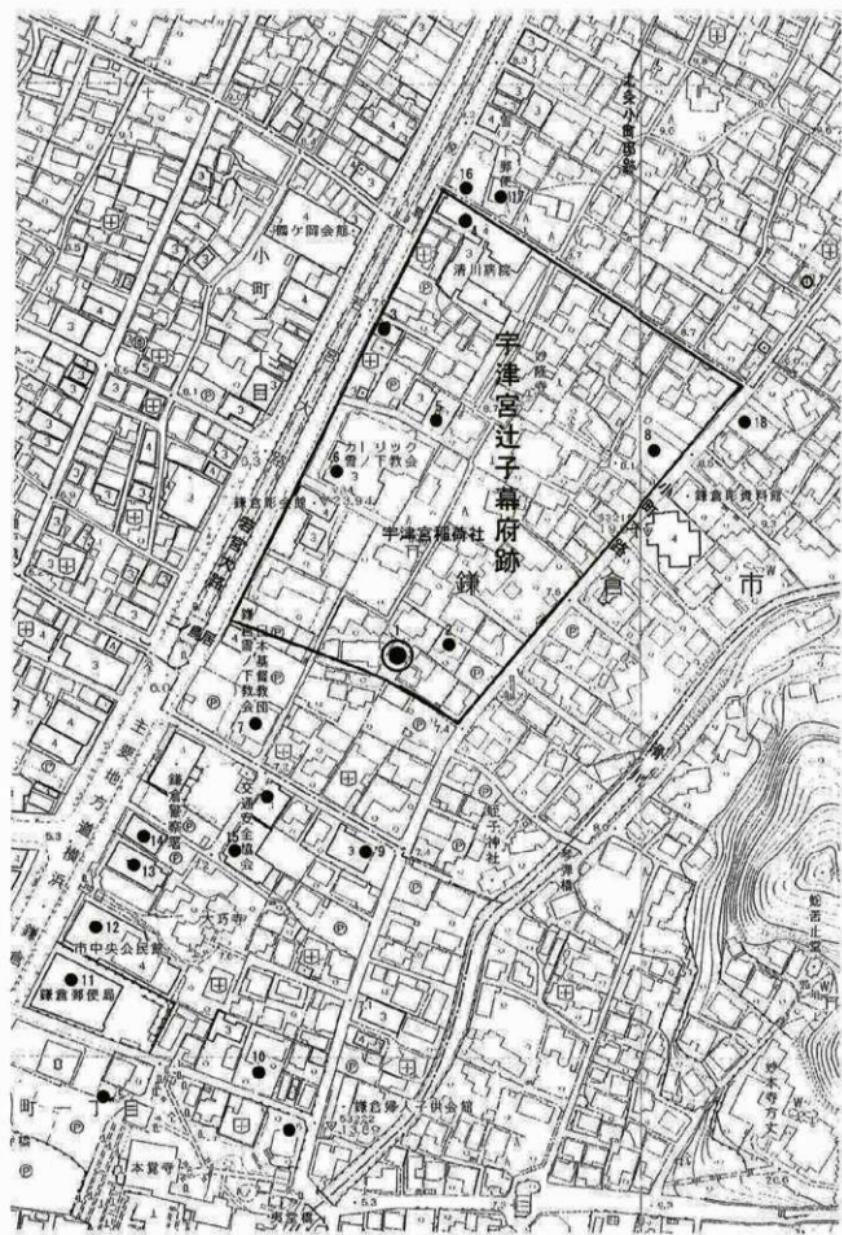


図1 調査地点と周辺遺跡

していたことが分かるが、御所移転からわずか1年後の嘉祐二(1236)年八月四日、頼経の疱瘡・腫れ物が土公の祟りと関係しているとのことで御所は北側の区画に移され、宇津宮辻子御所はその短い役目を終える事となる。

当遺跡は本地点以外に若宮大路沿いで5件、小町大路沿いで2件の調査が行われている。若宮大路沿いの調査地点の内小町二丁目 366-1 番他地点では中世の生活面は近世の掘削により確認されていないが、地山面より、一括で13世紀初頭から15世紀初頭に属すると思われる若宮大路側溝及び大路側溝に直行する溝、建物、柵列、井戸が検出されている。遺物については土壤2とした遺構からは板碑伝が、また大路側溝1とした遺構の上層木器堆積層からは「多胡郷 嘉賀口」と記された墨書き木管が出土している。小町二丁目 361-1 地点も同様に中世の生活面は近世の掘削により失われている。検出された遺構としては小町二丁目 366-1 他地点と同様、若宮大路側溝、柱穴列、柱穴などがある。

小町二丁目 354番2地点では二時期の生活面が確認されている。第1面とした14世紀前半の生活面では柱穴、道路状遺構、溝状遺構、土壤が検出されており、第2面からは南北五間・東西六間を最大建物面積とする掘立柱建物が9軒、橋脚、土壤、柱穴列、溝状遺構、井戸等が検出されている。

小町二丁目 354番12外地点も13世紀中～14世紀中葉と考えられる第1面と13世紀前～中葉と考えられる二時期の生活面が確認されており、第2面からは東西三間・南北三間の規模を持つ掘立柱建物、柱穴列等が検出されている。

小町大路沿いの小町二丁目 389番1地点では13世紀前半から15世紀前半の四時期の生活面が検出されており、この内1期～2B期では掘立柱建物が検出されており特に1期の建物は大きな屋敷地の一部との可能性が示されている。また小町二丁目 373番1地点では小町大路西側の木組みの側溝及び、若宮大路と平行する木組みの溝(溝2)が検出されており、この溝2からは「三丈 口きのやまの口口宗口」と墨書きされた木簡が出土している。

く註

1 『吾妻鏡』治承四年十月六日条

「着御于相模国。嵐山次郎重忠爲先陣。千葉介常胤候御後。九是巡從軍士不知幾千万。楚忽之間未及營作沙汰。以民家被定御宿所云々」

『吾妻鏡』治承四年十月九日条

「爲大庭平太景義奉行。被始御亭作事。但依難致合期沙汰。暫點知家事兼道山内宅被移築「立之」(後略)」

『吾妻鏡』治承四年十月十五日条

「武衛始入御鎌倉御亭。此間爲景義奉行所令修理也」

2 『吾妻鏡』承久元年七月十九日条

「左大臣道家公賢息ニ二歳。母公姫卿女。健保六年正月十六日寅刻誕生。下向關東。(中略)今日牛越入鎌倉。着于右京權大夫義時朝臣大倉亭。郭内南方。此間構新造屋。(後略)」

『吾妻鏡』承久元年十二月廿四日条

「子魁故右府將軍亭當時二品居所。焼亡。失火云云。(後略)」

3 『吾妻鏡』嘉祐元年十月三日条

「相州、武州參御所給。當御所可被移於宇津宮辻子之由有其沙汰。(後略)」

『吾妻鏡』嘉祐元年十二月五日条

「新御所上棟也。相州、武州監臨。(後略)」

『吾妻鏡』嘉祐元年十二月廿条

「今日若君有御移徒之儀。申一點御出。御狩衣。御騎馬。午刻之由雖載勘文、推移如此。(後略)」

4 宇津宮辻子御所の推定地については高柳光寿(高柳1959)と松尾剛次(松尾1993)の二説があるが、松尾説の方がより自然な解釈を受け止められるため、ここでは松尾の説を採用することとする。

- 5 たとえば高柳 1959・大三輪 1985・石井 1989・山村 1997など
6 千葉地については中世までその地名がさかのぼる事が出来るのか若干の疑問が残る。

×引用・参考文献×

- 石井 進 1989 「大路・小路・辻子・辻」石井進・大三輪龍彦編『よみがえる中世3 武士の都鎌倉』平凡社
- 伊藤正義 1991 「鎌倉・大倉幕府から宇都宮辻子幕府へ 御所の破却と政権の再生」「吾妻鏡」の総合的研究】
- 岡陽一郎 2006 「鎌倉の変容」小野正敏・萩原光雄編『鎌倉時代の考古学』高志書院
- 河野眞知郎 1995 『中世都市鎌倉 遺跡が語る武士の都』講談社選書刊行会 講談社
- 国史大系編集会 1971 『新訂増補国史大系 吾妻鏡』吉川弘文館
- 高柳光寿 1959 『鎌倉市史 総説編』吉川弘文館
- 田代郁夫ほか 1992 「宇津宮辻子幕府跡 小町二丁目 354番12外地点」「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書9-3」鎌倉市教育委員会
- 田畠佐和子 1991 「宇津宮辻子幕府跡の調査」「第一回鎌倉市遺跡調査、研究発表会要旨」
- 維 実 1992 「宇津宮辻子幕府跡の調査」「第三回鎌倉市遺跡調査、研究発表会要旨」
- 原 廣志 1999 「神奈川・宇津宮辻子幕府跡」木簡研究 第二十一号 木簡学会
- 原 廣志ほか 1996 「宇津宮辻子幕府跡発掘調査報告書 小町二丁目 361番1地点」宇津宮辻子幕府跡発掘調査団
- 原 廣志ほか 1996 「宇津宮辻子幕府跡 小町二丁目 389番1地点」「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書12-2」鎌倉市教育委員会
- 原 廣志ほか 1997 「宇津宮辻子幕府跡 小町二丁目 361番1地点」「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書13-2」鎌倉市教育委員会
- 山村亜希 1997 「中世鎌倉の都市空間構造」『史林80-2』史学研究会
- 松尾剛次 1993 「中世都市鎌倉の風景」吉川弘文館

〈図1の調査地点名一覧〉

1. 小町二丁目 390番2外：本調査地点
2. 小町二丁目 389番1地点
3. 小町二丁目 361番1地点
4. 小町二丁目 366番外地点
5. 小町二丁目 354番12外地点
6. 小町二丁目 354番2地点：雪ノ下カトリック教会
7. 小町二丁目 345番2地点：鎌倉雪ノ下教会
8. 小町一丁目 374番1地点
9. 小町一丁目 325番イ地点
10. 小町一丁目 333番2地点
11. 小町一丁目 374番1地点：鎌倉中央郵便局
12. 小町一丁目 374番1地点：生涯学習センター
13. 小町一丁目 374番1地点
14. 小町一丁目 309番1地点
15. 小町一丁目 322番地点
16. 雪ノ下一丁目 367・378番1地点
17. 雪ノ下一丁目 419番1地点
18. 小町二丁目 402番5地点

第2章 調査の概要

1. 調査の経緯と経過

本調査地点は宇津宮辻子幕府跡の南側東隅に位置している。今回の現地調査に先立ち鎌倉市教育委員会に地下室を伴う個人住宅建設の相談があった。この工事により埋蔵文化財への影響が予想されたため、事前に鎌倉市教育委員会による遺構確認の試掘調査が実施された。その結果、地表下約50cmから鎌倉時代の遺構・遺物が確認され、工事による埋蔵文化財への影響が避けられないものと判断されたため、事業者との協議がおこなわれた。結果、平成十六年2月26日より埋蔵文化財への影響が予想される約62.62m²を調査対象として発掘調査を実施した。

現地調査は平成十六年2月26日に機材搬入、重機により試掘データに基づいて地表下約50cm前後まで堆積していた近現代の擾乱・客土・近世耕作土の除去をおこない、以下を人力による掘り下げで調査をおこなった。その結果、12世紀末から15世紀前半にかけての鎌倉時代を中心とした中世の遺構・遺物が検出された。同年4月3日までの間に必要な記録作業をおこない、同日機材の撤収を含め現地調査を終了した。その間の作業内容については以下を参照されたい。

【日誌抄】

2月26日（木）機材搬入。重機により地表下約50cmまで掘削。

28日（土）確認調査開始。鎌倉市四級基準点を基とし、測量用基準点を設定。鎌倉市三級基準点から海拔標高を調査地点に移動。

3月 6日（土）井戸2上層のかわらけ溜りの写真撮影および平面実測。

10日（水）溝状遺構の写真撮影および平面実測。

17日（水）調査区南側の平面・遺構土層実測。井戸1・2の写真撮影。

23日（火）調査区南側の平面・遺構土層実測。

30日（日）全景写真撮影および平面実測・遺構土層実測。

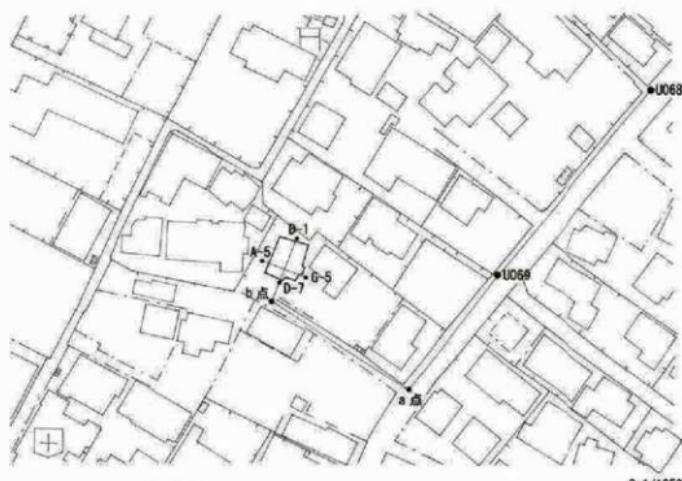
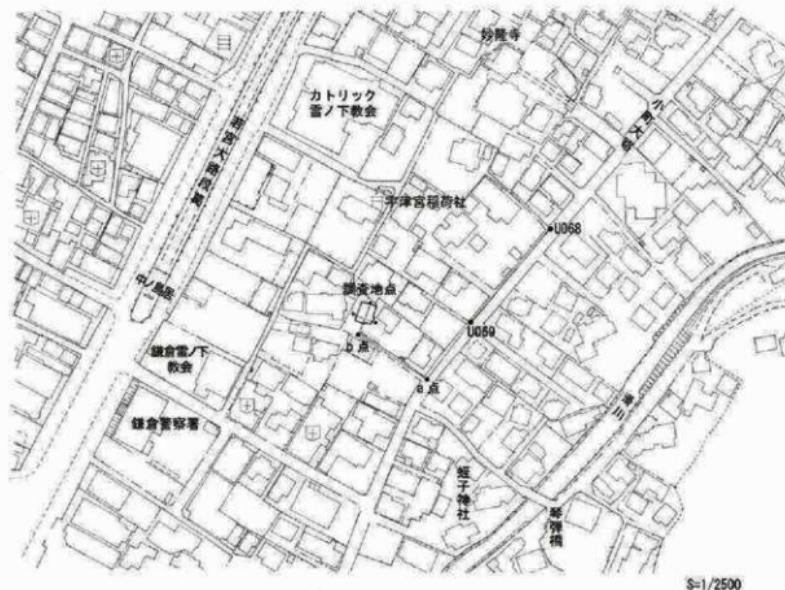
4月 1日（木）調査区各壁面土層堆積状況実測。

3日（土）現地調査終了。機材撤収。

2. 測量軸の設定

調査にあたって使用した測量設定は、図2で示したように調査地点東側の小町大路上に鎌倉市道路管理課が設置した鎌倉市4級都市基準点（第IV座標系）のU068(X=-75752.344 Y=-25030.674)とU069(X=-75799.463 Y=-25071.002)を使用した。さらにU068-U069両四級基準点から調査地点に測量基準点を設置するため任意のa点(X=-75828.161 Y=-25094.715)・b点(X=-75805.708 Y=-25129.135)の2点を設けD-1杭の座標数値をもとめた(X=-75788.996 Y=-25125.905)。ただしグリットは測量の利便性を優先させるかたちで調査区の形状に合わせ設置したので国土地標とは一致していない（図3）。

調査終了後、図3のように改めて国土地標区画X-75780.000～75810.000・Y-25115.000～



(国土測量部基準点
豊岡市4番地市基準点
1366 X=-75752.344 Y=-25600.674
1367 X=-75759.367 Y=-25601.002
1368 X=-75759.367 Y=-25601.002
河上測量点赤点 (河井大路設置点) / 黒点 (基準点)
N=15679.0 164.86

図2 グリッド設定図 ($S=1/200 \cdot 1/400$)

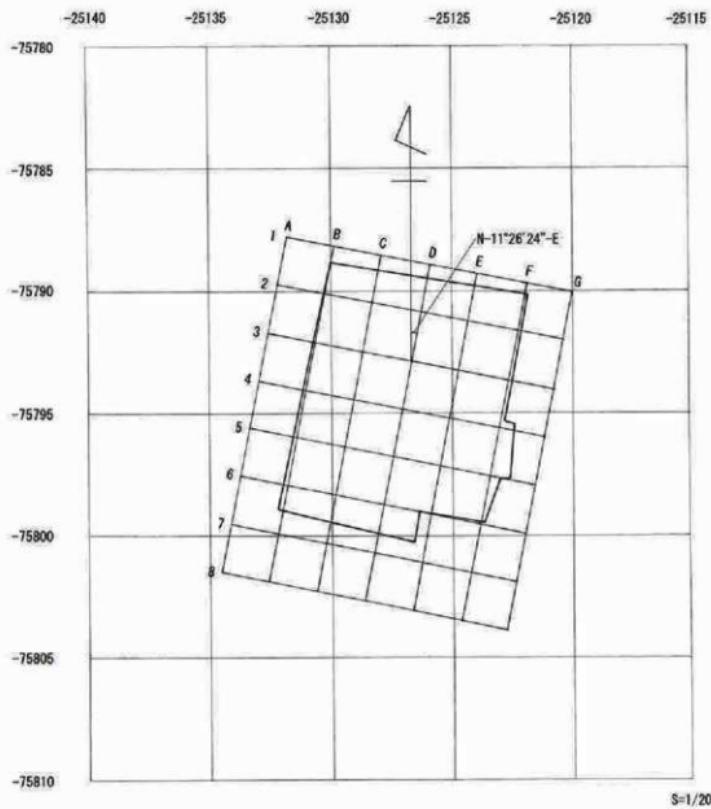
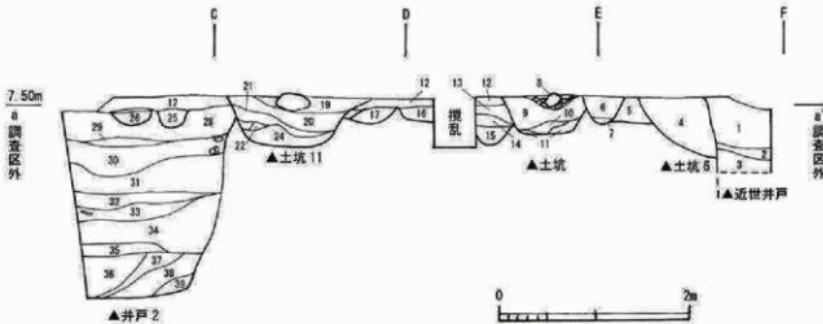


図3 國土座標位置図

25140.000 内に遺構図を移しかえて掲載した。調査区グリットは図3に示すように東西軸と南北軸をそれぞれ2m方眼で組み、北から東西軸をアルファベット、南北軸を西から算用数字を充てた。各グリットの名称は北西角の交差軸点をグリット名として呼称している。

3. 層序と生活面

調査地点の現地表は海拔標高 8.00m前後でほぼ平坦な土地となっていた。しかし遺跡地内の標高をみると、中央部の南端の鎌倉雪ノ下教会から北端に近い妙隆寺へ向かって緩やかに高くなっているが、小町大路と若宮大路方向にあたる東西側は低くなる地形を呈している。調査で確認した土層は厚さ 40～50 cmほどの近・現代の客土層の堆積土を除去すると、図4で示した中世遺物包含層の薄い堆積が観察され



土層記述

1. 明顯砂質土層：黒褐色砂質土を以て中量含む。土糞種・小石、根付少々含む。粘性・稍度引けに触る。
2. 暗褐色砂質土：かすり色・暗褐色を呈する老成少々含む。粘性弱く、触り心地良好。
3. 明顯砂質砂質土：黒褐色の砂質土を含む。粘性・触り心地良好。
4. 暗褐色砂質土：黒褐色砂質土を含む。三八粘・少々弱い。粘性・稍度引けにやや弱い。
5. 増殖砂質砂質土：黒褐色砂質土中含む。土糞種・化粧土を含む。粘性・触り心地良好。
6. 増殖砂質土：かすり色・土糞種・少々含む。粘性強・触り心地良好。
7. 暗褐色砂質土：黒褐色砂質土を含む。黒褐色砂質土を以て少々含む。粘性・触り心地良好。
8. 増殖砂質土：土糞種・粘性多度・含む。小石を少々含む。粘性・触り心地良好。
9. 増殖砂質砂質土：少々・化粧土を多量に含む。粘性・触り心地良好。
10. 増殖砂質土：黒褐色砂質土を含む。土糞種・化粧土を含む。粘性・触り心地良好。
11. 黒褐色砂質土：他の山土と混じて含む。粘性・触り心地良好。
12. 増殖砂質土：かすり色・土糞種・化粧土を少々含む。粘性・触り心地良好。
13. 増殖砂質土：かすり色・土糞種・化粧土を少々含む。粘性・触り心地良好。
14. 黑褐色砂質土：細砂多量に含む。かすり色・土糞種・化粧土を含む。粘性・触り心地良好。
15. 黑褐色砂質土：土糞種の少々含む。粘性・触り心地良好。
16. 黑褐色砂質土：黒褐色砂質土を含む。少々・土糞種・化粧土を含む。粘性・触り心地良好。
17. 增殖砂質土層：黒褐色砂質土層を以て含む。少々・土糞種・化粧土を含む。粘性・触り心地良好。
18. 増殖砂質土層：黒褐色砂質土層を以て含む。粘性・触り心地良好。
19. 増殖砂質土層：増殖砂質土層以て中量含む。粘性・触り心地良好。
20. 黑褐色砂質土層：黒褐色砂質土層を以て中量含む。少々・土糞種・粘性・触り心地良好。
21. 増殖砂質土層：黒褐色砂質土層を以て中量含む。少々・土糞種・粘性・触り心地良好。
22. 増殖砂質土層：増殖砂質土層を以て中量含む。粘性・触り心地良好。
23. 増殖砂質土層：増殖砂質土層を以て中量含む。粘性・触り心地良好。
24. 黑褐色砂質土層：黒褐色砂質土層を以て中量含む。粘性・触り心地良好。
25. 増殖砂質土層：土糞種・少々含む。増殖砂質土層を少々含む。粘性・触り心地良好。
26. 増殖砂質土層：同上。
27. 増殖砂質土層：同上。
28. 黑褐色砂質土層：黒褐色砂質土層を以て中量含む。粘性・触り心地良好。
29. 増殖砂質土層：黒褐色砂質土層を以て中量含む。粘性・触り心地良好。
30. 増殖砂質土層：黒褐色砂質土層を以て中量含む。粘性・触り心地良好。
31. 増殖砂質土層：土糞種・少々含む。増殖砂質土層を少々含む。粘性・触り心地良好。
32. 増殖砂質土層：土糞種・化粧土を含む。中量・増殖砂質土層を以て中量含む。粘性・触り心地良好。
33. 増殖砂質土層：土糞種・化粧土を含む。中量・増殖砂質土層を以て中量含む。粘性・触り心地良好。
34. 増殖砂質土層：土糞種・化粧土を含む。中量・増殖砂質土層を以て中量含む。粘性・触り心地良好。
35. 増殖砂質土層：土糞種・化粧土を含む。中量・増殖砂質土層を以て中量含む。粘性・触り心地良好。
36. 増殖砂質土層：土糞種・化粧土を含む。中量・増殖砂質土層を以て中量含む。粘性・触り心地良好。

図4 調査区中央土層堆積図 (S=1/40)

た。層位的にこの付近から掘り込まれた遺構もあるが、搅乱と遺構重複が多く認められるので最終的に検出はもう少し掘り下げる縄文時代海進・海退によって形成された自然堆積の灰～黄褐色砂層上面でおこなうこととした。遺構は平面プランの確認だけでは新旧関係が掴みきれないほど複雑に切り合っており、ほぼ全城がその覆土となって連続的に検出されるため、他の鎌倉遺跡群のように遺構を生活面や層位から明確に群別することは難しかった。よって現地での新旧関係や整理作業の検討により概ね上層・下層遺構の二群に大別したが、これはあくまで便宜上のものである。

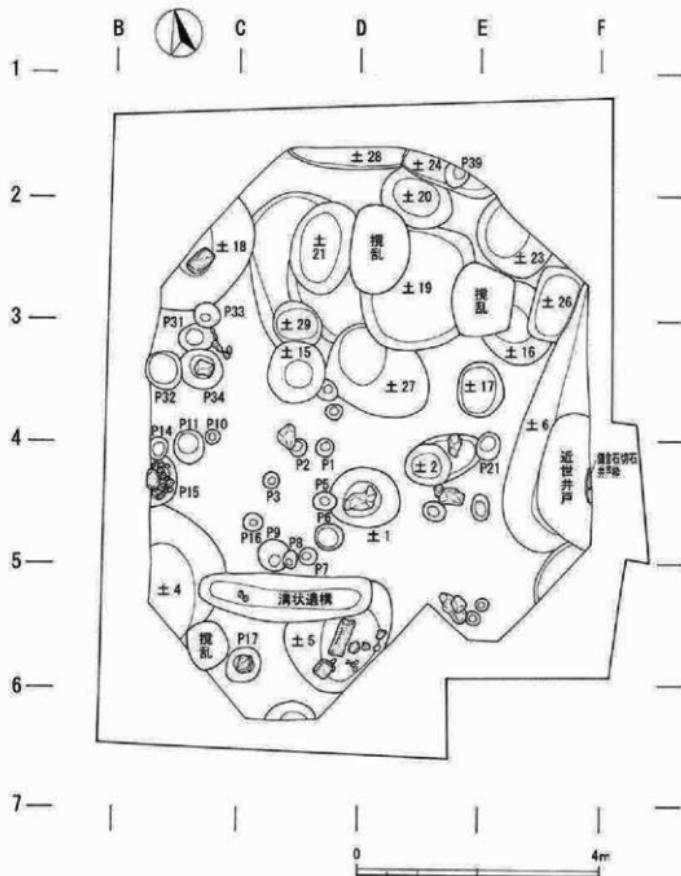


図5 上層遺構全測図 (S=1/80)

第3章 検出遺構と出土遺物

1. 検出した遺構

土坑は35基を確認した。

土坑1(図7):調査区のほぼ中央、D-3グリット付近で検出。短辺100cm×長辺110cm×深さ40cm、円形。P5にきられる。覆土は砂質土で、3層に土層は分けられる。かわらけ・刀子などが出土。

土坑2(図7):調査区のほぼ中央、E-4グリット付近で検出。短辺120cm×長辺150cm×深さ30cm、円形。かわらけが出土。

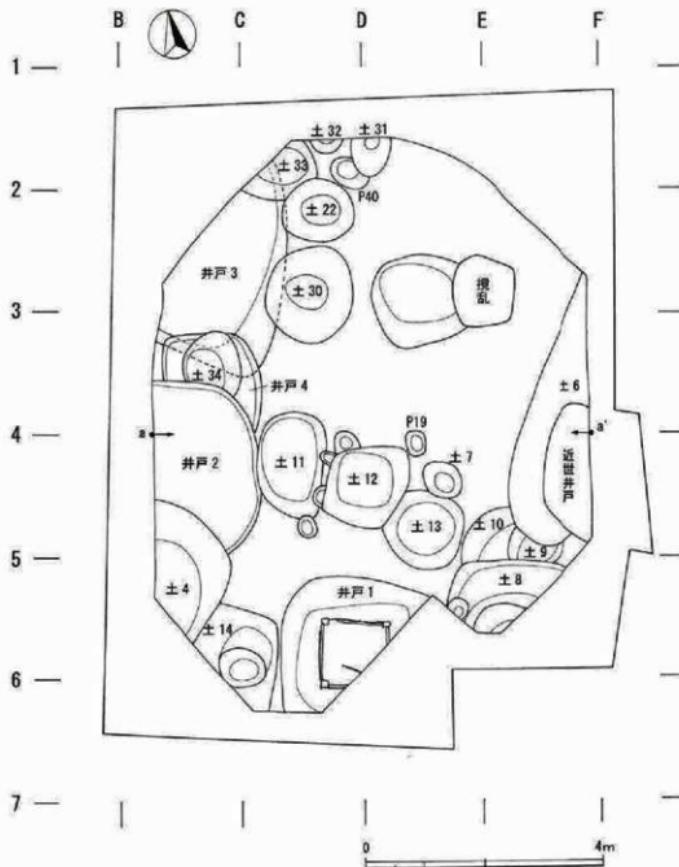


図6 下層遺構全測図 (S=1/80)

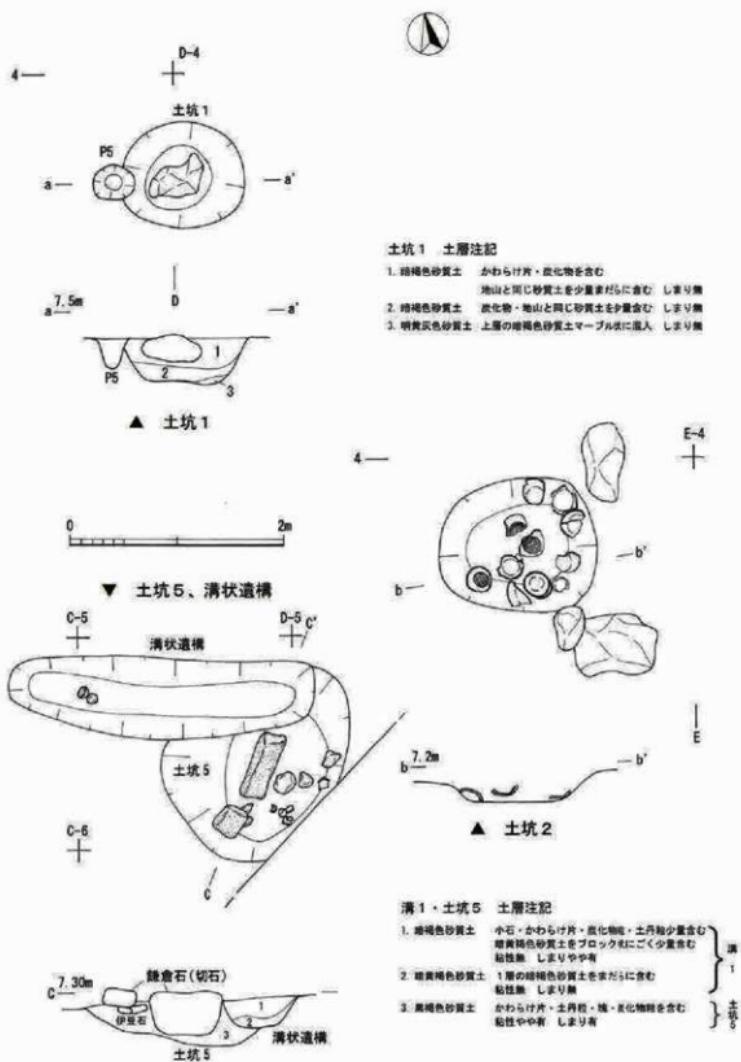
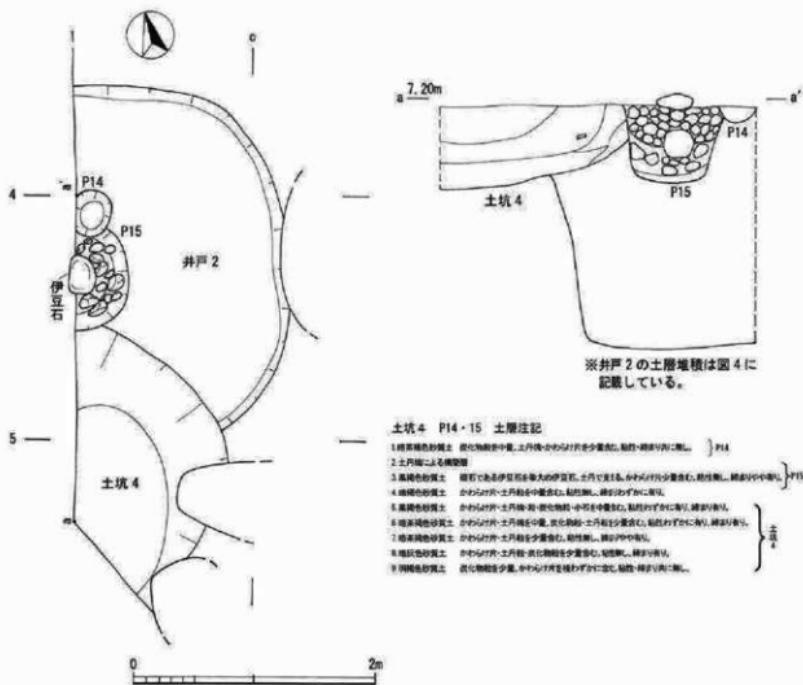


図7 土坑 1・2・5、溝 1 (S=1/40)

土坑 4(図8)：調査区の南東隅、B-5 グリット付近で検出。深さ 70cm。土坑 14・井戸 2 を壊して掘られてる。覆土は 9 層に分けられ、このうち 3 層～9 層でかわらけ片が他の層と比べ比較的多く含まれている。遺物はかわらけ・青磁・常滑窯製品・瀬戸窯製品が出土。

土坑 5(図7)：調査区の南西隅、B-5 グリット付近で検出。深さ 70cm。土坑 14・井戸 2 を壊す。覆土



は砂質で鎌倉石・伊豆石を含む。かわらけ・常滑窯製品・瀬戸窯製品・瓦質製品・硯が出土。

土坑6(図5): 調査区の東側、F-3グリット付近で検出。深さ70cm、長楕円形。土坑9・土坑10・土坑26を壊して掘り込む。かわらけ・青磁・常滑窯製品・瀬戸窯製品が出土。

土坑7(図9): 調査区のほぼ中央、E-4グリット付近で検出。短辺62cm×長辺71cm、楕円形。土坑13より新しい。

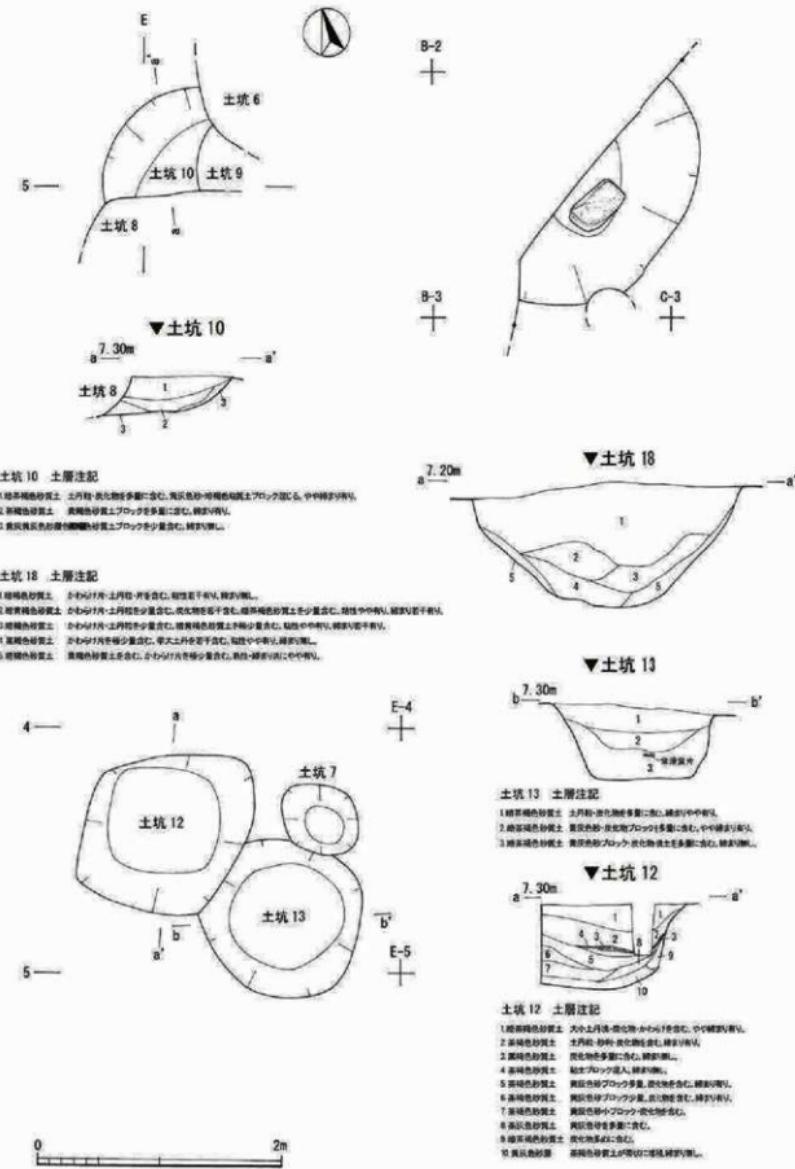
土坑8(図6): 調査区の南東隅、E-5グリット付近で検出。土坑9・土坑10をきる。かわらけ・青磁・白磁・釣が出土。

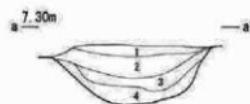
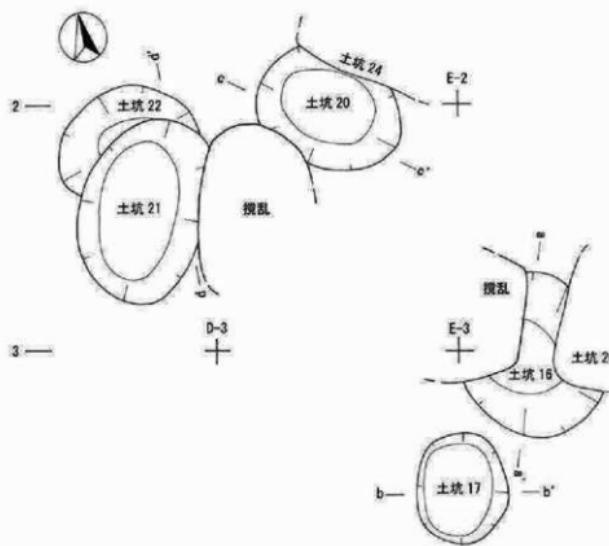
土坑9(図6): 調査区の南東隅、F-5グリット付近で検出。土坑6・土坑8に壊され、土坑10より新しい。かわらけ・常滑窯製品・瀬戸窯製品・瓦が出土。

土坑10(図9): 調査区の南西隅、F-5グリット付近で検出。深さ30cm。土坑6・土坑8・土坑9にきられる。覆土は砂質で3層に分けられる。かわらけが出土。

土坑11(図6): 調査区のほぼ中央、D-4グリット付近で検出。短辺123cm×長辺162cm、楕円形。井戸2より新しい。青磁が出土。

土坑12(図9): 調査区のほぼ中央、D-4グリット付近で検出。短辺143cm×長辺171cm×深さ72cm、不整形。土坑13を壊す。覆土は砂質であり、10層に分けられる。このうち3層は炭化物で構成された層である。かわらけ・青磁・常滑窯製品が出土。





土坑 16 土層注記

- 1 黄褐色砂質土 地面付近を除く。鐵頭印や中骨。
- 2 鉄頭印付土 地面付近を除く。炭化物を含む。鐵頭印や中骨。
- 3 黄褐色土 黄褐色土・炭化物を少量含む。鐵頭印や中骨。
- 4 黄褐色砂質土 カルシウム・土鉱・炭化物を少量含む。鐵頭印や中骨。



土坑 17 土層注記

- 1 黄褐色砂質土 カルシウム・土鉱・炭化物を少量含む。鐵頭印や中骨。
- 2 黄褐色砂質土 地面付近を除く。炭化物を含む。鐵頭印や中骨。
- 3 黄褐色砂質土 地面付近を除く。鐵頭印や中骨。
- 4 黄褐色砂質土 地面付近を除く。炭化物を少量含む。鐵頭印や中骨。



- 土坑 20 土層注記
- 1 黄褐色砂質土 カルシウム・土鉱・炭化物を少量含む。鐵頭印や中骨。
 - 2 炭化物層
 - 3 黄褐色の土質 地面付近を除く。炭化物を含む。鐵頭印や中骨。
 - 4 黄褐色砂質土 黄褐色土・炭化物を少量含む。鐵頭印や中骨。
 - 5 黄褐色砂質土 炭化物を少量含む。鐵頭印や中骨。
 - 6 灰色層
 - 7 黄褐色砂質土 黄褐色土・炭化物を少量含む。鐵頭印や中骨。
 - 8 黄褐色砂質土 黄褐色土・炭化物を少量含む。鐵頭印や中骨。
 - 9 黄褐色砂質土 黄褐色土・炭化物を少量含む。鐵頭印や中骨。
 - 10 黄褐色砂質土 黄褐色土・炭化物を少量含む。鐵頭印や中骨。
 - 11 黄褐色砂質土 黄褐色土・炭化物を少量含む。鐵頭印や中骨。



土坑 21・22 土層注記

- 1 黄褐色砂質土 地面付近を除く。小骨を含む。1月頭付近。
- 2 黄褐色砂質土 地面付近を除く。小骨を含む。2月頭付近。
- 3 灰色層
- 4 黄褐色砂質土 地面付近を除く。炭化物を少量含む。鉄頭印や中骨。
- 5 黄褐色砂質土 地面付近を除く。炭化物を少量含む。鉄頭印や中骨。

土坑 13(図9)：
調査区の中央より
やや南側、E-5 グ
リット付近で検出。
短辺 133cm ×
長辺 135cm 以上
× 深さ 62cm、円
形。土坑 7・12 よ
り古い。覆土は砂
質であり、3 層に
分けられ、すべて
の層に炭化物が多
く含まれているの
が特徴である。か
わらけ・常滑窯製
品が出土。

土坑 14(図6)：
調査区の南西隅、
C-6 グリット付近
で検出。不整形。
土坑 4 にきられる。
かわらけ・土
師器が出土。

土坑 15(図5)：
調査区のほぼ中
央、D-3 グリット
付近で検出。短辺
96cm × 長辺 105cm、
円形。土坑 27 を
きる。かわらけ・
骨角製品が出土。

土坑 16(図
10)：調査区の北
東、E-3 グリット
付近で検出。長辺
143cm、円形。土
坑 26 にきられる。
覆土は砂質であ

図 10 土坑 16・17・20~22 (S=1/40)

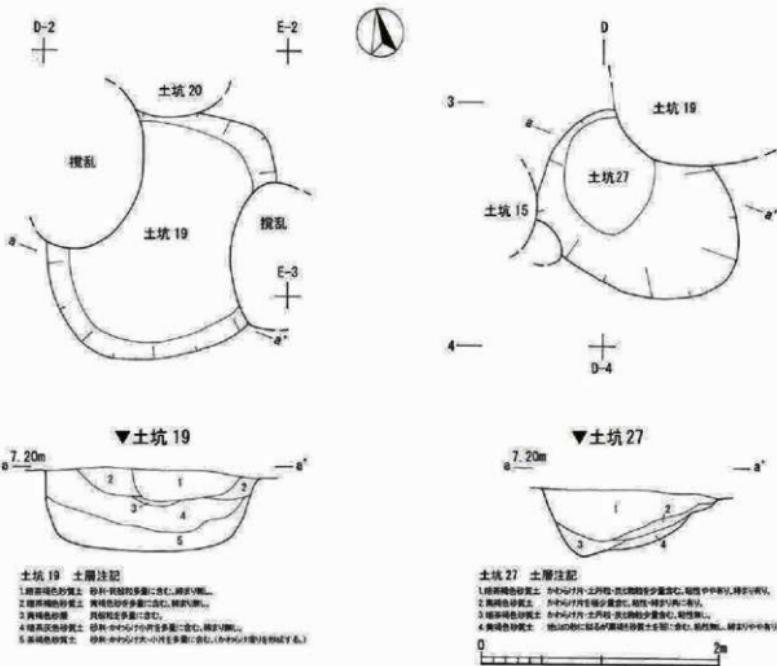


図 11 土坑 19・27 (S=1/40)

り、4層に分けられる。

土坑 17(図 10): 調査区の中央東側、E-4 グリット付近で検出。短辺 85cm × 長辺 93cm、楕円形。覆土は砂質であり、4層に分けられる。かわらけ・青磁が出土。

土坑 18(図 9): 調査区の北西隅、C-3 グリット付近で検出。短辺 85cm 以上 × 長辺 225cm × 深さ 108cm、楕円形。P33 にきられる。覆土は砂質であり、5層に分けられる。かわらけ・青磁・青白磁・瀬戸窯製品・砥石・墓石が出土。

土坑 19(図 11): 調査区の中央北側、E-3 グリット付近で検出。長辺 124cm × 深さ 75cm、円形。土坑 20 より古く土坑 27 より新しい。覆土は砂質で5層に分けられ、1～3層からは貝殻片を、4・5層からはかわらけ片が多量に含まれている。このほかに青磁・緑釉陶器が出土。

土坑 20(図 10): 調査区のほぼ中央、D-2 グリット付近で検出。長辺 125cm × 深さ 72cm、楕円形。土坑 19 にきられる土坑 24 をくる。覆土は11層に分けられ、砂質土と炭化物層の互層になっている。かわらけ・青磁・涅美製品・瓦が出土。

土坑 21(図 10): 調査区のほぼ中央、D-3 グリット付近で検出。短辺 103cm 以上 × 長辺 163cm × 深さ 32cm、楕円形断面皿状の浅い土坑である。土坑 22 をくる。覆土は砂質で単層である。

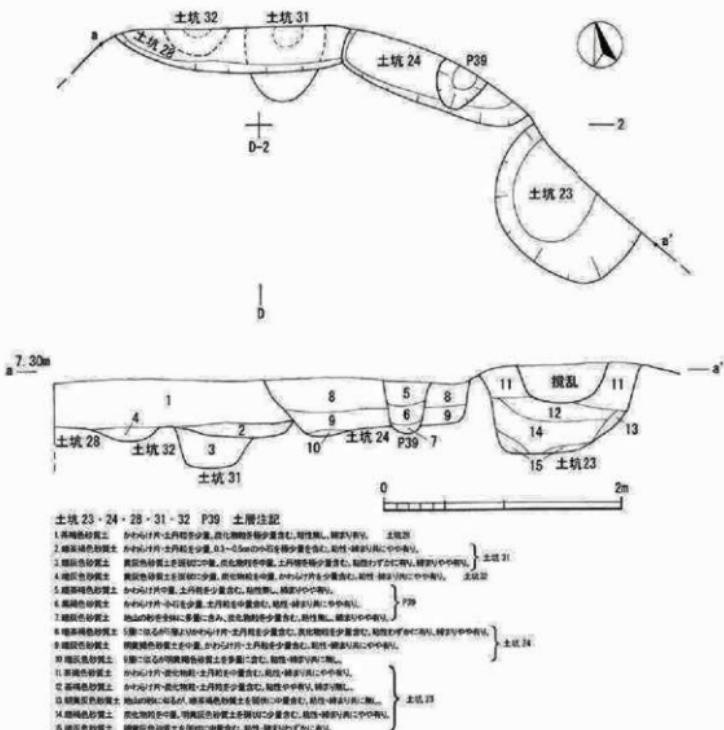


図 12 各土坑・Pit (S=1/40)

土坑 22(図10)：調査区の中央北側、D-2 グリット付近で検出。短辺 52cm 以上 × 長辺 60cm × 深さ 72cm、円形。土坑 33・井戸 3 をきる。覆土は砂質であり、4 層に分けられる。かわらけ・青磁が出土。

土坑 23(図12)：調査区の北東隅、E-2 グリット付近で検出。長辺 123cm × 深さ 75cm、円形。覆土は砂質であり、5 層に分けられる。かわらけ・青磁・白磁・青白磁・涅美窯製品・瓦・釘・骨未製品が出土。

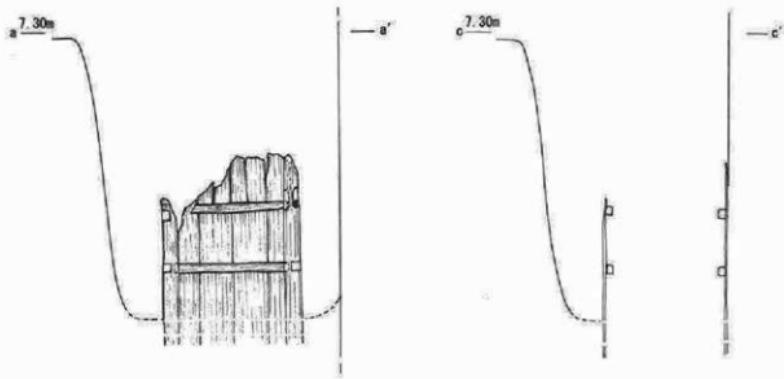
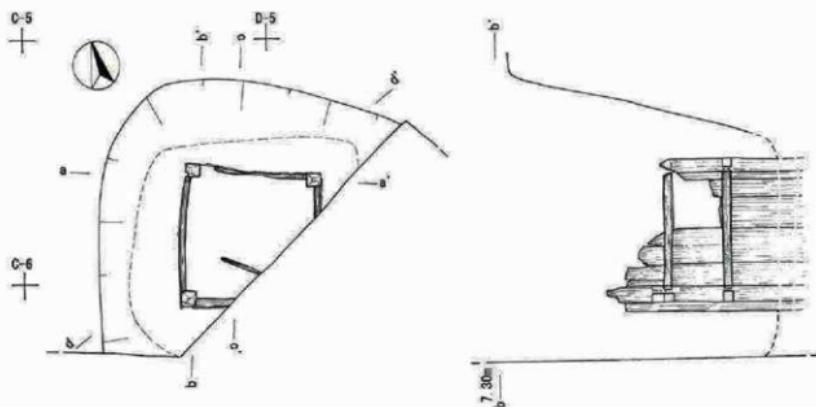
土坑 24(図12)：調査区の北側隅、E-2 グリット付近で検出。長辺 170cm × 深さ 53cm、梢円形。P39 にきられ土坑 28 をきる。覆土は砂質であり、3 層に分けられる。常滑窯製品が出土。

土坑 27(図10)：調査区のほぼ中央、E-2 グリット付近で検出。短辺 113cm 以上 × 長辺 184cm × 深さ 52cm、梢円形。土坑 15・19 にきられる。覆土は砂質であり、4 層に分けられる。土師器が出土。

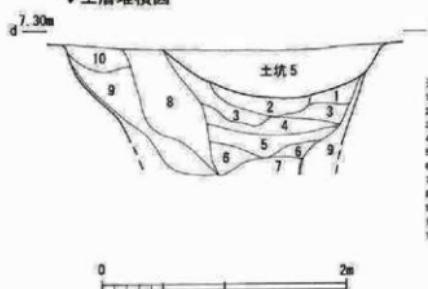
土坑 28(図12)：調査区の北隅、D-2 グリット付近で検出。長辺 190cm 以上 × 深さ 43cm。土坑 24 にきられ土坑 31・32 をきる。覆土は単層の砂質土である。

土坑 30(図6)：調査区の中央北側、D-3 グリット付近で検出。短辺 73cm × 長辺 82cm、円形。井戸 3 をきる。かわらけ・青磁・常滑窯製品・須恵器が出土。

土坑 31(図12)：調査区の北隅、D-2 グリット付近で検出。短辺 73cm × 長辺 182cm × 深さ 43cm、梢円形。土坑 28 にきられる。覆土は砂質で、2 層に分けられる。このうち上部の 1 層には炭化物がやや多めに含



▼土層堆積図



井戸 1 土層注記

- 1 滅ぼれ砂質土 カラリナイト・カルシウム・土灰粒を含む。地山の砂質土層混入。粘性わざわざに有り、疊がやや有り。
- 2 滅ぼれ砂質土 地面標高多量、カラリナイト・土灰粒を含む。粘性わざわざに有り、疊がやや有り。
- 3 滅ぼれ砂質土 地面標高多量、カラリナイト・土灰粒・滅ぼれ砂質土を含む。粘性わざわざに有り、疊がやや有り。
- 4 滅ぼれ砂質土 小方針(?)灰、炭化物類、土灰粒等、小石を含む。粘性無し。疊がやや有り。
- 5 滅ぼれ砂質土 土方針(?)灰、炭化物類、カラリナイトを含む。粘性無し。疊がやや有り。
- 6 滅ぼれ砂質土 粘性無沙の多量、地山の砂質土・土灰粒を少量含む。粘性無し。疊がやや有り。
- 7 滅ぼれ砂質土 地面標高多量、カラリナイト・土灰粒を含む。粘性わざわざに有り。
- 8 黒褐色砂質土 黒褐色を呈する多量、カラリナイト・土灰粒を含む。粘性わざわざに有り。
- 9 黒褐色砂質土 黒褐色を呈する多量、地山の砂質土を含む。粘性わざわざに有り。
- 10 小石灰岩 カラリナイトを含む。小石を含む。粘性無し。疊がやや有り。
- 11 滅ぼれ砂質土 地面標高多量、粘性わざわざに有り。

図 1.3 井戸 1 (S=1/40)

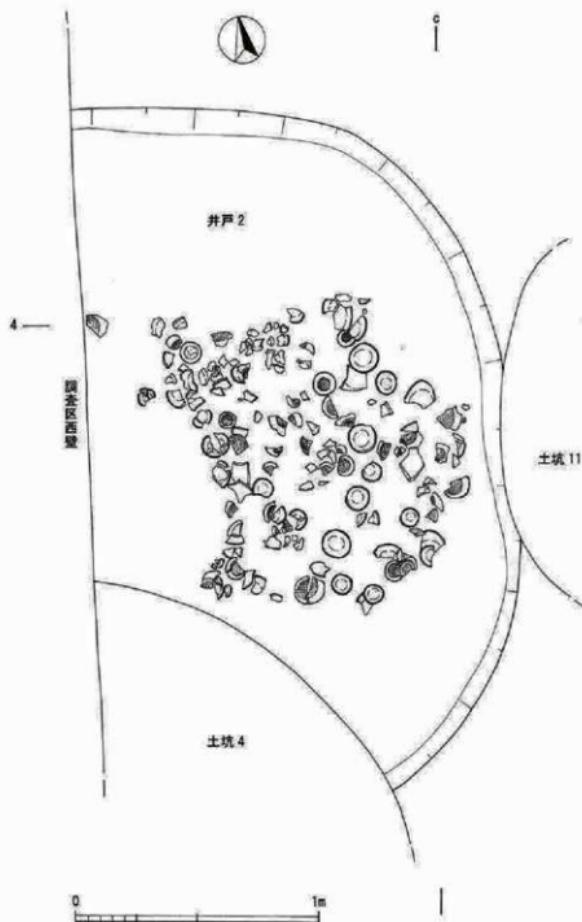


図 14 井戸 2 上層遺物出土状況 (S=1/20)

82cm、不整形。土坑 19 にきられる。常滑窯製品・転用陶器が出土。

井戸は 4 基を確認した。

井戸 1(図 13) : 調査区の中央南隅、D-6 グリット付近で検出。上部は腐食により木材は残存していないが、確認面より 1.0m 掘り下げた段階で木材を確認した。木枠は一辺約 110cm の方形を呈する横棟支柱式で側板幅は 17 ~ 29cm。掘り方は隅丸方形を呈している。崩落の恐れがあるために完壊は出来なかつたが、ピンボールを差し込み底部の状態を確認したところ底板や曲げ物の存在は確認されなかつた。かわらけ・青磁・常滑窯製品・瀬戸窯製品・瓦質製品・骨角製品・木製品・石製品が出土。

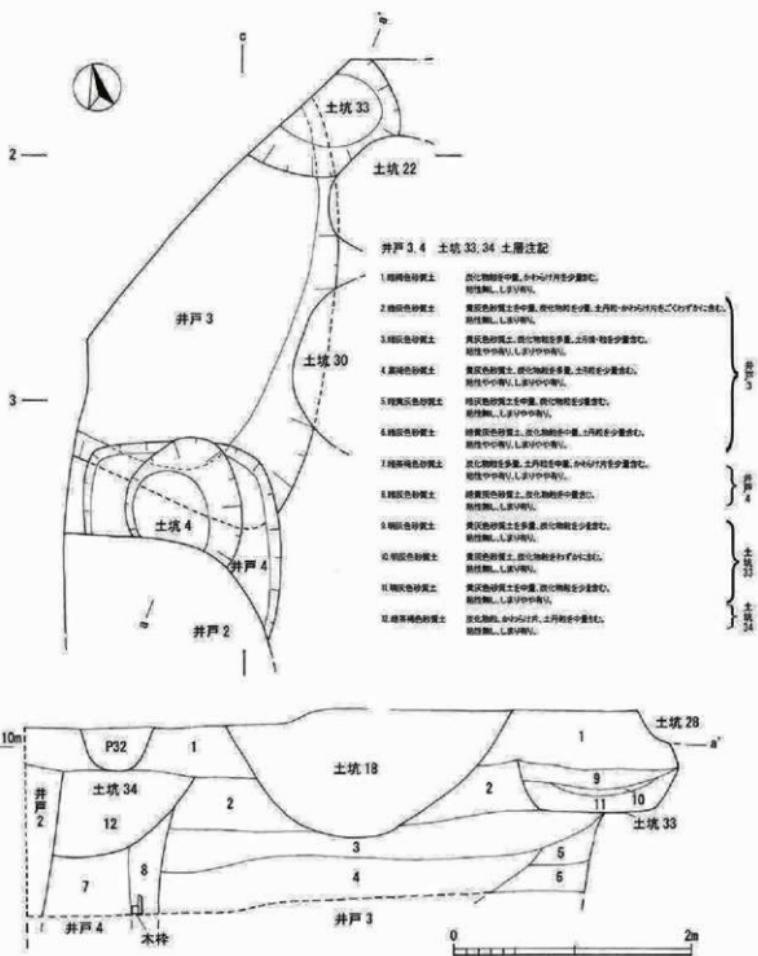
まれている。

土坑 32(図 12) : 調査区の北東、C-2 グリット付近で検出。深さ 13cm。土坑 28 にきられる。覆土は砂質であり、確認された限りでは単層である。覆土は土坑 31 の上層に似る。かわらけが出土。

— 土坑 33(図 15) : 調査区の北西隅、C-2 グリット付近で検出。短辺 120cm 以上 × 深さ 43cm、梢円形。井戸 3 をきり土坑 22・28 にきられる。覆土は砂質で 3 層に分けられる。

土坑 34(図 15) : 調査区のほぼ中央、E-2 グリット付近で検出。短辺 103cm × 深さ 70cm。井戸 3・4 をきり井戸 2 にきられる。覆土は単層の砂質土であり、かわらけ・青磁・常滑窯製品・瓦・釘が出土。

土坑 35(図 6) : 調査区の中央北側、E-3 グリット付近で検出。短辺



井戸 2(図 8・14) : 調査区西隅 C-4 付近で検出。平面形体は隅丸方形を呈しており、深さ 2.1m。遺構の形状から井戸と判断した。土層の観察から素掘りの井戸であった可能性が高い。なお、覆土上層からは大量のかわらけが出土している。

井戸 3(図 15) : 調査区北西隅 C-3 付近で検出。井戸 4 にきられる。平面形体は不整形であり、湧水があり崩落の危険があったため 1.6m までの深さまでしか調査をおこなえなかった。土層の観察では木枠と思われる木材は確認されなかったが、素掘りか木組みかは判断できなかった。かわらけ、青磁・白磁、

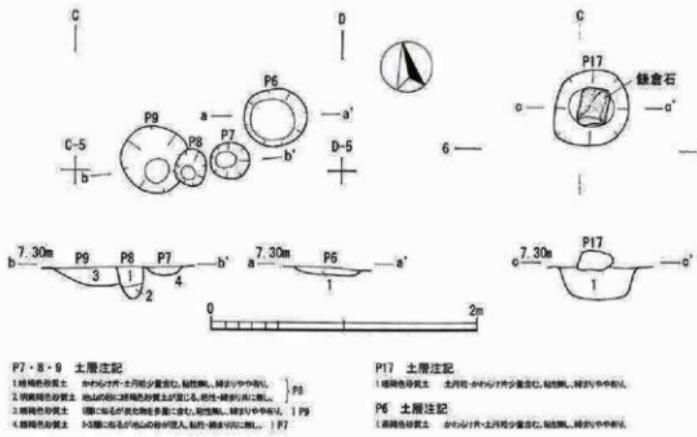


図 16 P6～9・17 (S=1/40)

常滑窯製品・瓦が出土。

井戸 4(図 15)：調査区中央西隅 C-3 付近で検出。井戸 3 をきり井戸 2 にきられる。掘り方平面形体は隅丸方形であり、土層の観察から木枠と思われる木材の一部が確認できたため木組みの井戸と思われるが、湧水があり崩落の危険があったため 1.6m までの深さまでしか調査をおこなえなかつた。

溝は 1 条を確認した。

溝 1(図 7)：調査区の南側 C～D-5 付近で検出。溝幅 72cm × 長さ 280cm × 深さ 30cm。土坑 4・5 をきる。覆土は砂質であり、かわらけ・白磁・常滑窯製品・石製品が出土。

ビット(P)は 40 穴ちかく確認されているが、この内特徴のあるビットのみを報告することにする。

P15(図 8)：中央西隅 B-4 付近で検出。短辺 42cm × 長辺 93cm × 深さ 61cm、円形。土坑 4、井戸 2 をきり P14 にきられる。覆土には伊豆石・砂岩塊・泥岩塊を多量に含み覆土上部に設置されている伊豆石製の礎石を支えている。同様の構造の柱穴が調査区内からは確認されていないため、この柱穴に伴う建物は調査区より西側に存在していたと思われる。

P17(図 16)：中央南西隅 C-6 付近で検出。短辺 63cm × 長辺 66cm、円形。土坑 14 をきる。覆土上部に平坦に加工された砂岩がおかれているが、この石が礎石になるかは不明。

2. 出土した遺物

a. 土坑出土遺物

土坑1(図17-1~8)

1~2は手捏ね成形のかわらけである。1は小皿で推定口径9.3cm、底径7.2cm、器高2.1cm、2は大皿で推定口径14.2cm、底径11.8cm、器高3.3cmを計り、胎土は両資料とも淡橙色の粉質精良土である。3は底部糸切り成型のかわらけ大皿で口径14.7cm、底径9.8cm、器高2.9cmと器高の低い大型口径である。器型は内底面が広く器壁が開いた立ち上がりである。4は龍泉窯系青磁劃花文碗口縁部で推定口径14.2cm、素地は灰白色で緻密、釉薬は淡緑色透明である。口縁部に刻みで輪花彫に施す。口縁部下と刻み目下に区画の二条沈線を片切彫りし、飛雲文を描くもので龍泉窯系青磁瓶I~4類(横田・森田1978)に相当する。5は常滑窯片口鉢I類口縁部、6は涅美窯片口鉢口縁部、7は涅美窯瓶口縁部片である。8は残存長27.5cm、刃身の幅2.3cm、厚さ3mm、茎幅1.6cmを計り、腐食が進行しており茎の目釘などは不明である。

土坑2(図17-9~27)

9~26は底部糸切り成型のかわらけである。小皿は9が口径7.5cm、底径5.8cm、器高1.4cmと器高が低く口径と底径の比率が小さい。10が口径7.9cm、底径5.2cm、器高2.1cmを計り口径・底径比がやや大きい数値を示す。11~25は主に砂粒などを含む粉質胎土であるが、21は口径11.3cmの中皿、26は粉質胎土で口径17.0cm、器高5.0cmと「薄手丸深」特大になる資料であり、それ以外は口径12cm前後の大皿である。21~23は口縁部周辺の内外面に煤が付着し灯明皿と思われる。27は龍泉窯系青磁劃花文碗口縁部で内面の口縁直下に片切彫りによる二条沈線を施し、素地は灰白色で緻密、釉薬は灰緑色透明である。

土坑4(図17-28~38)

28~33は底部糸切り成型のかわらけである。28~32の小皿は口径8cm台であるが、32の粉質精良胎土以外は混入物がやや多い。33は口径12.3cmの大皿である。34は龍泉窯系青磁劃花文碗口縁部で内面の口縁直下に片切彫りによる二条沈線を施し、素地は灰白色で緻密、釉薬は灰緑色透明である。35は瀬戸窯灰釉の壺または瓶類の胴部片である。36は常滑窯片口鉢I類口縁部、37は常滑窯片口鉢II類口縁部で共に内面が使用により磨耗している。38はかわらけを転用した鋳造品の坩堝か。内面から外面口縁部まで黒紫色の溶融物が付着し気泡が潰れた無数の小穴がみられ、外面は強い火を受け赤変している。

土坑5(図18-1~26)

1~17は底部糸切り成型のかわらけである。小皿は1~9が口径6cm台と小さく、いずれも厚めの器壁で開きながら直線的に立ち上がり、10は背高で内湾気味の薄い器壁である。11~13は口径9cm前後の中皿で器壁が直線的に立ち上がり、口縁が外反気味になる。14~17は口径11cm台の大皿で体部中位から屈曲して口縁は外反する。18~20は瀬戸窯製品である。18.綠釉小皿口縁~体部、19は御皿底部で内底部の御目は浅く目は粗い。体部に灰釉を薄く刷毛塗りで施す。20は折縁深皿体部片で灰釉の薄い刷毛塗りが底に発色、胎土は黄白色で堅微である。21~23は常滑窯甕の口縁部であり、中野編年8形式に相当すると考えられる(中野1994)。23は火鉢口縁部、24~25は火鉢底部である(河野1993)。23は口縁部が肥厚する鉢形器型のもので、胎土は粉質良好で微砂を交えたあまい焼成。24は軟繊を含む瓦質の胎土、器表は磨かれ黒色処理され、外面の底部脇に横位の沈線と菊花文の小型スタンプを施す。25は胎土が軟質繊を交えた粗胎の瓦に類似し、厚さ1.2cmほどの底板内面に斜格子文の暗文を入れ外面は砂目底になる。26は上面を欠損するが硯である。

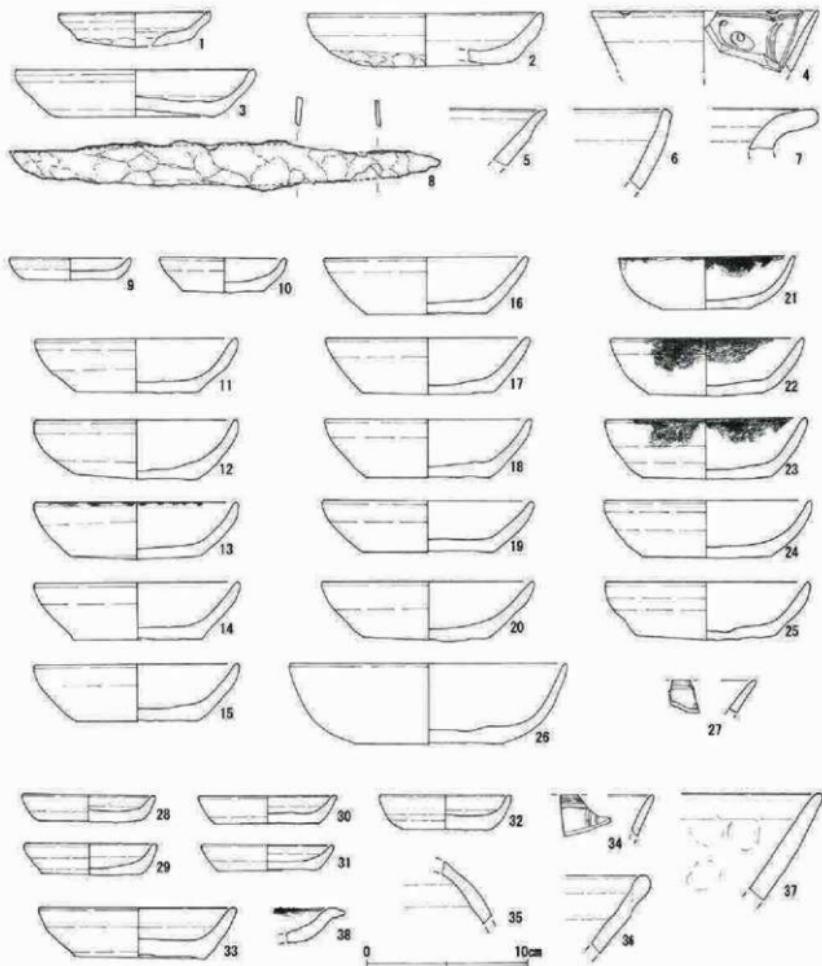


図 17 土坑 1・2・4 出土遺物 (S=1/3)

土坑 6(図 18-27~30)

27は口径 7.8 cmで低い器高の底部糸切り成形のかわらけである。28は混入物が多めの弱砂質胎土の手捏ね成形のかわらけ大皿である。29は男瓦(丸瓦、以下省略)で凸面に縄目叩き、凹面に布目痕があり鶴岡八幡宮中世基盤層に伴う鎌倉時代初期瓦(男瓦 I 類 B)と胎土・成形が類似する。30は土師器甕の底部へ胴部下位の破片である。

土坑 8(図 18-31~38)

31~34は底部糸切り成形のかわらけである。31・32は口径 8.5 cm前後の小皿、33は口径が 11 cm台の

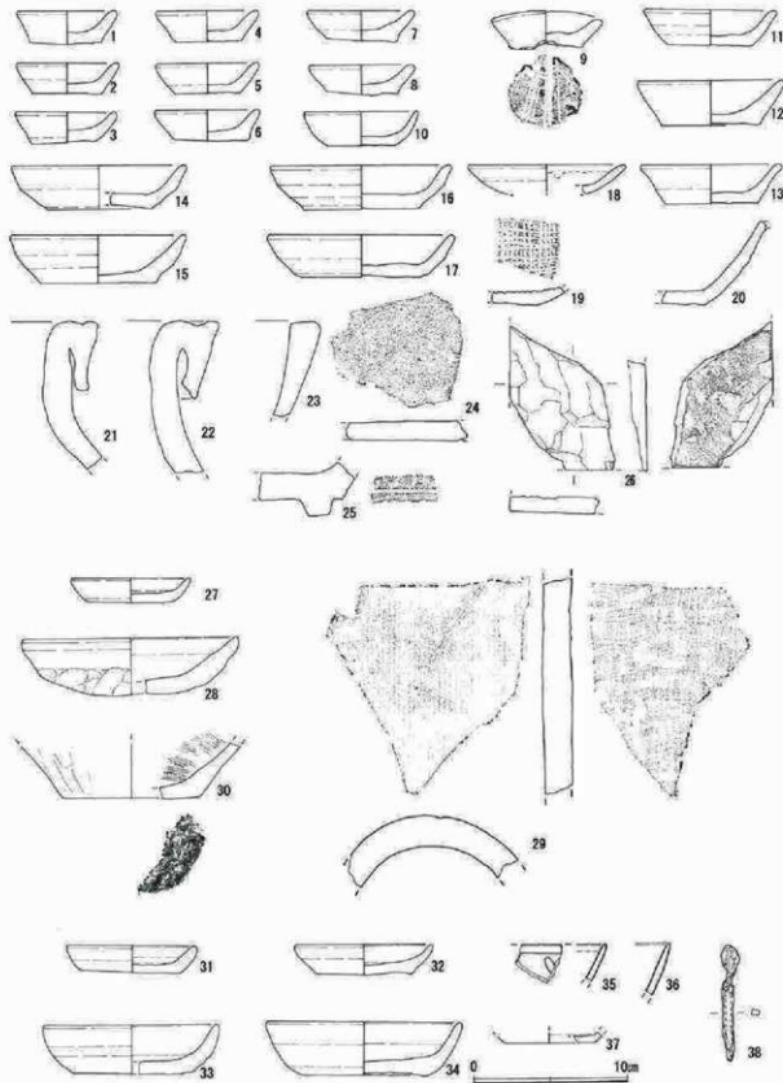


図18 土坑5・6・8出土遺物 (S=1/3)

中皿 34 は口径が 13 cm にちかい大皿である。35・36 は龍泉窯系青磁碗口縁部で 35 は内面に刻花文を片切彫りで施し、36 は無文であり、共に素地は灰白色で緻密、釉薬は灰緑色透明である。37 は白磁口元皿の

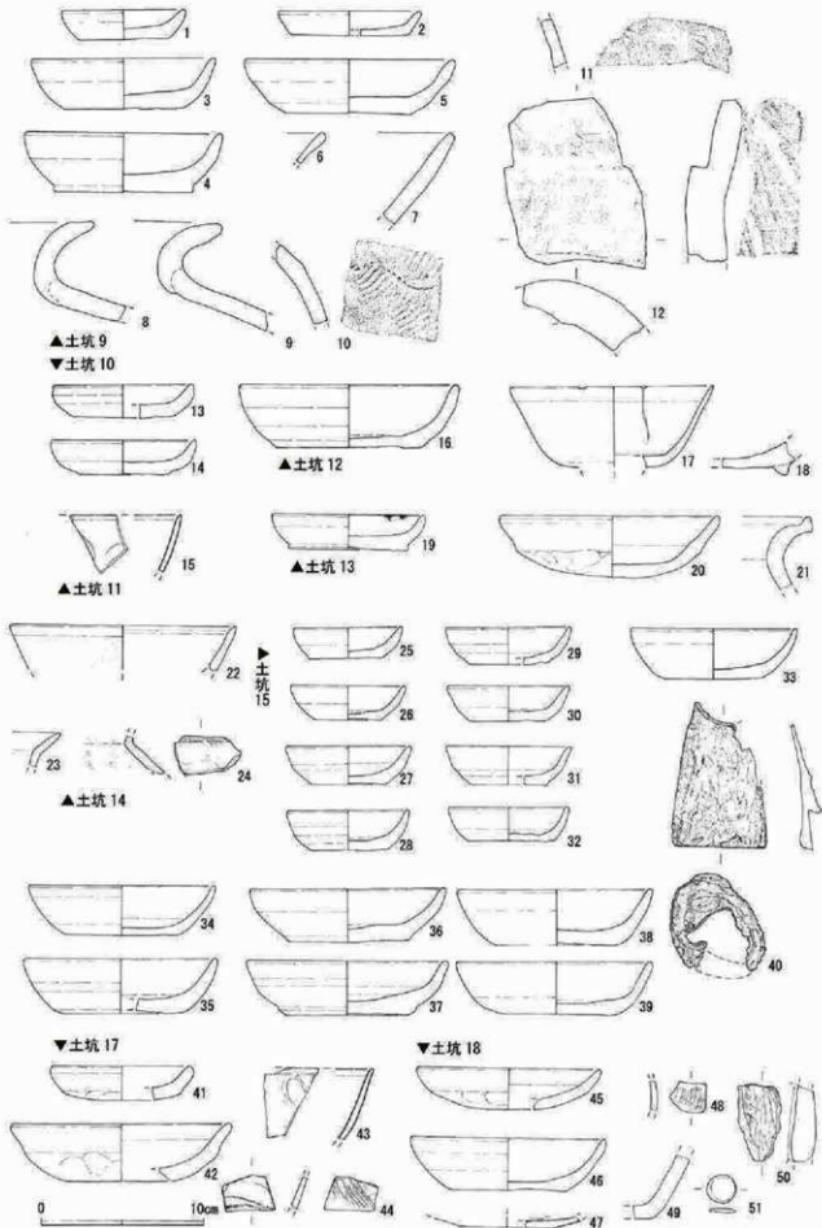


图 19 土坑 9~15·17·18 出土遗物 (S=1/3)

底部。素地は白色緻密、釉薬は灰白色で平底外面の釉を粗く拭き取る。38は鉄釘で断面方形である。

土坑9(図19-1~12)

1~5は底部糸切り成形のかわらけである。1は口径7.7cmの弱砂質土で厚い器壁をもち、2は口径8.6cmで器高が低く器壁が薄手であり精良土。3~5は内湾気味の器形で厚手の器壁であり胎土は灰雜物の多い砂質土である。6は胎土が灰白色精良な北部系山茶碗口縁部、7は常滑窯片口鉢II類口縁部である。8~9は渥美窯口縁部、10は渥美窯肩部で胎土は共に長石微粒を少量交えた灰~青灰色で緻密。11には平行叩き目痕がある。11は常滑窯胴部。表面に菊花文と斜格子を組み合わせた叩き目痕がある。12は玉縁を残す男瓦で永福寺創建期所用瓦と同類である。

土坑10(図19-13~14)

13~14は底部糸切り成形のかわらけである。口径8.5cm前後で、厚手の器壁で体部は内湾している。胎土は灰雜物を多く含む砂質土である。

土坑11(図19-15)

15は龍泉窯系青磁劃花文碗口縁部で内面に片切彫りで施文されている。素地は灰白色で緻密、釉薬は灰緑色透明で細やかな貫入がある。

土坑12(図19-16~18)

16は底部糸切り成形のかわらけ大皿である。器高は高く、胎土は灰雜物を多く含む粉質土。17は龍泉窯系青磁輪花碗で素地は灰色の岩石質、釉薬は灰緑色半透明、内面に白色の筋がある。18は常滑窯片口鉢I類底部で断面三角形の貼付高台をもつ。

土坑13(図19-19~21)

19は底部糸切り成形のかわらけ小皿で、器高は低く胎土は弱砂質土。20は手捏ね成形のかわらけ大皿で、指頭との境を強い横ナデを施し明瞭な稜となり、胎土は粉質精良土。21は常滑窯口縁部で形態から13世紀前半頃の所産と考えられる。

土坑14(図19-22~24)

22は土師器壺口縁部、23は土師器壺口縁部、24は土師器壺肩部である。

土坑15(図19-25~40)

25~39は底部糸切り成形のかわらけである。25~32の小皿は口径8cm以下、器高2cm以上の背高で薄い器壁をもち、胎土は粉質精良土。中皿は口径10cm台、大皿は口径12cm台で器高は高く、薄手の器壁をもつ側面観碗形で胎土は粉質精良土が主体である。40は用途不明骨角製品で下面と上端に刃物による削りで整形された痕跡がある。加工途中のものであろう。

土坑17(図19-41~44)

41~42は粉質胎土の手捏ね成形かわらけの大皿・小皿で、厚手器壁で口唇端部が丸みをもつ。43は龍泉窯系劃花文碗口縁部で内面に切り彫り劃花文を施す。素地は灰白色緻密、釉薬は淡灰緑色透明である。44は同安窯系青磁櫛描文碗体部で素地は黄灰色粘質で緻密。釉薬は淡灰緑色透明の薄い釉薬である。

土坑18(図19-45~51)

45は手捏ね成形、46は底部糸切り成形のかわらけ大皿である。47は同安窯青磁皿底部で素地は灰白色緻密。釉薬は淡灰緑色透明の薄い施釉で外底露胎である。48は青白磁で素地は白色緻密。釉薬は淡青白色で気泡多めのやや不透明、外面に櫛描文を施す梅瓶の胴部小片と思われる。49は瀬戸窯折縁深皿底部で胎土は黄白色できめが粗くやや軟質である。50は両面に使用痕が残る砥石。51は碁石黒の石製品。

土坑19(図20-21-1~126)

この土坑覆土中からは図20・21で示したとおり、ゴミ穴に廃棄されたような状況で破片数1213点と

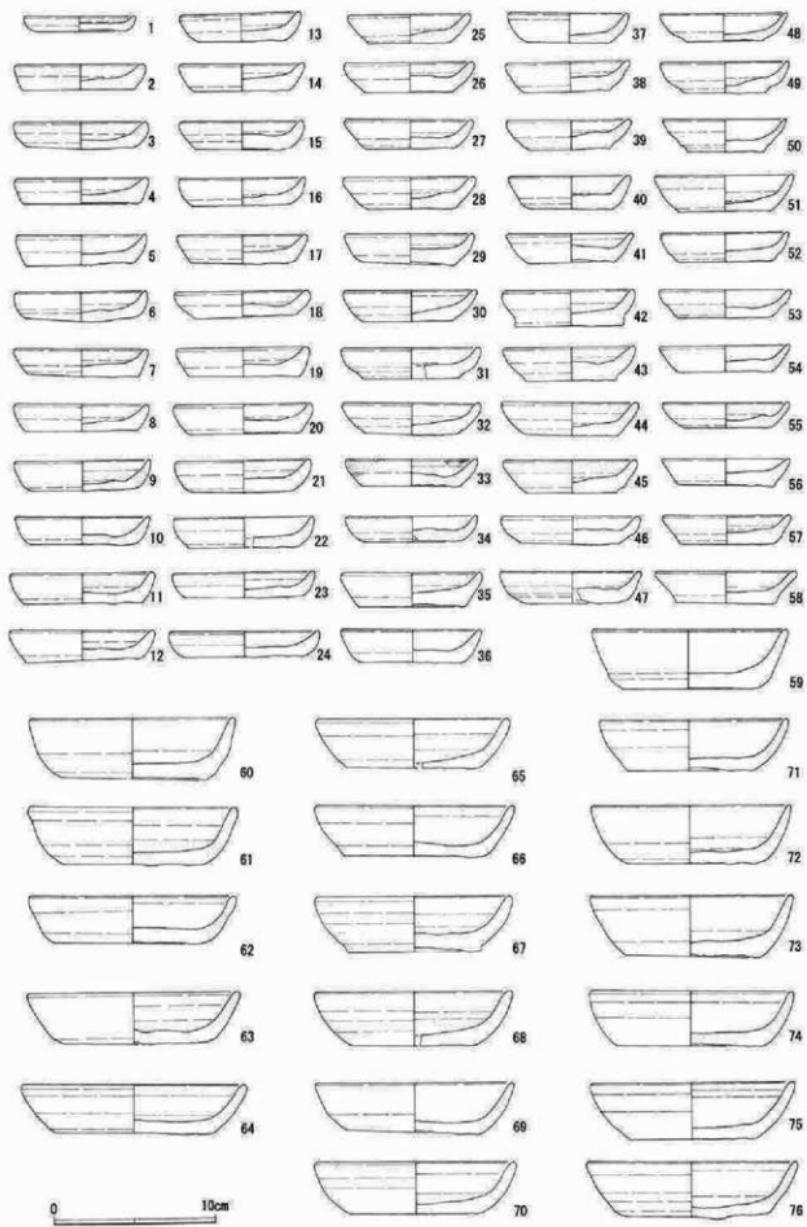


図20 土坑19出土遺物(1) (S=1/3)

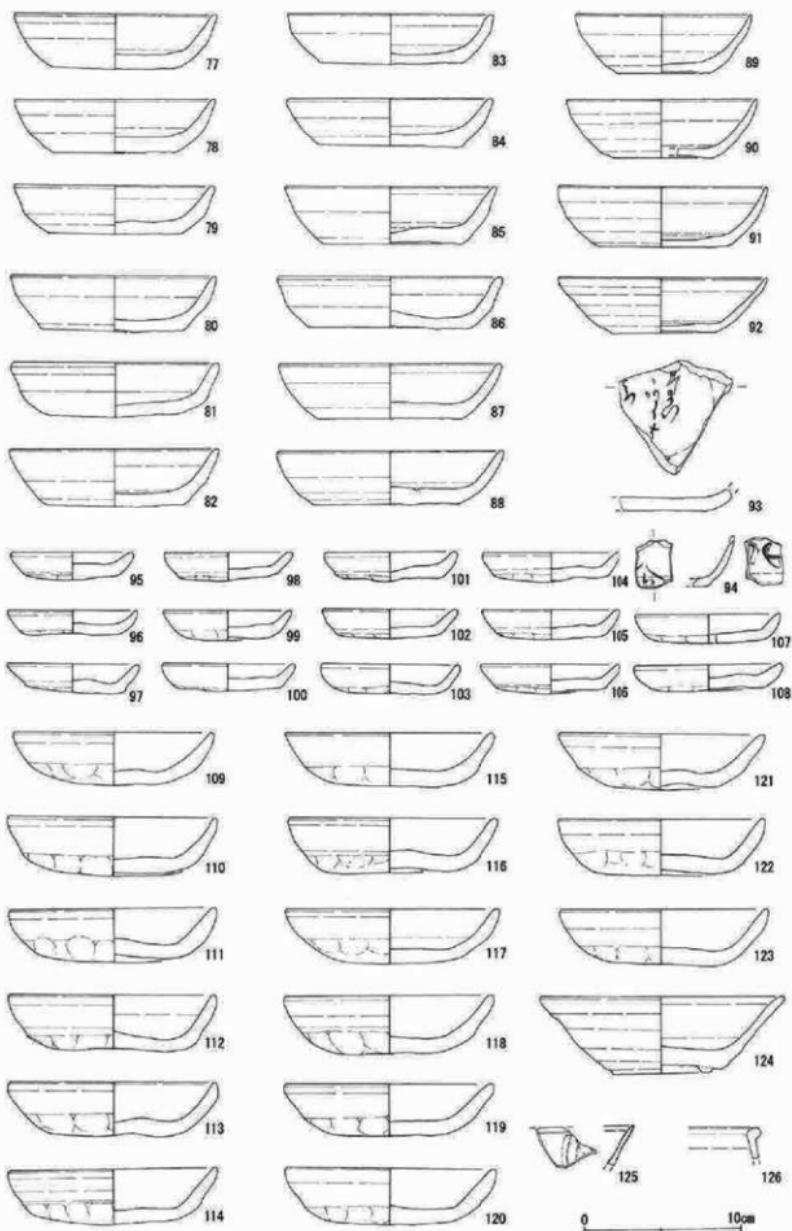


図2.1 土坑19出土遺物(2) (S=1/3)

まとまった量のかわらけが出上している。かわらけには底部糸切り成形のもの(1~94)と手捏ね成形のもの(95~123)とに大別できる。さらに底部糸切り成形のものは胎土に夾雜物を含んだやや粗胎で厚手の器壁をもち内底にナデ調整を施す一群(小皿1~47・大皿59~88)と、胎土は粉質精良、焼成堅微で明瞭な模様目痕のある薄手の器壁をもち内底は未調整で中央の凹む一群に分けられる(小皿48~58・中皿89・大皿90~92)。

このように本土坑出土のかわらけは3種類に大別されるが、この特徴や出土様相などは今小路西遺跡(宇都・原ほか、2006)第3面池3に伴って大量に出土したかわらけと類似している。今小路西遺跡の報告書の分類では底部糸切り成形のものを薄手器壁で精良胎の内底未調整の一群(A類)、厚手器壁で粗胎の内底ナデ調整の一群(B類)、手捏ね成形のものをC類としている。本土坑出土のかわらけ分類別出土比率をみると、A類:131点=11%、B類:739点=61%、C類:343点=28%であった。この中でA類とした資料は薄手器壁の精良な胎土で大中小型の器型分科がなされている。鎌倉遺跡群ではこのような3種器型分科するものには13世紀後半に出現すると考えられる糸切り底かわらけがあり、このタイプのかわらけは比較的に良好な胎土で口径は小型品が8cm以下、中型品が10cm前後、大型品が12.5cm前後を測り、内底をナデ調整した高い器高もつ薄手器壁で側面觀碗型の形態に近い。想像の域を出ないがこの新型の器種が初源的な器形になり、その後の出現である「薄手丸深型・側面觀碗型」に影響を与えた可能性も考えられよう。

93・94は墨書きされた底部糸切り成形のかわらけで93は内底面、94は体部内外面にみられるが判読はできなかった。

124は口径15.6cm、器高4.6cm、高台径6.5cmを測る南部系山茶碗で内底面外周にかけて摩滅した使用痕があり13世紀中葉の所産と考えられる。125は龍泉窯系青磁劃花文碗口縁部で内面に切り彫り劃花文を施す。素地は灰色でやや緻密。釉薬は灰緑色透明である。126は泉州窯系綠釉盤口縁部で褐色の粗胎、内外面に薄く緑色釉を施す。

土坑20(図22-1~9)

1・2は砂質胎土の手捏ねかわらけ小皿で、口唇端部が尖り気味の断面三角形を呈する。3は口径14.9cmの龍泉窯系青磁劃花文碗で底部を欠く。内面の口縁下に横線と縦位に界線の施文がある。素地は灰白色、釉薬は淡緑色半透明である。4は底径4.8cmの龍泉窯系青磁皿で素地は灰色、釉薬は灰緑色で薄手施釉、外底が露胎である。8~10は永福寺創建期所用瓦と同類の男瓦・女瓦(平瓦、以下省略)である。

土坑22(図22-10~16)

10~12は底部糸切り成形で、小皿は器高の低い薄い器壁が開きながら立ち上がる器形、大皿は11が低い器高の厚手器壁でやや粉質胎土、12が器高やや高めで夾雜物少い砂質胎土である。15は龍泉窯系青磁劃花文碗体部で内面に縦位の界線を切り彫り施文。素地は灰白色堅微、釉薬は灰緑色透明で薄手施釉、16は同安窯系青磁櫛描文皿底部。高台はなく、外底面は浅い皿状に削り込まれ、この部分が露胎となっている。内底面には所謂猫描き手の櫛描文を配している。素地は微孔の多い灰白色、釉薬は淡灰緑色透明の薄手施釉。

土坑23(図22-17~26)

17は底部糸切り成形の小皿。器高が低く薄い器壁が開きながら立ち上がる器形、夾雜物が少なめの粉質胎土である。18は手捏ね成形のかわらけ小皿で底部が平底に近く、指痕痕とナデ調整の境の縁は明瞭。胎土は夾雜物が多めの弱砂質土である。19は龍泉窯系青磁劃花文碗口縁部で内面に飛雲文風の施文があり薄手の器壁。素地は杯白色堅微、釉薬は灰緑色で気泡を含むが透明。20は青白磁梅瓶底部で底径8.9cmを測り素地は白色緻密である。21は型捺し作りの白磁小壺類の蓋で上面に細茎弁文を配する。素地は緻密で白色、釉薬は上面に薄く灰味白色のやや不透明、受部から内天井は露胎である。22は渥美窯の

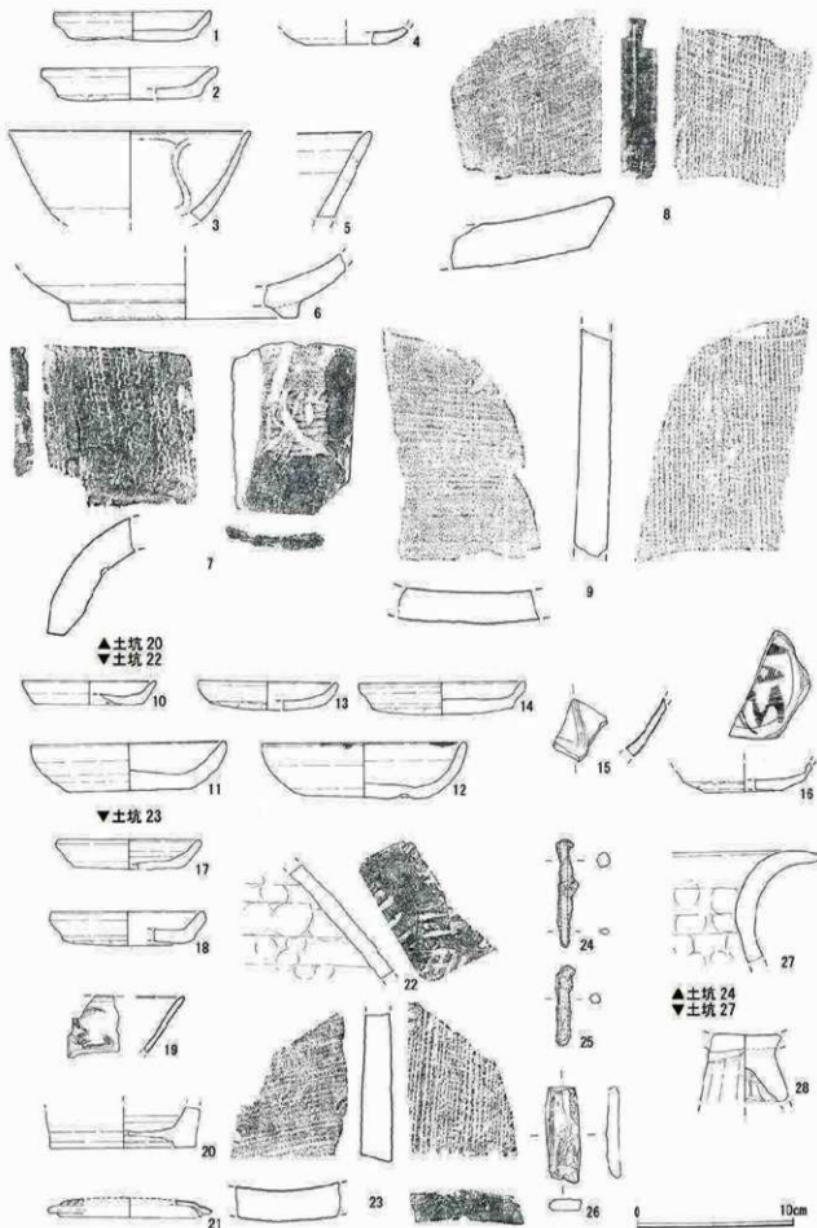


图 22 土坑 20·22~24·27 出土遗物 (S=1/3)

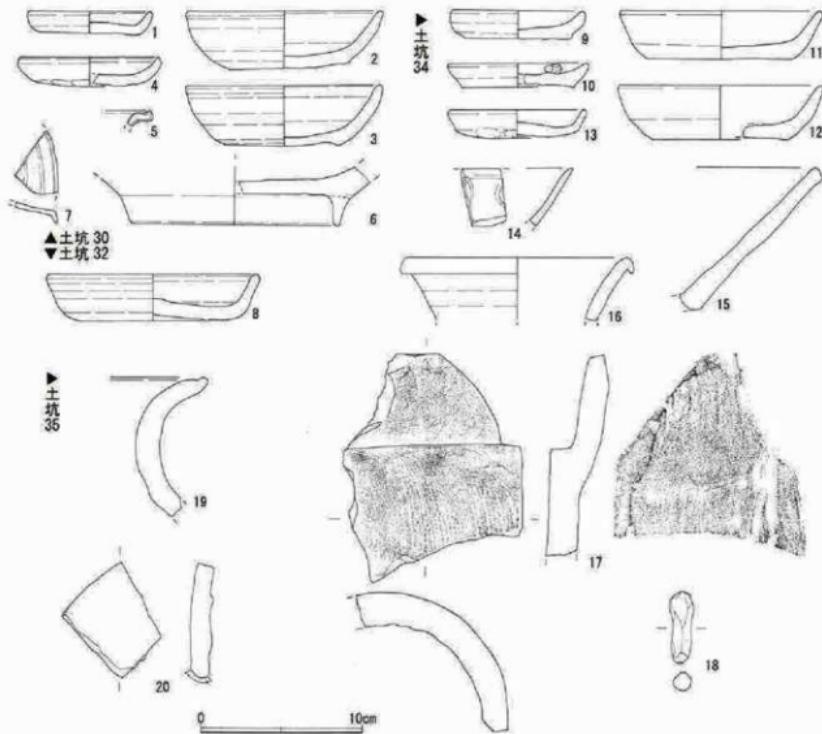


図23 土坑30・32・34・35出土遺物 (S=1/3)

肩部で平行文状の叩き目痕が見られる。23は凸面に繩目叩きを施し永福寺創建期所用瓦と同類の女瓦である。24・25は腐食しているが鉄製の角釘で断面は方形を呈する。26は長さ4.1cm、幅1.4cm、厚さ0.5cmで鹿角を薄切りにしたもので製作途中の骨角製品と思われる。

土坑24(図22-27)

27は常滑窯器口縁部で大きく丸みをもって外反しており13世紀前葉の所産であろうか。

土坑27(図22-28)

28は土師器高坏の脚上半部。

土坑30(図23-1~7)

1~3は底部糸切り成形のかわらけである。小皿は器高が低く器壁が開きながら立ち上がる器形でやや粗い粉質胎土であり、2・3の大皿は夾雜物を多く含む弱粉質胎土である。4は手捏ね成形のかわらけ小皿で指頭痕とナデの境の稜は不明瞭。胎土は夾雜物を多く含む弱粉質胎土である。5は龍泉窯系青磁折縁盤口縁部で素地は明白色堅微、釉薬は青味灰緑色の気泡を多く含んだ不透明で厚手の施釉である。6は常滑窯片口鉢1類底部である。外底には断面三角形の貼付高台で枠縫痕がみられ、内面は使用のため摩滅している。7は古代遺物の混入品で須恵器の坏蓋である。

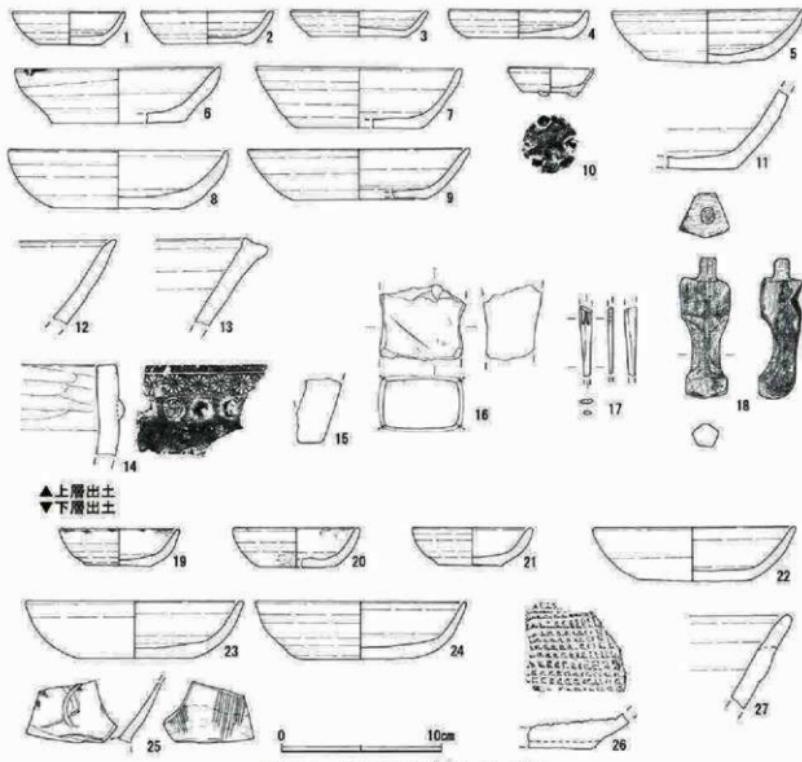


図24 井戸1出土遺物 (S=1/3)

土坑32(図23-8)

28は口径13.0cm、底径9.2cmと口径と底径比の少ない弱粉質胎土である。

土坑34(図23-9~18)

9~12は底部糸切り成形のかわらけである。小皿は器高が低く厚手の器壁でやや弱粉質胎土。11・12の大皿は夾雜物を多く含む弱粉質胎土である。10の小皿は底部中央と体部に小孔が穿たれている。13は手捏ね成形のかわらけ小皿で指頭痕とナデの境の稜は不明瞭、胎土は弱粉質胎土である。14は龍泉窯系青磁劃花文碗口縁部で素地は明灰色堅微、釉薬は灰緑色透明である。15・16は常滑窯製品で15は片口鉢II類、16は盃口縁部である。17は玉縁付の男瓦。18は用途不明鉄製品。

土坑35(図23-19・20)

1920は常滑窯製品で19は甕の口縁部、20は甕の胴部片であるが、一边に転用による摺り痕がみられる。

b. 井戸出土遺物

井戸1(図24)

上層・下層に大別した出土遺物は図13を参照すると上層としたものが井戸枠確認までの資料(1~18)、

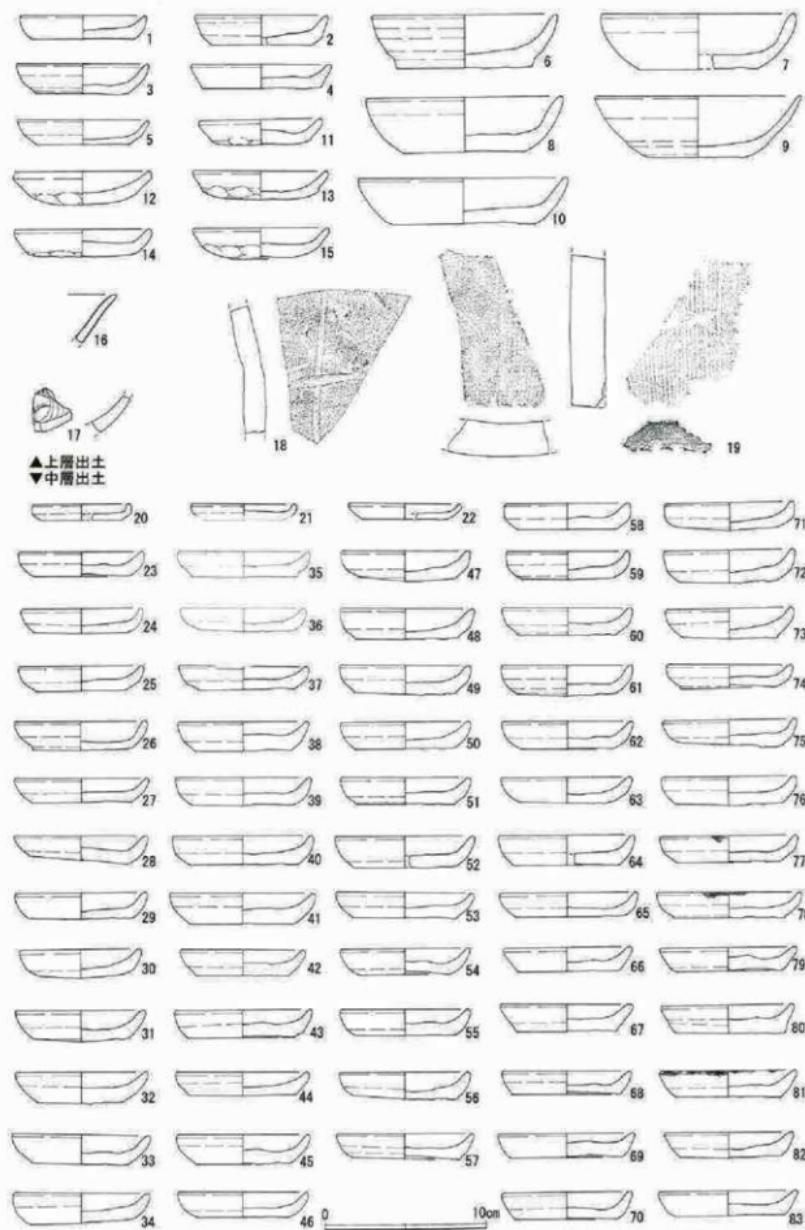


図25 幂戸2出土遺物(1) (S=1/3)

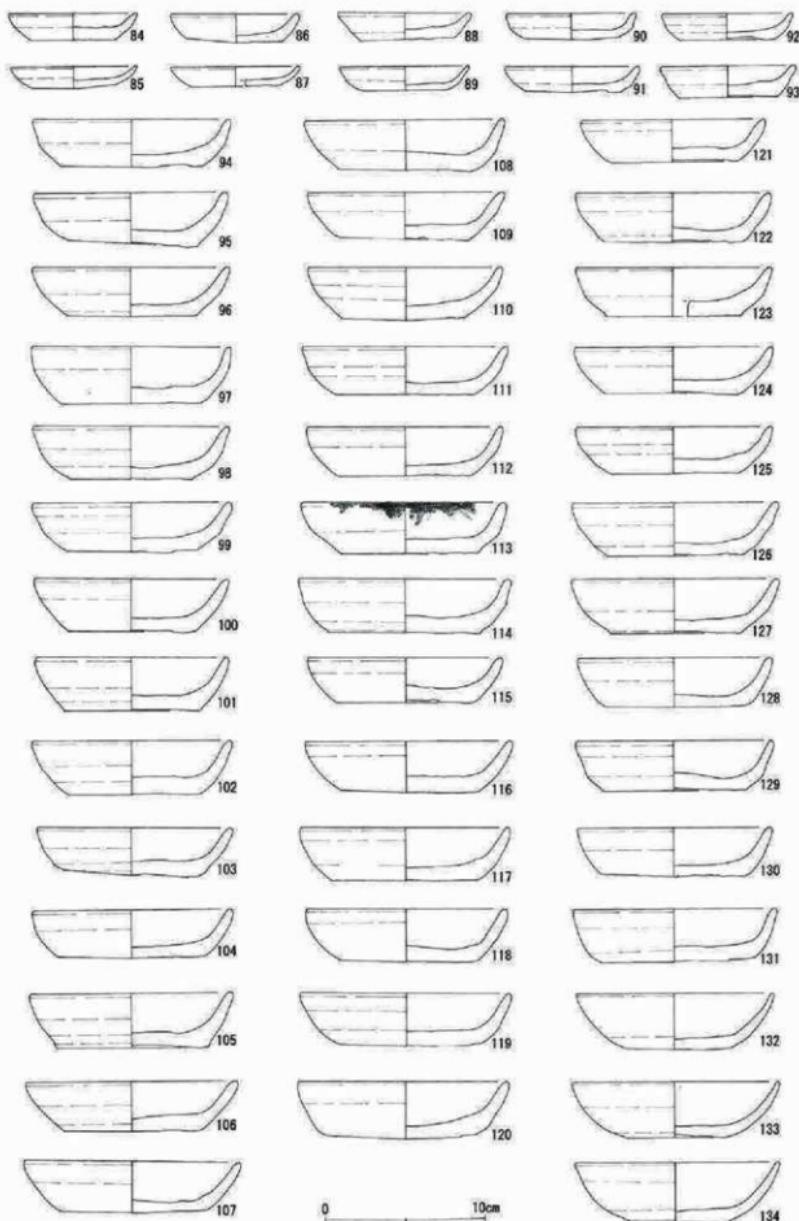


図26 井戸2出土遺物(2) (S=1/3)

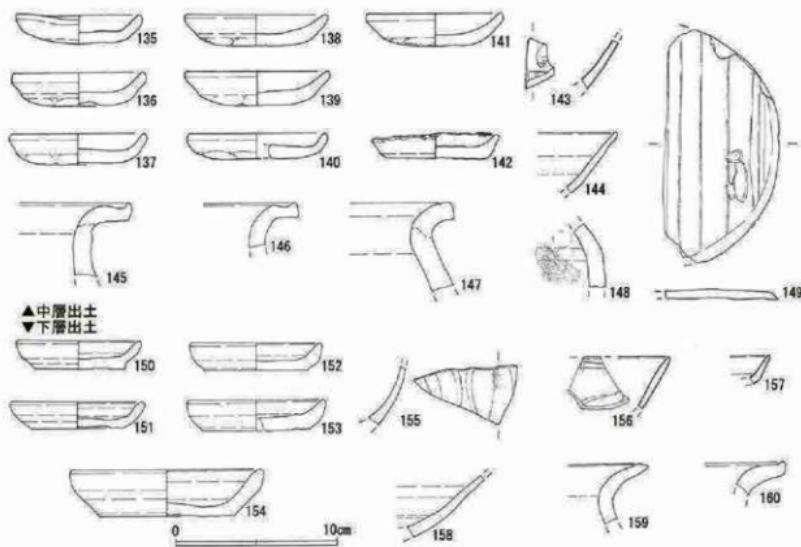


図27 井戸2出土遺物(3) (S=1/3)

下層としたものは井戸枠以下に伴った資料(19~27)である。

1~9は底部糸切り成形のかわらけ。1・2・5・7・9は夾雜物の少ない粉質精良胎で側面觀碗型を呈した所謂「薄手丸深」タイプである。4・6・8は夾雜物を多く含む胎土。10は瀬戸窯入子で口径5.3cm、底径3.3cm、器高1.7cmを測り浅い碗型を呈した無釉のものである。糸切りの底部には径4mmほどの目を三箇所に貼付けており、胎土は灰色精良。11は瀬戸窯折縁深皿底部~体部下位片。胎土は黄味明灰色土で緻密、釉は白濁した淡黄緑色である。12は涅美窯片口鉢口縁部。13は常滑窯片口鉢II類口縁部。14・15は瓦器質火鉢。14は口縁部で回線間に小型菊花文のスタンプと貼付連珠文を配し、器表は磨かれ黒色処理され光沢がある。15は底部に取り付く逆台形の板状脚である。16は群馬県上野砥の所産と思われる。17は鹿骨製の笄で表面がよく磨かれた細身のものである。18は獸脚様にした黒色塗通りの踏脚。

19~24は底部糸切り成形のかわらけで夾雜物の少ない粉質精良胎なもので器高の高い側面觀碗型を呈している。25は同安窯系青磁櫛描文碗体部で外面に櫛描文、内面に櫛描文と片切り文を施す。26は瀬戸窯卸皿底部で、内底の卸目は細かく丁寧な目を刻む。27は常滑窯片口鉢I類口縁部で口縁下に強いナデを施す。胎土は長石・石英粒を含む灰色粗土である。

井戸2(図25~27)

上層・中層・下層と別けた出土遺物は図4にみられる井戸2の堆積土層の28・29層が上層、中層は30~35層、下層は36~39層に相当する。なお図14に示したかわらけは30・31層から出土。

上層から出土した遺物(1~19)のうち、1~10は底部糸切り成形のかわらけ。1~5は小皿であるが、1・2・4は夾雜物を多く含む弱砂質の胎土で、3・5は夾雜物の少ない粉質精良土の薄手器壁のタイプである。6~10は大皿であるが、このうち9はいわゆる「薄手丸深」で、これ以外は厚手器壁で夾雜物を多く含む弱粉質の胎土である。11~15は手捏ね成形のかわらけ小皿で夾雜物が多めの弱砂質の胎土のもの。16・17は龍泉窯系青磁劃花文碗の口縁部と体部で、それぞれ素地は灰白色堅微、釉葉は灰緑色で透明である。

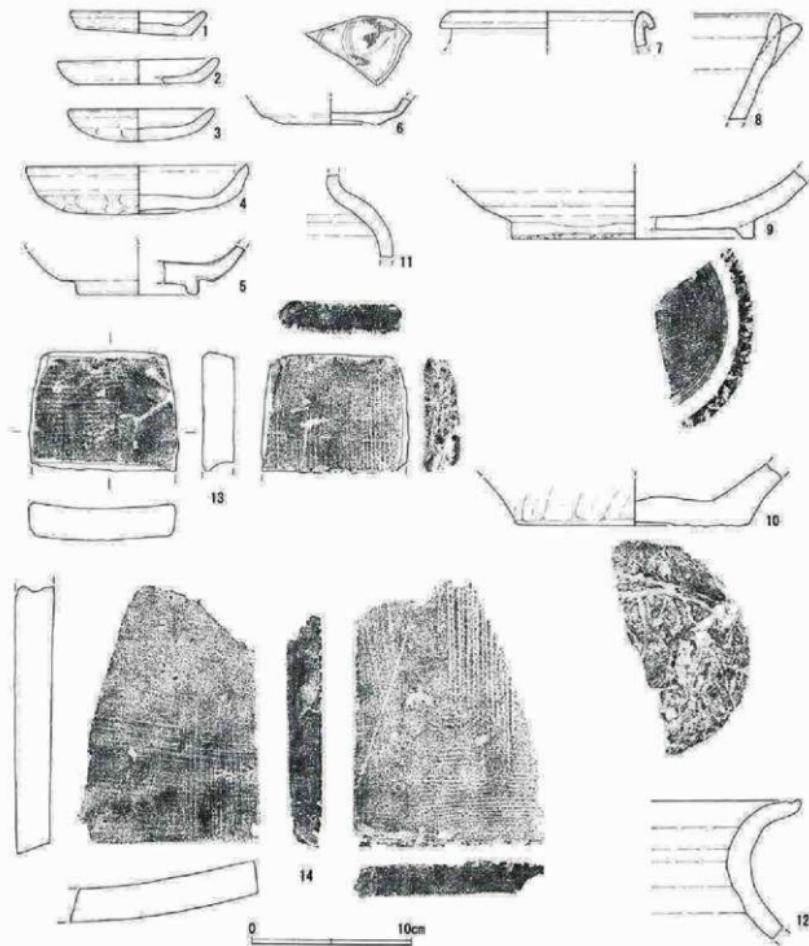


図28 井戸3出土遺物 (S=1/3)

18は常滑窯甕の胴部で外面に先端が丸まった棒状のもので「X」状に刻まれており、窯印かと思われる。19は凸面に側面に平行した縄目叩きを施す永福寺跡の創建期瓦と同類の女瓦である。

中層から出土した遺物(20~149)のうち、20~134は底部糸切り成形かわらけ、20~22は口径6.0cmの内折れ気味になる極小タイプで胎土は粉質精良の胎土である。小皿のうち23~83は口径7.6~8.6cm、底径6.2~6.9cm、器高2.0cm以下と低めの器高で器壁が開きながら立ち上がるものと、体部中程から内湾気味になる器形のものに分けられる。胎土は夾雜物を多く含む。84~93は胎土が粉質良土で器高の高い薄手器壁のものである。94~134は大皿。このうち94~131は口径12.6~13.5cm、底径8.2~9.6cm、器高3.0cm前後と器高が低く厚手器壁のもので、132~134は粉質精良の胎土をもつ「薄手丸深型」である。

なお、77・78・81・113 は口縁部に煤が付着しており打明皿として使用されたと思われる。135～141 は手捏ね成形かわらけの小皿。夾雜物を多く含む砂質胎土であり、底部は平底に近いが指頭痕とナデ調整の境は弱い稜を呈している。142 は底部糸切り成形のかわらけを鋳造の掛橋に転用したものである。143 は龍泉窯系青磁劃花文碗体部、144 は薄手器壁で均質な精良胎土の北部系山茶碗である。145～147 は常滑窯甕口縁部で 13 世紀前～中葉の所産と思われる。148 は常滑窯壺胴部、149 は木製品の曲物底板である。

下層の遺物（150～160）のうち、151～154 は底部糸切り成形のかわらけ小皿・大皿で、ともに夾雜物を多く含む弱砂質胎土であり器高は低く器壁は厚

手で内湾する。155 は龍泉窯系青磁蓮弁文碗体部で外面に幅広の錦連弁文を片彫りしている。素地は灰白色堅微、釉薬は淡灰緑色透明で薄い施釉。156 は龍泉窯系青磁劃花文碗口縁部で内面の口縁直下に二本の沈線、さらに蓮華文を片彫りで施している。素地は灰白色堅微、釉薬は灰緑色で半透明である。157 は龍泉窯系青磁皿と思われる口縁部。素地は明灰白色緻密、釉薬は暗草綠色である。158 は均質な精良胎土の北部系山茶碗。159・160 は常滑窯甕口縁部で 13 世紀前半の所産と思われる。

井戸 3(図 28)

1・2 は底部糸切り成形のかわらけ小皿で夾雜物を多く含む粉質胎土であり、器形は低い器高でやや厚手の器壁をもち開きながら立ち上がる。3・4 は手捏ね成形のかわらけで 3 の小皿は夾雜物を多く含む弱砂質胎土で底部が丸底に近く指頭痕と横位ナデ調整との境の稜は不明瞭である。4 の大皿は夾雜物を多く含む弱砂質胎土で外底は中央部が凹んだ平底に近く口縁部断面は三角形状を呈し、指頭痕と横位ナデ調整との境の稜は明瞭。5 は龍泉窯系青磁無文碗底部。断面方形の削り出し高台で腰は張っており素地は灰色緻密、透明度の高い淡草綠色の釉薬を厚く釉薬しているが高台の疊付から内側は露胎になる。6 は同安窯系青磁櫛描文皿底部である。内底面には櫛描きのジグザグ状文様と片切り掘り文を施している。外底面は浅皿状に削りこまれ、この部分のみが露胎となる。素地は淡黄色で白色粒を含む。7 は白磁壺口縁部で、おそらく四耳壺と思われる。素地は白色堅微、釉薬は綠味乳白色である。8～12 は常滑窯製品。8・9 は片口鉢 1 類の口縁部と底部で、ともに胎土は長石・石英を多めに含む灰色土であり、9 の貼付高台には粗痕がみられる。10 は底径 15.1 cm の壺の底部。11 は鶴口壺の頸～肩部。12 は甕口縁部で 13 世紀前葉の所産と思われる。13・14 は凸面に側面と平行した繩目叩きを施す永福寺跡の創建期所用瓦の瓦と同類資料である。13 は下端を欠するが側面を擦って長方形に再加工した痕跡を残す。

c. 溝出土遺物

溝 1(図 29)

1～3 は薄手の器壁をもつ底部糸切り成形かわらけで粉質精良な胎土。4 は白磁口元皿で、口径 10.1 cm の外反した口縁をもち口唇部の釉薬を削り去るために角張った様子。素地は灰白色の粘性がある緻密なもので綠味白色の釉薬を薄手に施す。5 は常滑窯片口鉢 1 類口縁部。胎土に石微粒を多く交えた粗い灰色土である。6 は砥石片で長さ 5.8 cm、幅 3.8 cm、厚さ 0.3 cm の京都鳴滝産の仕上砥。

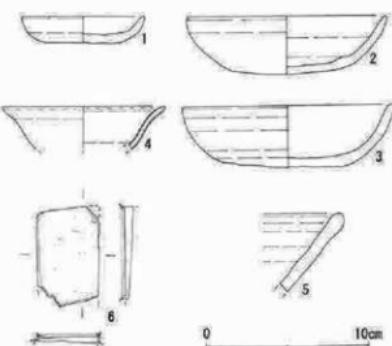


図 29 溝 1 出土遺物 (S=1/3)

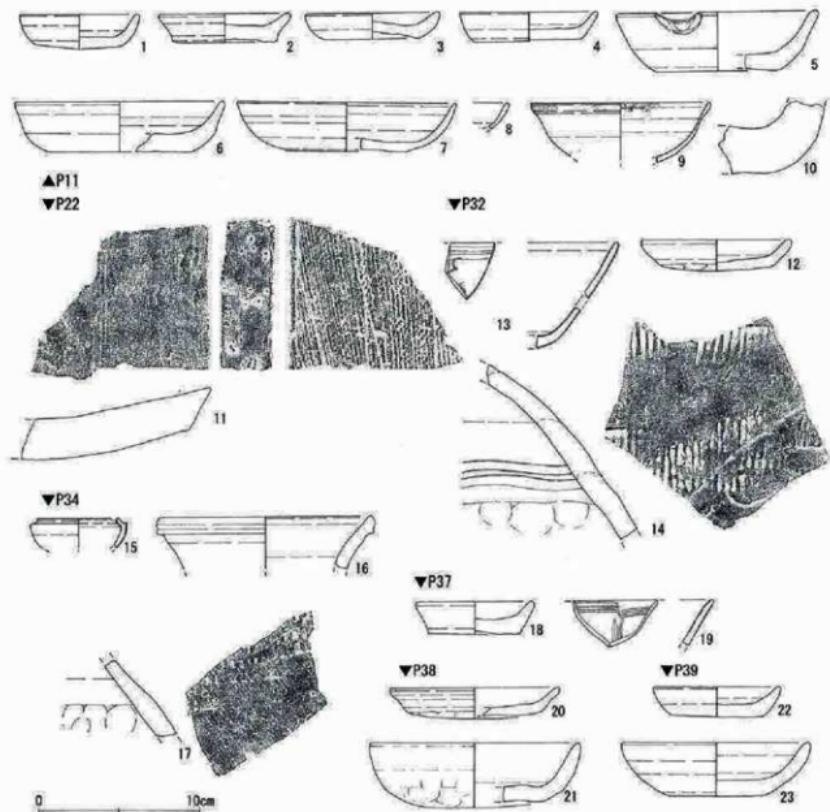


図 30 ピット出土遺物 (S=1/3)

d. ピット (P) 出土遺物

P11(図 30-1~10)

1~7 のかわらけはすべて底部糸切り成形である。1~7 は薄手の器壁をもち夾雜物の少ない良好な胎土だが、2~6 は夾雜物を多く含む粗めの粉質胎土。8 は山血口縁部で胎土は青味灰色の薄手器壁をもつ。東達系か。9 は口径 11.1 cm の手捏ね成形のかわらけであり、口縁部に煤が付着する。10 は厚手器壁の土器質火鉢底部でかわらけと類似した胎土である。

P22(図 30-11)

11 は女瓦で凸面縄目叩きを施し、胎土・製作法は永福寺創建期所用瓦と同類である。

P32(図 30-12~14)

12 は口径 9.0 cm、器高 1.9 cm の手捏ね成形のかわらけ小皿で、胎土は粉質精良。13 は接合しないが同一個体の龍泉窯系青磁劃花文碗口縁・体部である。内面の口縁直下に二本沈線を施す。素地は灰白色緻密、透明度の高い淡草緑色の釉薬を施す。14 は涅美窯瘦肩部で胎土に僅かな長石微粒を含む灰色緻

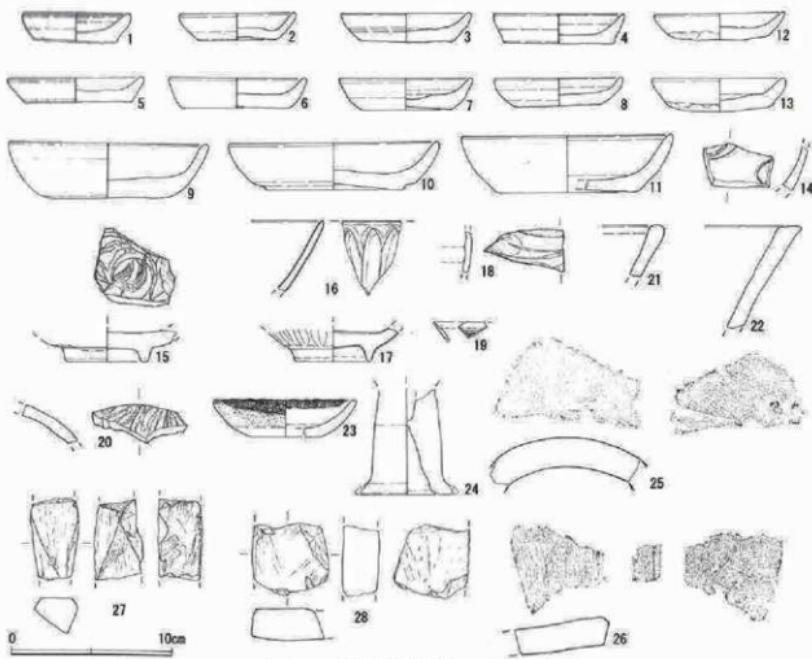


図3-1 遺構出土遺物 (S=1/3)

密土。外面に格子状の叩き目痕を施す。

P34(図30-15~17)

15は白磁合子の身で無文である。素地は白色緻密、釉薬は乳白色半透明で蓋受けの凹状部が露胎である。17は渥美窯壺肩部で胎土に僅かな長石微粒を含む灰色緻密土。外面に格子状の叩き目痕を施す。16は須恵器壺の口縁部で混入品である。

P37(図30-18·19)

18は底部糸切り成形のかわらけ小皿で口径7.2cmと小型品。器高が低く厚手器壁で逆八字型の器形である。19は龍泉窯系青磁劃花文碗口縁部で口縁部内面直下に縱位界線の二本沈線を施文。素地は灰白色緻密で草緑色の釉薬を施す。

P38(図30-20·21)

20·21は手捏ね成形のかわらけ小皿は薄手器壁で砂質胎、大皿は厚手器壁で粉質精良な胎土である。

P39(図30-22·23)

22·23は底部糸切り成形のかわらけ。厚手器壁で夾雜物を多く含む粗めの粉質胎土である。

e. 遺構出土遺物

図31-1~11は底部糸切り成形のかわらけ。12·13は砂質胎土の手捏ね成形のかわらけ小皿である。底部糸切り成形の小皿は主に器高が低く器壁が開きながら立ち上がる器形であり、胎土は夾雜物を多く

含む粗めの弱粉質胎土である。14・15は龍泉窯系青磁劃花文碗で14は体部、15は底部で断面方形の削り出し高台である。16・17は龍泉窯系青磁蓮弁文碗。16は口縁部で外面に細身の蓮弁文を彫り出す。釉薬厚手施釉で草緑色の釉薬を施す。17は底部で断面三角形の削り出し高台をもつ。釉薬は厚手施釉で高台疊付が露胎となる。18は青白磁海瓶胴部。19は内型捺作りの白磁小皿で口唇部は釉薬を削り露胎である。20は瀬戸窯瓶子肩部で外面に牡丹文を施す。21・22は常滑窯製品で21は片口鉢I類口縁部、22は片口鉢II類口縁部。23は底部糸切り成形のかわらけ小皿を転用した埴輪で口縁部に無数の小気泡が開き赤銅色の溶融物が付着している。24はかわらけ質の灯明台脚部。25は男瓦、26は女瓦である。26は鶴岡八幡宮の中世最下層に伴う鎌倉時代初期瓦と同類であるが、26は鎌倉市役所周辺で出土する古代瓦と同類のものである。27・28は中砥で上野産と思われる。

第4章 まとめ

調査では一面の遺構確認面で12世紀末から15世紀前半にかけての鎌倉時代を中心とした中世の遺構・遺物が検出された。これは本調査地点を含めた周辺域が微高地になっていることに起因する。具体的には若宮大路の東側、大町四ツ角以北、横大路以南の地域、六浦道南側の地域がこれに該当し、鎌倉跡群の多くでは中世基盤層の確認が現地表より2m以上のことでも珍しくないが、当該地域では1m前後で確認される。よって鎌倉跡群でよく見られるような盛土による生活面の複数枚化はあまりみられない。「吾妻鏡」によれば御所移転の理由の一つとして大路が西に大道、東に河川、北に鶴岡、南に海があり四神相応の地であったために若宮大路に接する（あるいは交差する）宇津宮辻子に幕府を移設したとある。しかし先の発掘調査の結果をふまえるのであれば、四神相応であったという理由と共に周辺より微高地であるがために水はけの良さなど実利的な要因も含めて選定されたと考える必要があると思われる。

・遺構について

遺跡周辺には嘉祐元（1225）年に大倉から御所が移動し様々な施設が建設されている。小町二丁目354番12外地点第2面では東西三間・南北三間の規模を持つ掘立柱建物、柱穴列等が、小町二丁目389番1地点1期では大きな屋敷地の一部との可能性が示されている掘立柱建物が検出されている。しかしながら本調査地点では様々な遺構が検出されたが、建物跡と考えられる柱穴列は検出されなかった。これは後世の掘削の影響という考え方もあるが、むしろ同時期の井戸や上坑などが多く検出されている点から本調査地点は屋敷地の中でも裏手などであった可能性を考えたい。

なお本調査地点では伊豆石・砂岩塊・泥岩塊を多量に詰め込みグリ石にし、その上に伊豆石を据えているP15が検出されている。年代は土坑4・井戸2をきるかたちで検出されており、2つの遺構出土の遺物年代から13世紀後半と考えられる。同様の遺構はこのほかに検出されておらず、P15が建物の東限になると考えられる。また構造のわりには置かれた礎石は小さく恐らくは底部の柱が建っていたと思われる。

このP15の礎石を伴う建物の軸線については、周辺の調査地点で検出された建物及び溝が遅くても13世紀中頃以降には若宮大路に軸線を合わせていると考えられるので、本遺構の軸線もこれと同じくすると考えられる。

・遺物について

本遺跡で特徴的な遺物として土坑19と井戸2中層一括出土のかわらけが挙げられる。土坑19からは

大量の出土している（図20・21参照）が、図示できた遺物はほんの一握りであり、出土した多くは復元実測できないような小片であった。土層堆積状況からみるとこれらのかわらけは遺構底部周辺から出土しており、一括廃棄された状況がよくみてとれる。また図11の土層堆積図をみてもわかるとおり、最下層とした5層のほうが上層の4層より遺物の残存率が高く、1～3層はかわらけをほとんど含まない弱砂質土層である。このことからかわらけは廃棄されたあと、一度上から踏まれるなどして圧を軽くかけられたのち砂質土により完全に埋められたと想像できる。なお出土遺物には落書と思われる墨書きがあるかわらけも含まれている点、また灯明に使用されたと考えられる焼が付着したかわらけの出土も少ないとから宴會の際に使用され一括廃棄されたものと思われる。

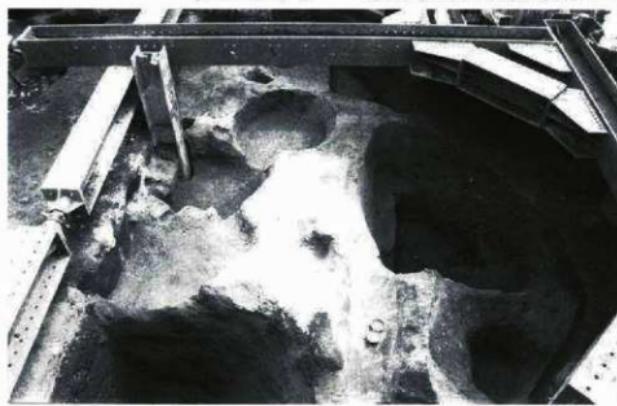
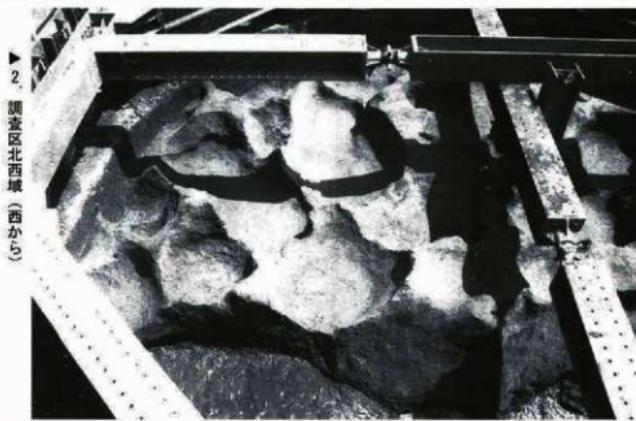
土坑19・井戸2中層からは灰雜物が少なく器壁が薄いかわらけが出土している。第3章で今小路西遺跡（御成町200番2地点）の第3面池3から出土したかわらけとの類似をしていたが、本遺跡で出土したかわらけと今小路西遺跡で出土したかわらけの差異を本章で述べることとする。本調査地点出土のかわらけと今小路西遺跡出土のかわらけの胎土の共通性は先に述べたとおりであるが、大きく異なる点が3つある。1つは本調査地点出土のかわらけには指2本乃至は3本で内底面にナデ調整が施されているが、今小路西遺跡では内底面のナデ調整が施されていない。また焼成も今小路西遺跡出土のかわらけは通常のかわらけより高温で焼かれたらしく良く焼き締められており、弾くと高音を発する。それに対し本調査地点のかわらけも通常のかわらけよりは焼き締められているが今小路西遺跡ほどではない。また色調も今小路西遺跡出土のかわらけは黄色味が強いものが多いが本調査地点出土のかわらけは赤味が強い印象を受ける。

その他の遺物ではかわらけを使用した堆塙や骨角製品の未製品などが製作にかかる遺物が若干出土している。今小路西遺跡御成小学校地点の南側武家屋敷の一角からは鍛冶が詰め込まれているピットが検出されていることから武家屋敷では職能民を呼び、必要に応じたものを作らせるという行為が行われていたと推測されるが、本遺跡でも同様の行為が行われていたと思われる。このような製作活動は屋敷の表側では行われず裏手などで行われたはずであるので、本調査地点が屋敷地の裏手にあたることが遺物からも理解できると思われる。

最後になるが、本調査地点を含めた周辺からは鎌倉時代以前（主に古代）の遺物が出土することがある。本地点からも土師器・須恵器などが出土しているが、詳しく年代などを検討することができなかつた。今後これらの遺物の年代を細かに分析することにより、鎌倉時代以前の景観復元の一端を考える上で貴重な資料になり得ると思われる。

引用・参考文献（第1章と同一のものは省略）

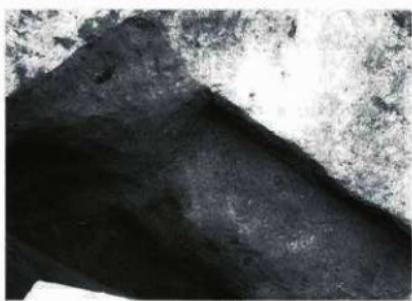
- 秋山哲雄 2006 「北条権力と都市鎌倉」吉川弘文館
河野真知郎 1989 「武家屋敷に呼ばれた鍛冶屋・石井達・大三輪能文福『よみがえる中世3武士の都鎌倉』」平丸社
河野真知郎 1990 「今小路西遺跡（御成小学校内）」今小路西遺跡発掘調査委員会・鎌倉市教育委員会
河野真知郎 2004 「政権都市「鎌倉」－考古学的研究のこの十年－」『政権都市 中世都市研究9』新人物往来社
河野真知郎 1993 「中世鎌倉火鉢考－東国との関連において－」『考古論叢 神奈川』第2章
鈴木松美 2008 「中世鎌倉の職能活動－分布図と出土点数、個別事例から探る職能民の存在形態－」
『考古論叢神奈川 第18集』神奈川県考古学会
中野晴久 1994 「知多半島（常滑）窯の編年について」『第2回中世都市研究討論会』発表要旨
宇都洋平 2006 「今小路西遺跡（御成町200番2地点）」鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書22】鎌倉市教育委員会
原 貴志ほか
藤原良祐 2008 「中世瀬戸窯の研究」高志書院
横田賀次郎 1978 「大宰府出土輸入中国陶磁器について－型式分類と編年を中心として－」
『九州歴史資料研究論集4』



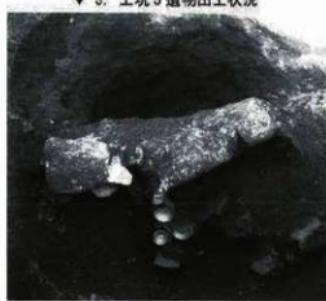
图版 2



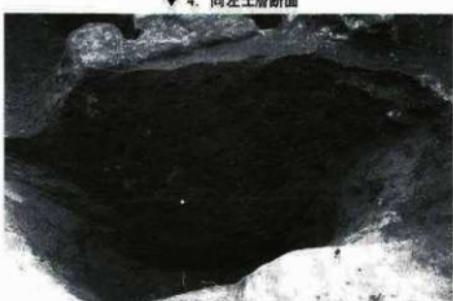
▲ 1. 土坑 2 遗物出土状况
▼ 3. 土坑 5 遗物出土状况



▲ 2. 土坑 8
▼ 4. 同左土层断面



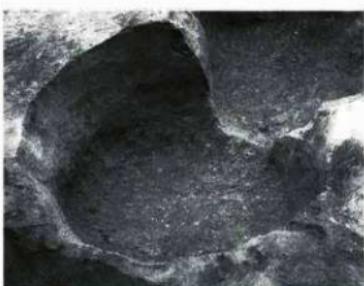
▼ 5. 土坑 11



► 7
土坑 12



▼ 6. 同上土层断面

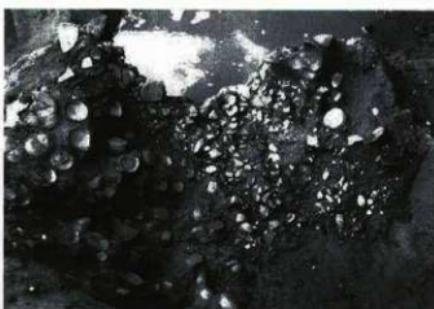


► 8
同上土层断面

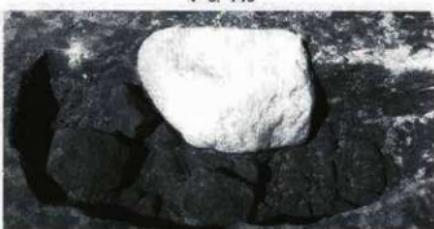




▼ 2. 土坑 18



▼ 4. 土坑 20 土层断面





▲ 1. 井戸 1 (井戸木枠上層)
▼ 2. 同上 (井戸木枠下層)



▲ 3. 井戸 1 (井戸枠組方)
▼ 4. 井戸 2



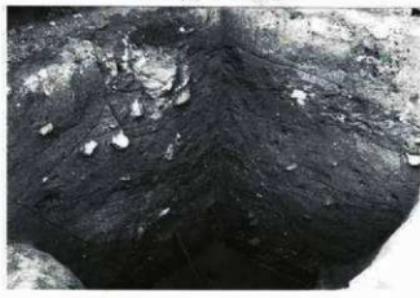
▼ 5. 井戸 2 中層出土遺物



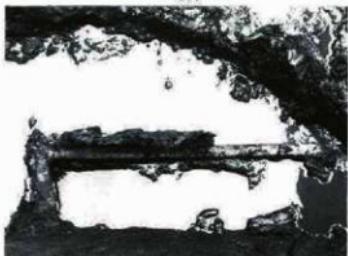
▼ 6. 井戸 2 土層断面



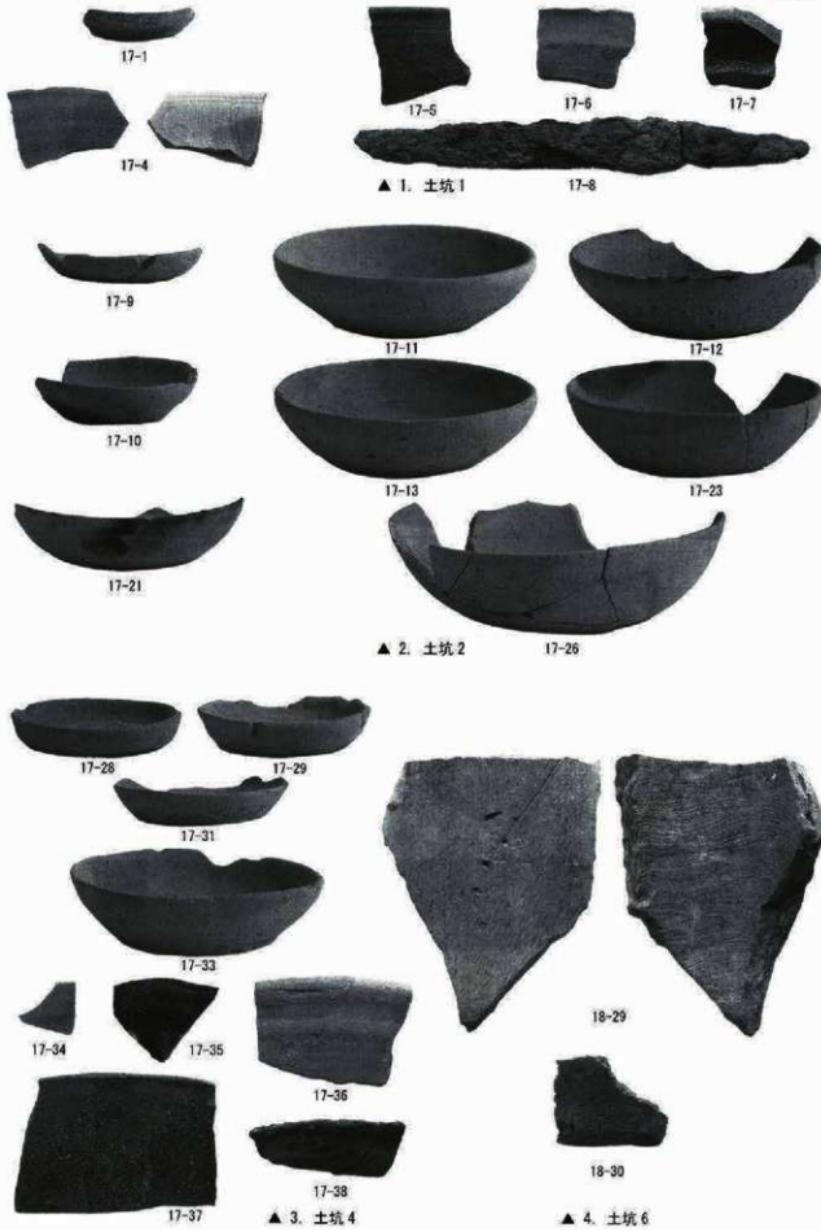
▼ 7. 井戸 4



▼ 8. 近世井戸 墓倉石 切石組 井戸枠



圖版 5



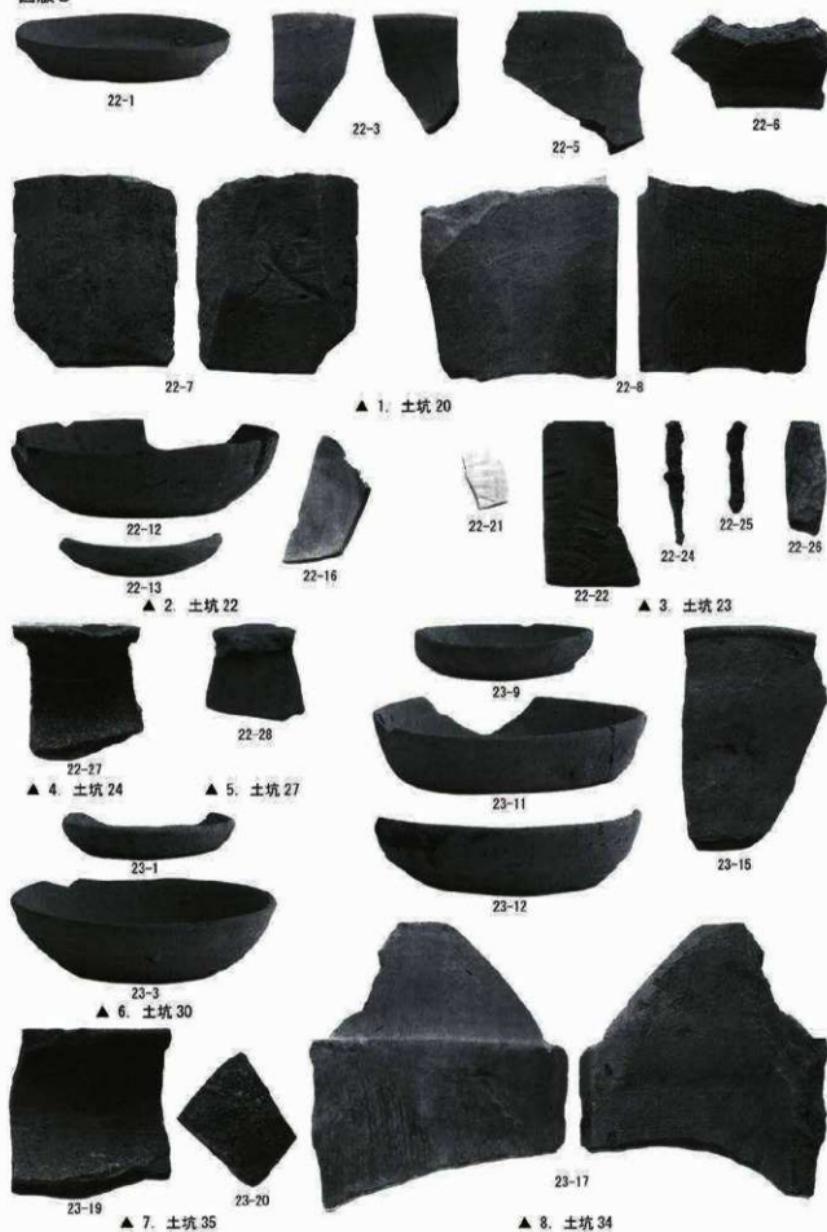
圖版 6

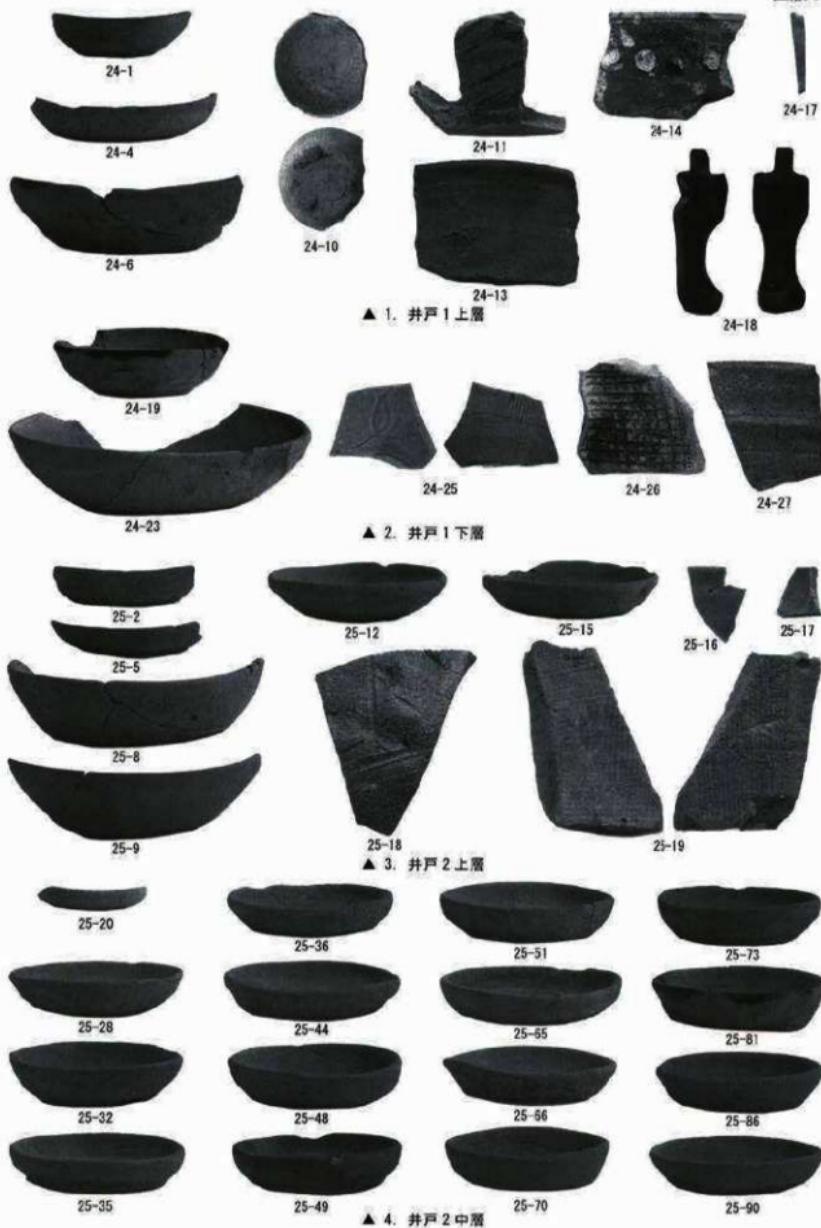




▲ 1. 土坑 19

圖版 8





図版 10



▲ 1. 井戸 2 中層

▲ 2. 井戸 2 下層

▲ 3. 井戸 3



はうじょうとぎ ふさ あき とき てい あと
北条時房・顯時邸跡 (No. 278)

雪ノ下一 丁目236番1

例　　言

- 本報は、北条時房・頼時邸跡の鎌倉市雪ノ下丁目 236 番 1 地点における個人専用住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査の報告である。
- 発掘調査は、平成 16 年 3 月 3 日～同年 4 月 5 日にかけて、調査面積 22.50m² を対象に鎌倉市教育委員会が実施した。
- 調査体制は、以下の通りである。
調査担当者：原 廣志
調査員：須佐直子・太田美智子・石元通子・須佐仁和・久保田裕美・鈴木絵美・梅岡ケイト
調査補助員：長友純子・宇都洋平・山口正紀・野崎美帆・小野夏菜
協力 機関：(社) 鎌倉市シルバー人材センター・鎌倉考古学研究所
- 本報の執筆は、第 1 ～ 3 章を原が執筆し、第 4 章については調査員協議のもと原が稿を草した。また挿図・写真図版作成には須佐(直)・梅岡・山口・小野が実施した。
- 本報の掲載写真は、全景・個別遺構を原、久保田があり、出土遺物は須佐(仁)が撮影した。
- 発掘調査における出土遺物、図面・写真類は、鎌倉市教育委員会が一括保管している。
- 本報の凡例は、以下の通りである。
 - 図版縮尺 全測図：1/50 遺構図：1/20 遺物図：1/3
 - 遺構図 遺構図のレベルは海拔標高の数値を示している。
 - 遺物図 一・二・三は種類範囲を示す。黒塗は主にかわらけ灯明皿付着の油煤煙や漆器の朱漆文様を表現している。遺物観察表における手程ねかわらけの底経計測値は外底指頭痕と口縁部との境、即ち稜部の数値を表わしている。
 - 使用名称 本報中の「土丹」は三浦・葉山岩層の泥岩のことである。
- 現地調査及び資料整理においては、多くの方々からご助言、並びにご協力を戴いた。記して感謝の意を表したい。(敬称略。五十音順)。
秋山哲雄・伊丹まさか・河野眞知郎・菊川 泉・菊川英政・古田戸俊一・汐見一夫・玉林美男・宗臺秀明・宗臺富貴子・鈴木弘太・手塚直樹・福田 誠・松尾宣方・馬淵和雄

本文目次

第1章 遺跡の位置と歴史的環境	61
1. 調査地点の位置	61
2. 歴史的環境	63
第2章 調査の概要	65
1. 調査の経過	65
2. 測量軸の設定	65
3. 層序	66
第3章 検出遺構と出土遺物	69
1. 第1面の遺構・遺物	69
2. 第2面の遺構・遺物	72
3. 第3面の遺構・遺物	75
4. 第4面の遺構・遺物	79
5. 第5面の遺構・遺物	82
6. 第6面の遺構・遺物	85
第4章 まとめ	88

挿図目次

図1 調査地点位置図	61	図13 第3面出土遺物	78
図2 調査地点とその周辺	62	図14 第4面全測図	79
図3 国土座標・測量軸設定図	66	図15 第4面各遺構	80
図4 調査区南壁・西壁土層図	67	図16 第4面出土遺物	81
図5 第1面全測図	69	図17 第5面全測図	82
図6 第1面各遺構	70	図18 第5面P1	82
図7 第1面出土遺物	71	図19 第5面出土遺物(1)	83
図8 第2面全測図	73	図20 第5面出土遺物(2)	84
図9 第2面各遺構	73	図21 第6面全測図	85
図10 第2面出土遺物	74	図22 第6面出土遺物(1)	86
図11 第3面全測図	75	図23 第6面出土遺物(2)	87
図12 第3面各遺構	76		

表 目 次

表 1 第5面玉砂利計測表(1).....	89
表 2 第5面玉砂利計測表(2).....	90
表 3 第5面玉砂利計測表(3).....	91
表 4 第5面玉砂利計測表(4).....	92
表 5 玉石計測比表	92
表 6 遺物観察表(1).....	93
表 7 遺物観察表(2).....	94
表 8 遺物観察表(3).....	95
表 9 遺物観察表(4).....	96
表 10 遺物分類別出土数量・比率表	97

図 版 目 次

図版 1. 1. 第1面全景(東から) 2. 第1面全景(西から) 3. 溝1(西から)	98
4. 溝1かわらけ出土状況	98
図版 2. 1. 建物1-イ礎石 2. 建物1-ロ礎石 3. 建物1-ハ礎石 4. P2	
5. 溝1土土層断面	99
図版 3. 1. 第2面全景(東から) 2. 第2面全景(西から) 3. 鎌倉石切石列	
3. 溝1北側土丹塊敷	100
図版 4. 1. 第3面全景(東から) 2. 第3面全景(西から) 3. かわらけ出土状況	
4. P7礎板検出状況	101
図版 5. 1. 第4面全景(東から) 2. 第4面全景(西から) 3. 溝1の木杭列	
4. 調査区中央部(北から)	102
図版 6. 1. 第5面全景(東から) 2. 第5面全景(西から) 3. 玉砂利敷範囲近景	
4. 玉砂利群	103
図版 7. 1. 第6面確認トレーナー(東から) 2. トレーナー内ハマグリ出土状況	
3. 調査区北壁土層断面 4. 調査区南壁土層断面 5. 調査区西壁南端土層断面	
6. 調査区西壁北側土層断面	104
図版 8. 1. 第1面 2. 第2面	105
図版 9. 1. 第3面 2. 第4面	106
図版 10. 1. 第5面遺構外	107
図版 11. 1. 第6面遺構外	108

第1章 遺跡の位置と歴史的環境

1. 調査地点の位置

「鎌倉城」と呼称される馬蹄形の山塊に囲まれた鎌倉旧市街地は、鶴岡八幡宮から市街中心を抜けて由比ヶ浜の海岸に向かって縱貫する若宮大路と、この幹線道路とほぼ平行・直交したいくつかの道路によって区画されている。この内で鶴岡八幡宮社前を東西に走る通りを「横小路」と呼び、若宮大路の



図1 調査地点位置図



図2 調査地点とその周辺

調査地点位置と周辺遺跡

- ①「雪ノ下一丁目 236番4」
- ②「雪ノ下一丁目 271番1」
- ③「雪ノ下一丁目 271番3」
- ④「雪ノ下一丁目 271番4」
- ⑤「雪ノ下一丁目 272番」
- ⑥「雪ノ下一丁目 273番口」
- ⑦「雪ノ下一丁目 273番イ」
- ⑧「雪ノ下一丁目 274番2」
- ⑨「雪ノ下一丁目 233番9」
- ⑩「雪ノ下一丁目 372番7」
- ⑪「雪ノ下一丁目 371番11」
- ⑫「雪ノ下一丁目 370番1」
- ⑬「雪ノ下一丁目 369番」
- ⑭「雪ノ下一丁目 369番1」
- ⑮「雪ノ下一丁目 367・368番1」
- ⑯「雪ノ下一丁目 419番3」
- ⑰「小町二丁目 366番1外」

調査報告書名など

本調査地點

- 田代都夫・原廣志 1889「北条時房・頬時邸跡 雪ノ下一丁目 231番1地点」『北条時房・頬時邸跡発掘調査報告』(田長吉田章一郎)
- 馬渕和雄 2000「北条時房・頬時邸跡 雪ノ下一丁目 272番1地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』16 第2分冊
- 馬渕和雄・森治屋勝二・松原康子 2000「北条時房・頬時邸跡 雪ノ下一丁目 271番4地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』16 第2分冊
- 宗祇宣・宗祇宣貢子 1998「北条時房・頬時邸跡 雪ノ下一丁目 272番地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』14 第1分冊
- 佐藤良・鷹田誠・原廣志 1988「北条時房・頬時邸跡 雪ノ下一丁目 273番口地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』4
- 鷹田信惟・藤谷清 1997「北条時房・頬時邸跡 雪ノ下一丁目 273番イ地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』15 第1分冊
- 鷹田信惟・原廣志 1988「北条時房・頬時邸跡 雪ノ下一丁目 274番2地点」『北条時房・頬時邸跡発掘調査報告』(田長吉田章一郎)
- 馬渕和雄 1987「北条時房・頬時邸跡 雪ノ下一丁目 233番9地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』3
- 馬渕和雄 1985「北条時房・頬時邸跡 雪ノ下一丁目 372番7地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』1
- 馬渕和雄 1985「北条時房・頬時邸跡 雪ノ下一丁目 371番1地点」『北条時房・頬時邸跡発掘調査報告』(田長吉田章一郎)
- 宗祇宣貢子・土地位美 1998「北条小町(泰時・時頬邸跡) 雪ノ下一丁目 367番7地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』14 第1分冊
- 鷹田信惟 1991「北条時房・頬時邸跡 雪ノ下一丁目 369番地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』7
- 秋山哲也・須佐道子・原廣志 1999「北条小町邸跡 雪ノ下一丁目 369番1地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』14 第2分冊
- 宮田真・森孝子・堀川浩通 2000「北条小町邸跡(泰時・時頬邸跡) 雪ノ下一丁目 367番1地点」『北条小町邸跡発掘調査報告』(田長官田真)
- 玉林英男 1987「北条泰時・時頬邸跡(雪ノ下一丁目 419番3地点)」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』3
- 羅英 1991「宇都宮宣子邸跡」『第1回鎌倉市遺跡発表会・研究発表要旨』鎌倉考古学研究所・鎌倉市教育委員会

西方約300mをJR横須賀線と平行に走る通りを「今小路」と呼び、その間の南北方向の通りには商店が軒を連ねて一年を通じ観光客で賑わう「小町通り」が位置している。さらに若宮大路の反対側200mほど東には、鎌倉幕府城東限をなして南北に走る道路の「小町大路」があり、この道は南進して町屋城を抜け和賀江津（港）へ至る経済要路でもあった。二ノ鳥居から段葛を鶴岡八幡宮方面へ約250m西には若宮大路から今小路踏切に至る真っ直ぐな路地がある。この路地と、若宮大路・横小路・小町通りに四辺を囲まれた範囲、およそ南北240m×東西110mに及ぶ長方形の地域が「北条時房・顕時邸跡」として神奈川県遺跡台帳（台帳番号：No.278）に掲載されている場所である。調査地点はこの区画内の南側中央寄りの一角にあたり、鶴岡八幡宮より約190mほど南の位置で、地番は鎌倉市雪ノ下一丁目236番1に所在している。

2. 歴史的環境

治承四（1180）年秋に鎌倉入りした源頼朝は、まず平安時代後期に源賴義が浜地の由比郷鶴岡に勧請した鶴岡若宮を、現在の小林郷北山へ遷座して鶴岡八幡宮新宮若宮と称した。鶴岡八幡宮社頭から由比ヶ浜へ一直線に延びる八幡宮への参詣道が若宮大路である。『吾妻鏡』には寿永元（1182）年春、鎌倉幕府による街造りの第一歩として、また妻北条政子の安産祈願をかねて大畜設営を行ない頼朝自ら陣頭指揮にたち北条時政以下の諸将が土石を運んで段葛を築造したと伝えている。この時期の御所（幕府）は鶴岡八幡宮東側に位置した大倉に設けられていたが、建保五（1217）年の火災焼失と、嘉禄元（1225）年に北条政子が没してまもなく、執権北条泰時がこれまでの大倉御所から鶴岡八幡宮前、若宮大路東方にあたる宇都宮辻子に面した地に御所（宇都宮辻子幕府）を移転し、翌年京都より迎えられた藤原振闇家の九条頼經が鎌倉幕府第四代將軍としてここに入っている。さらに嘉禄二（1236）年に「若宮大路の東の頼」へと新たに御所の造営が行なわれ移転されたのだが、その場所は若宮大路御所で鎌倉幕府第三代執権の北条泰時邸内の一画に置かれたという。この区画の若宮大路を挟んだ向かい側に位置したのが本調査地点が所在する「北条時房・顕時邸跡」である。

本遺跡である北条時房・顕時について簡単に触ることにする。時房（1175～1240年）は初代執権北条時政の嫡子であり、文治五（1189）年の奥州合戦や健保元（1213）の和田合戦などの際に参戦しており、さらに承久の乱（1221年）では泰時とともに上洛を果たし、のちに初代六波羅探題に任せられるほか没するまで連署などの要職を努めている。

顕時（1248～1301年）は初代金沢北条氏の実時嫡子で引付衆・評定衆などの要職を歴任している。北条実時と、鎌倉の外港六浦津及び金沢の地との縁は、宝治元（1247）年の宝治合戦で三浦一族を滅亡させたのち、六浦荘金沢を支配したのが金沢氏の祖、父実時であった。実時は六浦荘金沢に居館を営み、その一画に持仏堂から発したと推定されるのが現在の横浜市金沢区金沢町に所在した金沢山称名寺（西大寺末）である。称名寺は弘長二（1262）年に淨土教寺院として登場するが、文永四（1267）年に実時は五部大乗經を受け取るために鎌倉に下向した下野国薬師寺（戒壇院を有す）の僧審海を招請して長老に据え、真言律宗に改宗して称名寺の礎を築いた。弘安八（1285）年義父泰盛のおこした霜月騒動に巻きこまれて下総国埴生庄へ流謫の身となった。後に出家し、法名を恵日と号した。境内には顕時の墳墓となる大型の石塔五輪塔が建立されている。

（引用・参考文献）

- 大三輪龍彦 1989 「鎌倉の都市計画－政治都市・軍事都市として－」『よみがえる中世3 武士の都 鎌倉』平凡社

- 河野眞知郎 2004 『政權都市「鎌倉」－考古学的研究のこの十年－』中世都市研究会編『中世都市研究 9 政權都市』新人物往来社
- 斎藤直子 1999 「13～19世紀鎌倉海岸部における潟湖の変容」『国立歴史民族博物館研究報告』第81集 国立歴史民族博物館
- 高橋慎一朗 2005 『日本史リブレット 21 武家の古都鎌倉』山川出版社
- 前田元重・
村岡正 1988 「史跡称名寺境内－鎌倉を守った東の要害－」『称名寺庭園－鎌倉時代隨一の淨土庭園－』横浜市教育委員会・神奈川県立金沢文庫
- 西岡芳文 2004 「港湾都市六浦と鎌倉」五味文彦・馬淵和雄編『中世都市鎌倉の実像と境界』高志書院

第2章 調査の概要

1. 調査の経過

本地点は個人専用住宅の建設に先立つ発掘調査であった。建設計画は鋼管杭打ち基礎工事であったため、鎌倉市教育委員会による遺構確認の試掘調査が実施された。その結果、現地表下約 75～85cmまで近・現代の客土があり、その直下から中世遺物包含層を挟んで遺構面(生活面)の存在が明らかになり発掘調査を実施する運びとなった。現地調査は平成 16 年 3月 3日から調査機材の搬入及び確認調査の成果を基に客土の重機掘削から開始し、後に人力で掘り下げながら各遺構面の調査を行なった。調査期間中は高い地下水位に伴う多量湧水に悩まされながら、4月5日に現地調査を無事終了した。調査面積は 22.5m²を対象である。調査経過については、以下に主な作業内容を日誌抜粋で記しておく。

- 3月 3日 (水) 晴天 調査区を設定し、地表下 70cmまで重機による表土掘削と後追い残土処理。調査機材搬入とテント設営。
- 4日 (木) 晴天 土丹版築の整地層が確認され、第1面として検出作業を開始。市4級基準点を基に測量軸方眼の設定及び測量用水準点の原点レベル移動。
- 6日 (土) 晴天 第1面全景・個別遺構の写真撮影、平面図作成後に下層遺構検出の粗掘り開始。
- 8日 (月) 晴天 下層遺構検出の粗掘りと面出し精査。
- 11日 (木) 晴天 第2面全景・個別遺構の写真撮影及び平面図作成。第3面検出の粗掘りと面出し遺構確認の精査。
- 15日 (月) 晴天 第3面全景・個別遺構の写真撮影及び平面図作成。次の生活面へ向け粗掘りと面出し遺構確認の作業開始。
- 19日 (金) 晴天 第4面の遺構検出と写真撮影の為の清掃、全景・個別遺構の写真撮影及び平面図作成。
- 22日 (月) 曇天 第5面検出に向け粗掘りと面出し遺構確認の作業開始。
- 27日 (土) 晴天 第5面全景・個別遺構の写真撮影、平面図作成開始。
- 29日 (月) 晴天 調査区南半分にトレチ設定し、下層の生活面・遺構を確認するために深掘りを開始。
- 31日 (水) 晴天 トレチ内第6面の全景・個別遺構の写真撮影及び平面図作成。
- 4月 1日 (木) 晴天 調査区南壁・西壁土層堆積の写真撮影及び土層断面図作成。
- 5日 (月) 晴天 機材撤収、現地調査終了。

2. 測量軸の設定

現地調査にあたり使用した測量軸の設定には、図3に示したように国土座標の数値を用いており、グリットは調査区範囲にほぼ平行して基準の東西軸を設けた。設定には調査地点東側を南北に走る道の路面上に鎌倉市道路管理課が設置した市3級基準点(第IX座標系)の S111(X=-75,462.628 Y=-25,133.411)と S112(X=-75,501.598 Y=-25,153.207)が確認された。このS111・112を国土座標の基準点として図3に示したように敷地内へ任意点にあたる a・b 点を移動した。その後、調査区に併

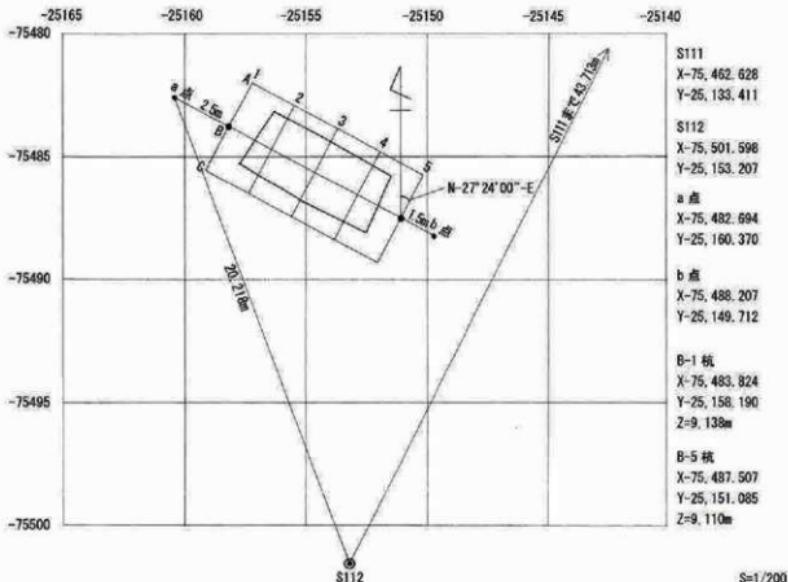


図3 國土座標・測量軸設定図

てグリットの基準としてB-1杭（X=-75,483.824 Y=-25,158.190）とB-5杭（X=-75,487.507 Y=-25,151.085）をそれぞれ設置した。なお、方眼軸線は測量の便利性と、予想される検出構造の軸方位を優先させた方法で調査区の形状に即した配置にしたために、國土座標とは一致していない。

調査区の方眼軸は、図2上段で示したように東西軸と南北軸をそれぞれ4m方眼を組み、北から東西軸をアルファベット、南北軸は西から算用数字を充てた。各グリットの名称は北西角の交差軸点をグリット名として呼称している。方眼の南北軸線は真北よりN-27° 24' 00" - Eを示し、現若宮大路の中軸線は真北よりN-26° 48' 23" - Eである。

調査中に使用した海拔標高の水準原点は、若宮大路二ノ鳥居の基礎に近接して設置されている国土地理院水準点No.15673(6,1684m)を基準にして調査地内の東西軸になるB-1杭(9.138m)・B-5杭(9.110m)上に仮水準点を移動したものである。従って、文章中及び挿図に記載されたレベル数値はこれを基準とした海拔標高である。

3. 層序

調査区の南壁と西壁で確認した図4の土層堆積図を用いて、その堆積状況を表土より説明する。調査前現地表の海拔標高は約9.00m程でほぼ平坦な地形を呈している。第1面までの堆積土層は近・現代の客土と擾乱層（主に関東大震災後に作るゴミ穴）が約85cm前後の厚さで堆積していた。近・現代の堆積土（擾乱・表土）を重機により取り除いたのち、中世の遺物包含層をほとんど挟まずに小土丹塊やかわらけ小片を含んだ締まった第1層の灰褐色砂質土が顔を覗かせ、上面より遺構が確認できたので第1面

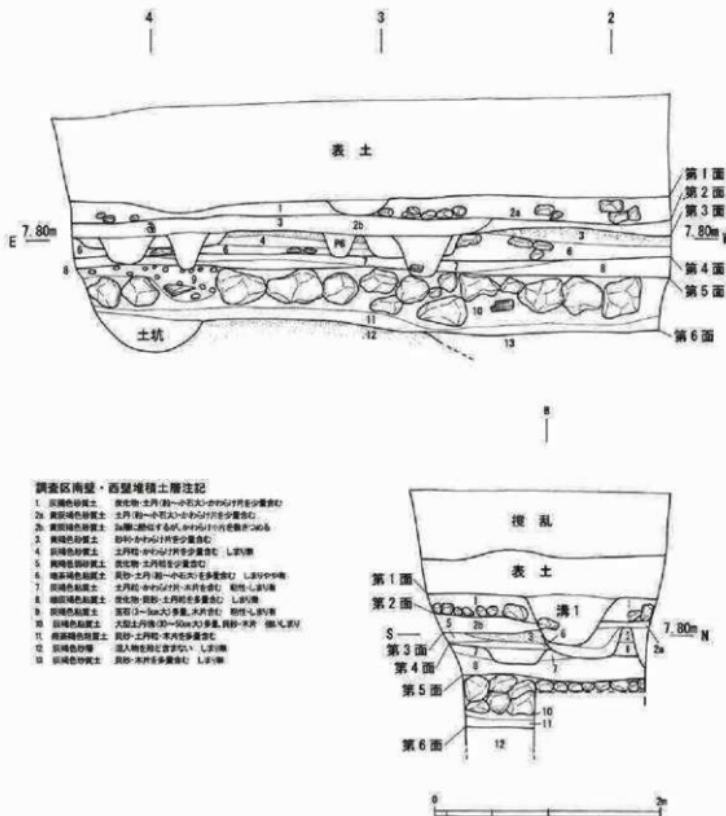


図4 調査区南壁・西壁土層堆積図

とした。第1面は海拔高約8.15mを呈し、調査区内全体で比較的良好な土丹塊を利用した整地がなされていたが、溝1を挟んで異なる様相を示していた。調査区北壁直下の礎石建物側は平らな土丹版築の地行を施して生活面を構築しているのに対し、南側は表面にまで土丹塊を貼り付けており凹凸を残す地行で構成されてる。第2面は海拔高約7.95m程度に起伏がある整地を施し、厚さ10~20cm 第1面構成土を除去した直下より2a・b層上を生活面としている。調査区内でこの面を構成する版築層や整地層はa・b層と区別したように異なる土丹地行層が施されていた。調査区南半分の範囲は地盤が土丹地行版築で固められていた(2b層)。その上におおむね拳大へ人頭大の土丹塊が列をなし延長上に鎌倉石の長方形切石2個が認められた。2a層は小土丹塊と粗砂を混入した黄灰褐色砂質土の薄手造成土で構成される。この時期は鎌倉石切石以外、ピット3口が認めらるだけで遺構密度は低く屋敷の中の空閑地と考えられる。

第3面は海拔高7.85m前後であった。第2面の厚さ15cm程度の構成土を除去すると、暗黄褐色砂層で多

量の砂利と粗砂を固めた地行層で表面が硬化した生活面を特徴とする。硬化した3層は下層の縮まりが弱く脆弱な4・5層の地盤を改良するため、結果的にこうなったのだろう。この面では礫板を伴う柱穴、土坑、溝状土坑など第2面に比べ、やや高い造構密度であった。第4面は海拔高約7.70mで調査区北半分の一定の範囲に土丹地行が確認された。この面の整地土は7層の土丹粒・かわらけ片を多めに含んだ粘性の強い縮まりある灰褐色粘質土と、8層の炭化物・貝砂・土丹粒を多量に含んだ縮まりの弱い粘質土で両層の堆積は厚さ15~25cmである。第5面は海拔高7.50m前後であった。この面の構成土は拳大~50cm大の大小土丹塊を多量に交えて地行した厚さ30~50cmの強固で硬化した整地層になり、東域の面上には3~5cm大の玉石敷きが検出された。

第6面は海拔高約7.05m程である。第5面の調査終了後、多量の降雨・湧水によって調査区壁面の一部が崩落した。そこで調査の安全確保を考慮する目的で第5面以下は調査区南壁沿いにトレンチを設定して造構確認を行なった。この面は12・13層の無遺物層より構成された生活面で、第5面の地行整地層との間に薄い有機物腐食土(11層)の堆積が認められた。

第3章 検出遺構と出土遺物

1. 第1面の遺構・遺物

第1面は、地表レベル海拔8.10～20mを測り、調査区北半分を中心に土丹塊を突き固めた地行面で緩やかに東から西に向かって傾斜している。この面では礎石建物1棟、溝1条、ピット4穴を検出した。建物1は東西に走る溝1の一部を壊して建られている。出土遺物には溝1に伴うかわらけ(ロクロ成形)をはじめ、船載陶磁器、瀬戸・常滑窯、瓦類、骨角製品などである。

建物1 (図5～7)

調査区北壁際ににおいて東西方方向で検出された礎石建物であり、現状では礎石3個からなり2間分(420cm)が確認され、南辺の限界と考えられるが、調査区の北・東西外へと拡がっているため規模は不明である。柱間寸法(図6上段を参照)をみると、西端に位置する礎石の建1-イから東端の建1-ハまでの柱間芯々距離がそれぞれ212cm(約7尺)・212cmを測り、建物主軸は若宮大路中輪線にほぼ直交した軸方向を示している。浅い掘り方をもつ各礎石は径40～47cm・厚さ17～23cm程の楕円形の偏平な川原石を用いている。建1-イの礎石上面には焼失した柱あたりの痕跡を残し、使用された柱の寸法は一辺約

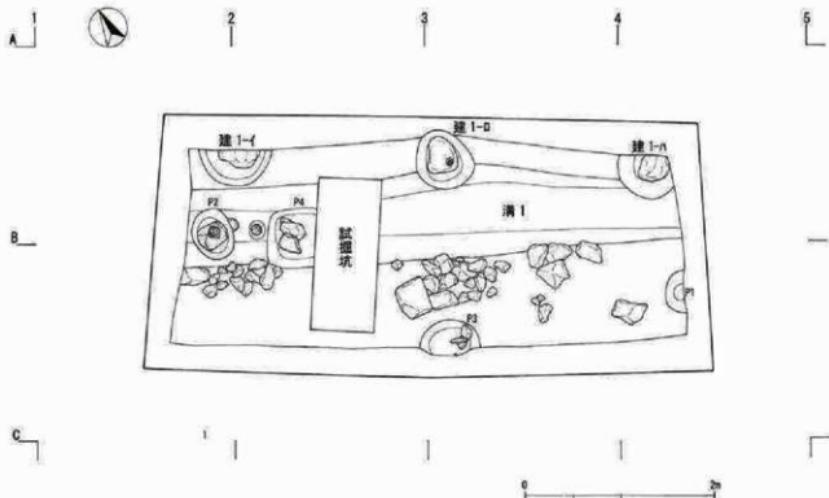
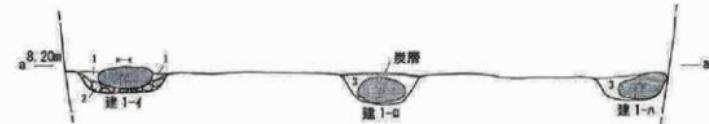
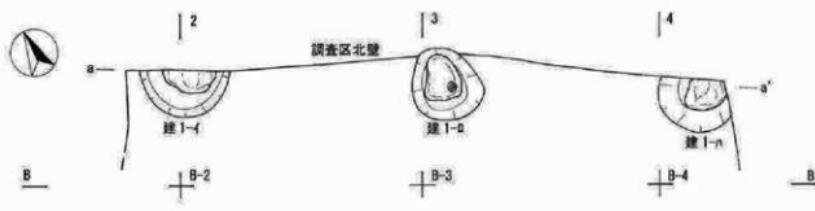


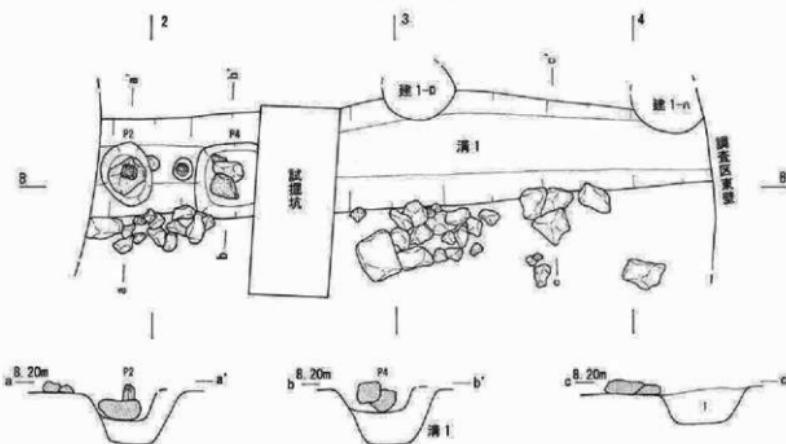
図5 第1面全測図



建物1柱穴土層注記
 1. 黄褐色の粘土質土 物理的・化学的小性質を多様化
 2. 黄褐色の粘土質土 物理的・化学的小性質を同上
 3. 黄褐色の粘土質土 物理的・化学的小性質を同上

▲建物1

▼溝1・ピット



溝1柱穴土層注記
 1. 黄褐色の粘土質土 物理的・化学的小性質を多様化

▼P3

▼P1

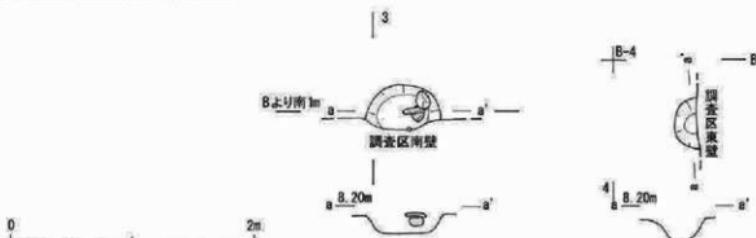


図6 第1面各過構

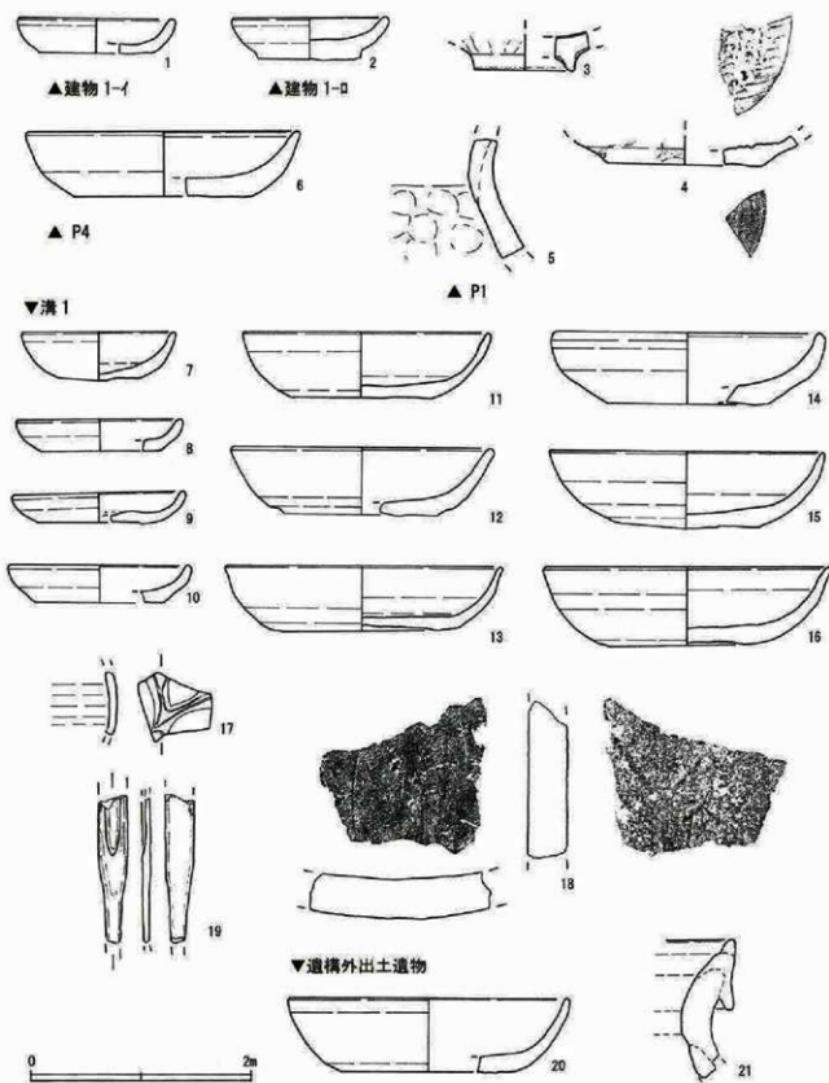


図7 第1面出土遺物

13cmの角柱と推定された。建1-イは礎石上面の海拔高 8.20mであり、礎石下に拳大の土丹塊により根固めを施した掘り方である。建1-ロの礎石上層には薄い炭層が覆っており、建1-ハの礎石表面に煤けた痕跡が認められ、この建物が被災した可能性が予想させる。出土遺物は建1-イ・建1-ロから図

7-1・2のロクロ成形のかわらけ小皿がそれぞれ伴っていた。

溝1(図6・7)

調査区中央で建物1や柱穴に一部を壊されているが、建物1と同じ主軸方位で東西へ延びる素掘り溝である。溝は幅68~93cm、深さ35~45cm、長さ5.2m以上を計測し、掘り方の断面は逆台形を呈する。溝底の海拔高は東端で7.85m、西端で7.70mで東から西へ緩やかに流下している。覆土は貝砂ブロック・水磨した土丹小塊・炭化物を含む黄灰褐色砂質土である。出土遺物は図7-7~19である。7~16は系切底ロクロ成形のかわらけ皿で7~10が小型、11が中型、12~16が大型である。7は薄手器壁の背高で口径・底径比が大きいもの、8~10が背低で内底面が広く、内彎気味の器形である。11は口径10.8cmの背高で薄手器壁の内彎した器形、12~16は口径12.1~13.3cm、底径6.7~7.8cm、器高3.0~3.5cmと薄手丸深型の器形である。17は青白磁梅瓶の胴部片、18は女瓦、19は鹿骨製品の笄である。

ピット(図6・7)

P1は調査区東南隅で西半分を確認した径43cm、深さ25cmの掘り方をもつ。遺物は図7-3~5の青磁蓮弁文碗底部・瀬戸御皿底部・常滑窯頭部の破片である。

P2はB-2杭に位置し溝1より新しいもので、掘り方は径40~50cmの楕円形を呈し、深さ24cmで底面に方形状の鎌倉石を据えてその上に一辺12cmの角柱痕を残している。図示可能な出土遺物はない。

P3は調査区南壁中央で確認した径65cm、深さ18cmの浅く楕円形の掘り方である。図示可能な遺物はない。

P4はP2東隣で溝1を壊して掘り込まれる。掘り方は一辺45cmの隅丸方形を呈し、深さ22cmを測り中には根固めに用いたのか鎌倉石・土丹塊が認められた。遺物は図7-6のロクロ成形かわらけの大型品が出土した。

第1面遺構外出土遺物(図7)

図7-20はロクロ成形の大型かわらけ、21は常滑窯の口縁部片で13世紀末葉~14世紀前葉頃の所産である。

以上、第1面の遺構・遺物について述べてきたが、この面に伴う遺物の種別出土量・出土比率について触れる。遺物は遺構及び遺構外の資料を併せてて破片数が130点であり、出土比率は全体の17%を占めていた。その内訳をみると、かわらけ98点、舶載磁器4点、国産陶器23点、瓦質製品3点、骨製品1点の他、獸骨1点も出土している。

2. 第2面の遺構・遺物

第2面は、海拔高8m前後で調査区南側域を中心に破碎土丹を多く混入して突き固めた比較丁寧な地行版築面の拡がる範囲を検出された。面上には大小土丹塊が認められ、地行面東端から鎌倉石切石が2個が据えられていた。北側域の地行面は版築を施していないが、破碎土丹を含んだ黄灰褐色砂質土の整地層となっており、併せてこの面上で遺構検出を行なった。遺構は石列とピットが検出されただけで遺構密度が低い特徴である。出土遺物にはかわらけ、瀬戸・常滑窯、瓦類などがある(図8~10)。

切石列(図9)

調査区南東端で南壁に沿って鎌倉石の切石が面に据えられた状況で検出されており、石列の主軸方位は若宮大路軸線に対して直交している。切石は割れているが、1が長さ80cm・幅36cm・厚さ13cm、2が76cm・幅36cm・厚さ13cmで上面の海拔高約8.10mである。西側にある土丹版築面の切石延長線上には粗

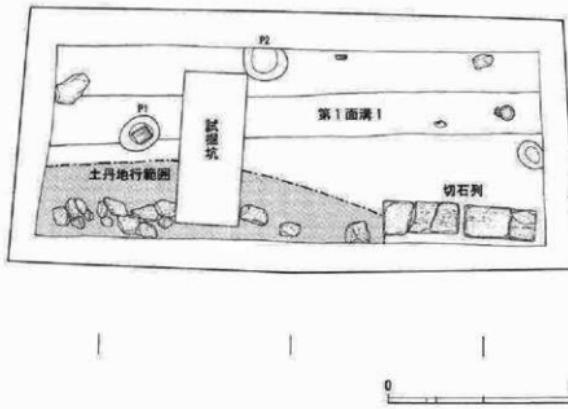


図8 第2面全測図

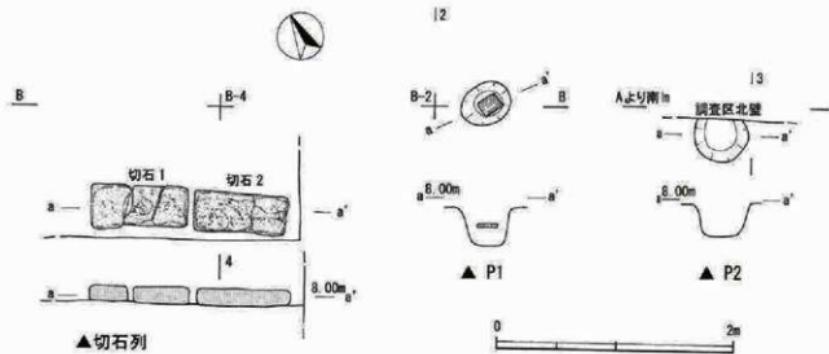


図9 第2面各遺構

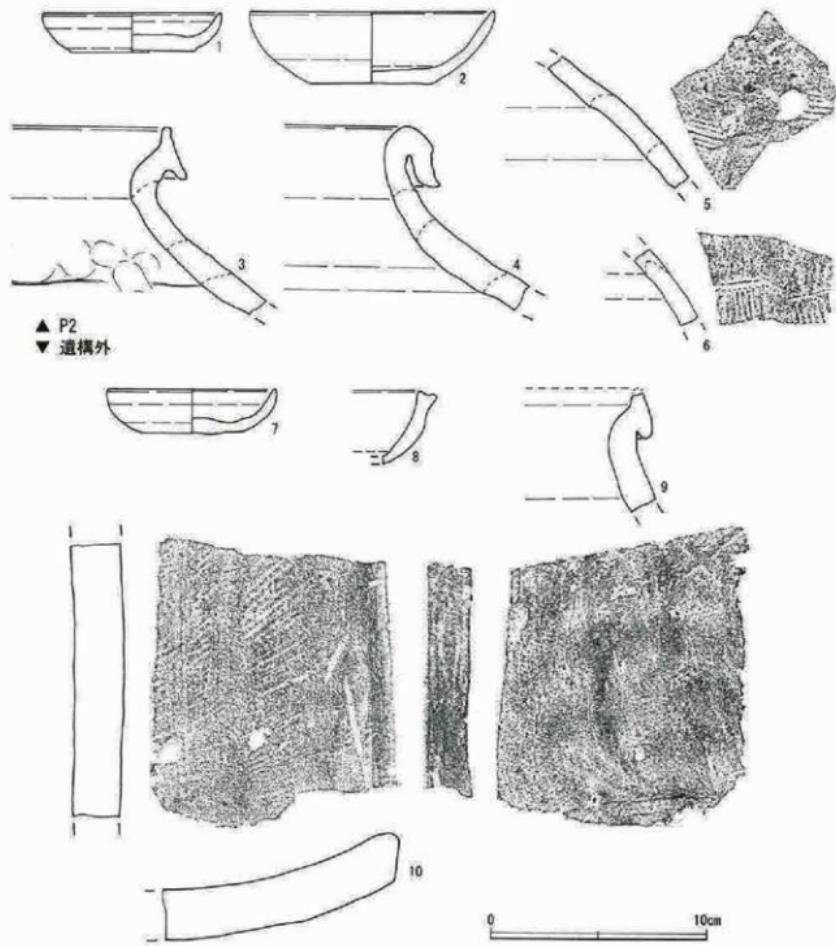


図10 第2面出土遺物

密の土丹塊列が認められたるが本造構との関係は不明である。

ピット(図9・10)

P 1はB-2杭に位置する。径45~35cm、深さ35cmで梢円形を呈した掘り方をもつ。掘り方中程に長さ18cm、幅13cm、厚さ4cmの礎板と思われる。図示可能な遺物は出土していない。

P 2は調査区北壁中央に位置したもので、掘り方は径約45cmの梢円形を呈し、深さ30cmで底面平らになる。灰褐色砂質土の覆土に交じって、図10-1~6の遺物が出土した。1・2はかわらけで小型が背低で薄手器壁の内彫した器形、2は口径11.0cmの中型で粉質良胎の薄手丸深の器形である。3~6は常

滑號の口縁部・肩部片であるが、口縁玉縁部の型体は13世紀後葉頃の所産であろう。

遺構外出土遺物（図10）

7は小型のかわらけで器壁の薄目のものである。8は瀬戸窯の灰釉鉢皿、9は常滑窯の口縁部片で玉縁部の型体からみて13世紀後葉頃の所産と考えられる。10は女瓦（平瓦）で凹面に斜め方向の糸切痕と離れ砂、

凸面に斜格子の叩き締め後、縦位の指ナデ消しを施す。

以上のように第2面の遺構・遺物について述べてきた。この時期の生活面は遺構密度が低く、それに伴う遺物の種別出土量・出土比率も各面中、一番少ないものであった。遺物は破片数にして33点、出土比率は全体量の4%程に留まり、その内訳はかわらけ14点、国産陶器18点、瓦1点だけで舶載

3. 第3面の遺構・遺物

第2面を構成する整地層を除去すると、上面が褐鉄で硬化した暗黄褐色砂層が表出された。この砂層は砂利と粗い貝砂から構成され、厚さ5~12cmで調査区中央の一部を除き敷きつめられた状況で確認された。上面検出レベルは海拔標高7.85m前後である。この面に伴う遺構には土坑・溝状土坑、ピットなどが検出された。出土遺物は主にかわらけで、この他に少量の舶載陶磁器、瀬戸・常滑窯、瓦質製品、漆器などがみられた。

土坑1（図11・12）

調査区南壁の3ラインに位置し、南半分は調査区外に拡がっている。P9との新旧関係は図12左下の土層観察のように本遺構が古い。確認した東西径86cm、深さ20cmであり、浅い皿型の縹みで覆土は貝砂

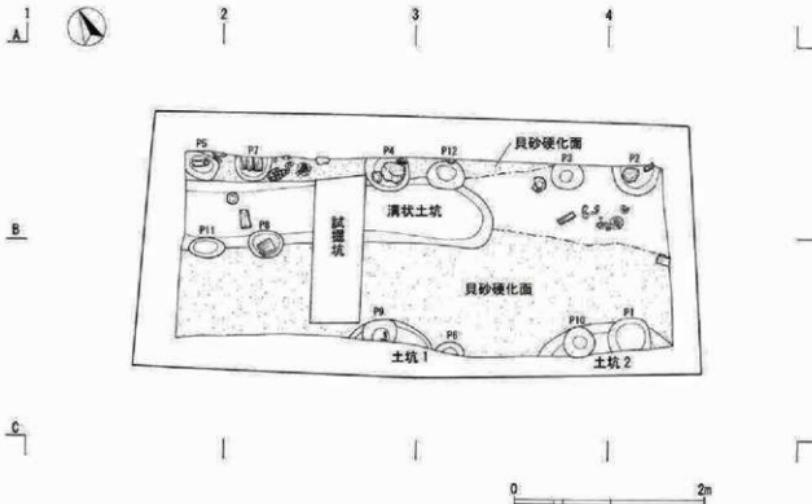


図11 第3面全測図

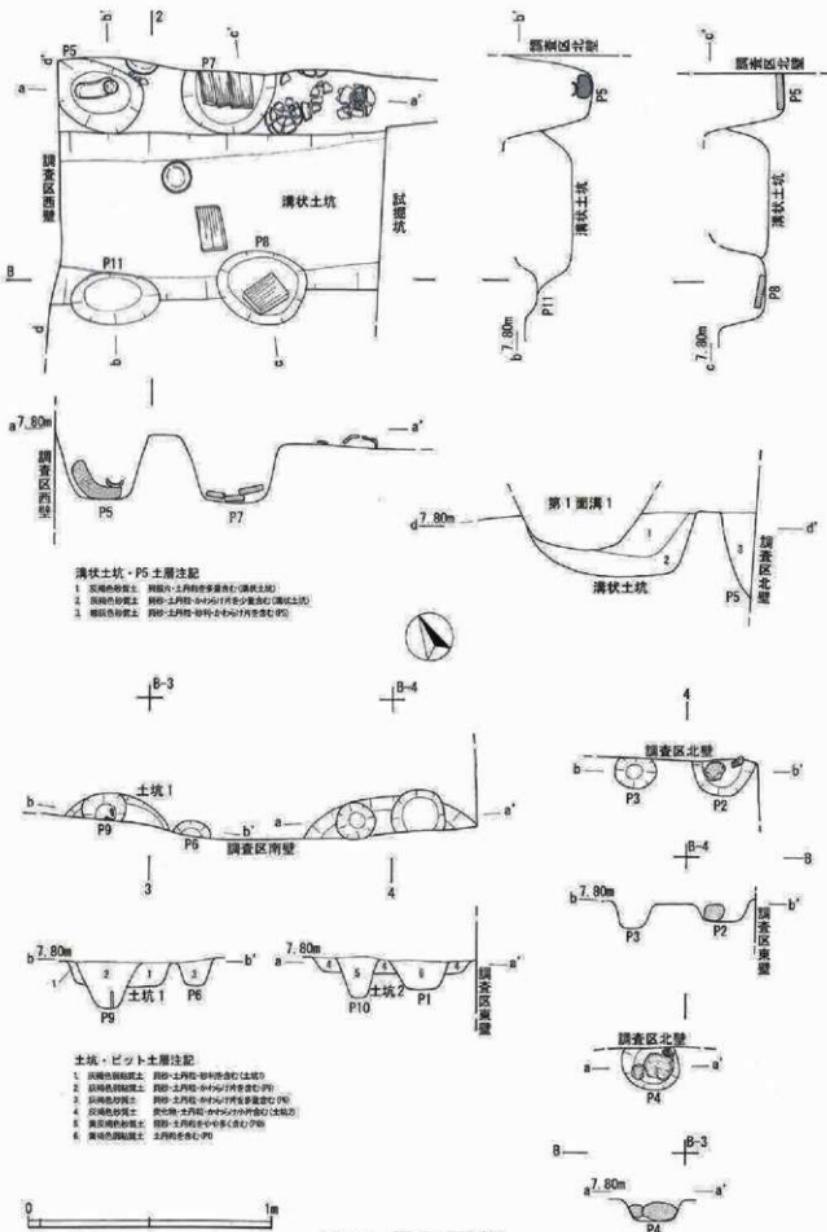


図 12 第3面各遺構

・砂利を含む灰褐色弱粘質土である。図示可能な遺物の出土はない。

土坑 2 (図 12)

土坑 1 の東隣に位置し、南半部は調査区壁にかかるため全体形は不明である。P 1・10 との接された重複関係にある。確認した東西径 145cm、深さ 12cm を測り、浅い皿型の底みをもつ掘り方で覆土は炭化物・小土丹を含む縮まりのない灰褐色砂質土である。図示可能な遺物の出土はない。

溝状土坑 (図 12)

B ライン北側に位置した東西位に長い土坑で西側は調査区外に拡がっている。第 1 面溝 1 とビットの P 4・5・8・11・12 に接されていた。確認できた規模は長さ 3.2m 以上、幅 66cm 前後、深さ 58cm 程で掘り方は断面逆台形の形状である。覆土は縮まりのない灰褐色砂質土の 2 層からなり、上層が貝殻片や小土丹を含み、下層が貝砂・かわらけ小片を交えたもの。図示可能な遺物の出土はない。なお土坑西側の位置で出土したかわらけは遺構が埋まつた後に周辺面上のかわらけと同じように廃棄された遺物資料が遺存したと解釈されたものである。

ビット (図 12・13)

P 1 は調査区南東隅に位置し、土坑 2 を壊し掘り込んだビットで掘り方は梢円形で径 23cm を測る。覆土は小土丹を含む縮まりのない黄褐色弱粘質土である。P 2 は調査区北東隅に位置し、北半部は調査区壁にかかり全体形は不明、径 22cm、深さ 10cm の梢円に近い形状と思われる。覆土からは拳大土丹がみられ、遺物は図 13-1・2 の南部系山茶碗と碁石黒が出土。

P 3 は P 2 の西隣に位置する。大きさは径 20cm、深さ 15cm の平面円形を呈す。遺物は 3 の碁石黒出土。

P 4 は溝状土坑を切り込んだ遺構である。北半部は調査区壁にかかり全体形は不明、長径 25cm 程、深さ 12cm で、底面に偏平な錐倉石と小土丹塊が据えられていた。遺物は 4 のロクロ成形の小型かわらけが出土した。P 5 は調査区北東隅に位置し、溝状土坑を壊して掘り込んでいる。掘り方は長径 40cm、短径 26cm、深さ 35cm の平面梢円形を呈する。深い掘り方の底面には伊豆石が据えられており、礎石上に 5 の小型かわらけ完形品 (灯明皿) が 1 点出土した。

P 7 は P 5 に隣接し溝状土坑を切って掘り込まれたビットで、掘り方は一部調査区壁にかかり規模不明、径 25cm 以上、深さ 35cm を測り、底面に礎板 3 枚を据えている。覆土は貝砂ブロックの多い灰褐色砂質土である。P 8 は溝状土坑を壊している。平面梢円形で長径 38cm、短径 26cm、深さ 20cm を測り、底面に礎板を置く。P 9 は土坑 1 を壊したビット、平面形梢円形で長径 25cm、深さ 18cm と深い掘り方である。覆土は灰褐色弱粘質土である。P 10 は土坑 2 を壊して掘り込み、平面円形で径 20cm、覆土は貝砂を多く含む黄灰褐色砂質土である。

第 3 面遺構出土遺物 (図 13)

6～26 は系切底のかわらけである。6～10 の小型品は口径 7.4～8.2cm、底径 4.5～6.0cm、器高 1.6～2.1cm で器高低めで内湾気味の器形のものが主体である。11～13 の中型かわらけは口径 10.6～11.6cm、底径 5.5～7.5cm、器高 3.2～3.8cm、14～26 の大型かわらけは口径 12.2～13.6cm、底径 7.5～8.3cm、器高 3.1～3.6cm を測るもので薄手の丸深型が多い。27・28 は常滑窯の口縁部と底部片である。29 は土器質火鉢の脚部片である。

以上、第 3 面の遺構・遺物について述べてきたが、この面に伴う遺物の種別出土量・出土比率について簡単に触れる。遺物は遺構及び遺構外の資料を併せて破片数 264 点、出土比率は全体量の 34% ともっとも多く認められた。その内訳をみると、かわらけ 243 点、舶載器 1 点、国産陶器 8 点、瓦質製品 3 点、石製品 2 点の他、獸骨 3・貝 1 点も出土している。

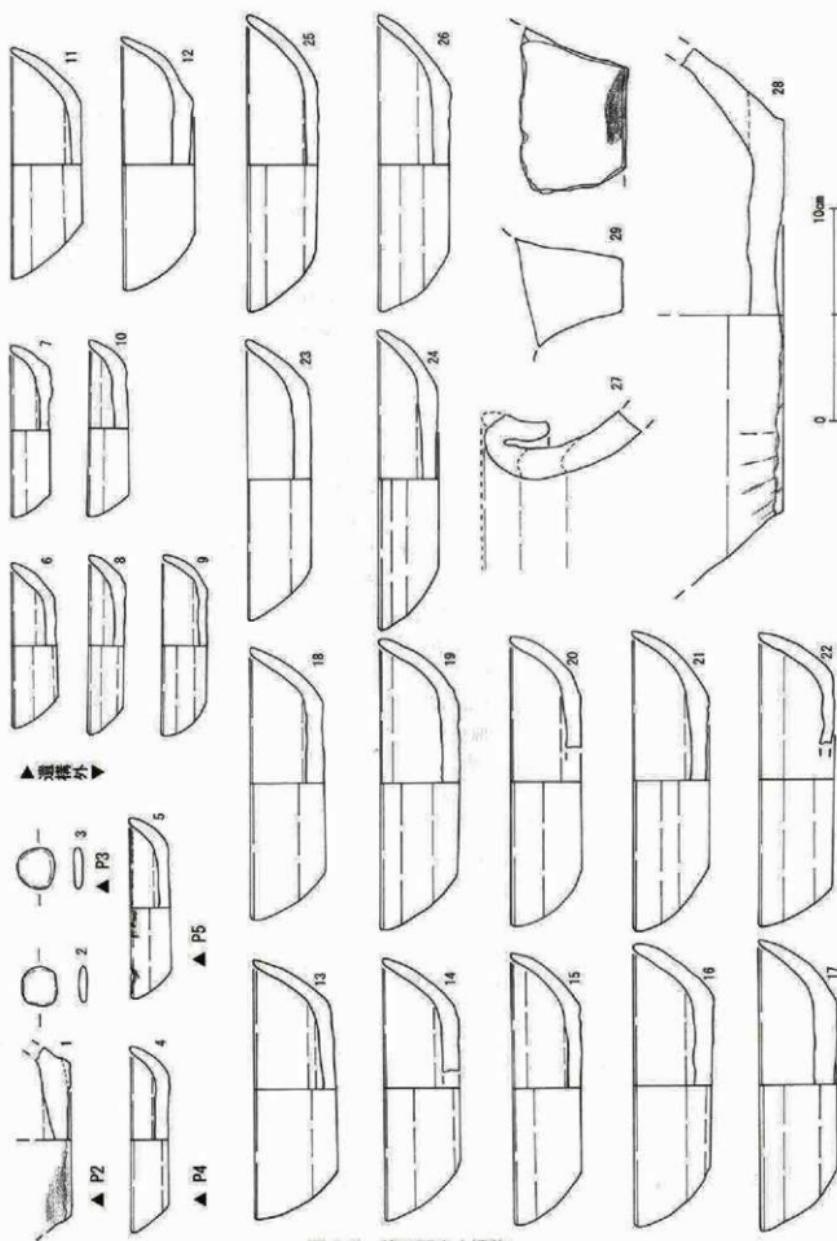


図 13 第3面出土遺物

4. 第4面の遺構・遺物

第3面の整地・地行層を除去すると、破碎土丹・かわらけ小片を交えた締まり強めの茶褐色粘質土が表出し、上面で遺構が検出されたので第4面とした。この面は調査区北側域を中心に破碎土丹を密に突き固めて版築を施した堅牢な地行範囲が認められた。また木組構を挟んだ南側は破碎土丹や貝砂を含んだやや締まりの弱い暗灰褐色粘質土の整地層で構成された海拔高 7.65m前後の生活面である。遺構は溝1条、ピット1口である。

溝1 (図14～16)

調査区中央のBラインの南側に沿った東西方向の溝で両端は調査区外に延びている。確認された規模は長さ 5.15m、幅 30cm、深さ 20cm 程であり、溝底の両基底部に打ち込まれた細い角杭が部分的に残存していた。これは木組構と思われ、細い木杭は土止めに用いた横板材を受けるために打ち込まれた杭であり、屋敷内において建物や場を区画するような雨水などを処理する役割の溝であろう。溝中からは有機物腐植土ブロックや貝砂に交じりの覆土中からかわらけや木製品、アワビなどの貝殻、魚の骨と雜多なものが出土しており、ゴミ捨て場の様相を呈していた。

出土遺物は図 16-1～3 がクロ成形の小型かわらけである。口径 7.0～7.6cm、底径 4.3～6.0cm、器高 1.5cm を測り、背低気味で内底面が広く開いた立ち上がりの器壁をもつ。4 は口径 5.0cm、高台径 1.5cm、器高 2.3cm で小型かわらけ質の碗型土製品である。高台はハラで削り出した断面三角形を呈す。外面に煤が付着している。5 は土器質火鉢片で断面四角形の肥厚した口縁部になる。6 は滑石製鍋を転用したもので厚さから推測すると、鍋鏂を削り加工しているが上面に四角い切込みを施したもので用途不明である。

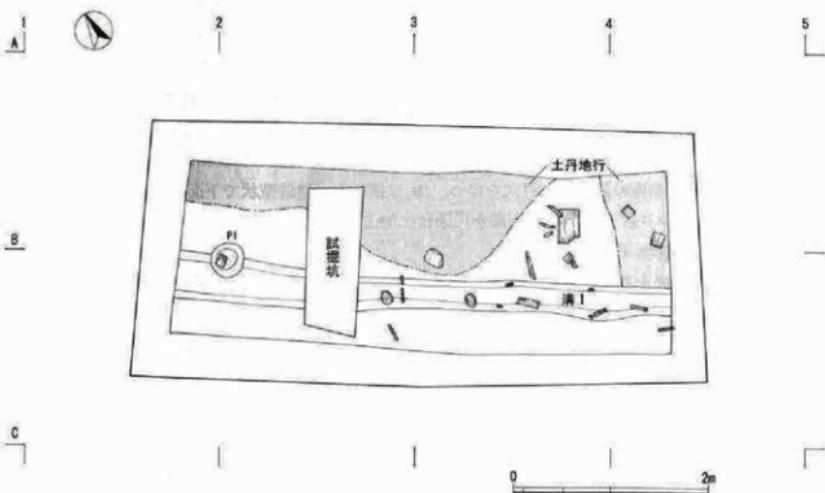


図14 第4面全測図

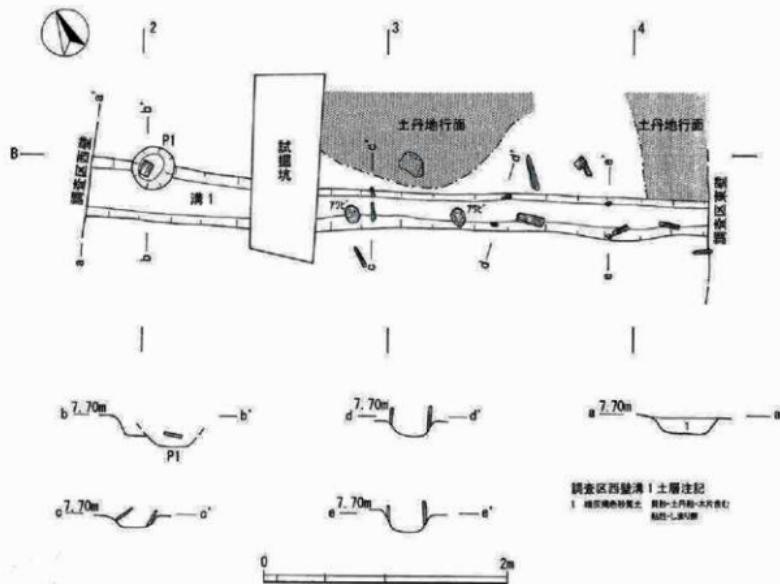


図15 第4面各遺構

7は釘針状に曲がった鉄釘で推定長7.5cmの断面四角形である。8～10は漆器皿である。8は口径9.9cm、底径6.9cm、器高1.2cmを測り、無高台の外底面を除き黒色漆が塗られており、内面のみに朱色漆による手描き草文がみられる。薄い木地の丁寧な仕上げである。9は高台径4.2cmの輪高台で墨付内側から外底面を除き黒色漆が塗られ、内底面に朱色漆による花文スタンプを施す。10は底径6.9cmの無高台で外底面を除き黒色漆が塗られている。内底面に朱色漆による鶴丸文スタンプを施す。11～17は木製品である。11は長さ34.0cm以上、幅1.3cm、厚0.6cmで多角形の偏平な断面の菜箸である。12～14は箸で長さ22.6～24.6cm以上、幅0.7cmを測り、断面多角形の棒状に削った両口加工である。15は檜扇の扇子で短冊型の基部に木釘穴を穿つ。16は横断面が鉢鉾型状で下面中央に抉りがあり鍋蓋の摘みのようなものか。17は薄板材の両端を円頭状に加工したものかで用途不明品。

第4面遺構出土遺物(図16)

ここでは第3面構成土及び第4面の面出し精査に伴なって出土した資料で遺構に共存しない遺物を一括して述べる。

14～24はすべて回転糸切底のロクロ成型かわらけである。14は口径4.2cm、底径3.4cm、器高0.9cmを測る極小タイプで内折れ気味の器形である。19～21は口径7.6～7.9cm、底径4.8～5.7cm、器高1.6cm程の小型品である。混入物少なめの弱粉質胎土、いずれも背が低めで内彎気味に立ち上がる。22～24の大型品は口径12.1～13.6cm、底径7.5～7.8cm、器高2.9～3.3cmを測り、22・23が混入物多めの弱粉質胎土、24が混入物少なめの弱粉質胎土である。器壁はやや内彎しながら立ち上がる。

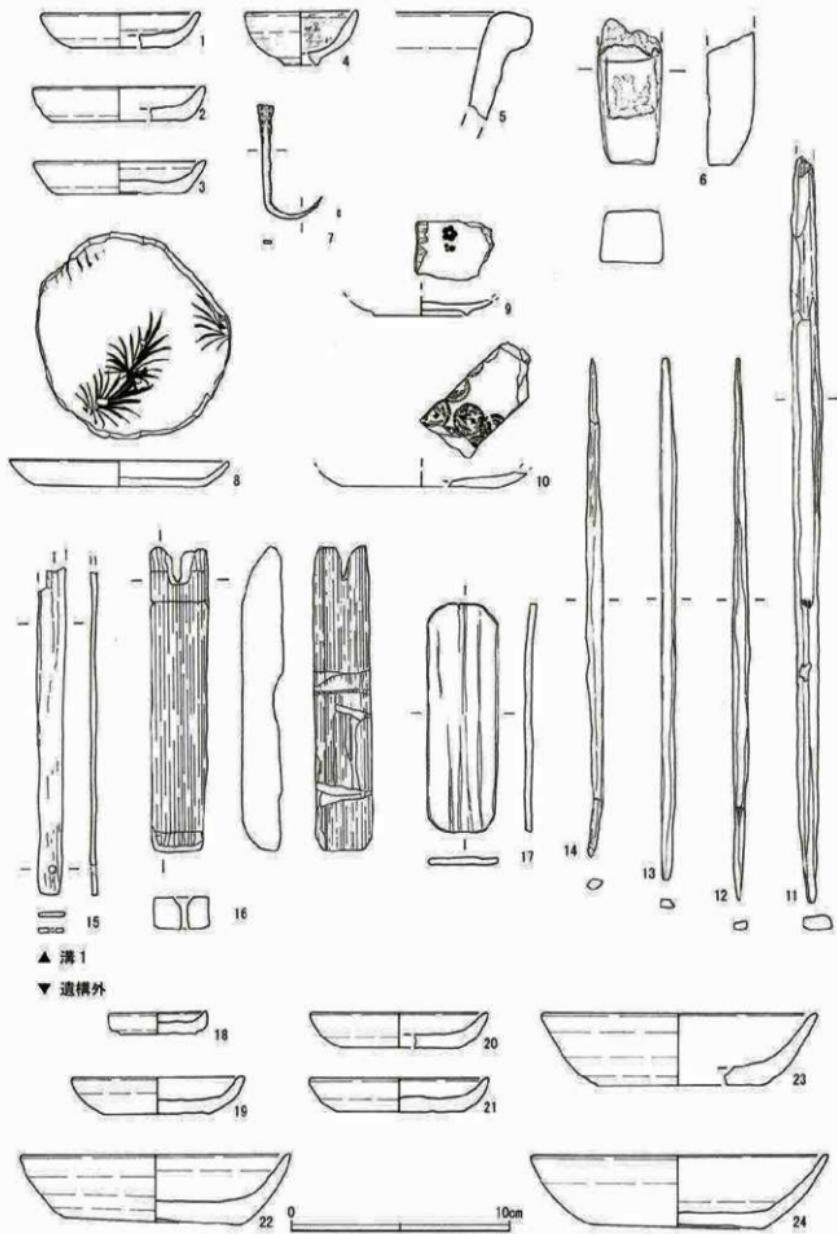


図 16 第4面出土遺物

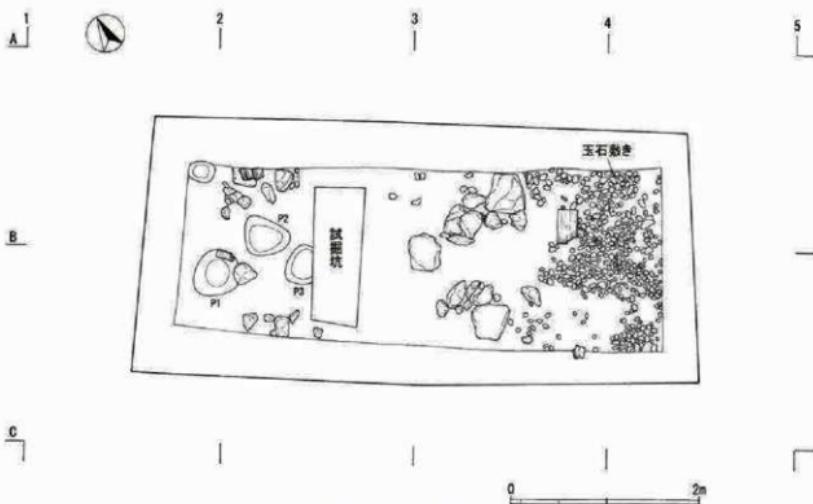


図 17 第5面全測図

以上、第4面発見の遺構・遺物について触れたが、ここではこの面に伴う遺物の種類別出土量と出土比率を簡単に述べる。遺物は破片点数で 156 点で出土比率は全体量の 2 割を占め第3面について高い出土比率を示している。その内訳をみると、かわらけ 100 点、舶載陶磁器 2 点、国産陶器 8 点、土製品 4 点、石製品 1 点、金属製品 1 点であり、また湧水の深度に係る地下水位の関係で漆・木製品 40 点と出土比率が高い数値で認められた。

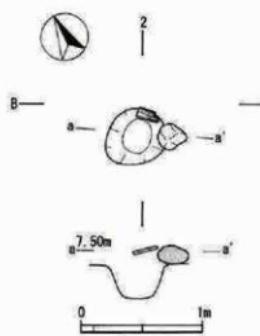


図 18 第5面 P 1

5. 第5面の遺構・遺物

第4面を構成する厚さ 20cm 前後の整地層（第7・8層）を除去すると、海拔標高 7.5m 前後の暗褐色粘質土層上を第5面とした。この面の構築土は 30 ~ 50cm の厚い堆積で大小型土丹塊を多量に交え整地層上面を破碎土丹で版築した地行を施している。調査区東域の 3 ラインから約 1 m の間に偏平な土丹塊が多めに表出した範囲がみられ、さらに土丹塊敷きが切れたたのを境に玉石集中の範囲となっていた。この面で検出した遺構はピット、玉石利・土丹塊集中範囲などである。

ピット (図 17・18)

試掘坑の西側で建物を構成しないピット 4 穴が発見された。

P 1 は平面梢円形を呈し、長径 53cm、短径 45cm、深さ 30cm の掘り方である。覆土は貝砂・木片を含む縮まりのない灰褐色粘

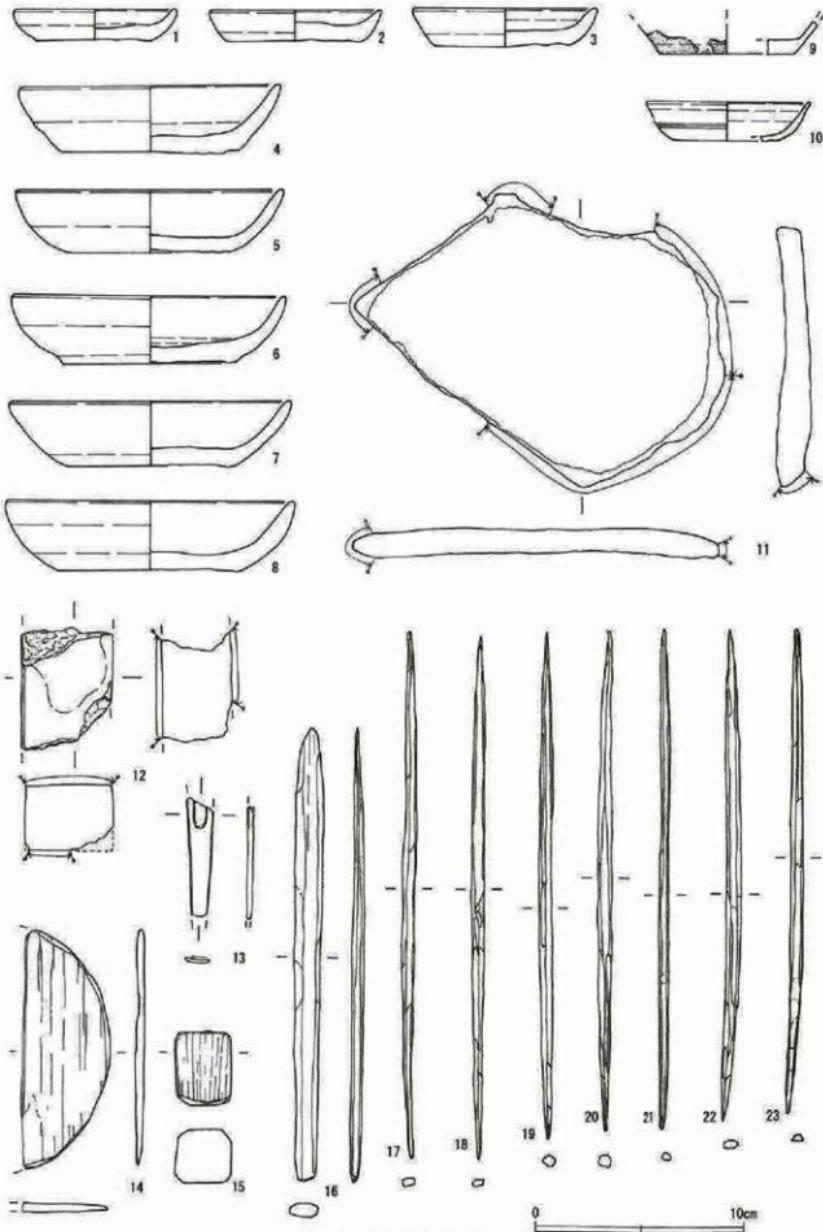


図19 第5面出土遺物(1)

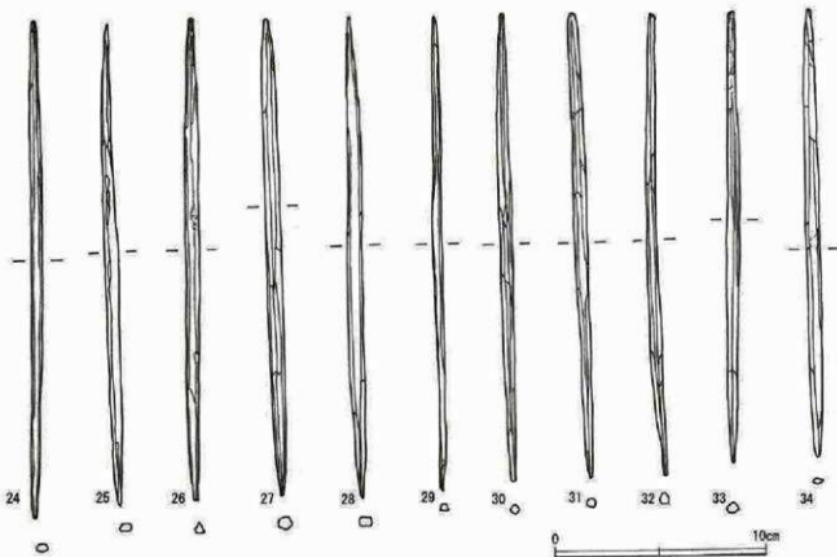


図20 第5面出土遺物（2）

質土、遺物はロクロ成形のかわらけ小片だけである。

P 2は平面不整円形を呈し、長径 48cm、短径 37cm、深さ 25cm の大きさである。覆土は貝砂・破碎土丹を交えた茶褐色弱粘質土、図化可能な遺物は出土していない。

P 3は平面不整円形を呈し、長径 48cm、短径 37cm、深さ 25cm の掘り方である。覆土は貝砂・木片を含む縮まりのない茶褐色粘質土、図化できる遺物は出土していない。

玉砂利範囲（図 17）

調査区東端において検出され、調査区壁へかかり拡がっている。確認海拔高は約 7.55m を測り、敷かれた大型の玉砂利の厚さは10cm 前後である。大きさは長径 4.8 ~ 10.2cm の偏平な梢円形の水磨した川原玉石である。玉砂利範囲には密に敷き詰められている部分と比較的まばらな場所が認められた。玉砂利範囲は土丹敷きの東側だけと区画を意識して限定した範囲にのみ敷いていたものと考えられる。玉砂利各試料の計測表及び長径・短径の計測比については表 1 ~ 5 を参照されたい。

第5面構外出土遺物（図 19・20）

第4面構成土及び第5面上に伴なって出土した遺物を一括してここに述べる。

1 ~ 8 はすべて回転糸切底のロクロ成形かわらけである。1 ~ 3 は口径 7.4 ~ 8.3cm、底径 5.3 ~ 6.2cm、器高 1.4cm と 1.7cm の小型品。いずれも背低で内底面が広く、器壁は開き気味の器形である。1 は混入物が少なめ弱粉質胎土である。4 ~ 8 の大型品は口径 12.0 ~ 13.2cm、底径 7.6 ~ 8.2cm、器高 2.9 ~ 3.3cm を測り、6・8 は混入物多めの弱砂質胎土、5・7 は混入物少なめの弱粉質胎土である。背低で器壁は内側気味の器形である。

9 は底径 6.3cm で白磁口元皿である。10 は瀬戸窯入子で口径 7.8cm、底径 4.8cm、器高 1.7cm で口縁部に

薄く自然降灰釉が付着する。11は摩耗陶片で最大長17.0cm、最大幅11.8cm、厚1.5cmの常滑焼転用で、摩耗部は割口面が中心である。12は砥石で底面が上下面に使用した痕跡があり、凝灰岩製で上野国産の中砥であろうか。13は鹿骨製の笄片で下端が細くなるように加工する。

14～34は木製品である。14は推定径23.6cm、厚0.4cmの円盤状木製品である。柾目材で周縁部を削り加工した曲物の底板と考えられるもの。15は骰子型で四隅は面取り加工を施した栓のようなものか。16は箆状工具で細長い偏平にした丁寧な削り加工し、先端は尖り気味で薄く仕上げている。17～34は箸である。長さ20.5～24.5cm、幅0.4～0.7cmで断面多角形の棒状に削り端部を尖らす両口加工である。

第5面遺物の種類別出土量や出土比率を簡単に述べる。この面に伴う遺物は破片点数126点で、その内訳をみると、漆・木製品が60点と最も高い出土数値を示し、次いでかわらけ38点、舶載陶磁器・

6. 第6面の遺構・遺物

第5面の調査を終了した時点で掘削深度が表下2.3m以上に達して豊富な湧水量に伴う調査区壁崩落の危険性と、排土の処理が不可能となり、調査区の北半分を排土置場として利用するためにトレーニングのみでの調査になったことをお断りしていく。

第6面は大型土丹塊を密に交えた厚さ35～50cmの第5面整地土を除去すると、暗茶褐色粘質土層の薄い堆積土を挟んだ海拔高7.05m前後で灰褐色砂層が検出された。この土層中からは遺物などの混入物を含んでおらず中世基盤層となる自然堆積と考えられた。トレーニングという狭い調査範囲ではあったが遺構として土坑、礎板や貝殻然りなどが発見された。

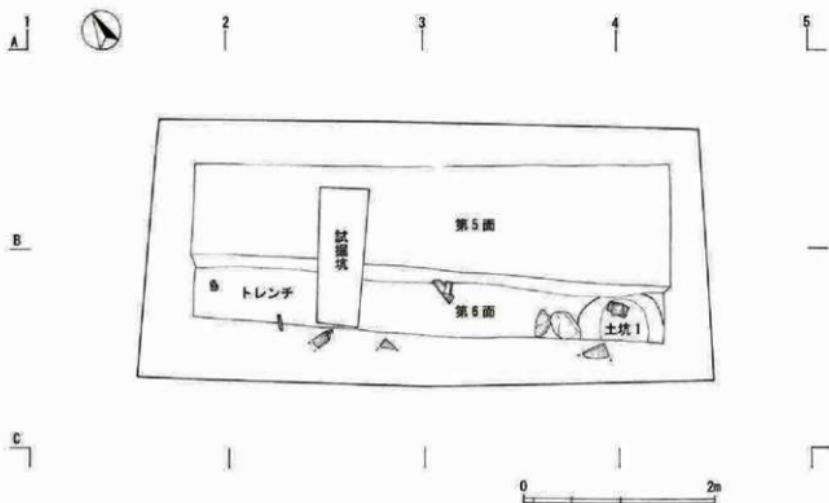


図21 第6面全測図

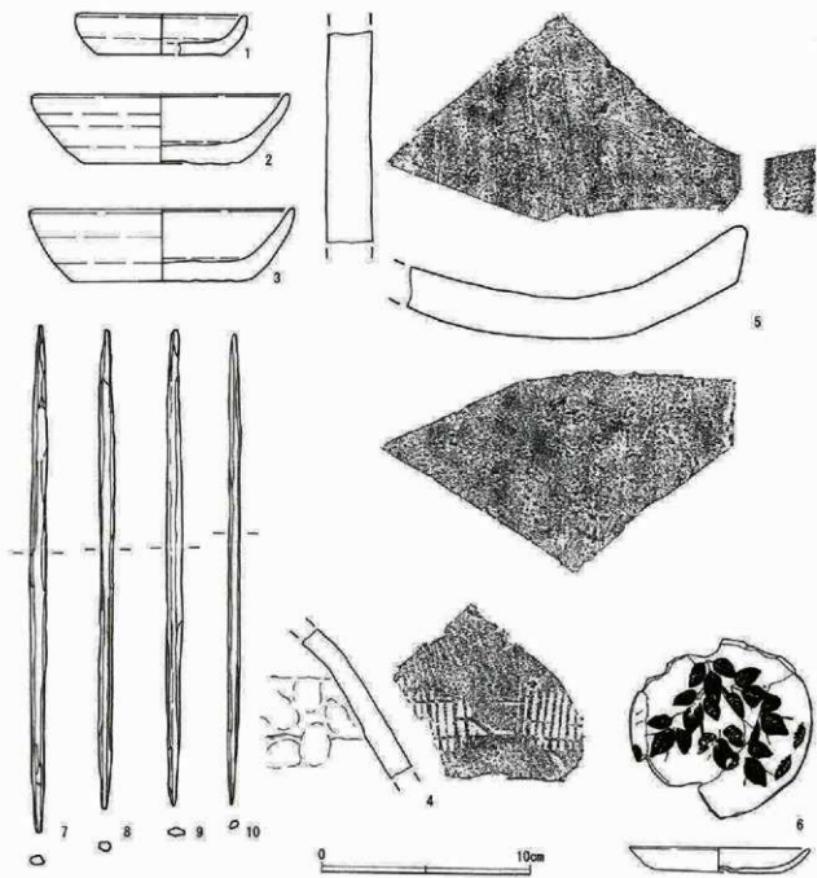


図2.2 第6面出土遺物(1)

土坑1(図2.1)

調査区東端に位置した全容不明の土坑である。大きさは東西径90cm・南北径50cm以上で断面浅い皿型を呈する。覆土は有機物腐蝕土で上層に貝殻(ハマグリ)や木片・藁状ものなどを多く含む堆積がみられたが、実測可能な遺物は出土していない。

第6面造構外出土遺物(図2.2・2.3)

第5面構成土及び第6面上に伴なって出土した遺物を一括してここに述べる。1~3はすべて回転系切底のロクロ成形かわらけである。1は口径7.8cm、底径5.8cm、器高1.9の小型品で背低の内底面が広い器形である。2・3の大型品は口径12.0・12.2cm、底径7.1・8.3cm、器高3.2・3.3cmで開き気味の器形である。4は常滑焼の肩部片で叩き目が見られる。5は女瓦(平瓦)で凸面が網目叩き後に縦位指ナ

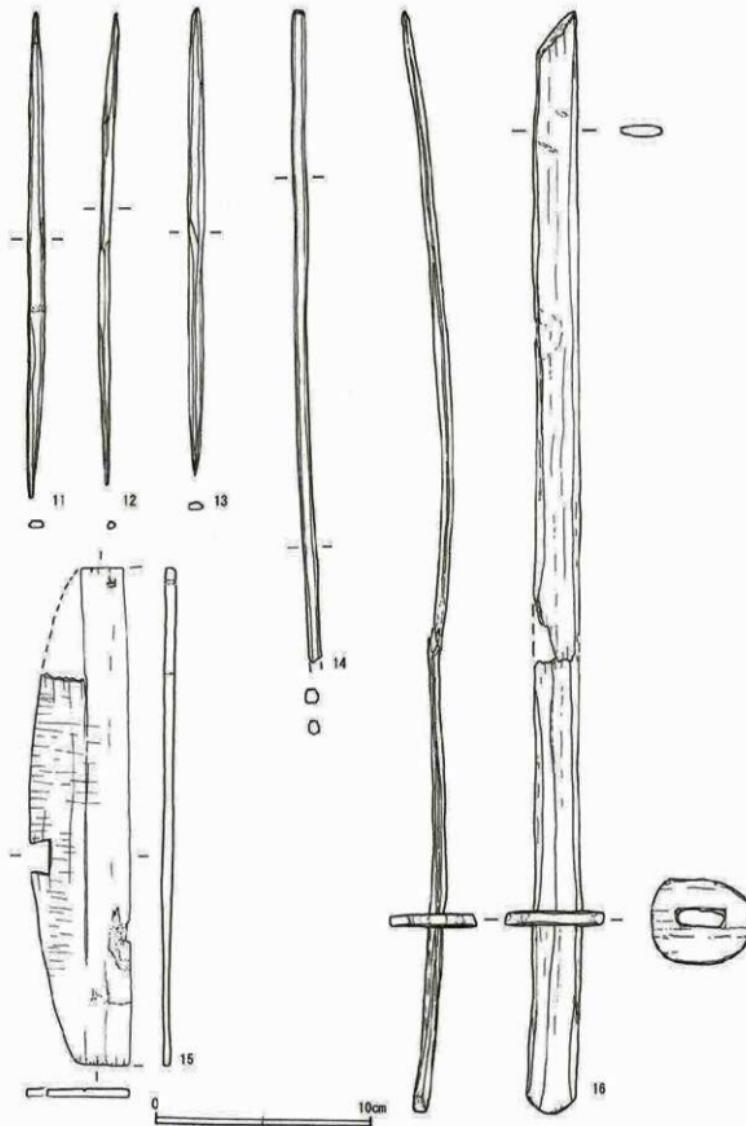


图 23 第6面出土遗物 (2)

で粗く擦り消す。縁台時代前期の所産。6は口径約9cmの漆器皿である。無高台の外底を除き、黒色漆が塗られており内面にのみ朱色漆による手描きの木葉文を施している。

7～16は木製品である。7～13は箸で長さ21.6～24.2cm、幅0.4～0.6cmを測り、断面多角形の棒状に削り、端部を尖らした両口の加工を施す。14も箸状の加工を施したもので長さ30cm以上あり菜箸と考えられる。15は金剛草履の板芯で半分で表面に葉編みの植物圧痕が残る。

16は刀形である。全長51.3cm、幅1.8～2.2、厚0.5cm前後で刃身が断面船型で先端を切先状に削り、鈍は長径4.7cm、短径4.0cm、厚0.6cmの梢円形を呈し、刀身へ差し込む加工が施されている。

以上、第6面発見の遺構・遺物について触れたが、ここではこの面に伴う遺物の種類別出土量と出土比率を簡単に述べる。遺物は破片点数で69点で、その内訳は漆・木製品46点と最も多く、かわらけ16点、国産陶器3点などがみられた。

第4章 まとめ

今回の調査地点では、調査面積や掘削深度の関係で制約を受けて狭い範囲の限定された深さでの遺構検出にとどまり遺構の性格や敷地の空間的な解釈を明確にすることはできていない。ここでは前章までに記した調査の成果について概観すると共に、近辺の調査地点との関係や検出遺構の特徴などを簡単に触れてまとめにかえたい。

第1面の礎石建物跡は北西溝（溝1）を埋め立た生活面を土丹版築の地行によって整地が行なわれ、その後に建築されたものである。この礎石建物は東西列の2間分（柱間寸法芯々約212cm=7尺）だけの確認で建物規模は不明であるが、調査区南壁面には礎石や掘り方が発見できなかった。從って北城へ抜がるものと予想される。この面に伴う出土遺物からみて概ね14世紀中頃の所産と考えられる。さらに大小上丹塊を突き固めた生活面に繋がる錆倉石の切石列が検出された第2面も近い時期が想定される。

第3面は褐鉄分が染み込んだ貝砂硬化面からは据立柱建物を構成しない不揃いな柱穴が溝状の土坑を挟んで確認された。この面に伴う出土遺物からみて概ね14世紀前葉の所産と考えられる。第4面も近似した頃の生活面と思われる。

第5面では小型玉石とでも呼べる大きさの砂利敷き面が検出されているが、このように屋敷内に砂利を敷きつめるのは、幕府周辺（宇都宮市下ノ幕府跡・北条小町邸跡など）及び寺社（鶴岡八幡宮・永福寺跡・東勝寺跡・建長寺など）、今小路西遺跡（御成小学校）の南谷戸敷跡などとある程度限られた確認例にすぎない。この調査区範囲では第1面のような礎石建物を予想させる遺構は発見できなかったが、砂利敷き面の存在から武家屋敷の庭園一部などの一画と想定される。なお第5・6面の時期はかわらけなどの年代觀から概ね13世紀後～末葉と考えたいところである。

本遺跡の発掘調査では今までのところ、若宮大路沿い西側に面した地点を中心に調査が実施されており、若宮大路西側溝と築地堀を挟んでその西城へ抜がる武家屋敷と推定される13世紀～14世紀代にあたる中世前期を主体とした生活空間が発見されている。しかし若宮大路より西に奥まった地点での調査事例は少なく不明な点が多く今後の調査資料が増加すれば具体的な屋敷地の規模や地割りが見えてくると思われる。

表1 第5面玉砂利計測表

No	長径	短径	厚さ	a.	b.	重さ	No	長径	短径	厚さ	a.	b.	重さ
1	7.09	4.27	1.93	0.60	0.45	80.0	38	5.46	5.13	2.01	0.94	0.39	75.7
2	8.11	5.60	3.08	0.69	0.55	212.3	39	5.30	4.02	1.93	0.76	0.48	62.2
3	6.97	4.49	1.72	0.64	0.38	89.1	40	7.08	5.64	3.00	0.80	0.53	176.8
4	7.38	4.13	3.70	0.56	0.90	157.1	41	8.92	5.81	2.68	0.65	0.46	211.5
5	6.45	4.69	3.17	0.73	0.68	134.8	42	15.46	7.93	2.62	0.51	0.33	455.1
6	7.25	6.50	3.15	0.90	0.48	214.3	43	6.27	5.30	2.19	0.85	0.41	115.4
7	8.49	4.72	2.35	0.56	0.50	132.1	44	9.66	6.29	3.48	0.65	0.55	288.9
8	8.82	6.40	2.99	0.73	0.47	230.9	45	8.36	6.64	3.22	0.79	0.49	270.6
9	7.78	6.69	2.60	0.86	0.39	194.2	46	5.66	4.97	2.66	0.88	0.54	101.7
10	7.95	5.41	2.76	0.68	0.51	173.0	47	9.44	6.14	2.46	0.65	0.40	233.6
11	10.34	4.48	2.99	0.43	0.67	194.8	48	9.62	3.63	2.97	0.38	0.82	155.3
12	6.21	5.82	3.00	0.94	0.52	150.1	49	6.34	4.65	2.39	0.73	0.51	93.2
13	5.63	4.41	2.34	0.78	0.53	93.5	50	7.78	5.90	3.00	0.76	0.51	198.9
14	7.90	6.70	3.80	0.85	0.57	247.9	51	6.50	5.91	2.50	0.91	0.42	149.5
15	8.77	6.71	2.80	0.77	0.42	233.6	52	6.71	5.11	2.50	0.76	0.49	114.6
16	7.40	4.22	2.52	0.57	0.60	118.5	53	8.14	4.86	2.66	0.60	0.55	140.2
17	7.46	4.25	2.93	0.57	0.68	125.2	54	7.77	4.55	2.61	0.59	0.57	140.1
18	6.32	4.30	2.49	0.68	0.58	105.2	55	4.81	4.85	2.58	1.01	0.53	70.0
19	7.48	4.47	2.36	0.57	0.53	123.1	56	5.99	5.28	2.58	0.88	0.49	111.7
20	9.68	7.42	3.20	0.77	0.43	281.5	57	8.04	7.09	2.24	0.88	0.32	185.4
21	7.12	4.62	2.95	0.65	0.64	115.9	58	4.80	4.55	1.99	0.95	0.44	62.3
22	7.25	5.80	3.08	0.80	0.53	178.7	59	10.22	6.08	3.44	0.59	0.57	291.5
23	6.98	7.06	2.69	1.01	0.38	194.8	60	8.83	7.42	2.82	0.84	0.38	329.5
24	7.22	4.58	2.50	0.63	0.54	138.3	61	7.73	4.31	2.30	0.56	0.53	107.0
25	6.68	6.50	2.22	0.97	0.34	147.5	62	7.80	5.45	2.77	0.70	0.51	171.0
26	5.88	4.67	2.71	0.79	0.58	128.2	63	8.47	5.55	2.88	0.66	0.52	175.8
27	7.61	3.83	3.10	0.44	0.80	132.5	64	8.00	5.71	1.62	0.71	0.28	126.4
28	8.07	6.28	2.28	0.77	0.44	223.0	65	7.21	6.48	3.05	0.90	0.47	189.7
29	8.30	5.77	2.82	0.69	0.49	171.1	66	8.81	4.55	2.85	0.52	0.63	172.0
30	7.61	4.88	3.60	0.64	0.74	182.5	67	5.73	3.28	2.60	0.57	0.79	77.7
31	7.42	5.28	2.00	0.71	0.38	129.4	68	5.97	4.91	2.30	0.82	0.47	104.7
32	8.83	6.40	2.61	0.72	0.41	226.4	69	7.42	6.10	3.57	0.82	0.59	218.9
33	6.71	5.23	1.89	0.78	0.36	98.9	70	7.34	3.55	2.47	0.48	0.70	108.2
34	8.25	6.71	2.92	0.81	0.44	230.6	71	8.31	4.72	2.22	0.57	0.47	140.0
35	5.62	4.80	1.62	0.85	0.34	71.4	72	5.48	5.08	2.49	0.93	0.49	124.7
36	6.90	5.42	1.96	0.79	0.36	113.1	73	6.49	6.61	2.43	1.02	0.37	97.9
37	6.78	5.12	2.40	0.76	0.47	127.7	74	7.98	5.09	2.78	0.64	0.55	164.4

※玉砂利の長径・短径・厚さ・重さ、径の比率(a. 短径÷長径、b. 厚さ÷短径)の計測数値

単位: cm

表1 第5面玉砂利計測表

No	長径	短径	厚さ	a.	b.	重さ	No	長径	短径	厚さ	a.	b.	重さ
1	7.09	4.27	1.93	0.60	0.45	80.0	38	5.46	5.13	2.01	0.94	0.39	75.7
2	8.11	5.60	3.08	0.69	0.55	212.3	39	5.30	4.02	1.93	0.76	0.48	62.2
3	6.97	4.49	1.72	0.64	0.38	89.1	40	7.08	5.64	3.00	0.80	0.53	176.8
4	7.38	4.13	3.70	0.56	0.90	157.1	41	8.92	5.81	2.68	0.65	0.46	211.5
5	6.45	4.69	3.17	0.73	0.68	134.8	42	15.46	7.93	2.62	0.51	0.33	455.1
6	7.25	6.50	3.15	0.90	0.48	214.3	43	6.27	5.30	2.19	0.85	0.41	115.4
7	8.49	4.72	2.35	0.56	0.50	132.1	44	9.66	6.29	3.48	0.65	0.55	288.9
8	8.82	6.40	2.99	0.73	0.47	230.9	45	8.36	6.64	3.22	0.79	0.49	270.6
9	7.78	6.69	2.60	0.86	0.39	194.2	46	5.66	4.97	2.66	0.88	0.54	101.7
10	7.95	5.41	2.76	0.68	0.51	173.0	47	9.44	6.14	2.46	0.65	0.40	233.6
11	10.34	4.48	2.99	0.43	0.67	194.8	48	9.62	3.63	2.97	0.38	0.82	155.3
12	6.21	5.82	3.00	0.94	0.52	150.1	49	6.34	4.65	2.39	0.73	0.51	93.2
13	5.63	4.41	2.34	0.78	0.53	93.5	50	7.78	5.90	3.00	0.76	0.51	198.9
14	7.90	6.70	3.80	0.85	0.57	247.9	51	6.50	5.91	2.50	0.91	0.42	149.5
15	8.77	6.71	2.80	0.77	0.42	233.6	52	6.71	5.11	2.50	0.76	0.49	114.6
16	7.40	4.22	2.52	0.57	0.60	118.5	53	8.14	4.86	2.66	0.60	0.55	140.2
17	7.46	4.25	2.93	0.57	0.68	125.2	54	7.77	4.55	2.61	0.59	0.57	140.1
18	6.32	4.30	2.49	0.68	0.58	105.2	55	4.81	4.85	2.58	1.01	0.53	70.0
19	7.48	4.47	2.36	0.57	0.53	123.1	56	5.99	5.28	2.58	0.88	0.49	111.7
20	9.68	7.42	3.20	0.77	0.43	281.5	57	8.04	7.09	2.24	0.88	0.32	185.4
21	7.12	4.62	2.95	0.65	0.64	115.9	58	4.80	4.55	1.99	0.95	0.44	62.3
22	7.25	5.80	3.08	0.80	0.53	178.7	59	10.22	6.08	3.44	0.59	0.57	291.5
23	6.98	7.06	2.69	1.01	0.38	194.8	60	8.83	7.42	2.82	0.84	0.38	329.5
24	7.22	4.58	2.50	0.63	0.54	138.3	61	7.73	4.31	2.30	0.56	0.53	107.0
25	6.68	6.50	2.22	0.97	0.34	147.5	62	7.80	5.45	2.77	0.70	0.51	171.0
26	5.88	4.67	2.71	0.79	0.58	128.2	63	8.47	5.55	2.88	0.66	0.52	175.8
27	7.61	3.83	3.10	0.44	0.80	132.5	64	8.00	5.71	1.62	0.71	0.28	126.4
28	8.07	6.28	2.28	0.77	0.44	223.0	65	7.21	6.48	3.05	0.90	0.47	189.7
29	8.30	5.77	2.82	0.69	0.49	171.1	66	8.81	4.55	2.85	0.52	0.63	172.0
30	7.61	4.88	3.60	0.64	0.74	182.5	67	5.73	3.28	2.60	0.57	0.79	77.7
31	7.42	5.28	2.00	0.71	0.38	129.4	68	5.97	4.91	2.30	0.82	0.47	104.7
32	8.83	6.40	2.61	0.72	0.41	226.4	69	7.42	6.10	3.57	0.82	0.59	218.9
33	6.71	5.23	1.89	0.78	0.36	98.9	70	7.34	3.55	2.47	0.48	0.70	108.2
34	8.25	6.71	2.92	0.81	0.44	230.6	71	8.31	4.72	2.22	0.57	0.47	140.0
35	5.62	4.80	1.62	0.85	0.34	71.4	72	5.48	5.08	2.49	0.93	0.49	124.7
36	6.90	5.42	1.96	0.79	0.36	113.1	73	6.49	6.61	2.43	1.02	0.37	97.9
37	6.78	5.12	2.40	0.76	0.47	127.7	74	7.98	5.09	2.78	0.64	0.55	164.4

※玉砂利の長径・短径・厚さ・重さ、径の比率(a. 短径÷長径、b. 厚さ÷短径)の計測数値

単位: cm

表2 第5面玉砂利計測表

No	長径	短径	厚さ	a.	b.	重さ	No	長径	短径	厚さ	a.	b.	重さ
75	6.50	5.72	3.10	0.88	0.54	198.9	112	8.52	4.95	2.57	0.58	0.52	165.0
76	10.38	4.28	2.32	0.41	0.54	144.2	113	6.13	4.12	2.06	0.67	0.50	80.7
77	7.82	3.68	2.67	0.47	0.73	117.5	114	5.78	4.87	3.02	0.84	0.62	133.4
78	8.41	4.25	2.66	0.51	0.63	147.2	115	9.57	5.18	2.33	0.54	0.45	168.9
79	6.97	5.08	2.95	0.73	0.58	146.1	116	6.63	3.60	3.03	0.54	0.84	88.8
80	4.99	3.79	2.83	0.76	0.75	115.1	117	6.20	3.90	2.70	0.63	0.69	86.3
81	6.87	3.46	1.86	0.53	0.54	70.7	118	7.21	5.65	3.21	0.78	0.57	181.9
82	5.15	4.82	2.67	0.87	0.56	108.4	119	6.35	3.78	2.30	0.60	0.61	84.0
83	6.00	4.30	2.23	0.72	0.52	88.2	120	6.30	5.19	3.12	0.82	0.60	127.6
84	5.82	4.82	3.36	0.83	0.70	134.9	121	7.32	6.10	3.40	0.83	0.56	202.3
85	9.73	5.61	2.91	0.61	0.52	232.7	122	5.86	5.42	2.40	0.92	0.44	116.8
86	6.62	5.95	2.18	0.90	0.37	128.7	123	5.98	4.18	3.16	0.70	0.76	96.1
87	5.42	4.11	2.00	0.76	0.49	68.0	124	6.61	5.73	2.95	0.87	0.51	165.2
88	7.00	4.12	2.16	0.59	0.52	100.2	125	6.31	5.52	2.43	0.87	0.44	140.0
89	10.12	4.76	2.55	0.47	0.54	173.9	126	6.05	5.31	3.64	0.88	0.69	67.7
90	8.20	4.00	2.76	0.49	0.69	129.9	127	9.07	4.80	2.82	0.53	0.59	184.5
91	6.05	5.81	2.19	0.96	0.38	109.7	128	5.37	5.01	2.44	0.93	0.49	95.8
92	12.05	5.18	3.90	0.43	0.75	413.8	129	8.09	5.27	4.45	0.65	0.84	230.7
93	8.33	6.70	3.28	0.80	0.49	257.7	130	6.05	3.38	2.33	0.56	0.69	62.8
94	5.85	3.88	2.30	0.66	0.59	82.7	131	5.00	4.89	2.53	0.98	0.52	88.8
95	5.23	2.94	3.25	0.56	1.10	71.1	132	8.43	4.28	2.34	0.51	0.55	126.4
96	7.89	4.58	1.81	0.58	0.40	111.3	133	7.72	4.89	2.60	0.63	0.53	151.0
97	8.57	5.04	2.25	0.59	0.45	159.6	134	7.85	4.30	3.05	0.57	0.71	139.4
98	7.56	4.08	2.53	0.54	0.62	121.4	135	8.71	7.24	1.98	0.83	0.27	165.0
99	5.11	3.48	2.18	0.68	0.62	61.6	136	8.31	4.96	2.16	0.60	0.44	112.9
100	7.19	4.28	2.49	0.60	0.58	126.2	137	6.35	3.70	2.60	0.58	0.70	77.8
101	6.04	5.42	2.87	0.90	0.53	136.4	138	10.22	6.40	3.07	0.63	0.48	271.5
102	9.18	4.68	2.63	0.51	0.56	169.2	139	7.10	5.04	2.75	0.71	0.55	154.4
103	5.60	6.12	2.27	1.09	0.37	118.1	140	5.60	4.88	2.06	0.87	0.42	80.8
104	9.63	5.62	3.28	0.58	0.58	252.0	141	7.40	6.15	1.80	0.83	0.29	137.3
105	8.24	4.30	2.00	0.52	0.47	102.6	142	5.51	4.91	2.77	0.89	0.56	115.1
106	7.88	5.32	2.50	0.68	0.47	143.3	143	4.20	3.61	1.95	0.86	0.54	36.9
107	6.78	6.12	2.72	0.90	0.44	161.2	144	7.55	5.62	2.58	0.74	0.46	181.0
108	9.28	5.51	2.51	0.59	0.46	225.3	145	6.62	5.03	2.31	0.76	0.46	124.0
109	7.76	6.00	3.60	0.77	0.54	244.3	146	7.15	5.70	3.60	0.80	0.63	183.7
110	8.61	5.82	3.88	0.68	0.66	230.5	147	7.86	4.54	2.85	0.58	0.63	147.2
111	9.18	4.43	2.39	0.48	0.54	150.9	148	6.58	4.16	2.89	0.63	0.70	96.2

※玉砂利の長径・短径・厚さ・重さ、径の比率(a. 短径÷長径、b. 厚さ÷短径)の計測数値

単位: cm

表3 第5面玉砂利計測表

No	長径	短径	厚さ	a.	b.	重さ	No	長径	短径	厚さ	a.	b.	重さ
149	5.25	3.31	2.30	0.63	0.69	47.4	186	7.34	4.28	2.76	0.58	0.64	135.2
150	5.41	3.45	2.35	0.64	0.68	56.8	187	5.41	4.97	2.60	0.92	0.52	104.4
151	5.18	3.60	2.17	0.69	0.60	53.4	188	7.45	6.10	2.18	0.82	0.36	182.2
152	7.16	4.21	2.79	0.59	0.66	93.5	189	7.18	4.59	2.92	0.64	0.64	140.3
153	5.78	3.10	1.91	0.54	0.62	58.9	190	6.39	4.97	3.09	0.78	0.62	133.4
154	7.02	4.63	1.70	0.66	0.37	89.6	191	8.80	3.59	2.73	0.41	0.76	113.3
155	9.29	4.25	2.38	0.46	0.56	139.1	192	6.50	5.82	3.60	0.90	0.62	160.8
156	5.12	3.11	1.55	0.61	0.50	46.4	193	6.62	5.57	1.53	0.84	0.27	71.5
157	6.40	3.97	2.38	0.62	0.60	87.8	194	6.73	4.58	1.78	0.67	0.39	93.8
158	6.14	4.62	1.88	0.75	0.41	81.7	195	6.83	5.43	2.16	0.80	0.40	99.5
159	8.37	6.79	2.60	0.81	0.38	170.5	196	7.45	5.69	3.40	0.76	0.60	203.2
160	8.60	5.11	2.60	0.59	0.51	164.3	197	7.79	5.72	3.30	0.73	0.58	230.1
161	6.58	4.05	2.23	0.62	0.55	102.9	198	7.52	2.79	1.57	0.37	0.69	50.4
162	5.76	4.56	3.26	0.79	0.80	129.6	199	5.62	4.45	2.17	0.79	0.49	85.7
163	4.70	4.70	3.00	1.00	0.64	70.9	200	7.01	3.90	3.35	0.56	0.86	125.6
164	7.45	3.68	2.13	0.36	0.58	86.9	201	5.61	3.45	2.10	0.61	0.61	61.8
165	9.45	5.94	4.40	0.63	0.74	324.0	202	8.59	5.54	3.26	0.64	0.59	195.5
166	8.06	4.68	2.18	0.58	0.47	122.4	203	10.15	6.99	3.51	0.69	0.50	301.4
167	5.85	4.61	2.16	0.79	0.47	88.5	204	6.71	6.16	2.85	0.92	0.46	182.9
168	4.04	4.10	2.22	1.01	0.54	48.7	205	7.55	6.51	4.06	0.86	0.62	236.1
169	6.10	3.79	2.12	0.62	0.56	90.4	206	4.39	2.74	0.83	0.62	0.30	16.6
170	5.00	3.33	2.12	0.62	0.56	90.4	207	6.12	3.92	2.37	0.64	0.60	88.1
171	6.69	5.65	3.00	0.84	0.53	167.1	208	5.28	4.50	2.62	0.85	0.58	92.9
172	8.73	3.92	2.65	0.46	0.68	152.4	209	7.00	4.73	3.05	0.68	0.64	167.0
173	5.48	5.11	2.32	0.93	0.45	88.0	210	5.05	4.62	2.97	0.91	0.64	90.4
174	8.26	3.74	2.58	0.45	0.69	114.8	211	8.06	4.86	2.48	0.60	0.51	175.4
175	5.22	3.91	2.13	0.75	0.54	65.7	212	5.71	3.42	2.60	0.60	0.70	82.4
176	5.29	4.48	2.24	0.85	0.50	79.4	213	8.03	4.78	2.41	0.60	0.50	145.3
177	7.60	4.70	2.47	0.62	0.53	126.9	214	7.21	5.82	3.13	0.81	0.54	201.3
178	5.02	3.83	1.70	0.76	0.44	51.8	215	7.38	4.42	1.62	0.60	0.37	103.6
179	7.29	5.21	2.86	0.71	0.55	170.5	216	5.39	4.03	2.10	0.75	0.52	68.9
180	4.31	3.89	2.17	0.90	0.56	42.9	217	6.85	4.68	2.53	0.68	0.54	131.2
181	5.89	4.55	1.72	0.77	0.38	77.2	218	7.09	4.10	2.11	0.58	0.51	108.0
182	7.76	4.03	2.60	0.52	0.65	124.2	219	6.61	5.00	3.31	0.76	0.66	171.6
183	8.70	5.40	3.29	0.62	0.61	227.0	220	8.26	4.63	2.00	0.56	0.43	127.3
184	7.55	5.30	2.95	0.70	0.56	158.5	221	5.90	3.32	2.68	0.56	0.81	76.8
185	7.21	4.22	1.58	0.59	0.37	72.1	222	8.09	4.43	4.32	0.55	0.98	208.1

※玉砂利の長径・短径・厚さ・重さ・径の比率(a. 短径÷長径、b. 厚さ÷短径)の計測数値 単位: cm

表4 第5面玉砂利計測表

No	長径	短径	厚さ	a.	b.	重さ	No	長径	短径	厚さ	a.	b.	重さ
223	6.82	4.40	2.81	0.65	0.64	112.3	229	7.02	3.16	2.00	0.45	0.63	67.7
224	7.08	3.20	1.95	0.45	0.61	68.5	230	7.81	6.08	2.61	0.78	0.43	195.3
225	6.83	5.30	2.37	0.76	0.45	158.8	231	10.91	4.62	2.00	0.42	0.43	193.9
226	3.89	2.65	2.01	0.68	0.76	32.2	232	6.45	4.48	2.36	0.69	0.53	104.5
227	5.47	4.93	2.81	0.90	0.57	106.2	233	5.41	3.11	1.98	0.57	0.64	53.5
228	5.94	4.88	3.30	0.82	0.68	134.0	234	4.97	3.83	2.51	0.77	0.66	68.6

※玉砂利の長径・短径・厚さ・重さ、径の比率(a. 短径÷長径、b. 厚さ÷短径)の計測数値 単位: cm

表5 玉砂利計測比図

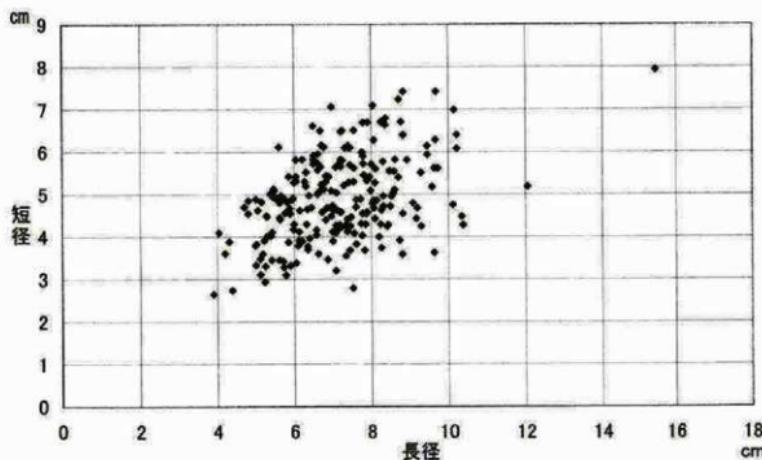


表6 遺物観察表(1)

図番号	層位・遺構	種別	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	観察項目	
						外底系切痕	板状圧痕
7-1	第1面 建物I-イ	かわらけ	(6.9)	(5.0)	1.6	ロクロ成形	外底系切痕 板状圧痕 脱土 黄灰色 微砂 雲母 白色針状物質 赤色粒
7-2	第1面 建物I-ロ	かわらけ	7.0	4.7	1.9	ロクロ成形	外底系切痕 板状圧痕 脱土 橙色 微砂 雲母 白色針状物質 赤色粒
7-3	第1面 P1	龍泉窯系 青磁緑蓮弁文碗	/	(4.6)	/	夷地 明灰白色 精良堅壁 美灰綠色半透明 内外面共原 施釉 高台豊付露胎 文様 外面緑蓮弁文	
7-4	"	瀬戸 鉢皿	/	(7.4)	/	内面ヘリによるおろし目 内底系切痕 脱土 明白黄色 砂粒 良土 艶 淡灰白色 斜彫ハケ塗り	
7-5	"	常滑 壺	/	/	/	肩部小片 脱土 灰色 砂粒 白色粒 長石粒やや多量 器表 赤褐色 降灰部 灰綠色	
7-6	第1面 P4	かわらけ	(12.4)	(8.1)	2.9	ロクロ成形	外底系切痕 板状圧痕 脱土 黄褐色 微砂 雲母 白色針状物質 赤色粒 土丹粒
7-7	第1面 満1	かわらけ	6.8	3.7	2.2	ロクロ成形	外底系切痕 板状圧痕 脱土 橙色 微砂 雲母 白色針状物質
7-8	"	かわらけ	(7.4)	(5.4)	1.5	ロクロ成形	外底系切痕 板状圧痕 脱土 黄灰色 微砂 雲母 白色針状物質
7-9	"	かわらけ	(7.8)	(5.5)	1.3	ロクロ成形	外底系切痕 板状圧痕 脱土 黄灰色 微砂 雲母 白色針状物質
7-10	"	かわらけ	(8.1)	(5.7)	1.7	ロクロ成形	外底系切痕 板状圧痕 脱土 灰褐色 微砂 雲母 白色針状物質
7-11	"	かわらけ	10.8	6.3	3.0	ロクロ成形	外底系切痕 板状圧痕 脱土 淡橙色 微砂 雲母 白色針状物質 土丹粒
7-12	"	かわらけ	(11.9)	(7.1)	3.0	ロクロ成形	外底系切痕 板状圧痕 脱土 黄灰色 微砂 雲母 白色針状物質 赤色粒 土丹粒
7-13	"	かわらけ	12.6	7.8	2.4	ロクロ成形	外底系切痕 板状圧痕 脱土 淡橙色 微砂 雲母 白色針状物質 赤色粒 土丹粒
7-14	"	かわらけ	(12.5)	(7.6)	3.3	ロクロ成形	外底系切痕 板状圧痕 脱土 淡橙色 微砂 雲母 白色針状物質 赤色粒 土丹粒
7-15	"	かわらけ	12.8	6.5	3.5	ロクロ成形	外底系切痕 板状圧痕 脱土 淡黄橙色 微砂 雲母 白色針状物質 赤色粒 土丹粒
7-16	"	かわらけ	13.3	7.3	3.5	ロクロ成形	外底系切痕 板状圧痕 脱土 淡黄橙色 微砂 雲母 白色針状物質 赤色粒
7-17	"	青白磁 梅瓶	/	/	/	腹部部 素地 灰白色 精良堅壁 艶 水青色不透明	
7-18	"	女瓦(平瓦)		厚1.8		凹面 隔れ砂少量付着 傾方向ナデ 凸面 隔れ砂多量に 付着 斜格子の叩き目 脱土 灰色 砂粒 白色粒 やや粗土 色調 暗灰色~淡橙色	
7-19	"	骨角製品 箕	残存長6.7 幅0.6~1.3 厚0.2~0.25				
7-20	1面上に包含層	かわらけ	(12.7)	(7.9)	3.4	ロクロ成形	外底系切痕 板状圧痕 脱土 黄褐色 微砂 雲母 白色針状物質 赤色粒 土丹粒
7-21	"	常滑 壺	縁帯幅 3.4			口縁部小片 脱土 灰色 分粒 白色粒 黒色粒 器表 增 褐色	
10-1	第2面 P2	かわらけ	(8.0)	5.6	1.6	ロクロ成形	外底系切痕 板状圧痕 脱土 黄褐色 微砂 雲母 白色針状物質 赤色粒
10-2	"	かわらけ	11.0	5.6	3.3	ロクロ成形	外底系切痕 板状圧痕 脱土 黄褐色 微砂 雲母 白色針状物質 赤色粒
10-3	"	常滑 壺	縁帯幅 2.9			口縁部小片 脱土 灰色 分粒 白色粒 黒色粒若干多く含 む 器表 暗赤褐色	
10-4	"	常滑 壺	縁帯幅 2.8			口縁部小片 脱土 灰色 分粒 白色粒 少量 器表 暗褐 色	
10-5	"	常滑 壺	/	/	/	肩部小片 脱土 増灰色 分粒 白色粒 少量 器表 黒褐色	
10-6	"	常滑 壺	/	/	/	肩部小片 脱土 淡黄褐色 砂粒 白色粒 多量 小石粒 器表 暗赤褐色	
10-7	第2面遺構外	かわらけ	(7.6)	(4.6)	2.0	ロクロ成形	外底系切痕 板状圧痕 脱土 黄褐色 微砂 雲母 白色針状物質 赤色粒
10-8	"	瀬戸 鉢皿	/	/	/	口縁部小片 脱土 灰白色 分粒 白色粒 若干含む 精良土 釉 反白色 斜彫ハケ塗り	
10-9	"	常滑 壺	/	/	/	口縁部小片 脱土 淡橙色 砂粒 白色粒 黑色粒 少量 器表 暗赤褐色	

表7 遺物観察表(2)

()は復元値

図番号	層位・遺構	種別	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	観察項目
10-10	第2面遺構外	女瓦(平瓦)		厚2.2~2.5		凹面 脊れ砂若干付着 布目痕 斜め方向系切り痕 縦方向ナデ 凸面 脊れ砂若干付着 斜格子の叩き目 斜め方向ナデ 側面 ケズリ 側縁 ナデ ケズリ 胎土 灰色 砂粒 白色粒 良土 色調 暗灰色
13-1	第3面 P2	南部系山茶碗	✓	(6.8)	✓	外底系切痕 貼付高台破損 胎土 灰色 砂粒 白色粒 小石粒 やや粗土 軟質
13-2	"	基石	幅1.6×1.8	厚0.3		黒色
13-3	第3面 P3	基石	幅1.6×1.9	厚0.4		黒色
13-4	第3面 P4	かわらけ	8.2	5.5	1.7	口クロ成形 外底系切痕 板状圧痕 胎土 黄灰色 微砂 雲母 白色針状物質
13-5	第3面 P5	かわらけ	8.0	5.8	1.8	口クロ成形 外底系切痕 板状圧痕 胎土 黄灰色 微砂 雲母 白色針状物質 赤色粒 灯明皿
13-6	第3面遺構外	かわらけ	7.4	4.5	2.1	口クロ成形 外底系切痕 板状圧痕 胎土 橙色 微砂 雲母 白色針状物質 赤色粒
13-7	"	かわらけ	(7.7)	(5.8)	1.8	口クロ成形 外底系切痕 板状圧痕 胎土 橙色 微砂 雲母 白色針状物質 赤色粒
13-8	"	かわらけ	8.0	5.6	1.6	口クロ成形 外底系切痕 板状圧痕 胎土 橙色 微砂 雲母 白色針状物質 赤色粒
13-9	"	かわらけ	(8.2)	4.9	2.0	口クロ成形 外底系切痕 板状圧痕 胎土 橙色 微砂 雲母 白色針状物質 赤色粒 小石粒
13-10	"	かわらけ	7.9	6.0	1.8	口クロ成形 外底系切痕 板状圧痕 胎土 黄灰色 微砂 雲母 白色針状物質
13-11	"	かわらけ	10.6	5.5	3.2	口クロ成形 外底系切痕 板状圧痕 胎土 淡褐色 微砂 雲母 白色針状物質 赤色粒
13-12	"	かわらけ	11.6	6.0	3.3	口クロ成形 外底系切痕 板状圧痕 胎土 黄褐色 微砂 雲母 白色針状物質 赤色粒
13-13	"	かわらけ	11.6	7.5	3.8	口クロ成形 外底系切痕 板状圧痕 胎土 橙色 微砂 雲母 白色針状物質 赤色粒 小石粒
13-14	"	かわらけ	(11.8)	(6.4)	3.4	口クロ成形 外底系切痕 板状圧痕 胎土 淡褐色 微砂 雲母 白色針状物質 赤色粒
13-15	"	かわらけ	12.2	7.5	3.1	口クロ成形 外底系切痕 板状圧痕 胎土 淡褐色 微砂 雲母 白色針状物質 赤色粒 土丹粒
13-16	"	かわらけ	12.6	7.9	3.5	口クロ成形 外底系切痕 板状圧痕 胎土 黄灰色 微砂 雲母 白色針状物質 赤色粒 土丹粒
13-17	"	かわらけ	13.0	7.5	3.5	口クロ成形 外底系切痕 板状圧痕 胎土 橙色 微砂 雲母 白色針状物質 赤色粒 土丹粒
13-18	"	かわらけ	12.2	7.6	3.4	口クロ成形 外底系切痕 板状圧痕 胎土 淡褐色 微砂 雲母 白色針状物質 赤色粒 土丹粒
13-19	"	かわらけ	(13.0)	8.0	3.6	口クロ成形 外底系切痕 板状圧痕 胎土 黄灰色 微砂 雲母 白色針状物質 赤色粒 小石粒
13-20	"	かわらけ	(13.0)	(7.8)	3.3	口クロ成形 外底系切痕 板状圧痕 胎土 黄灰色 微砂 雲母 白色針状物質 赤色粒 小石粒
13-21	"	かわらけ	13.6	7.7	3.5	口クロ成形 外底系切痕 板状圧痕 胎土 淡褐色 微砂 雲母 白色針状物質 赤色粒 小石粒
13-22	"	かわらけ	(13.2)	(9.8)	3.4	口クロ成形 外底系切痕 板状圧痕 胎土 淡褐色 微砂 雲母 白色針状物質 赤色粒 土丹粒
13-23	"	かわらけ	12.6	8.3	2.9	口クロ成形 外底系切痕 板状圧痕 胎土 黄褐色 微砂 雲母 白色針状物質 赤色粒 小石粒
13-24	"	かわらけ	(13.6)	7.8	2.7	口クロ成形 外底系切痕 板状圧痕 胎土 黄褐色 微砂 雲母 白色針状物質 赤色粒
13-25	"	かわらけ	13.6	7.7	3.2	口クロ成形 外底系切痕 板状圧痕 胎土 黄灰色 微砂 雲母 白色針状物質 赤色粒 小石粒
13-26	"	かわらけ	13.5	7.6	3.3	口クロ成形 外底系切痕 板状圧痕 胎土 橙色 微砂 雲母 白色針状物質 赤色粒 小石粒
13-27	"	常滑 豊	縁帯幅(3.0)			口縁部小片 胎土 灰色 砂粒 白色粒 黑色粒 器表 捺赤褐色
13-28	"	常滑 要	✓	18.0	✓	胎土 灰色 砂粒 白色粒 黑色粒少量 器表 暗赤褐色

表8 遺物観察表(3)

()は復元値

図番号	層位・遺構	種別	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	観察項目	
						脚部片	胎土
13-29	第3面遺構外	土器質 火鉢	/	/	/	灰色~淡橙色	砂粒多量 赤色粒 器表 淡橙色
16-1	第4面溝1	かわらけ	(7.0)	(4.3)	1.5	ロクロ成形 外底系切痕 板状圧痕 胎土 黄灰色 微砂 雲母 白色針状物質 赤色粒	
16-2	"	かわらけ	(7.6)	(6.0)	1.5	ロクロ成形 外底系切痕 板状圧痕 胎土 黄灰色 微砂 多量 雲母 白色針状物質 赤色粒	
16-3	"	かわらけ	(7.6)	5.7	1.5	ロクロ成形 外底系切痕 板状圧痕 胎土 黄灰色 微砂 雲母 白色針状物質 赤色粒 小石粒	
16-4	"	かわらけ質 土製品	(5.0)	(1.5)	2.3	削り出し高台 胎土 橙色 微砂 白色粒 良土 内外面共にスス付着	
16-5	"	土器質 火鉢	/	/	/	口縁部小片 胎土 橙色 微砂 白色粒 器表 淡橙色 浅鉢型	
16-6	"	滑石鏡軸用品	残存長6.5 幅3.0 厚2.2			鏡軸の鋸部部分 上面に四角く切り込みを入れスタンプに加工しようとしたものか?	
16-7	"	鉄製品 鈎針	長5.0 幅0.3 厚0.1			先端が鎌のよう尖る	
16-8	"	漆器皿	(9.9)	(6.9)	1.2	無高台 外底部以外墨塗墨 壁内面朱漆で草文を手描き	
16-9	"	漆器皿	/	(4.2)	/	削り出し高台 内外面墨塗墨 壁内面朱漆で花文をスタンプ	
16-10	"	漆器皿	/	(7.0)	/	高台欠損 内外面墨塗墨 壁内面朱漆で松鶴文をスタンプ	
16-11	"	木製品 草箸	残存長33.9 幅1.3 厚0.6			先端欠損 断面多角形の棒状に削り加工	
16-12	"	木製品 箸	長24.6 幅0.7 厚0.3			断面多角形の棒状に削り端部を尖らす両口加工	
16-13	"	木製品 箸	長23.8 幅0.7 厚0.3			断面多角形の棒状に削り端部を尖らす両口加工	
16-14	"	木製品 箸	長22.6 幅0.7 厚0.5			断面多角形の棒状に削り端部を尖らす両口加工	
16-15	"	木製品 筋子	残存長15.0 幅1.0~1.2 厚0.2 孔径0.3			全体を平らに加工 基部に木釘を差し込む孔を穿つ	
16-16	"	木製品 用途不明	長13.9 幅2.4~2.6 厚1.5~1.9			上端中央を1.7cm程削り込む両端丸味を帯びる加工染・紡具・糸巻き?)か?	
16-17	"	木製品 用途不明	長10.4 幅3.2 厚0.3			側面取り加工 表裏面共丁寧に平らに加工 小判型の形代か?	
16-18	第4面 遺構外	極小かわらけ	(4.2)	(3.4)	0.9	ロクロ成形 外底系切痕 胎土 黄褐色 微砂 雲母 赤色	
16-19	"	かわらけ	(7.6)	4.7	1.6	ロクロ成形 外底系切痕 板状圧痕 胎土 黄灰色 微砂 雲母 白色針状物質 赤色粒 小石粒	
16-20	"	かわらけ	(7.8)	(5.3)	1.6	ロクロ成形 外底系切痕 板状圧痕 胎土 黄褐色 微砂 雲母 白色針状物質 赤色粒	
16-21	"	かわらけ	(7.9)	(5.7)	1.5	ロクロ成形 外底系切痕 板状圧痕 胎土 黄灰色 微砂 雲母 白色針状物質 赤色粒 土丹粒	
16-22	"	かわらけ	12.0	7.8	2.9	ロクロ成形 外底系切痕 板状圧痕 胎土 黄褐色 微砂 雲母 白色針状物質 赤色粒 小石粒	
16-23	"	かわらけ	(12.6)	(7.5)	3.3	ロクロ成形 外底系切痕 板状圧痕 胎土 橙色 微砂 雲母 白色針状物質 赤色粒 小石粒	
16-24	"	かわらけ	13.6	7.8	3.1	ロクロ成形 外底系切痕 板状圧痕 胎土 黄褐色 微砂 雲母 白色針状物質 赤色粒	
19-1	第5面 遺構外	かわらけ	(7.3)	(5.3)	1.4	ロクロ成形 外底系切痕 板状圧痕 胎土 暗褐色 微砂 雲母 白色針状物質 赤色粒 小石粒	
19-2	"	かわらけ	7.8	6.2	1.4	ロクロ成形 外底系切痕 板状圧痕 胎土 黄灰色 微砂 雲母 白色針状物質 赤色粒 土丹粒	
19-3	"	かわらけ	8.4	6.2	1.7	ロクロ成形 外底系切痕 板状圧痕 胎土 黄灰色 微砂 雲母 白色針状物質 赤色粒 土丹粒	
19-4	"	かわらけ	(11.8)	8.0	3.0	ロクロ成形 外底系切痕 板状圧痕 胎土 橙色 微砂 雲母 白色針状物質 赤色粒 小石粒	
19-5	"	かわらけ	12.0	7.6	2.9	ロクロ成形 外底系切痕 板状圧痕 胎土 黄灰色 微砂 雲母 白色針状物質 赤色粒 小石粒	
19-6	"	かわらけ	12.4	7.8	3.1	ロクロ成形 外底系切痕 板状圧痕 胎土 黄褐色 微砂 雲母 白色針状物質 赤色粒 小石粒	
19-7	"	かわらけ	(12.8)	7.6	3.0	ロクロ成形 外底系切痕 板状圧痕 胎土 橙色 微砂 雲母 白色針状物質 赤色粒 小石粒	
19-8	"	かわらけ	(13.2)	8.2	3.3	ロクロ成形 外底系切痕 板状圧痕 胎土 橙色 微砂 雲母 白色針状物質 赤色粒 小石粒	

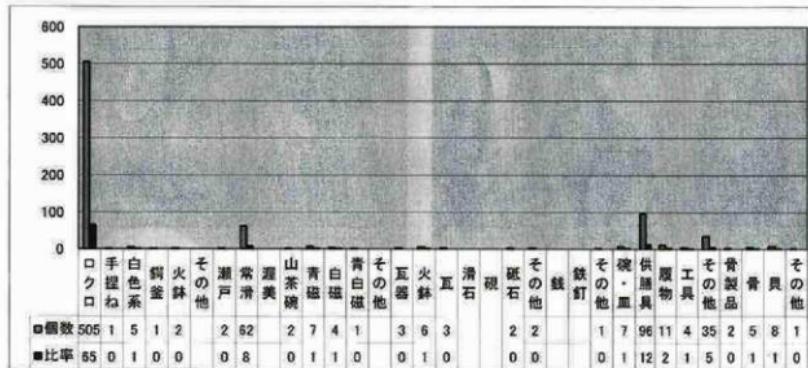
表9 遺物観察表(4)

()は復元値

図番号	層位・遺構	種別	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	観察項目
19-9	第5面 遺構外	白磁 口兀皿	/	(6.3)	/	素地 灰白色 精良堅緻 細 灰白色半透明 薄く施釉 外面下位～外底面に鉄分付着
19-10	"	瀬戸 入子	(7.8)	(4.8)	1.7	胎土 灰色 精良土 口唇部に淡灰緑色の自然釉
19-11	"	常滑窯用砥石	厚1.0～1.5			常滑窯の転用品 扉引殆ど使用され磨滅する
19-12	"	石製品 砥石	残存長5.3 幅4.0 厚3.1			砥面は上下面に使用痕 基灰岩製 上野産の中ほか?
19-13	"	骨角製品 笈	残存長5.5 幅0.7～1.2 厚0.2			両面と周縁を丁寧な磨り加工
19-14	"	木製品 曲物	残存長11.0 残存幅4.0 厚0.2～0.4			周縁面取り加工 下面粗い加工
19-15	"	木製品 杵状	長3.4 幅2.5×2.6			断面八角形に面取り加工
19-16	"	木製品 笹	長21.3 幅0.5～1.5 厚0.1～0.8			偏平な用材に丸味を持たせ丁寧に加工 先端部に向け薄く削り仕上げる
19-17	"	木製品 葭	長24.5 幅0.5 厚0.4			断面多角形の棒状に削り底部を尖らす両口加工
19-18	"	木製品 葭	長24.3 幅0.6 厚0.3			断面多角形の棒状に削り底部を尖らす両口加工
19-19	"	木製品 葭	長23.6 幅0.6 厚0.5			断面多角形の棒状に削り底部を尖らす両口加工
19-20	"	木製品 葭	長23.3 幅0.6 厚0.5			断面多角形の棒状に削り底部を尖らす両口加工
19-21	"	木製品 葭	長23.3 幅0.6 厚0.4			断面多角形の棒状に削り底部を尖らす両口加工
19-22	"	木製品 葭	長23.0 幅0.7 厚0.3			断面多角形の棒状に削り底部を尖らす両口加工
19-23	"	木製品 葭	長22.6 幅0.6 厚0.5			断面多角形の棒状に削り底部を尖らす両口加工
20-24	第5面 遺構外	木製品 葭	長22.8 幅0.6 厚0.3			断面多角形の棒状に削り底部を尖らす両口加工
20-25	"	木製品 葭	長22.2 幅0.6 厚0.3			断面多角形の棒状に削り底部を尖らす両口加工
20-26	"	木製品 葭	長22.1 幅0.6 厚0.5			断面多角形の棒状に削り底部を尖らす両口加工
20-27	"	木製品 葭	長21.8 幅0.7 厚0.5			断面多角形の棒状に削り底部を尖らす両口加工
20-28	"	木製品 葭	長22.0 幅0.7 厚0.4			断面多角形の棒状に削り底部を尖らす両口加工
20-29	"	木製品 葭	長21.7 幅0.4 厚0.3			断面多角形の棒状に削り底部を尖らす両口加工
20-30	"	木製品 葭	長21.4 幅0.6 厚0.5			断面多角形の棒状に削り底部を尖らす両口加工
20-31	"	木製品 葭	長21.4 幅0.6 厚0.5			断面多角形の棒状に削り底部を尖らす両口加工
20-32	"	木製品 葭	長21.2 幅0.5 厚0.5			断面多角形の棒状に削り底部を尖らす両口加工
20-33	"	木製品 葭	長20.7 幅0.6 厚0.5			断面多角形の棒状に削り底部を尖らす両口加工
20-34	"	木製品 葭	長20.5 幅0.6 厚0.3			断面多角形の棒状に削り底部を尖らす両口加工
22-1	第6面 遺構外	かわらけ	(7.8)	(5.8)	1.9	ロクロ成形 外底糸切痕 版状圧痕 胎土 黄灰色 微砂 雲母 白色針状物質 赤色粘 土丹粒
22-2	"	かわらけ	(12.0)	(7.0)	3.2	ロクロ成形 外底糸切痕 版状圧痕 胎土 暗緑色 微砂 雲母 白色針状物質 小石粒
22-3	"	かわらけ	(12.2)	8.3	3.3	ロクロ成形 外底糸切痕 版状圧痕 胎土 暗緑色 微砂 雲母 白色針状物質 赤色粘 小石粒
22-4	"	常滑窯	/	/	/	肩部小片 胎土 暗褐色 砂粒 白色粒や多い 黒色粒 器表 暗褐色
22-5	"	瓦瓦(平瓦)	厚2.1			凹面 離れ砂若干付着 目口直 緩方向ナデにより縦目叩き溝す 側面 ケズリ 側縁 ナデ 胎土 暗赤褐色 砂粒 白色粘 良土 色調 灰色
22-6	"	漆器 皿	8.9 (6.4)	1.2		外底面以外黒漆塗布 内面朱漆で墨文を手書き
22-7	"	木製品 葭	長24.2 幅0.6 厚0.4			断面多角形の棒状に削り底部を尖らす両口加工
22-8	"	木製品 葭	長22.9 幅0.6 厚0.4			断面多角形の棒状に削り底部を尖らす両口加工
22-9	"	木製品 葭	長22.7 幅0.7 厚0.4			断面多角形の棒状に削り底部を尖らす両口加工
22-10	"	木製品 葭	長22.5 幅0.4 厚0.4			断面多角形の棒状に削り底部を尖らす両口加工
23-11	第6面 遺構外	木製品 葭	長22.4 幅0.7 厚0.3			断面多角形の棒状に削り底部を尖らす両口加工
23-12	"	木製品 葭	長21.8 幅0.4 厚0.4			断面多角形の棒状に削り底部を尖らす両口加工
23-13	"	木製品 葭	長21.6 幅0.7 厚0.3			断面多角形の棒状に削り底部を尖らす両口加工
23-14	"	木製品 葦蓋	長29.9 幅0.6 厚0.6			先端欠損 断面多角形の棒状に削り加工
23-15	"	木製品 草履板芯	長23.0 幅(4.6) 厚0.2～0.5			先端に小孔 茎状の植物圧痕残る
23-16	"	木製品 刀	長51.3 幅1.8～2.2 厚0.5 ～0.7			刃身の先端は尖らせぜなだらかに加工 持ち手の下端は丸 味を帯びる 子供の玩具か? 形代か?

表10 遺物分類別出土数量・比率表

種類	出土地	1面	2面	3面	4面	5面	6面	合計	比率(%)
かわらけ	ロクロ	98	14	243	100	36	14	505	65
	手捏ね						1	1	0
	白色系				2	2	1	5	1
	銅釜				1			1	0
土製品	火鉢			1	1			2	0
	その他								
	瀬戸	1	1					2	0
国産陶器	常滑	22	17	8	8	4	3	62	8
	瀬戸								
	山茶碗			1		1		2	0
舶載陶磁器	青磁	2		1	2	2		7	1
	白磁	1				3		4	1
	青白磁	1						1	0
	その他								
瓦質製品	瓦器	1		2				3	0
	火鉢	1		1		4		6	1
	瓦	1	1			1		3	0
石製品	滑石								
	硯								
	砥石				1	1		2	0
	その他			2				2	0
金属製品	銛								
	鉄釘								
	その他				1			1	0
	碗・皿			1	4	1	1	7	1
漆・木製品	供膳具				20	44	32	96	12
	頬物				8		3	11	2
	工具					2	2	4	1
	その他				8	18	9	35	5
骨製品		1				1		2	0
自然遺物	骨	1		3		1		5	1
	貝			1		4	3	8	1
	その他					1		1	0
合計		130	33	264	156	126	69	778	
比率(%)		17	4	34	20	16	9		100



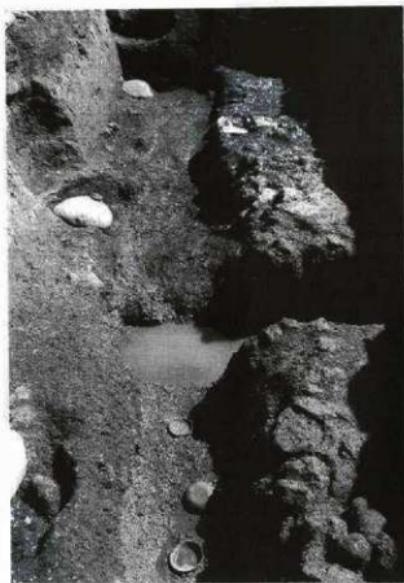
図版 1



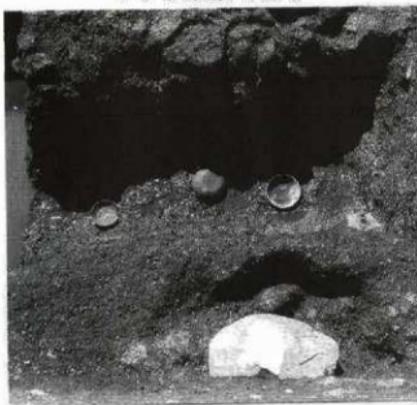
▲ 1. 第1面全景（東から）



▲ 2. 第1面全景（西から）



◀ 3. 調査区南西域（西から）



▼ 4. 第1面溝1（西から）

▲ 1. 建物1一イ礫石
馬糞の為か表面が



▲ 2. 建物1一口礫石



▲ 3. 建物1一八礫石



▲ 4. P2 (角柱痕あり)



▲ 5. 溝1 土層堆積

図版 3



▲ 1. 第2面全景（東から）



▲ 2. 第2面全景（西から）



▲ 3. 掘立石切石列
建物1・渠1と
同一軸方位





▲ 1. 第3面全景(東から)



▲ 2. 第3面全景(西から)



◀ 4 P7 瓦板検出状況

図版 5



▲ 1. 第4面全景（東から）



▲ 2. 第4面全景（西から）



▲ 3. 溝1の木杭列



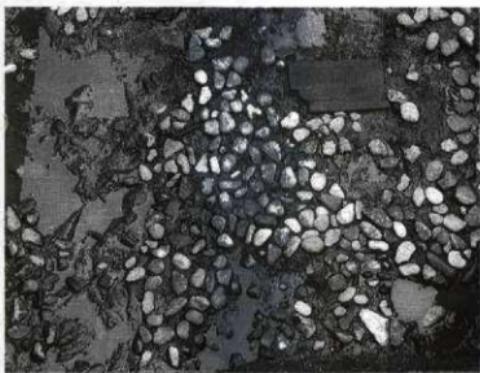
▲ 4. 調査区中央部（北から）



▲ 1. 第5面全景(東から)



▲ 2. 第5面全景(西から)



▲ 3. 玉砂利敷範囲近景



▲ 4. 玉砂利



▲ 1. 第6面確認トレンチ（東から）



▲ 3. 調査区北壁土層断面



▲ 2. トレンチ内ハマグリ出土状況



▲ 4. 調査区南壁土層断面



▲ 5. 調査区西壁南端土層断面

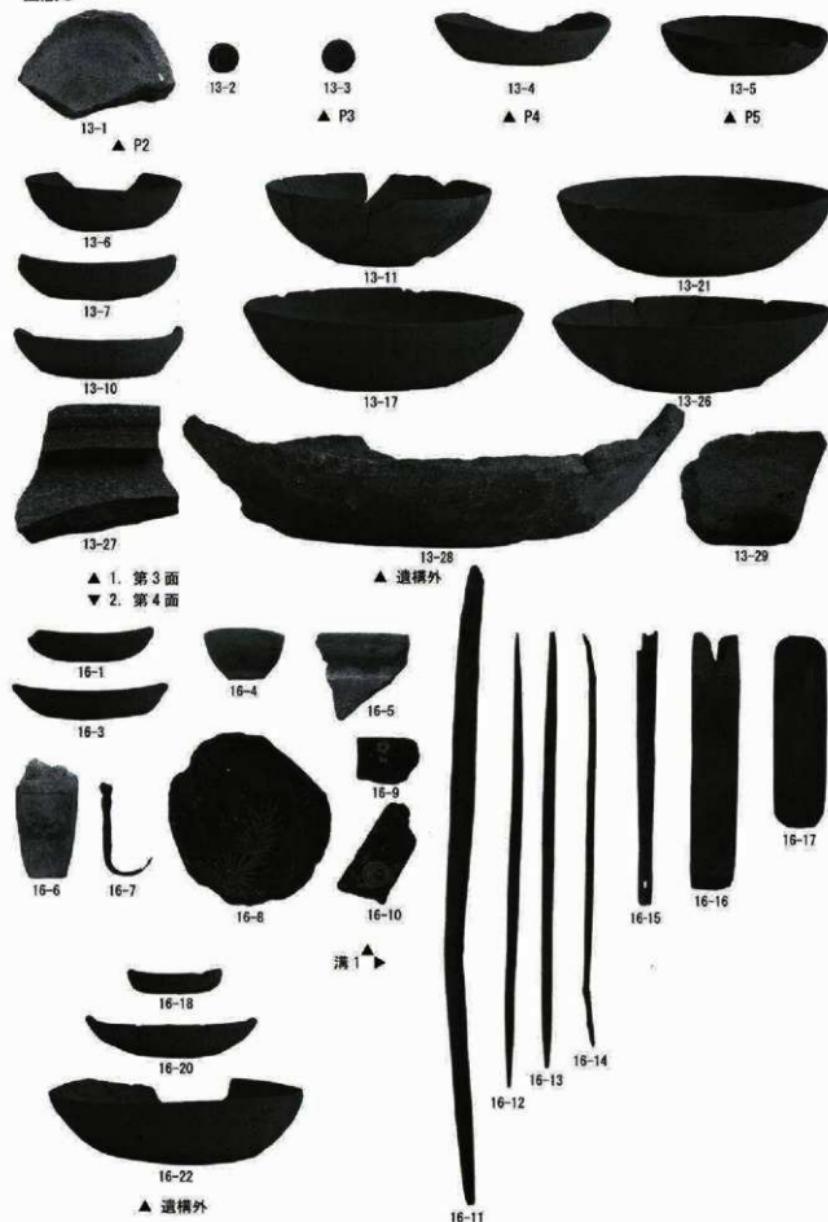


▲ 6. 調査区西壁北側土層断面

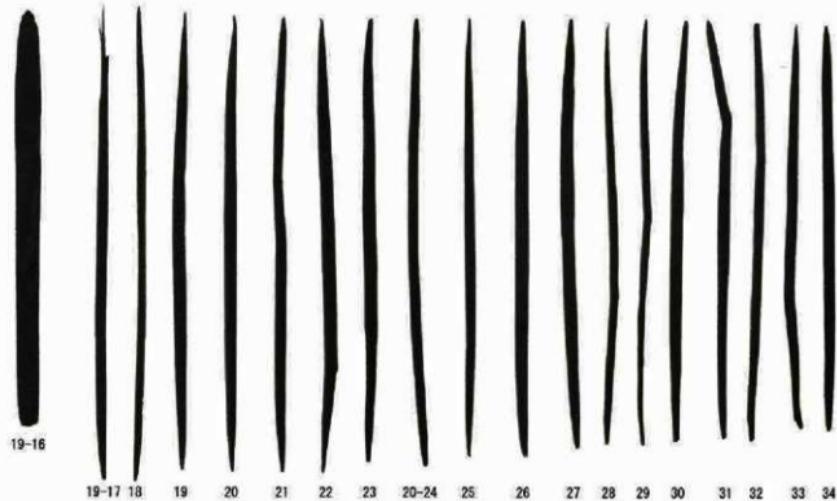
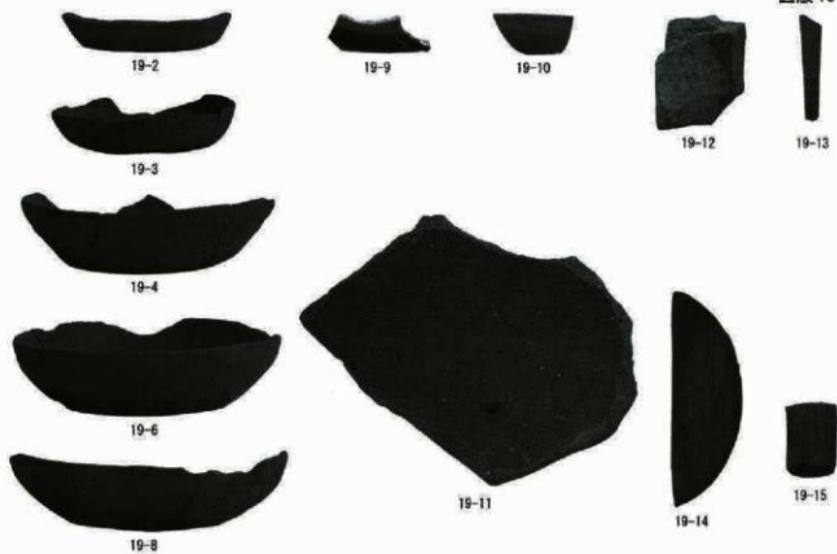
图版 8



图版9



図版 10



▲ 1. 第 5 面遺構外

ほうじょう こ まち ていあと
北条小町邸跡 (No. 282)

雪ノ下一 丁目440番の一部

例　　言

1. 本報は「北条小町邸跡（鎌倉市№282）」内、雪ノ下一丁目 440 番の一部における個人住宅建設にともなう埋蔵文化財発掘調査報告である。
2. 調査期間 2004 年 1 月 16 日～同年 2 月 19 日
調査面積 56 m²
3. 本調査地点の略称は YYT1440 とした。
4. 調査体制
 - 担当者 馬淵和雄
 - 調査員 鎌治屋勝二（資料整理）・松原康子（同）・根本志保（同）
 - 調査補助員 鈴木弘太・吉田智哉・岩崎卓治（資料整理）・佐藤あおい（同）
 - 作業員 窪田孝善・田口康雄・清水光一・森原敏夫・田島道夫・堀住稔
(以上社団法人鎌倉シルバー人材センター)
5. 本報作成担当構図整理 馬淵・鎌治屋・根本
遺物実測 松原・岩崎・鈴木・佐藤
同墨入れ 松原・岩崎
同観察表 松原
原稿執筆 馬淵・鎌治屋・松原（担当部分末尾に執筆者名を記した）
編集 馬淵
総括 馬淵
寄稿 鈴木茂（パレオ・ラボ）

目 次

第1章 遺跡と調査地点の概観	113
1. 位置と地勢	113
2. 歴史的環境	113
第2章 調査の概略	121
1. 調査にいたる経緯	121
2. 調査方法	121
3. 調査の経過	121
第3章 調査結果	122
第1節 層序と面の概要	122
1. 基盤層の状況	122
2. 小町大路側溝と平坦面のあり方	122
第2節 各説	124
1. 小町大路側溝1・2と関連遺構	124
2. 小町大路側溝3と関連遺構	126
3. 小町大路側溝4・5と関連遺構	132
4. 小町大路側溝6と関連遺構	136
5. 小町大路側溝7と関連遺構	141
6. 小町大路側溝8・9・10と関連遺構	145
7. 側溝一括出土遺物	150
8. 中世以前の遺物	150
9. 遺構外採集遺物	150
第4章 まとめと考察	159
1. 遺構の変遷について	159
2. まとめ	164
第5章 北条小町邸跡の花粉化石	167

挿 図 目 次

図1 調査地点と周辺の遺跡・旧跡	114
図2 明治15年頃の道路付近の状況	119
図3 調査区設定図	121
図4 調査区壁土層図	123
図5 遺構全図(1)一側溝1・2と関連遺構、同出土遺物	125
図6 遺構全図(2)一側溝3と関連遺構	127
図7 側溝3・東西溝2・東西溝3出土遺物	128
図8 上師器集中部出土遺物	130
図9 建物1・柱穴列1～3、同出土遺物	131
図10 遺構全図(2)内落込み出土遺物	132
図11 遺構全図(3)一側溝4・5と関連遺構、同出土遺物	133
図12 遺構全図(4)一側溝6と関連遺構	135
図13 側溝5・6同出土遺物	136
図14 側溝6出土遺物	137
図15 側溝6西岸上出土遺物	138
図16 上師器集中部3、同出土遺物	139
図17 積脚1・柱穴列4～6、同出土遺物	140
図18 遺構全図(5)一側溝7と関連遺構	142
図19 側溝7出土遺物(1)～上層	143
図20 側溝7出土遺物(2)、側溝8・9・10・側溝7西岸・P.98、同出土遺物	144
図21 遺構全図(6)一側溝8・9・10と関連遺構	146
図22 側溝一括出土遺物(1)	148
図23 側溝一括出土遺物(2)	149
図24 中世以前・遺構外採集遺物	150
図25 遺構変遷図	160
図26 小町大路側溝変遷模式図	161
図27 小町大路側溝対比図	165

表 目 次

表 1 遺物観察表 (1).....	151	表 5 遺物観察表 (5).....	155
表 2 遺物観察表 (2).....	152	表 6 遺物観察表 (6).....	156
表 3 遺物観察表 (3).....	153	表 7 遺物観察表 (7).....	157
表 4 遺物観察表 (4).....	154	表 8 遺物観察表 (8).....	158

図 版 目 次

図版 1-1 土師器集中部 1 南から.....	175	3-3 側溝 9 西岸上大型礫板 南から.....	177
1-2 建物 1 P. 2.....	175	3-4 側溝 9 東から.....	177
1-3 側溝 5 南から.....	175	3-5 側溝 9 南から.....	177
1-4 側溝 5 と関連遺構 南から.....	175	3-6 側溝 9 西から.....	177
1-5 側溝 5 と関連遺構 西から.....	175	図版 4-1 調査区北壁東側土層断面 (上段).....	178
図版 2-1 土師器集中部 3 南から.....	176	4-2 同 (下段).....	178
2-2 側溝 6 肩部 東から.....	176	4-3 調査区南壁東側土層断面 (上段).....	178
2-3 側溝 7 と関連遺構 東から.....	176	4-4 同 (下段).....	178
2-4 側溝 7 と関連遺構 西から.....	176	図版 5 遺物出土.....	179
2-5 側溝 7 と関連遺構 北から.....	176	図版 6 遺物出土.....	180
図版 3-1 側溝 8 木材出土状況 南から.....	177	図版 7 遺物出土.....	181
3-2 側溝 9 と関連遺構 東から.....	177		

第1章 遺跡と調査地点の概観

1. 位置と地勢

位 置

鎌倉中心部は、鶴岡八幡宮から海に向かって真っ直ぐ伸びる若宮大路を基軸として、それにはほぼ平行した東西2本の南北大路、および直交する何本かの東西大路と小路（「辻」か）により区画される。市街地のほとんど地下には中世都市遺跡が存在し、このうち若宮大路東側の鶴岡八幡宮前面（南）にある一辺約200mの方形区画が、神奈川県遺跡台帳に「北条小町邸跡（泰時・時頼邸）」（鎌倉市No.282）として登録されている。この区画は西辻を若宮大路、北辻を横大路、東辻を小町大路に囲まれ、鎌倉時代中～後期には幕府のあった場所とも、執権北条泰時や経時・重時らの正亭のあった場所ともいわれている（高柳1959・秋山1996・同1997）。

調査地点はこの方形区画の東南角にあり、現在の小町大路からは約10m西に入った場所に位置する。「北条小町邸跡」東辻の調査事例は近年増加しており、地点2（雪ノ下一丁目432番2地点、1988年調査—菊川1989）、地点4（雪ノ下一丁目400番1地点、2000年調査—馬淵ほか2002）、地点5（雪ノ下一丁目401番5ほか地点、2001年調査—馬淵ほか2003）とはいずれも約100m以内の至近距離にある。とくに小町大路に臨んで大路側溝の発見された地点2・4とは、東西位置ではほぼ同じ並びにあり、本地点はその南側の延長線上にある。現在の地番は、鎌倉市雪ノ下一丁目440番となっている。

地 勢

調査地点を地勢上からみれば、およそ次のように表現できる。鎌倉東辻の山中に源を発した滑川は、現在の浄明寺から二階堂付近にかけて狭隘な谷間を開析したあと、大倉の辺から南に向きを変えて市内中心部の沖積平野を形成しつつ、相模湾に流れ込む。この間中流域から下流では東側の山裾を削り、右岸に河岸段丘を形成する。調査地点は沖積平野のほぼ入口付近東寄りの滑川右岸に位置する。滑川までは約170m、現在の標高は9.4m前後、中世期には、削平されて詳しいことは不明ながら、ほぼ8.2～8.5m程度であったと推測される。現況で西の若宮大路よりほぼ80cm高い。

2. 歴史的環境

縄文～古墳時代

縄文海進期、鎌倉市街地は水面下であったと考えられ、遺跡は二階堂や大倉の山裾に限られる。海退期以降では、本調査地点東側のほぼ隣地といつていい地点1の調査で、深さ2m以上、幅が検出範囲だけで8mはある縄文晩期の大きな落込みの南岸が検出されている（馬淵ほか2002）。逆台形の断面をしており、おそらく古滑川の流路か河跡湖と考えられる。しかし、他の地点でその対（北）岸は検出されていないので、広がりは把握できない。

調査地点一帯で人の生活痕跡がみられるようになるのは弥生時代中期後半からである。大倉から二階堂にかけて大規模な集落が形成されており（馬淵1998・1999）、当地点付近でも、中世層の中からしばしば中期後半～後期の土器が出土する。古墳時代の集落は、周辺山稜部・海岸部・二階堂付近の平坦な微高地で発見されているが、当地点付近ではまだ例がない。地点18での花粉分析でイネ科のプラントオバールが析出されていることから、この一帯で水田耕作がおこなわれていた可能性がある。

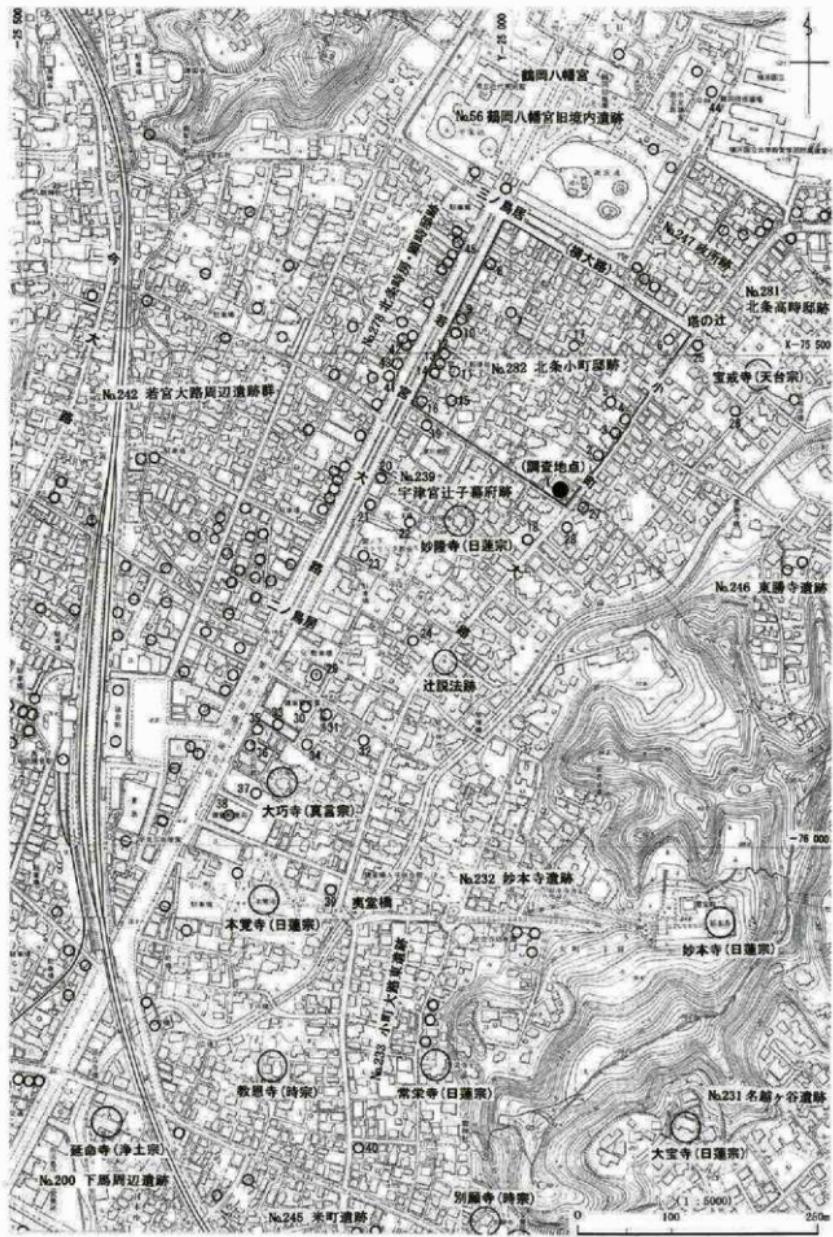


図1 調査地点と近辺の遺跡・旧跡

図1 調査地点名

地点名に続く()内は担当者と調査年度、調査報告書名に続く()は編著主作者と発行年度を示す

北条小町跡跡 (No.282)

- 雪ノ下1丁目44番(馬淵2001) 本地点 2. 雪ノ下1-432-2(菊川1988)『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書5』(菊川1989) 3. 雪ノ下1-432-2(市教委1977)『鎌倉市埋蔵文化財発掘調査年報1』(1983) 4. 雪ノ下1-400-1(馬淵2000)『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書18(第2分冊)』(馬淵2002) 5. 雪ノ下1-401-5外(馬淵2001)『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書19』(馬淵2002) 6. 雪ノ下1-395(菊川1988)『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書5』(菊川1989) 7. 雪ノ下1-374-2(玉林・田代1985)『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書2』(玉林ほか1986) 8. 雪ノ下1-377-6,7(馬淵1994-95)『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書12(第2分冊)』(馬淵1996) 9. 雪ノ下1-372-7(馬淵1984)『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書1』(馬淵1984) 10. 雪ノ下1-371-1(馬淵1984)『北条泰時・時頃跡』(馬淵1985) 11. 雪ノ下1-369外(田代1989) 12. 雪ノ下1-370-1(田代1996)『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書14(第1分冊)』(土屋ほか1988) 13. 雪ノ下1-369外(田代1990)『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書7』(田代1991) 14. 雪ノ下1-389-1(原1996)『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書14(第3分冊)』(原ほか1998) 15. 雪ノ下1-419-1(玉林・田代1989)『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書14(第1分冊)』(玉林1987) 16. 雪ノ下1-367-1-368-1(宮田1999~2000)『北条小町跡跡(泰時・時頃跡)』(諸星ほか2000) 17. 雪ノ下1-407-3の一部(原2002~03)『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書21(第2分冊)』(原2005)

宇津宮辻子墓跡 (No.239)

- 小町2-373-1の一部(原1998) 未報告 18. 小町2-366-1(手塚1990~91) 未報告 20. 小町2-366-1(原1996)『宇津宮辻子墓府跡発掘調査報告書』(原ほか1996)『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書13』(小林1997) 21. 小町2-354-2(松尾1997) 未報告 22. 小町4-354-2(田代1991)『宇津宮辻子墓府跡(No.239)』(熊谷1993) 23. 小町2-354-2(田代1992) 未報告 24. 小町2-388-1(原・佐藤1994)『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書12(第1分冊)』(佐藤1996)

北条高時跡路 (No.281)

- 小町3-426-3(原1994)『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書12(第1分冊)』(原ほか1996)

若當大路周辺道路跡 (No.242)

- 小町3-455-4(原1997~98) 未報告 27. 小町2-409-9外(伊丹2001)『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書23(第2分冊)』(馬淵2007) 28. 小町2-402-5(手塚・野本1999)『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書17(第1分冊)』(野本2000) 29. 小町2-345-2(馬淵1983)『若宮大路二丁目345番-9地點遺跡』(馬淵1983) 30. 小町1-321-1(宮田1993)『若宮大路周辺道路群発掘調査報告書』(宮田1996) 31. 小町1-322-2(菊川1987) 未報告 32. 小町1-325-1(田代・藤作1992~93)『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書10(第3分冊)』(佐藤1994) 33. 小町1-319-2(赤木1978)『鎌倉市埋蔵文化財発掘調査年報1』(松尾ほか1983) 34. 小町1-322(宮田1992~93)『若宮大路周辺道路群発掘調査報告書』(宮田1997) 35. 小町1-309-5(森木1982)『小町1丁目309番地點発掘調査報告』(森木1983) 36. 小町1-309-4(森木1977)『鎌倉市埋蔵文化財発掘調査年報1』(松尾ほか1983) 37. 小町1-891(1-309-2) (森木1978~79)『(推定)鎌倉定員塙跡遺跡』(森木ほか1982) 38. 小町1-305-308(森木1975) 未報告 39. 小町1-302(赤木1977) 未報告

小町大路東遺跡 (No.233)

- 大町1-1181(原1980) 未報告

北条時房・頼時跡跡 (No.278)

- 雪ノ下1-273-1(原1987)『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』4(原ほか1988) 42. 雪ノ下1-271-4(馬淵1998)『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書(第2分冊)』(北条時房・頼時跡跡『雪ノ下1丁目272番地點』) (原ほか1997)

鶴岡八幡宮境内道路跡 (No.56)

- 雪ノ下4-1051(松尾1982)『鶴岡八幡宮境内発掘調査報告書(鎌倉国宝館収蔵庫建設に伴う緊急調査)』(松尾ほか1985)

律令期~平安時代後期

律令時代の鎌倉は、『相模國封戸戸租交易帳』に相模(横)国八郡のひとつとして現れる(『正倉院文書』正集十八『神奈川県史 資料編』1~58による)。現在の鎌倉市内中心部はおそらく当時の鎌倉郷にあたり、調査地点もこのうちに含まれていた可能性がある。広範囲に集落が存在していたようで、市街地からの堅穴住居や掘立柱建物の検出例も漸増している。地点 23 では石帶部材の駒尾が出土しており(未報告、該品は筆者実見)、律令の官吏が一帯を往来していたことがわかる。地点 8 でも盤状坏が発見されている(馬淵ほか1996)。

王朝国家期末期(平安時代末期)の鎌倉には二十近い寺社があり、12世紀初頭までに荏柄天神社・紙園天王社(大町八雲神社)・御靈神社(坂ノ下)等、都市神の勧請もおこなわれているので、このころすでにかなりの集住形態が形成されていた可能性がある(野口1993・馬淵1994)。市内のいくつかの地点から若宮大路と異なる軸線を持つ平安後期の溝の検出が相次いでおり(地点 41・原ほか1988・馬淵ほか2000・地点 43・宗義ほか1997)、また定窓白磁(地点 41・原ほか1988)や渥美刻文壺(馬淵ほか1985a・地点 34・宮田ほか1997)など、鎌倉時代以前に属する遺物の出土も珍しいことではない。鶴岡八幡宮境内で創建期以前の層から発見された、板製五輪塔とともに男女2体の合葬墓(地点 44・松尾宣ほか1985)も、おそらくこの頃、12世紀前半期のものであ

る可能性が高い。

鎌倉時代

鎌倉時代、当地点一帯は政治的中心であった。北側には横大路をはさんで御岡八幡宮と政所跡比定地、東側には東勝寺、南側には宇津宮辻子幕府跡比定地（嘉祿元年=1225 以降）がある（文中『比定地』としたのは鎌倉市教育委員会による遺跡名称）。東北にある宝戒寺はもと執権邸といわれる場所である。そして当遺跡付近は北条小町邸跡とも『若宮大路幕府』跡ともいわれる場所である（高柳 1959）。以下、この一帯の変遷をみてみよう。

『吾妻鏡』に上れば、嘉祿元年（1225）7月11日に北条政子が死ぬと、前年第三代執権に就任したばかりの泰時はただちに大倉からの『御所』移転を計画する。10月3日に計画が群議され、翌4日、連署北条時房・執権泰時らにより候補地が巡査される。そして、12月にはやくも宇津宮辻子に新御所が完成し、20日には將軍藤原頼経移徃の儀がおこなわれた。慌ただしい移転に違いないが、これによって政治の中心が大倉の地から若宮大路一帯に移行した。

このときの御所移転について、はやく須藤博史・貫達人らは『鎌倉市史 総説編』（高柳 1959）の史料解釈の誤りを指摘している（須藤／貫 1963・貫 1989）。すなわち、『吾妻鏡』嘉祿元年十一月廿日条にみえる『東西二百五十五丈五尺。南北六十一丈』という長さが、高柳のいう新御所の大きさではなく、當時仮御所としていた伊賀朝行亭（勝長寿院前）の御寝所からの距離であることを明らかにした。また松尾剛次はそれを図化した（松尾剛 1992・1993）。史料の説みは彼らのとおりに違いない。しかし、なお未解決の問題が残っている。この点については過去に何度も触れたが（馬淵ほか 2002, P.78～80など）、本章後段でもあらためて触れる。

この移転にともない、泰時は鎌倉はじめて丈尺制を導入した。これは平城京や平安京で施行されていた都市の地割制度で、街区を方眼区画に再編しようと意図したことを意味する。また屋敷単位として戸主制を採用した。

11年後の嘉祐二年（1236）、幕府と持仏堂などを『若宮大路東類』に新造する（三月廿日条）。その場所については、高柳光寿は幕府郭内の北方への移動といい（高柳 1959）、松尾剛次は（宇津宮辻子幕府郭外の）『北西寄り』といっている（松尾 1992・1993）。しかし、いずれの主張もそれぞれの比定する宇津宮辻子幕府の位置から推測しているので、先にその点を解決しない限り、若宮大路幕府の位置もまた確定することはない。これについても別稿で何度も書いたので（馬淵ほか 2002, P.78～80など）、ここでは触れない。

調査地点南方約70mの地点18では小町大路側溝のすぐ脇で、小町大路ではなく若宮大路に平行した大溝が発見され、『三丈 せきのやまの口口 宗近』と書かれた木簡も出土した（原 1998）。これは幕府が公共事業を御家人に課役として割り当てた工事区間の表示札であり、從来若宮大路側溝からのみ出土していたものである。この木簡の出土した溝に関しては、小町大路側溝のすぐ脇でありながら、小町大路ではなく若宮大路に平行していること。しかもそこが宇津宮辻子幕府比定地に至近の場所であることから、幕府外郭の側溝である可能性も視野に入れておく必要がある。

小町大路に関しては、近年側溝の調査例が増加しつつある。東側側溝が地点25（原 1996）・27（伊丹ほか 2007）・28（野本 2001）で、西側側溝が上記地点18のほか地点2（菊川 1989a）や地点4（馬淵ほか 2002）などで検出されており、大路幅の復元がようやく可能になってきた。馬淵は地点4の調査結果から、かつておよそ16mという数値を算出したことがある（馬淵ほか 2002, 『第四章 まとめと考察』）。しかし、図上復元であるためいまひとつ精度を欠くといわざるをえず、今

回の調査結果であらためて検討したい。

南北朝時代

鎌倉幕府が滅ぶと、関東十ヶ国を統治する鎌倉府が浄妙寺の南東にでき、政治の中心は再び鎌倉時代以前のように、東西山際道路沿いに移行する。南北朝時代以後、当地付近がどうなっていたかは、あまりよくわからっていない。しかし、調査地点南側隣地にある寂昌山妙隆寺は日蓮宗中山門流の鎌倉における拠点であり、重要な施設であると考えられるので、概略をみておきたい。

妙隆寺は小町大路西側にある日蓮宗寺院で、『日蓮辻説法跡』とされる場所の北（八幡宮方向）100mほどにある。一带は鎌倉幕府の有力御家人であった千葉常胤の子孫胤貞（1288～1336）の故地（別邸か）と伝え、一般に『千葉屋敷』とも呼ばれている。胤貞は下総に広く保有する領地を積極的に經營し、自家とその氏寺である下総中山法華経寺の勢力を不動のものとしていた。妙隆寺は、胤貞が祖先追福のため至徳二年（1385）七堂伽藍をととのえ、中山法華経寺の日英を開山に迎えて開いたという。しかし、胤貞はすでに建武三年（1336）に没しているので、これはのちの付会ということになる。

日英は、日蓮宗諸門流の激しい争いの中で身延山久遠寺の日叡との論争に勝利し、彼以後中山門流は大いに勢力をのばした。妙隆寺は鎌倉における中山門流の拠点となった。激しい修行で知られる第二代の日親は、室町幕府六代將軍足利義教に、宗祖日蓮に倣い『立正治國論』を建白しようとしたが容れられず、捕らえられて拷問を受けた。そのとき灼熱した鍋を被せられても主張を曲げなかつたといふ。

室町時代以後

調査地点南約400mの小町大路東側には商業の神である蛭子神社があり、さらに南の『大町四ツ角』近くには町衆の信仰を集めた八雲神社（紙園山王社）がある。室町時代から戦国時代にかけて、一带は町衆の往来する賑やかな場所であったようである（藤木1993）。上述妙隆寺のほか、このころから本覚寺（永享八年＝1436開創）など調査区南方の市内中心部への日蓮宗寺院の進出が顕著になる。

遺跡地および近辺の調査例

これまで『北条小町邸跡』比定地では、縁辺部を中心に10箇所で発掘調査がおこなわれている。近隣の調査も併せて、簡単に成果をみておこう。

若宮大路沿いでは7例があり、いずれにおいても大路の東側側溝が検出された。側溝は何度も改修されているが、鎌倉時代中期以降断面箱型の木枠をもち、掘片幅は大体3mであることが明らかにされている。木枠は、東柱で連結された上下2段の角材によって、側板を固定する構造になっている。鎌倉時代前期に相当する構は素掘りで、逆台形の断面形状をもつ。溝の内側には大型の柱穴列が見つかっており、柵列の存在が指摘できる。道路側溝と内側の大型柵列という構成は、やはり鎌倉時代前期を中心若宮大路の両側で確認されているので、当該期のこの付近における特徴的な方なのだろう。このあり方は、鎌倉時代中期以降、変質する。すなわち、柵列が姿を消し、それまで断面V字形あるいは逆台形で素掘りであった構が、箱型の木枠を持つようになる。

東の小町大路側でも、先述のように側溝が発見されており、若宮大路のそれと同様、箱型の構造をもつ（地点1・3・24）。しかし、両岸が明瞭になった例は少なく、幅など規模は確定的でない。

若宮大路側では構作事を御家人に課役として割り当てた、当該地点の表示札らしい人名木簡が何例か出土している。地点10では『一丈 伊北太郎跡』・『一丈南 くにの井の四郎入道跡』と書かれた2枚が（馬淵1985）、地点8では『二けん おぬきの二郎』・『二けん まきのむくのすけ』・『二

『けん かわしりの五郎』と書かれた3枚が出土した(馬淵ほか 1996)。この種の木簡は、若宮大路西側の地点45からも『口二丈 あかき [] 入道』の文字の読めるものが出土している(田代ほか 1990・宗台ほか 1999)。また、小町大路側の地点18でも、溝中から『三丈 せきのやまの 口口宗近』と書かれた木簡が出土しているのも、先述のとおりである(原 1998)。つまり、若宮大路に限らず、他の大路側溝や大型溝等の作事が、公共事業として御家人役でまかなわれていたことがわかる。

小町大路東側でも近年調査例が漸増しており、本地点の対岸に相当する地点27で側溝が検出されている(馬淵ほか 2007)。本地点の調査結果との対比によって、小町大路の幅が明らかになることが期待される。

このほか、本遺跡北東角近くで横大路南側側溝が検出されている(地点6-菊川 1989b)。ここでは側溝幅は約1.9m~2mで(報告書掲載図から筆者概測)、本地点で検出されたのと同様の側板構造をもつ。

嘉禄元年と嘉禄二年の御所移転について

二度の御所移転はおそらく地割の変更を余儀なくせるものであり、調査地点にも多大な影響をおぼさずにはいなかつたはずである。あらためて近年の研究成果を整理しておこう。

嘉禄元年(1225)、北条政子の死の直後、泰時は『御所』移転を計画し、たった二ヶ月で完成させた。この移転について、かつて高柳光寿は『鎌倉市史 総説編』中で、『吾妻鏡』嘉禄元年十一月廿日条にみえる『東西二百五十六丈五尺、南北六十一丈』という数値を宇津宮辻子幕府の大きさと読み誤り、『東西二百五十六丈五尺』が地形に比べて大きすぎることから、『吾妻鏡』筆記者が『五十六丈五尺』に『二百』を書き加えたとした。

高柳のこの意見については、はやくに須藤博史・貫達人らが史料解釈の誤りを指摘している(須藤／貫 1963・貫 1989)。すなわち、この数値が、高柳のいう新御所の大きさではなく、方違えとともに当時仮御所としていた伊賀朝行亭(『大御堂(勝長寺院)前』)の御寝所からの距離であることを明らかにした。これによれば、朝行亭内御寝所から西に256丈5尺行き、そこから南に61丈下ったところが新御所の乾(北西)の角となる。松尾剛次はこの比定地を図示しており、それにしたがうならば、宇津宮辻子幕府は現若宮大路二ノ鳥居交差点から東の小町大路にいたる道(『宇津宮辻子』)の北側東半部ということになる(松尾 1992・1993)。

須藤・貫・松尾の『吾妻鏡』文言の解釈自体はそのとおりであろう。しかし、松尾の比定した位置は実際の子午線によって東西南北が設定されているため、留保を要する。というのは、川副武胤が指摘したように、中世鎌倉にあっては、若宮大路が子午線とみなされていた可能性が高いからである(川副 1980)。

どちらが子午線と認識されていたか。御所の位置比定の場合は、松尾の想定する伊賀朝行亭の位置にしたがって後者を使うと、鶴岡八幡宮の社頭付近に宇津宮辻子御所の北西角がきてしまい、『吾妻鏡』の関連諸記事と整合しない。実際の子午線を使ったほうが、松尾の図のとおり、都合よくおさまるようみえるのは確かである。

しかしその一方で、若宮大路を子午線と想定しなければ説明できない場合がある。それは松尾も触れているように(松尾 1992)、小山下野入道生西の『若宮大路家』に対する宇津宮辻子御所と若宮大路御所の位置関係である。

生西の『若宮大路家』は『車大路』にも面していた(『吾妻鏡』安貞二年=1228十月十五日条)。つまりその位置は、若宮大路の東側で車大路の北側、すなわち両大路の交差点の北東角になる。そ

して、生西家からみて、若宮大路御所は『正北方』。宇津宮御所は癸の方向にあたるという（注1）。若宮大路は真北から26度40分東に振れているので、もし実際の子午線が用いられていたとすると、若宮大路の『東頃』（嘉慶二年三月廿日条）にあったはずの若宮大路御所は、大路の西側にきてしまうことになる。この位置関係は、若宮大路が子午線に見立てられていないければ成立しないのである。

このように、須藤・貴・松尾らによっていったん決着がついたかにみえた御所移転問題は、肝心の点にいまだ未解決の部分を残している。小山生西の『若宮大路家』と宇津宮辻子・若宮大路両御所の位置関係は、若宮大路を子午線としなければならないことを示唆している。そして、小山生西家の位置は、『大御堂前』というだけの情報しかない伊賀朝行亭に比べ、より確定的である。すると、当時の測量技術に誤りがなければ、問題の根幹は『大御堂（勝長寿院）前』にあったという伊賀朝行亭の位置にあることがわかる。松尾剛次が勝長寿院のある谷（大御堂ヶ谷）の入り口に比定しているのは、おそらく間違いである。『大御堂前』とはどこか。それは、勝長寿院の伽藍形式に深くかかわる。しかし、もはやそれは本稿の課題を超えていよう。

幕府の移転とともにあっては、当然近在の諸屋敷も影響を免れ得なかつたであろう。この点については最近秋山哲雄が整理している（秋山1996・1997）。



図2 明治15年頃の遺跡付近の状況（迅速測図、黒丸印が調査地点）

秋山によれば、建保元年（1213）頃当遺跡地方形区画の北半部に泰時亭、宝戒寺の場所に義時亭があり、嘉祐元年に幕府が宇津宮辻子に移転した後は、嘉祐二年の幕府再移転まで当遺跡全体を泰時亭が占めるようになる。この年、『若宮大路の東頃』へ再移転した後、遺跡地は三つに分割される。すなわち南側に幕府、北側に経時亭、その間に泰時亭がある。秋山は、宝治元年（1247）以後経時亭および泰時亭は合わせて重時に相伝され、一方宝戒寺の地が得宗亭となるという。秋山は時宗以後の当遺跡地については、南部に幕府を想定し、北域は不明としている。

この説の前半部には汲むべきところがあるが、嘉祐二年の幕府再移転については、基本的に北方向への移動であることを前提としているため、検討の必要があろう。両幕府の位置関係から、若宮大路幕府は宇津宮辻子幕府の北西に位置していなければならないからである。

『吾妻鏡』同年六月二十六日条に、將軍藤原頼經は、宇津宮辻子御所からみて若宮大路御所が、方角のよくない乾方向（北西）に当るのではないかとの疑いを持った、という記事がある。これは結局そうではないことが判明するが、大きくみて北西方面という認識がなければこの疑惑は発生しないはずである。とすれば、松尾剛次のように、もし宇津宮辻子幕府が若宮大路から小町大路の間の東半分（小町大路側）の区画を占めていたとすると、若宮大路幕府は西半分の北寄りに移転したと考えれば、『吾妻鏡』と矛盾は生じないことを指摘しておきたい。いずれにせよ方形区画内で地割改編があったことは確かであろうから、秋山の意見を参考として挙げておいた。

注1 『吾妻鏡』嘉祐二年（1236）四月四日条に、「小山下野入道生西の若宮大路家は為丁方之山」とあり、逆に生西の若宮大路家から宇津宮御所を見れば、癸丁の反対方向に相当することになる。

（馬淵ほか 2002 を大幅に加除筆）

引用・参考文献

- 秋山哲雄 1996 「御所と北条氏亭」『北条小町邸跡「泰時・時頃頃」[古論]』『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』12 鎌倉市教育委員会（以下発行者が鎌倉市教育委員会単独の場合はこれを略す）
秋山哲雄 1997 「都市鎌倉における北条氏の邸宅と寺院」『史学雑誌』第106編第9号
須彌博史／貴達人 1985 「宇津宮辻子幕府の位置について」『鎌倉』11 鎌倉文化研究会
高橋光洋 1959 『鎌倉市史 総概編』吉川弘文館
田代郁夫 1998 「大町大路と小町大路一中世都市中の「町」と「路」」『湘南考古学同好会年報』73 湘南考古学同好会
貴達人 1989 「第二章 古代・中世の鎌倉」『鎌倉市史 近世通史編』吉川弘文館
野口実 1993 「頼朝以前の鎌倉」『古代文化』45 (8) 古代学講会
野木賀二 2001 「若宮大路周辺遺跡群—鉄門二丁目402番5地点一」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』17
原廣志 1996 「北条高時邸跡一小町三丁目426番3地點一」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』12
原廣志 1998 「鎌倉市宇津宮辻子幕府跡」第22回神奈川県道路調査・研究室表会 発表要旨『神奈川県考古学会・市教委 藤久保志 1993 「中世鎌倉の紙幣と民衆」『神奈川県城史研究』11号 神奈川城史研究会
松尾剛次 1993 「中世鎌倉の風景」吉川弘文館
馬淵和雄 1994 「武士の都 鎌倉—その成立と構想をめぐってー」『都市鎌倉と坂東の海に暮らす』『中世の風景を読む』2 新人物往来社
馬淵和雄 1987 「北条泰時・時頃邸跡 雪ノ下一丁目233番9地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』3
馬淵和雄 1988 「大倉幕府周辺遺跡群 雪ノ下西丁目620番5地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』14
馬淵和雄 1993 「鎌倉大の歴史」新人物往来社
馬淵和雄 1999 「大倉幕府周辺遺跡群 雪ノ下四丁目620番5地塊」大倉幕府周辺遺跡群発掘調査団
馬淵和雄 2002 「北条小町邸跡 雪ノ下一丁目400番1地丸」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』18 (第2分冊)
馬淵和雄 2003 「北条小町邸跡 雪ノ下一丁目401番5地點」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』19
馬淵和雄 2004 「大倉幕府周辺遺跡群 (No.49) の発掘調査—雪ノ下天神前 562番30地點一」『第19回 鎌倉市道路調査・研究発表会 発表要旨』鎌倉考古学研究所・鎌倉市教育委員会
馬淵和雄ほか 1996 「北条小町邸跡「泰時・時頃頃」雪ノ下一丁目377番7地點」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』12
馬淵和雄・伊丹圭どか 2007 「若宮大路周辺遺跡群 小町二丁目409番9外地京」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』23 (第2分冊)

第2章 調査の概略

1. 調査にいたる経緯

雪ノ下一丁目 440 番の一部において個人専用住宅建設の事前相談があつた。鋼管杭打ちをともなう基礎工事を実施する計画で、埋蔵文化財に影響を及ぼすおそれのあることが予想された。そのため確認調査を実施した結果、小町大路側溝と思われる溝や中世遺物など良好な埋蔵文化財が確認された。それを踏まえ事業者と協議をおこなったところ、当初の計画どおりに工事を実施したいという意向が示され、それとともに遺構の損傷は避けられないものと判断されたため、文化財保護法に基づく届出手続きを行い、平成 16 年 1 月 16 日から発掘調査を開始した。

2. 調査方法

調査時の測量は便宜上、街区に合わせて任意に設定した方眼を使用した。小町大路上の国土座標 4 級点 (T042・TOC0001・C0002) を基点にして調査地点の座標を計測した後、測量方眼を座標系に変換したものを作成して本書に掲載した。調査区は X-74 631 ~ 76 641, Y-24 942 ~ 24 952 (エリア 9) の区域内に位置する。

3. 調査の経過

調査は平成 16 年 1 月 15 日～同年 2 月 19 日の期間を要した。主な作業内容は以下のとおり

- 1月 15 日 (木) 重機による表土掘削。
- 1月 20 日 (火) 側溝 1 を含む中世面の掘り上げ後、撮影と実測。
- 1月 31 日 (土) 側溝 3 を含む中世面全景撮影と実測。
- 2月 11 日 (水) 側溝 6 を含む中世面全景撮影と実測。
- 2月 17 日 (火) 側溝 7 を含む中世面全景撮影と実測。
- 2月 18 日 (水) 土層図実測、座標値測量など。
- 2月 19 日 (木) 機材撤収。調査完了。

(鍛冶屋)



図 3 調査区設定図

第3章 調査結果

第1節 層序と面の概要

1. 基盤層の状況

若宮大路を中心とした鎌倉市の中心街は、全体的に海岸から僅かずつ高まっていく。若宮大路東側では大町四つ角付近が丘陵状になっていて 7.4m ほどの高さをもつが、夷堂橋にかけて 5.4m 辺りまで下った後はふたたび緩やかに高まっていく。調査地点東の小町大路の海拔は約 8.8m、北約 250m の宝成寺門前では約 10m まで上っている。

調査地点の地表高は 8.9m で、80cm ほどの厚さの近・現代土に覆われている。この表土を除くと、すぐに茶褐色の基盤粘質土層と中世遺物を含んだ遺構が現れる。海拔約 8.2m 前後である。この状況は近・現代に基盤層まで削り取られたことを示している。同様の状況は「北条小町邸」内の小町大路沿い調査地点に共通して認められ、60m ほど北の地点 2（雪ノ下一丁目 432 番 2 地点）で 100m 北の地点 4（雪ノ下一丁目 400 番 1 地点）では表土下に基盤層が確認されている（基盤層標高は前者が 8.25m、後者が 8.05m）。

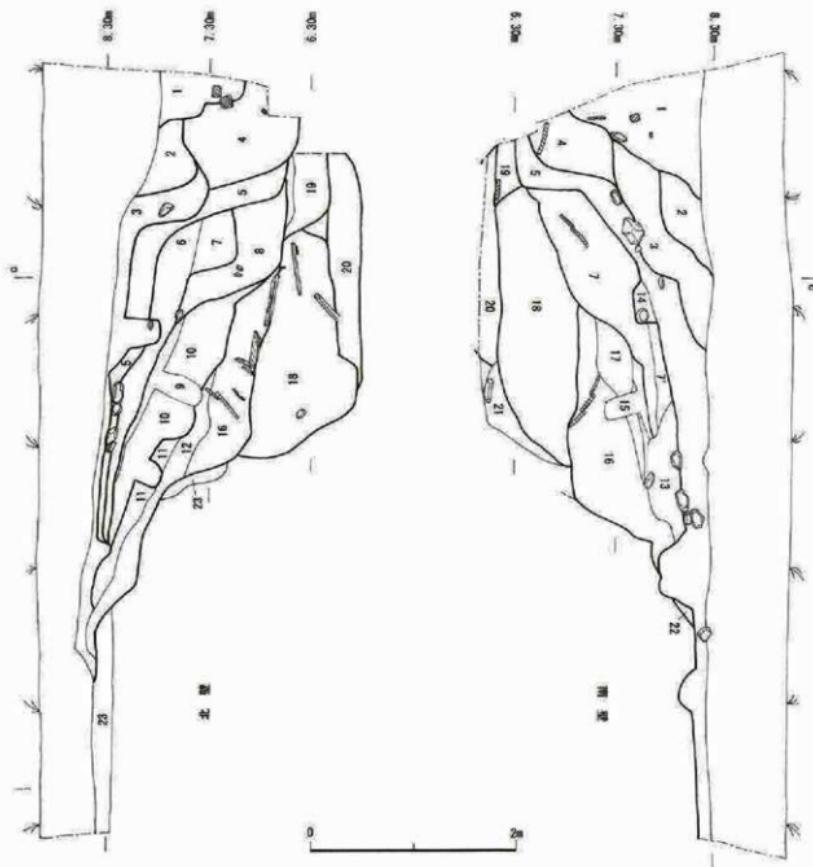
しかし一方、本地点から至近の位置にあっても、過去の調査では小町大路東側の平坦部では顕著な削平は認められない。本地点とは大路を挟んで対面位置にある地点 27（小町二丁目 409 番 9 ほか地点）、およびその南隣で本地点東南 30m の位置にある地点 28（小町二丁目 402 番 5 地点）の調査例では、平坦部の表土下にいずれも厚さ 50cm を超える中・近世包含層が残っている（馬淵 2007、図 4・野本 2000、図 4）。両地点においては、平坦部での基盤層標高は、前者が 8.5 ~ 8.6m、後者が 8.1 ~ 8.2m で、近世から近代にかけてある時期に、大路側溝以西では上部層が大きく削られていることが土層断面図で確認できる。以上の状況は、削平が要するに小町大路を中心としておこなわれたことを示している。この辺は畠地となっていたのだろうか。

2. 小町大路側溝と平坦面のあり方

調査区内の東側半部を小町大路西側の側溝らしい大溝が占めており、生活面は西半部にしか見られない。側溝東岸は東側の調査区外にあって現れていない。大路側溝は古いものほど西寄りに位置しており、最古期のものだと調査区全体の 3 分の 2 に達する（図 26 側溝断面模式図参照）。したがってこの時期にあって、基盤層の露頭は調査区西側の 3 分の 1 に過ぎない。側溝は時代を下るにつれ東に移行し、平坦部分もそれとともに拡がる。そのため新しい溝の西肩は、おおむねその前代の堆積土中に構成されることになる（図 4 参照）。またそれにともない、柱穴などの遺構確認範囲も基盤層上から次第に東方向に拡張されることになる。

小町大路側溝と確認される溝が少なくとも 7 条検出できたが、すべて上部を削り取られており、それにともなう生活面もほとんどが失われている。したがってほぼ同一の面上で柱穴等を検出することとなり、側溝との組み合わせを見出すのは容易でない。ここでは側溝を 5 時期に分け、平坦部の遺構のうち、位置や切合、また埋土などから同時存在と判断したものを組み合わせて提示する。判断の具体的根拠については各説で述べる。

土層断面については、調査区全体に関して図 4 を、小町大路側溝に関しては溝の個別図を参照してほしい。



1. 側溝 1
2. 側溝 2
3. 側溝 3
4. 側溝 4
5. 側溝 5
6. 暗茶褐色砂質土
7. 側溝 6 埋土
8. 側溝 6 裏込め
9. 士師器集中部 3 及び柱穴埋土
10. 喙青灰色粘質土
11. 黄褐色泥岩層
12. 喙茶褐色粘質土～暗灰褐色粘質土～明茶褐色纖維質土

13. 土坑埋土
14. 柱穴埋土
15. 柱穴埋土
16. 側溝 7
17. 炭化層
18. 側溝 8
19. 側溝 9
20. 側溝 10
21. 地山崩土
22. 成土
23. 落込み堆土

側溝個別の詳細については第2節を参照

図4 調査区壁土層断面図

第2節 各説

1. 小町大路側溝 1・2 と関連遺構 (図5)

調査区西半部では表土直下に基盤層が露われるが、東半部3分の2ほどはそれではなく、位置と方位などから、全体として小町大路西側側溝であると判断した。基盤層の切れ目から東の小町大路方向になだらかに傾斜しており、調査区東壁まで2m前後のあたりからは急な落ちとなる。位置と方向からみて、これが小町大路西側の上層側溝であることは間違いない。溝は平行して2条検出され、側溝1・2と名づけた。層位的には最も新しい一群であるが、近代に上部が深く抉られている。東壁寄りの側溝1が同2を切る。北半部では2に切られた溝肩も見えており(図4土層断面図土層番号6)、側溝の作り直しが何度にもおよんだことがうかがえる。

先述の通り、側溝1・2はいずれも肩の部分が2mあまりの幅で平坦部より一段落ちた形になっている。溝枠を支える何らかの施設の可能性があるが、上部が失われて本来の深さが不明なため、性格もまたわからない。

調査区西南域に、小町大路側溝に直交する幅1m前後の東西溝が検出された(「溝1」)。上部の大半が失われて10cmほどの深さしか残っていないが、側溝1・2と共に共通の埋土を持ち、また全遺構の中で層位的にも後出であるため、ともなう可能性が高いと判断した。

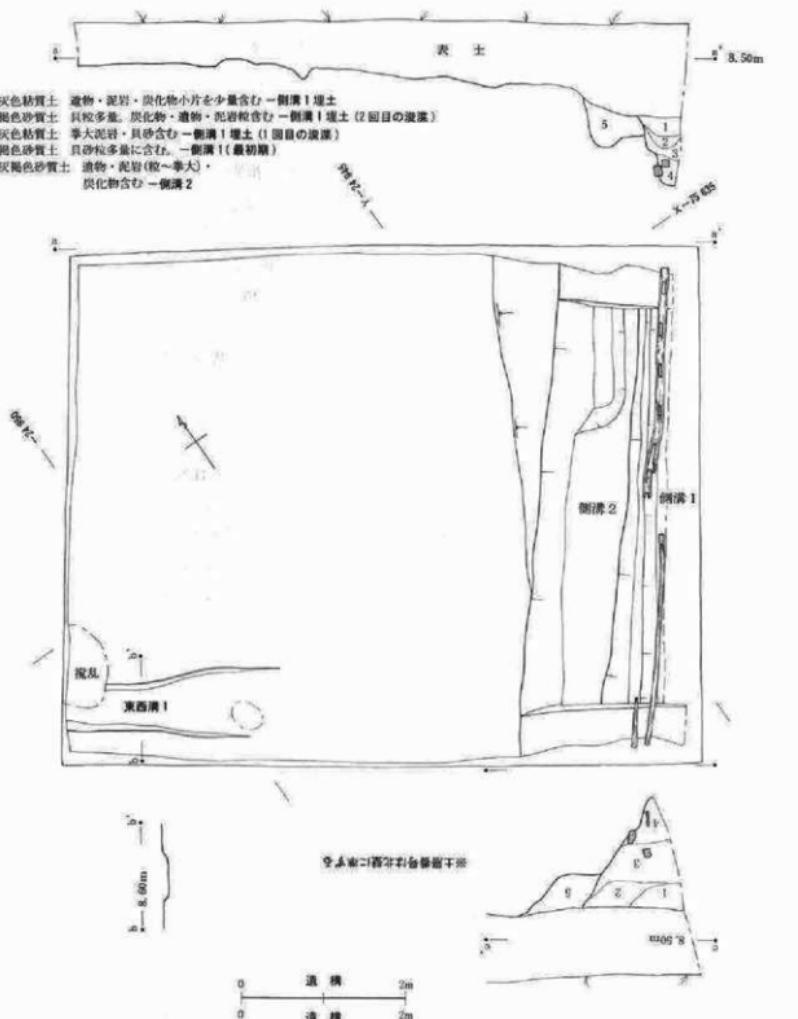
検出高: 8.1 ~ 8.5m 構成土: 明茶褐色粘質土(基盤層)・暗茶褐色粘質土・暗茶褐色砂質土・破碎泥岩地行 検出遺構: 小町大路側溝2条・東西小溝1条

なお以下で「深さ」としたのは、直近の平坦面からの計測値である。

側溝1(図5)

位置: X-75 634 ~ -75 641 Y-24 942 ~ -24 947 規模: 東西幅122cm以上×深さ143cm以上(最下面標高約6.74m) 断面形: (逆台形) 流下方向: 北→南 主軸方位: (N-38.5°-E) 充填土: 図に記載 重複関係: 側溝2を切る 出土遺物: (側溝2と共に) 土師器皿T種(1)・土師器皿R種(2~6)・白色系土師器皿T種(7)・瀬戸(8)・青白磁碗(9) 特記事項: 調査区東壁沿いに南北に走行する溝の西側掘り方を検出した。下端付近には護岸の部材とみられる根太がある。根太は調査区内で2本が縦位置に並び、北側のものにはホゾ穴があるが、南側のものにはない。ホゾ穴のある根太の検出高は7.2m前後、幅約10cm×厚み約10cm×長さ184cm以上(北側は調査区外)、ホゾ穴のない根太は検出高7.4m前後、幅約6cm×厚み約11cm×長さ160cm以上(南側は調査区外)。南側の根太にホゾ穴のない理由はわからないが、前代にこの位置には橋があり、その点で構造が他と異なっていた可能性はある。ホゾ穴の根太を含む側溝は、雪ノ下一丁目400番1地点(図1地点4)にもみられる。こちらは大路西側溝の掘り方、東肩部分を検出した。雪ノ下一丁目400番1地点の側溝2は主軸方位:N-39°-E、底面高約7m、根太の検出高7.2m前後、本地点の側溝1と共に通する。また雪ノ下一丁目432番2地点(図1地点2)のトレンチ調査でも同様の根太が出土している。これらの根太自体は規格において若干の差異がみられるが、その軸線を延長すると根太の間隔が約3mとなる。これらを同時期の小町大路側溝とすれば、若宮大路側溝と同規格の溝が存在していたことになる。

次述の側溝2と区別できていないが、遺構年代は13世紀後半~14世紀前半、すなわち鎌倉時代後期いっぱいを充てたい。



側溝1・2 出土遺物

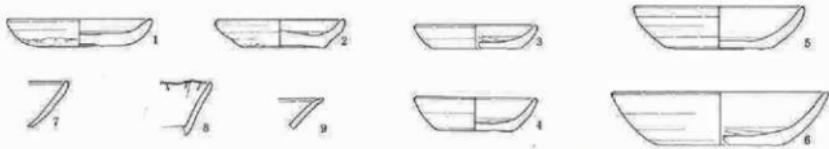


図5 遺構全図 (1) -側溝1・2と関連遺構、同出土遺物

側溝2(図5)

位置:X-75 634 ~ -75 640 Y-24 942 ~ -24 948 規模:東西幅100cm以上×深さ85cm以上(最下面標高約7.42m) 断面形:(深皿形) 流下方向:北→南 主軸方位:(N-39°-E)
充填土:図に記載 重複関係:側溝1に切られる 出土遺物:(側溝1と一括) 特記事項:肩の部分が平坦部から一段落ちさらに一段の落ちがある。側溝1より70cmほど深い溝。側溝に据えられた木枠などの控えにかかる施設か。その場合は側溝1との関連も視野に入れておきたい。

年代は側溝1に準じるが、層位上いくらか早く終焉することになる。

東西溝1(図5)

位置:X-75 635 ~ -75 640 Y-24 944 ~ -24 952 規模:最大幅85cm×深さ11cm以上(最下面標高8.26m) 断面形:浅皿形 流下方向:西→東 主軸方位:N-56.5°-W 出土遺物:図化可能遺物なし

有効な出土遺物を欠くので年代を判断しにくいが、側溝1・2と同時存在だとすればそれに準拠する。

2. 小町大路側溝3と関連遺構(図6)

側溝2を除くと、下に別の側溝が現れる。ほとんどが2に削り取られ残存部は少ないが、埋土と控えの東材などの様子から別の側溝と認識し、「側溝3」とした。また先の側溝1・2関連遺構と検出高は変わらないが、位置と側溝中の東材などの関連が推測される遺構をここにまとめた。ただし、平坦面の遺構は削平によってすべて同一面(基盤層上)で検出されたため、柱穴の中には本来層位的に下位に属していたものでもこの期に含めた可能性は低くない。側溝3西岸には部分的に泥岩を粗く敷いた地行がみられ、直上に土師器皿を中心とした遺物が集中的に出土している。比較的生活面に近い状況が残存しているものの、各遺構との関連については詳細不明である。

また西域には東西に平行した2条の溝が通じており、その間には幅3m弱の平坦面がある。この平坦面の延長上の大路側溝中には、橋脚の可能性のある石も見られる。すなわち、2条の溝の間が道路であった可能性が指摘できる。

検出高:8.1~8.4m 構成土:明茶褐色粘質土(基盤層、1と同じ) 検出遺構:小町大路側溝1条・東西小溝2条・小穴61口(うち建物1、柱穴列1~3の柱穴含む)

側溝3(図6・7)

位置:X-75 634 ~ -75 640 Y-24 942 ~ -24 948 規模:東西幅120cm以上×深さ103cm以上(最下面標高約7.50m) 断面形:(逆台形) 流下方向:北→南 主軸方位:(N-37°-E) 充填土:図に記載 重複関係:側溝1に切られる 出土遺物(図7):土師器皿T種(1~3)・土師器皿R種(4~7)・常滑山茶碗(8)・瀬戸灰釉鉢(9)・童泉窯青磁鑄運弁文碗(10)・平瓦(11)

特記事項:これも二段落ちの構造となっている。側溝2の護岸の裏込め部分の可能性も残るが、上部が大きく削られて全容がつかないので、何ともいえない。溝中には、流水方向に直交する横木と、それを固定するためのものとみられる杭が並んで出土した。厳密な規格は認められないが、長さ80~90cm、幅5~10cm弱で、側溝の構造を考えると木組の東柱が水流側に傾かないよう設置した護岸の跡とみたい。若宮大路側溝をはじめ、鎌倉市内遺跡の護岸跡ではこのような「控え貫」「控え横木」とよばれるものが頻繁に発見されるが、規模だけではなく構造上も、小町大路側溝は若宮

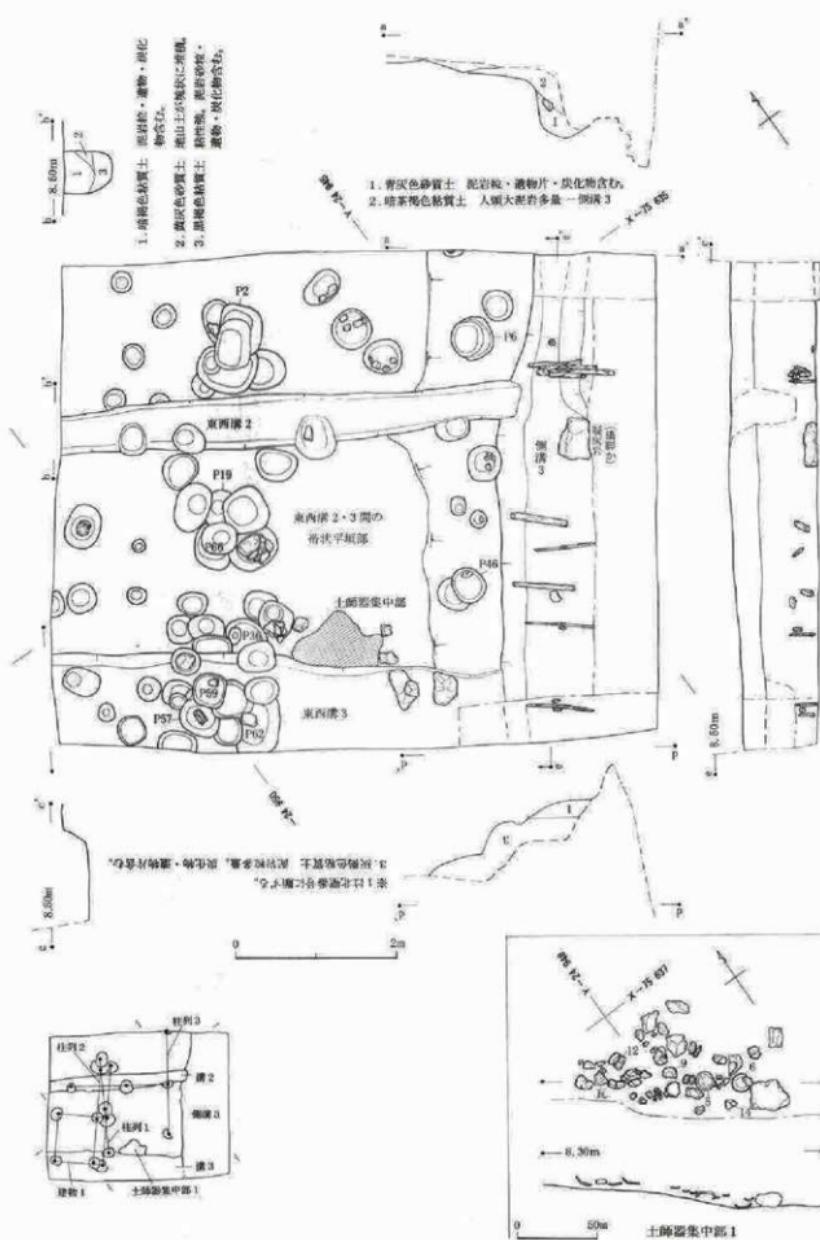


図6 遺構全図(2) —側溝3と関連遺構

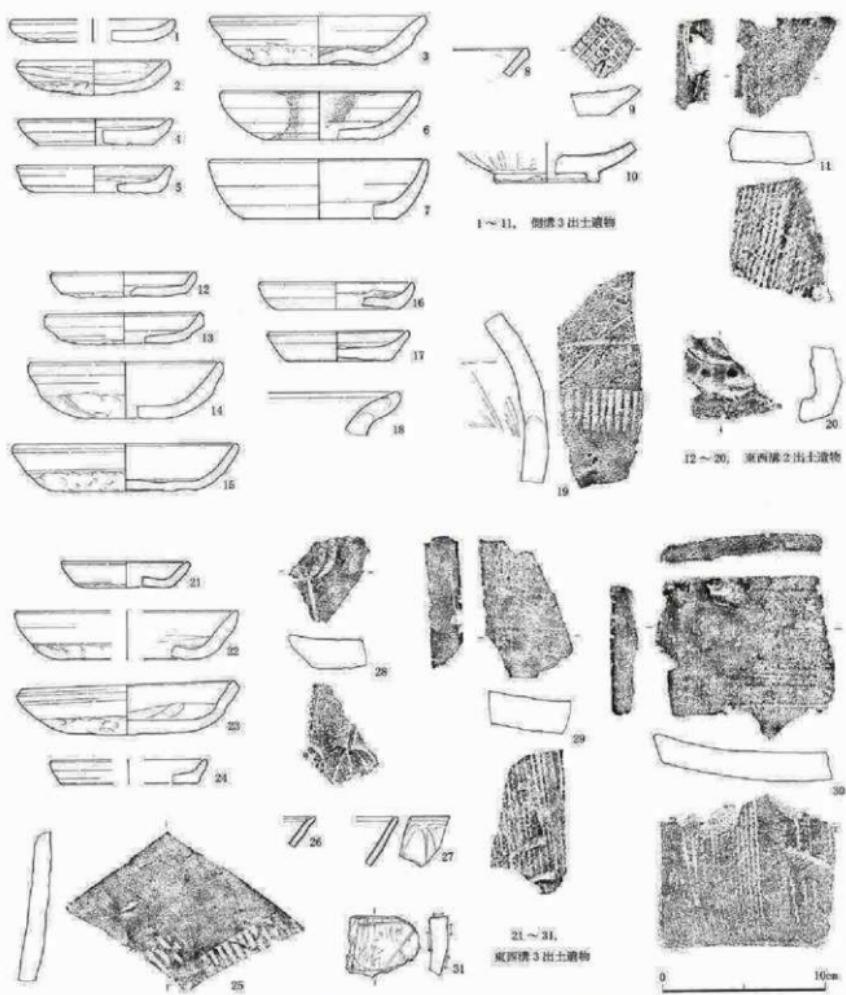


図7 側溝3・東西溝2・東西溝3出土遺物

大路のそれと共通している。溝底のやや北寄りに1辺50cmにおよぶ凝灰岩があり、付近にはこれ以前から橋脚の存在が指摘できることから(側溝6・7期、図12・18)、この石も橋脚の礎石である可能性を視野に入れておきたい。

出土遺物には土師器皿工種が多く、またR種でも器高底く底径・口径比の小さい13世紀第2四

中期～中葉のものも同様に多い上、常滑山茶碗（8）などもみられる。複弁の青磁鎌連弁文碗（10）などが含まれているとはいって、全体的には13世紀第2四半期～中葉の年代を示している。

東西溝2（図6・7）

位置：X-75 634～-75 640 Y-24 944～-24 950 規模：南北幅68cm以上×深さ62cm以上（最下面標高約7.34m） 断面形：箱形 流下方向：西→東 主軸方位：N-58°-W 充填土：図に記載 重複関係：柱穴列3を切り、側溝3に切られる。 出土遺物（図7）：土師器皿T種（12～15）・土師器皿R種（16・17）・渥美甕（18・19）・軒丸瓦（20） 特記事項：側溝3にはほぼ直交する小溝。上部を失っているが、大路側溝へ排水するためのものと推測される。次述の東西溝3とは3m弱の間隔で平行する。

出土遺物には土師器皿T種が多く、渥美甕なども含まれているところから、本址の年代を13世紀前半としたい。

東西溝3（図6・7）

位置：X-75 634～-75 640 Y-24 946～-24 952 規模：南北幅128cm以上×深さ53cm以上（最下面標高約7.54m） 断面形：（逆台形） 流下方向：西→東 主軸方位：（N-53°-W） 充填土：暗褐色砂質土 重複関係：側溝3・埴物1・柱穴列1・2に切られる。 出土遺物（図7）：土師器皿T種（21～23）・土師器皿R種（24）・渥美甕（25）・白磁口はげ皿（26）・竜泉窯青磁鎌連弁文碗（27）・平瓦（28～29）・滑石鍋軸用品（31） 特記事項：溝2とは約3mを隔てて平行しており、同じく側溝3とは直交している。溝2との間に道があったのか、あるいは、位置的にみて遺跡南辺を画する道の北側側溝である可能性もある。前者であればやや狭い印象を受け、側溝としてもいずれも近在の同一遺跡内地点5で見つかった東西溝に比べ規模が小さすぎる。後者とすれば、溝2との間に土壁ないしは築地のような施設の存在を考慮することもできる。

本址の年代は、土師器がT種主体で13世紀前半とみたいところだが、13世紀中～後半の竜泉窯青磁鎌連弁文碗・白磁口はげ皿も含む点を勘案して、13世紀第2四半期～第3四半期としたい。

東西溝2・3間の帯状平坦部（図6）

位置：X-75 633～-75 639 Y-24 944～-24 956 規模：幅（南北）318cm×長さ560cm 断面形：ほぼ平坦 特記事項：2本の東西溝に挟まれた平坦な部分。延長上の小町大路側溝3底面に平たい凝灰岩があり、これを橋脚の礎石と考えれば本址を道路とすることができる。この位置には断続的とはいって前代まで橋が確認されているので、この石をそう考へるのは無理ではない。

年代は、次述の土師器集中部1が同一遺構と考えられるので、その遺物から13世紀前半としたい。

土師器集中部1（図6・8）

位置：X-75 637～-75 639 Y-24 947～-24 949 規模：東西約150cm×南北約80cm 検出高：8.2～7.9m 重複関係：東西方向の溝3に切られる 出土遺物（図8）：土師器皿T種（1～7）・土師器皿R種（8～14）・渥美甕（15）・平瓦（16） 特記事項：側溝3西岸の粗い泥岩地行上に土師器を中心とした遺物片が集中的に出土した。大路側溝に向かって緩やかに傾斜し、遺物もその斜面上に載る。位置的には上記東西溝2と3の間の帯状平坦部中におさまる。あるいは道路かとも推測される帶状平坦部にかかる祭祀かもしれない。

年代は広く13世紀前半とおきたい。

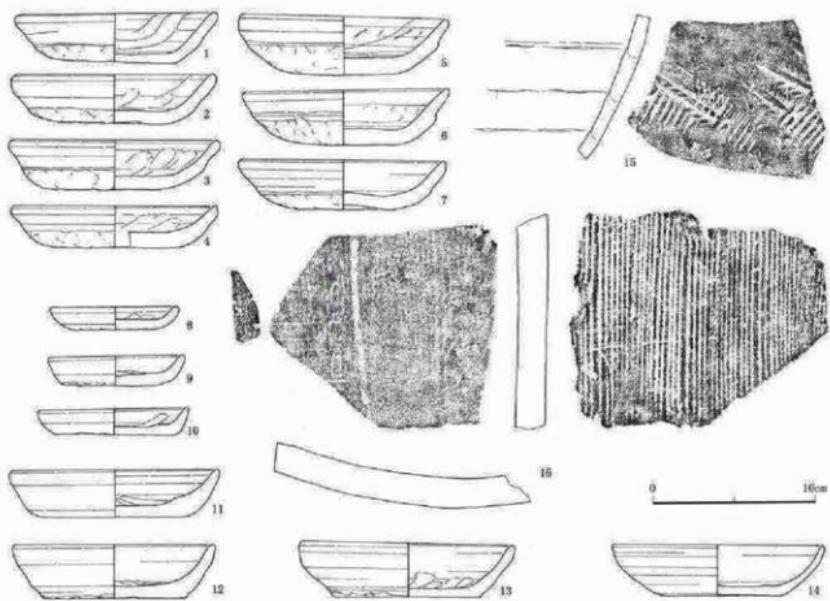


図8 土師器集中部1出土遺物

建物1(図9)

位 置 : X-75 633 ~ -75 638 Y-24 946 ~ -24 952 規 模 : 東西1間(柱間距離 2.02m)
×南北2間(柱間距離 2.01m)・柱穴底面高 7.73m(平均)※各柱穴規模は図に記載 南北軸方位 : N-40° -E 重複関係 : 溝4を切り、柱穴列1・2に切られる 出土遺物 : 土師器皿R種(1・2)

特記事項 : 側溝3と並列して存在していた施設で、柱穴は比較的深く残っている。P.2は充填土内に土師器が2枚、口を合わせるように埋納されていた。

柱穴列1(図9)

位 置 : X-75 633 ~ -75 637 Y-24 946 ~ -24 950 規 模 : 南北2間(柱間距離約 1.95m)
柱穴底面高 7.69m(平均)※各柱穴規模は図に記載 南北軸方位 : N-30.5° -E 重複関係 : 建物1・柱穴列2・溝4を切る 出土遺物 : 図化可能遺物なし 特記事項 : 側溝3から約3m西に位置する。軸線が溝と若干異なるが、形状の共通した柱穴が並んでいるので、柱穴列として抽出しておく。建物や塀などが考えられるが、いずれにせよ南東角の一部を捉えたものであろう。

柱穴列2(図9)

位 置 : X-75 633 ~ -77 637 Y-24 946 ~ -24 951 規 模 : 南北2間(柱間距離 2.02m)
柱穴底面高 7.63m(平均)※各柱穴規模は図に記載 南北軸方位 : N-38.5° -E 重複関係 : 建物1・溝4を切り、柱穴列1に切られる 出土遺物 : 図化可能遺物なし 特記事項 : 軸線は側溝3や建物1と並ぶ。位置的には柱穴列1と重なっていることから、1と同種の遺構としてよかろう。

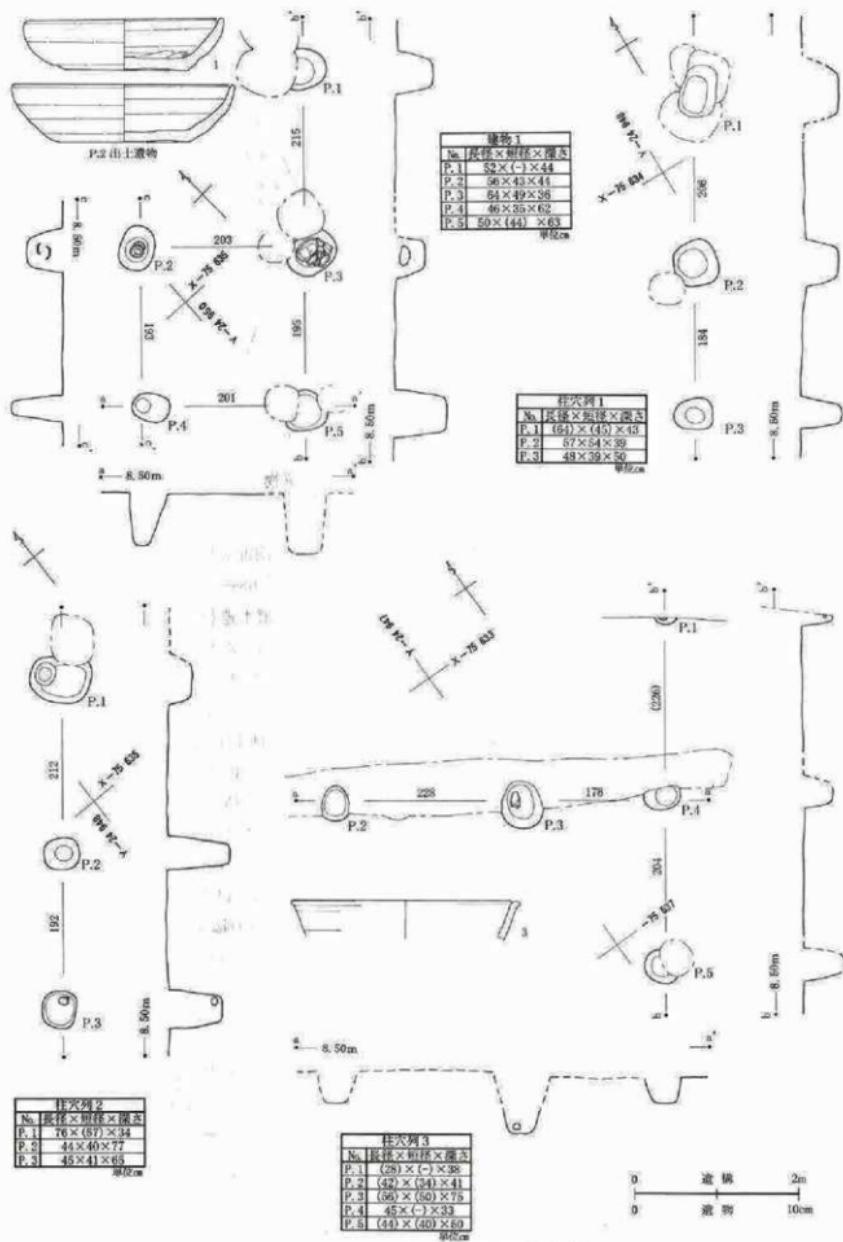


图 9 建物 1・柱穴列 1-3, 同出土物

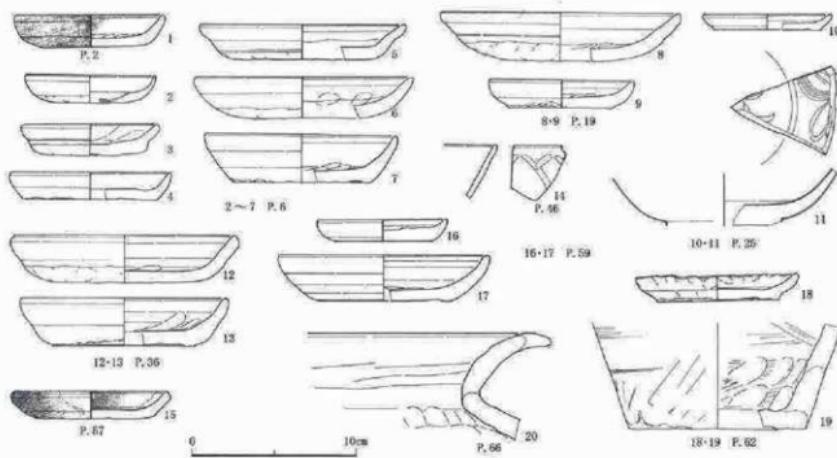


図 10 遺構全図 (2) 内落込み出土遺物

柱穴列 3 (図 9)

位 置 : X-75 633 ~ -77 638 Y-24 944 ~ -24 949 規 模 : 南北 2 間 (柱間距離約 2.15m)
 柱穴底面高 7.77m × 東西 2 間 (柱間距離約 2.03m) 柱穴底面高 7.68m (平均) ※各柱穴規模は図に記載
 南北軸方位 : N-35° - E 重複関係 : 溝 2 に切られる 出土遺物 : 図化可能遺物なし
 特記事項 : 側溝 3 と直交する溝 2 を軸と同じくする T 字状の柱穴列。形状や柱間距離など、ほかの柱穴列とは異なる。南北軸は側溝 3 まで約 40 cm しかないが、性格は不明。

柱穴等その他落込み (図 9・10)

出土遺物 (図 10) : [P. 2] 土師器皿 T 種 (1) [P. 6] 白色系土師器皿 T 種 (2)・土師器皿 T 種 (3・5・6)・
 土師器皿 R 種 (4・7) [P. 19] 土師器皿 T 種 (8)・土師器皿 R 種 (9) [P. 25] 土師器皿 T 種 (10)・
 竜泉窯青磁画文碗 (11) [P. 36] 土師器皿 T 種 (12)・土師器皿 R 種 (13) [P. 46] 竜泉窯青
 磁連弁文碗 (14) [P. 57] 土師器皿 T 種 (15) [P. 59] 土師器皿 R 種 (16・17) [P. 62] 土師器
 皿 R 種 (18)・常滑窯 (19) 特記事項 : 大雑把に年代だけ指摘しておきたい。13世紀中葉まで下
 る可能性がある P. 59 出土の R 種土師器皿 2 点を除き、提示した遺物のほとんどは 13世紀前半代
 までに取まる。P. 46 出土の 14 も、竜泉窯青磁連弁文碗ではあるものの縞を持たない幅広連弁で、
 これも 13世紀第2四半期の前半までにはおそらく終焉を迎えているものである。この一群の出土
 遺物年代観は 13世紀前半としてよい。

3. 小町大路側溝 4・5 と関連遺構

側溝 1・2・3 を掘り上げると、その下の調査区東壁近くに 2 条の溝が現れる。東壁寄りの新しい方を側溝 4、その 4 に切られて西岸しか残っていない方を 5 とした。ただし 2 条は切り合ってはいるが、接する領域が非常に小さく、新旧の判断が不安定であることを否定しない。ここでは断面に

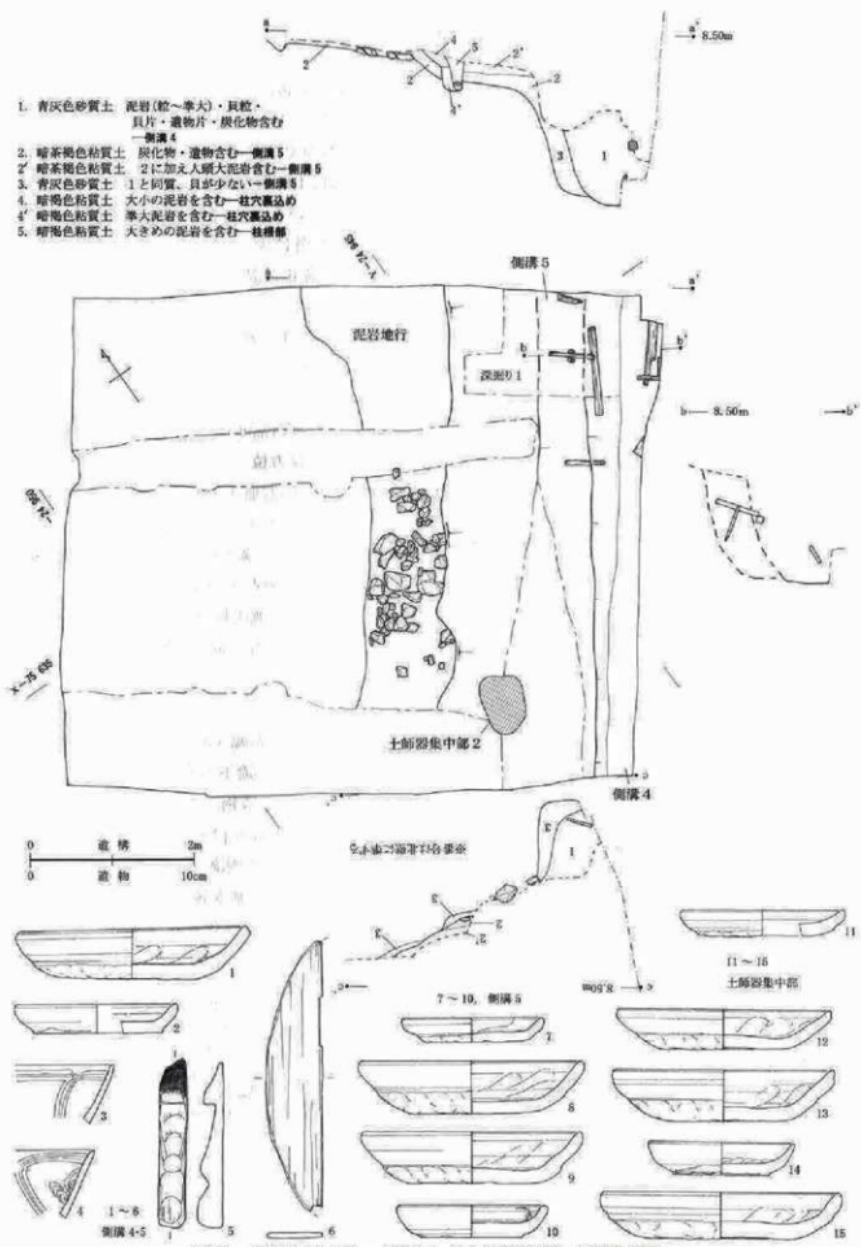


図 11 遺構全図 (3) —側溝 4・5と関連遺構、同出土遺物

みえる全体的な堆積土の流れで判断した。この点は今後本地点前後の側溝資料の増加によって、正確な判断を求めていきたい。

西岸には1mあまりの幅で、拳大～半人頭大泥岩の粗い集積が認められる。この付近の上層には側溝3に伴うとみられる泥岩の集積もあったが、本址は側溝3の下に潜っていくので、時期的に別遺構と判断した。ただしこのことは遺構の継続性を否定するものではない。また側溝以外の遺構(建物や柱穴列など)との関連性は不明である。側溝5の落ち際には、土師器皿の集中した場所があり、「土師器集中部2」とした。これは後述する側溝6埋土の上に載っている。

なお側溝5は側溝3・4に大半が削り取られ、残存部分が意想外に少ない。当初そのことについての認識が不足していたため、掘削作業中に出土遺物が下層の側溝6と混じってしまう事態が生じた。それらの遺物については後述する。

検出高:7.9～8.4m 構成土:明茶褐色粘質土(基盤層)・泥岩地行土 検出遺構:小町大路側溝2条・土師器集中部1

側溝4(図11)

位 置:X-75 634～-75 640 Y-24 942～-24 947 規 模:東西幅96cm以上×深さ195cm以上(最下面標高約6.20m) 断面形:(逆台形) 流下方向:北→南 主軸方位:(N-33.5°-E) 充填土:図に記載 重複関係:側溝5を切る 出土遺物:(側溝5と一緒に)土師器皿T種(1)・土師器皿R種(2)・童泉窯青磁画花文碗(3・4)・木製紡錘機部材(5)・円盤状木製品(6) 特記事項:上部を失つてもなお平坦部から2m近い深さがあり、若宮大路側溝に匹敵する。溝の西半部しかとらえられなかつたが、底面標高から推測して雪ノ下一丁目400番1地点(図1地点4)の「側溝3」に相当する可能性が高い(底面標高は約6.65m)。輪線を延長させて計測すると側溝幅は約3mになる。

遺構年代は、2点の童泉窯青磁画花文碗の存在、土師器皿T種の存在と同R種の形状から、13世紀前半と考える。

側溝5(図11)

位 置:X-75 634～-75 640 Y-24 943～-24 947 規 模:東西幅50cm以上×深さ(平坦面から)95cm以上(最下面標高約7.50m) 断面形:(現存部は直形) 流下方向:北→南 主軸方位:(N-34°-E) 充填土:図に記載 重複関係:側溝4に切られる 出土遺物:土師器皿T種(7～9)・土師器皿R種(10) 側溝5・6出土遺物(図13):先述のように側溝5は側溝3・4に削られて残存部分が少なく、当初その点についての認識不足から出土遺物が下層の側溝6と混じってしまう事態が生じた。ここでは合わせて提示する 土師器皿T種(1～5)・土師器皿R種(6～9)・渥美甕(10)・平瓦(11)・不明木製品(12)・円盤状木製品(13・14)・棒状木製品(15)・ヘラ状木製品(16) 特記事項:先の側溝3と同じ、裏込め部分にある控え材とそれを固定する杭を持つ。側溝4の護岸施設か。

年代は側溝4と同じく、13世紀前半とする。

土師器集中部2(図11)

位 置:X-75 638～-75 639 Y-24 946～-24 948 規 模:東西約54cm×南北約72cm 検出高7.5～7.7m 出土遺物:土師器皿T種(11～14)・土師器皿R種(15) 特記事項:粗い泥岩面が西岸から側溝に向かって緩やかに下る、その傾斜地に土師器小片が集中的に出土した。先の集中

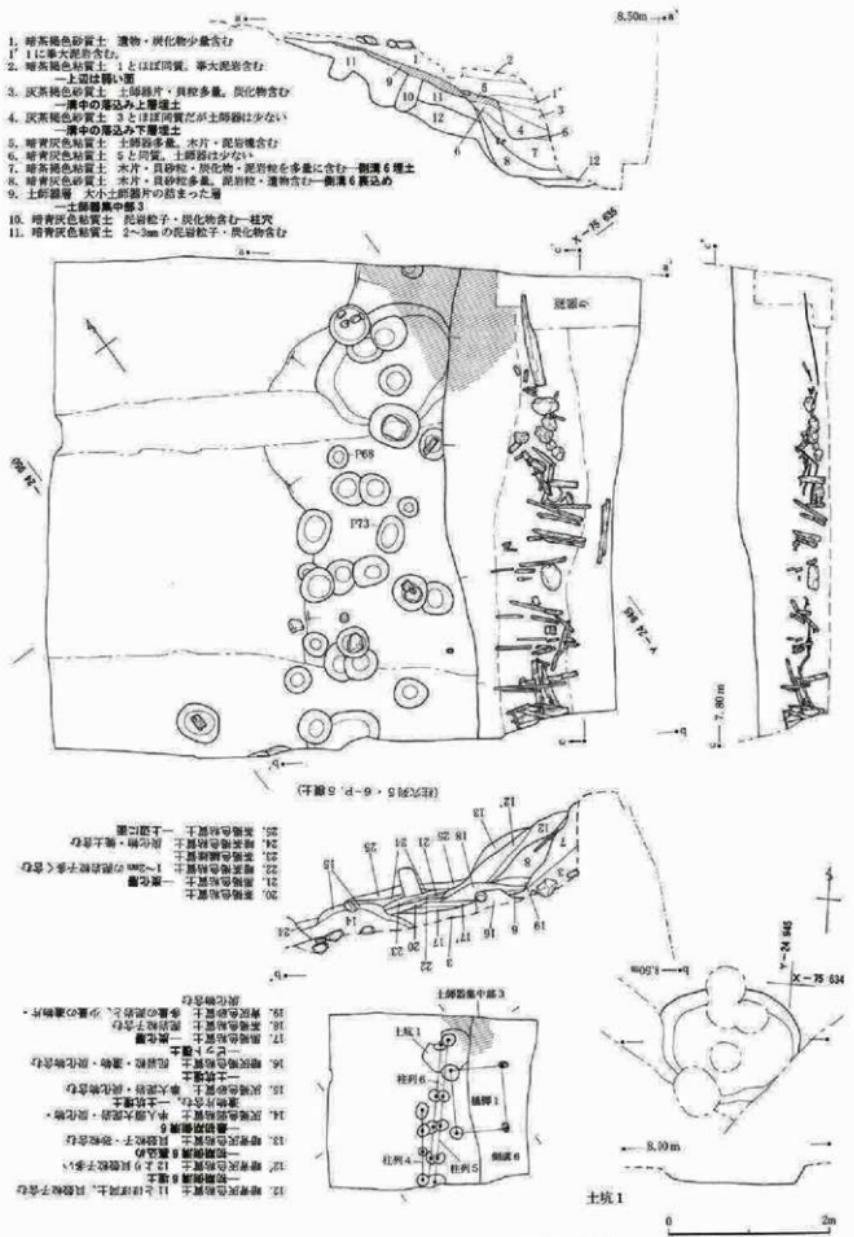


図 12 遺構全図 (4) 一側溝 6 と関連の遺構

部1とは検出高が異なるが、同じ泥岩面直上で検出されているので、連続性が認められる。ただし、側溝6・7の埋土上にあるので、確實にそれより新しい。

年代は土師器皿T種の形状から判断して、13世紀前半に属するとしてよい。

4. 小町大路側溝6と関連遺構(図12)

側溝4・5の西岸部から東へと傾斜している泥岩地行を取り除くと、土師器を大量に含んだ土が現れる。土師器は特に調査区北側に集中(土師器集中部3)し、南側は炭が多量に含まれていた。それらの土を取り除くと、人頭大～半人頭大泥岩を多く含む層となる。この層は、上面にいくつかの柱穴様の穴が掘り込まれ、東に向かって傾斜している。そして2mほどで急な落ちとなり、小町大路側溝本体となる。これを側溝6とした。ここでは側溝6と、泥岩含有層からの遺構をあわせて提示する。すでに遺構全図2(図6)に載せた調査区西側の遺構群にも本期と同時期のものが含まれている可能性は否定できないが、西側は削平によりすべて基盤層での検出になるため、時期を特定することができなかった。またこの層では、柱穴と溝中礎石の組み合わせから橋脚とみられる

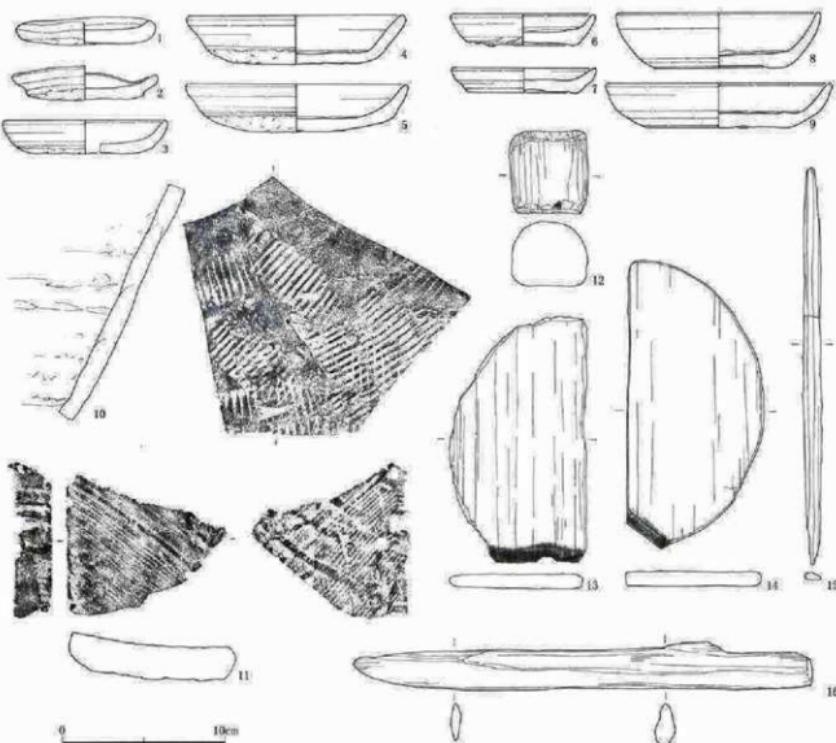


図13 側溝5・6出土遺物

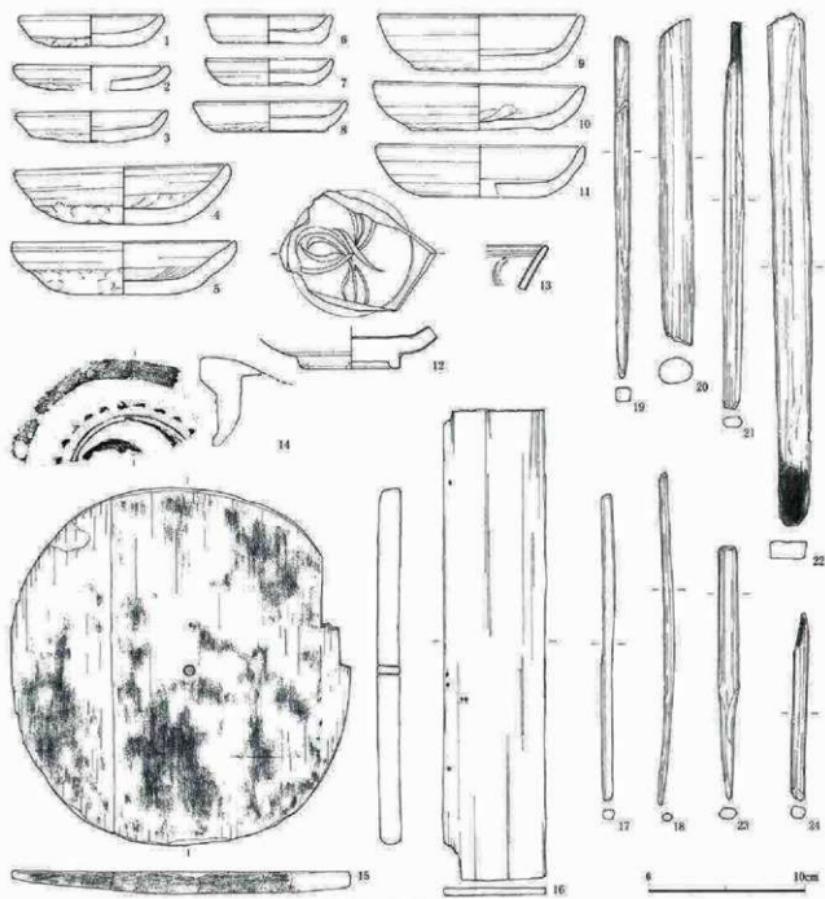


図 14 側溝 6 出土遺物

造構も検出されている。

検出高: 7.6 ~ 8.4m 構成土: 明茶褐色粘質土(地山)・泥岩地行土・暗褐色砂質土 検出遺構: 小町大路側溝 1 条、土坑 1 基・小穴 29 口(うち櫛脚 1、柱穴列 4 ~ 6 の柱穴を含む)

側溝 6(図 12 ~ 14)

位 置: X-75 634 ~ -75 640 Y-24 943 ~ -24 948 規 模: 東西幅 180 cm 以上 × 深さ(平坦面から)208cm 以上(推定最下面標高約 6.45m) 断面形:(箱形?) 流下方向: 北→南 主軸方位: (N-30° -E) 充填土: 図に記載 重複関係: 土坑 1 を切る 出土遺物(図 14): 土師器皿 T

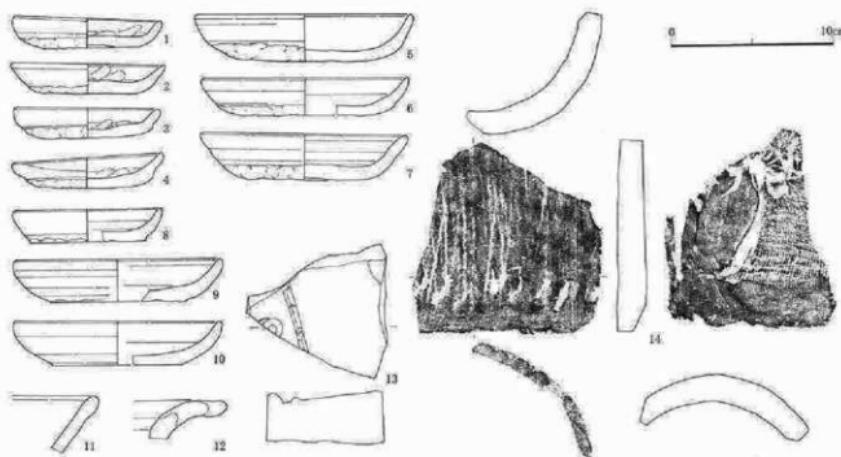


図 15 側溝 6 西岸上出土遺物

種 (1 ~ 5)・土師器皿 R 種 (6 ~ 11)・竜泉窯青磁画花文碗 (11・12)・軒丸瓦 (14)・円盤状木製品 (15)・折敷 (16)・棒状木製品 (19 ~ 24) 側溝 5・6 出土遺物 (図 13)：当初の遺物取り上げの際、側溝 5 についての認識不足から混乱が生じた。この遺物については側溝 5 の項参照。特記事項：安全性の確保から掘削途中で南北両端および東側の堅断面を階段状に縮小したため、土層断面図に断絶が生じている。本址は調査区西側の基盤層上の平坦面から約 2 m 強、西岸際から約 1.4 m の深さがあり、これは若宮大路側溝に匹敵する。図 12 土層 No.8 の下面に溝底が形成され、さらに下に落ちていくことが確認できたが、その先は階段状に狭めた東の調査区に出て、全体の幅や形状は確認できない。別の側溝と考えるべきかもしれない。側溝 6 は 5 に比べ全体的に 0.7 m ほど西に移動している。溝中には櫛脚の基礎とみられる礎石や、構木枠部材の束や横板などが多数残る。出土遺物からみた本址の年代は、土師器皿 T 種の多さとともに、同 R 種における器高の低さと底径：口径比の小ささ、同じく全体にがっしりとして薄手深皿器形の前段階のものである点、さらには竜泉窯の青磁画花文碗 2 点の存在など、全体的に 13 世紀第 2 四半期の様相を呈している。

側溝 6 西岸出土遺物 (図 15)

出土遺物：土師器皿 T 種 (1 ~ 7)・土師器皿 R 種 (8 ~ 10)・常滑片口鉢 I 類 (11)・渥美甕 (12)・鬼瓦 (13)・丸瓦 (14) 特記事項：西岸にかなりの遺物が廃棄されているのは、ここがおそらく地表面に出ていたからと考える。

年代は、瓦 2 点がいずれも永福寺 I 期であること、土師器皿 T 種の多さ、さらに同 R 種も器高が低く口径：底径比の小ささことなど、全体に 13 世紀前半の様相をもっている。やはり側溝 6 と同時期の 13 世紀第 2 四半期とみるのが妥当であろう。

土師器集中部 3 (図 16)

位 置：X-75 633 ~ -75 636 Y-24 944 ~ -24 946 規 模：東西約 150 cm × 南北約 150 cm 檢

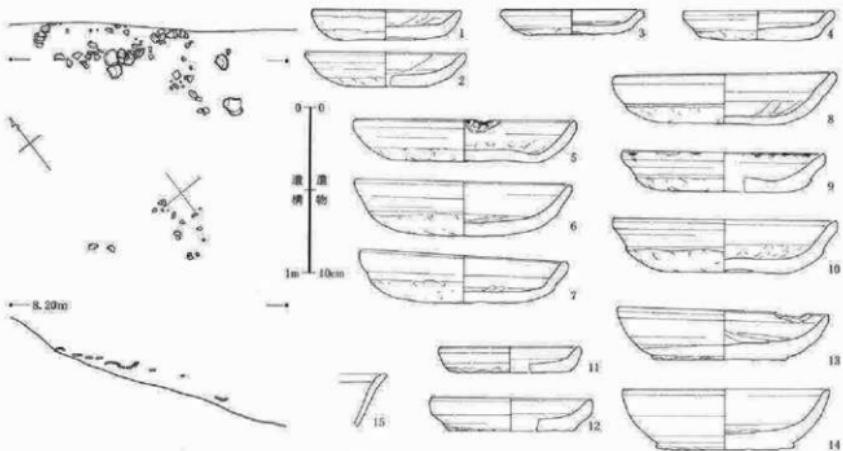


図 16 土師器集中部 3. 同出土遺物

出高 7.6 ~ 7.9m. 出土遺物：土師器皿 T 種 (1 ~ 10)・土師器皿 R 種 (11 ~ 14)・竜泉窯青磁画面文碗 (15) 特記事項：側溝 6 西岸の緩やかな傾斜から側溝 6 の上層にかけて、かなり広範囲に土師器が散在する。東側は小さめの掘り直し (図 12 北側土層図土層 No.3・4) に切られており、側溝 6 の埋没期もしくは改修時に形成されたものだろう。開渠当時のものとは考えにくい。

出土遺物の様相は側溝 6 のそれと共通しており、年代的にも同時期とみてよい。

橋脚 1 (図 17)

位 置 : X-75 635 ~ -75 639 Y-24 944 ~ -24 948 規 模 : 東西 1 間 (柱間距離 1.84m)
 × 南北 1 間 (柱間距離 2.08m)・柱穴底面高 7.38m・礎石高 6.7m (平均)※各柱穴規模は図に記載
 南北軸方位 : N-30° -E 重複関係 : 土坑 1 を切る 出土遺物 : 関連遺物と特定できるものなし 特記事項 : 側溝 6 西岸の緩傾斜面上にある柱穴と溝内にある礎石の軸線が一致することから、これらを橋脚の基礎と認識した。この付近には前代の側溝 7 の段階 (次述) すでに橋とおぼしい礎石や礎板の列があるので、本址を橋脚とすることに無理はない。側溝西岸の緩斜面に 1 脚、溝底面に 1 脚を据えた構造となる。柱穴内礎石と溝内礎石との間隔は芯々で 1.84m。東側は調査区内では見えないが、溝底面の礎石については、これのみとすれば溝の中心に置かれていた可能性が高いとみたい。仮に東にもう 1 脚あったと想定すれば、溝中の礎石から 1m の地点で側溝上端幅は若宮大路と同規模のほぼ 3m に復元され、それ以上の幅は考えにくい。溝内の礎石の海拔高は 6.7m で、護岸材の一部も付近に多く残っている。

柱穴列 4 (図 17)

位 置 : X-75 635 ~ -77 638 Y-24 947 ~ -24 950 規 模 : 南北 3 間 (柱間距離 0.81m)
 柱穴底面高 7.55m (平均)※各柱穴規模は図に記載 南北軸方位 : N-35° -E 重複関係 : 柱穴列 5・6 を切る。 出土遺物 : 青白磁小皿 (1) 特記事項 : 側溝 6 に並列する。橋脚関連遺構か？柱穴列 5・

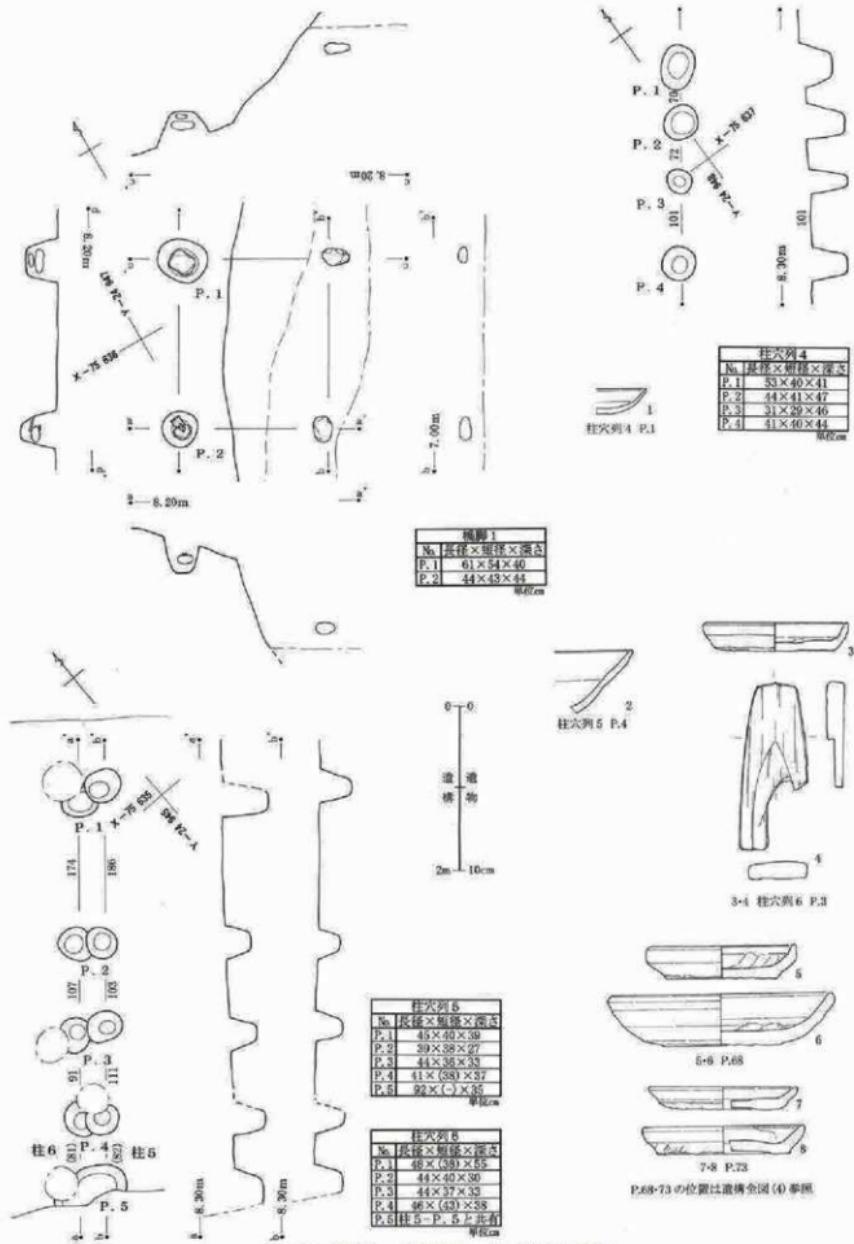


図 17 橋脚 1・柱穴列 4～6、同出土遺物

6と同類であろう。

柱穴列5(図17)

位置:X-75 634～-77 639 Y-24 945～-24 950 規模:南北4間(柱間距離1.20m)柱穴底面高7.52m(平均)※各柱穴規模は図に記載 南北軸方位:N-40°-E 重複関係:土坑1・柱穴列6を切る 出土遺物:東遠系山茶碗(2) 特記事項:橋脚関連遺構か?柱列4・6と同類遺構であろう。

柱穴列6(図17)

位置:X-75 634～-77 639 Y-24 945～-24 950 規模:南北4間(柱間距離1.15m)柱穴底面高7.56m(平均)※各柱穴規模は図に記載 南北軸方位:N-40°-E 重複関係:土坑1を切り、柱穴列5に切られる 出土遺物:土師器皿T種(3)・舟形木製品(4) 特記事項:柱穴列5の作り直しか、補強のためのものか、規模もほぼ共通している。

土坑1(図12)

位置:X-75 634～-75 636 Y-25 944～-24 947 規模:東西172cm以上×南北142cm×深さ約26cm(最下高7.50m) 平面形:(梢円形) 断面形:皿形 主軸方位:(N-85.5°-E) 重複関係:側溝7を切り、側溝6・橋脚1・柱穴列5・6に切られる。土師器集中部3が上に載る 出土遺物:圓化しうるものなし 特記事項:側溝6西岸の緩斜面に検出された浅い穴。この位置の下層には側溝7の溝枠と礎板があり(次述)、それとの関連も推測されるが、詳細は不明。

P.68出土遺物(図17)

出土遺物:土師器皿R種(5・6) 特記事項:位置的には橋脚関連遺構の可能性がある。小型の5は体部中位が垂れ気味に外に膨らむ、鎌倉時代初期に多い形状を備える。大型の6は底径よりもかなり内側にロクロ糸切りの範囲が取まつておらず、これも鎌倉時代前期に多い特徴をもつ。

年代については、13世紀前半以前に帰属すると考えてよい。

P.73出土遺物(図17)

出土遺物:土師器皿T種(7)・土師器皿R種(8) 特記事項:これも位置からいって橋脚関連の柱穴であろう。T種・R種とも小型。8は口径:底径比がきわめて小さく、鎌倉時代初期～前期に多い特徴を備える。

年代は13世紀前半までとみたい。

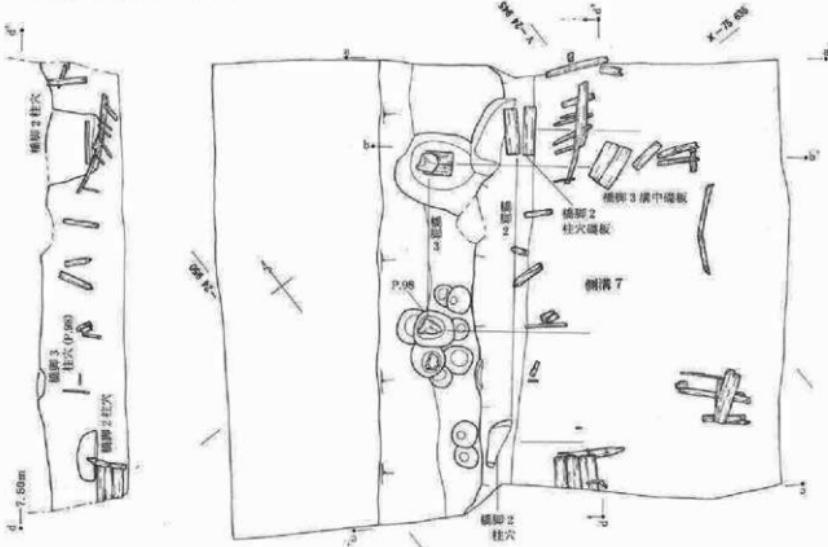
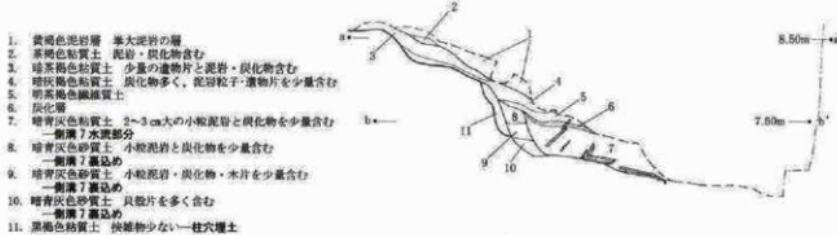
5. 小町大路側溝7と関連遺構(図18)

側溝6西岸の泥岩層を掘り下げると、古い溝があらわれ、これを側溝7とした。位置は側溝6より西へ2m近くずれ、調査区の半分ほどにもおよぶ

検出高:約8.4m 構成土:明茶褐色粘質土(基盤層) 検出遺構:小町大路側溝1条・小穴13口

側溝7(図18～20)

位置:X-75 632～-75 640 Y-24 942～-24 951 規模:東西幅245cm以上(底面幅約210cm以上)×深さ(平坦面から)185cm以上(最下面標高約6.20m) 断面形:(箱形ないしは浅い逆台形) 流下方向:北→南 主軸方位:N-39°-E 充填土:図に記載 重複関係:側溝8・9を切る 出土遺物(図19・20):土師器皿T種(1～4)・土師器皿R種(5～9)・南部系山茶碗(10)・



11. 黑褐色粘質土 快適物少ない柱穴埋土
12. 暗褐色粘質土 多量の炭化物を含む
13. 暗褐色粘質土 多量の遺物を含む

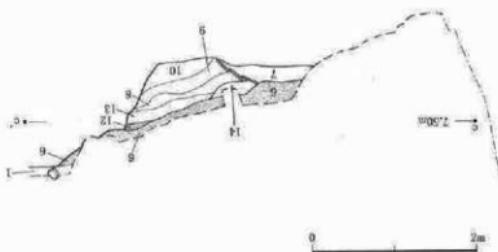


図18 造構全図(5) —側溝7と関連造構

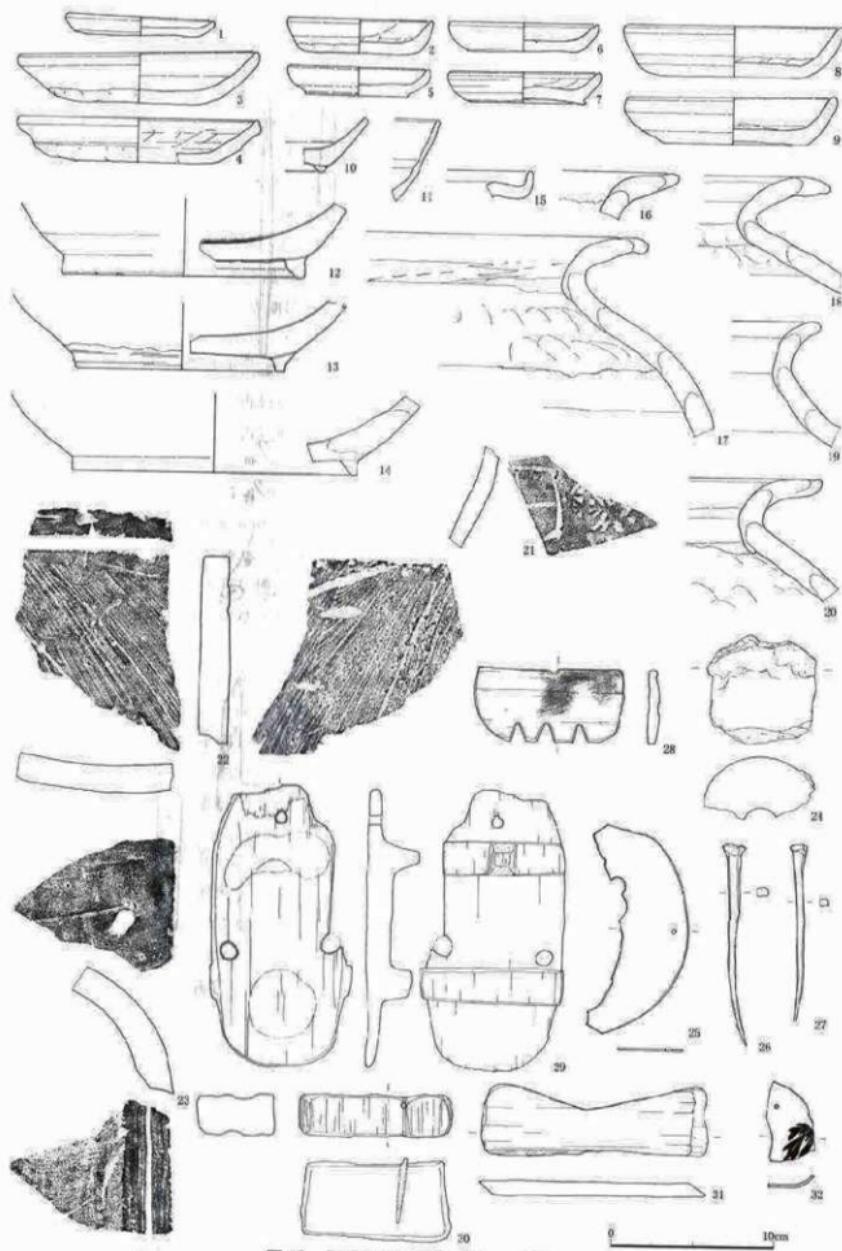


图 19 倒满 7 出土遗物 (1) —上层

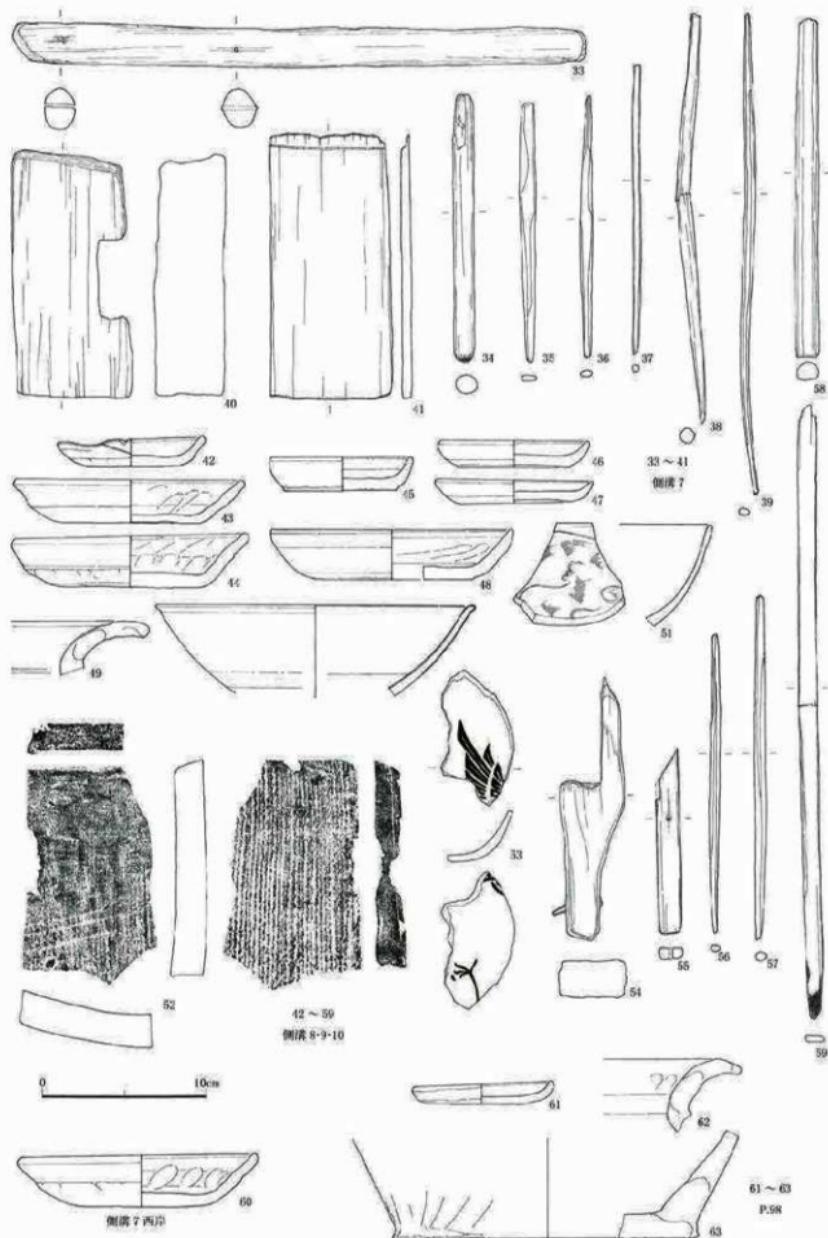


图 20 側溝 7 出土遺物 (2), 側溝 8・9・10・側溝 7 西岸・P.98 出土遺物

東遼系山茶碗(11)・常滑片口鉢I類(12～13)・常滑甕(15)・渥美甕(16～21)・平瓦(22)・丸瓦(23)・輪羽口(24) 側溝7西岸出土遺物(図20):(側溝7の西岸にへばりつくように墨褐色粘質土があり、ここから数点の遺物が出土した) 土師器皿T種(60) 特記事項: 側溝7は側溝6底面から1mほどの深さを持つ。逆台形の断面をもち、側溝6より約1.7m、側溝1からは約3.6m西に位置する。この時点では小町大路側溝が全体的に西に移行したか、あるいは拡幅されたのであろう。底面も上層側溝より幅広で深く、全体に上層のものに比べひと回り大きい。調査区西半部の基盤層上面と溝底面との比高差は約1.7m、側溝1底面より約0.9m深く掘り込まれている。側溝7は、調査区の限りで底面の幅210cmを超え、全体では推定で3mほどあった可能性もある。次述の側溝8・9・10にはこれほどの大きさではなく、この7の時代になって、小町大路は最も立派な側溝を備えることとなった。またこの時期には橋脚も備わっている。南側隣地には現在、小町大路から若宮大路に抜ける東西道が走行しているので、この橋はその初期のものかもしれない。ただしこれに連なる道そのものは、削平によるためか調査区の限りで発見されなかった。

年代は13世紀第1四半期から第2四半期としたい。側溝7西岸の土は下層の側溝10上層部分の可能性もあるが、さらに古い時期のものである可能性もある。

橋脚2(図18)

位 置: X-75 634～-75 639 Y-24 945～-24 949 規 模: 南北1間(柱間距離3.4m)
× 東西不明・柱穴底面高6.6m・礎板高6.7m(平均) 南北軸方位:N-29°-E 特記事項: 柱間距離3.4mと非常に大きい。先述のように、調査地点のすぐ南側を走行している小町大路から若宮大路に抜ける東西道(「辻子」か?)の当時のものかもしれない。ただし道そのものは、削平によるためか調査区内で発見されなかった。

橋脚3(図18)

位 置: X-75 634～-75 637 Y-24 945～-24 948 規 模: 南北1間(柱間距離2m) × 東西不明・柱穴底面高7.34m・礎板高7.43m(平均) 南北軸方位:N-28.5°-E P.98出土遺物(図20): 土師器皿T種(61)・渥美甕(62・63) 特記事項: 幅2mと、規模は小橋脚2に比べ小さい。2mの柱間は鎌倉時代中期以降に一般的になるが、P.28出土遺物からみた年代は鎌倉時代初期の様相を示す。ここでも連接したはずの道は明確にならなかった。

6. 小町大路側溝8・9・10と関連遺構(図20～21)

小町大路側溝7の完掘後、下にさらに古い側溝があることが確認された。しかしその時点では側溝部分の掘削深度は2mにおよんでいたため、安全性確保の観点から調査区南北壁を約1m迫出して掘削することとした。この下層の側溝は当初1条の認識で掘り下げたが、のちの断面観察から三時期に分けられることが判明したため、それぞれ大路側溝8・9・10の番号を付した。新旧の関係は、側溝10が最も古く、次いで8、最も新しいのが9となる。下層側溝10の堆積土の中へ上層には、8と9の境をなす断面3角の掘り残しが観察された。北壁際では側溝10の底面まで掘削し、基盤層を確認した。一方、南壁際は崩落の危険性があり、底面までの掘削は断念せざるを得なかつた。ここでは遺構番号に沿う形で記述するが、出土遺物に関しては3条それぞれに帰属させることが困難であるため、図20においては包括的に提示した。

側溝8(図20・21)

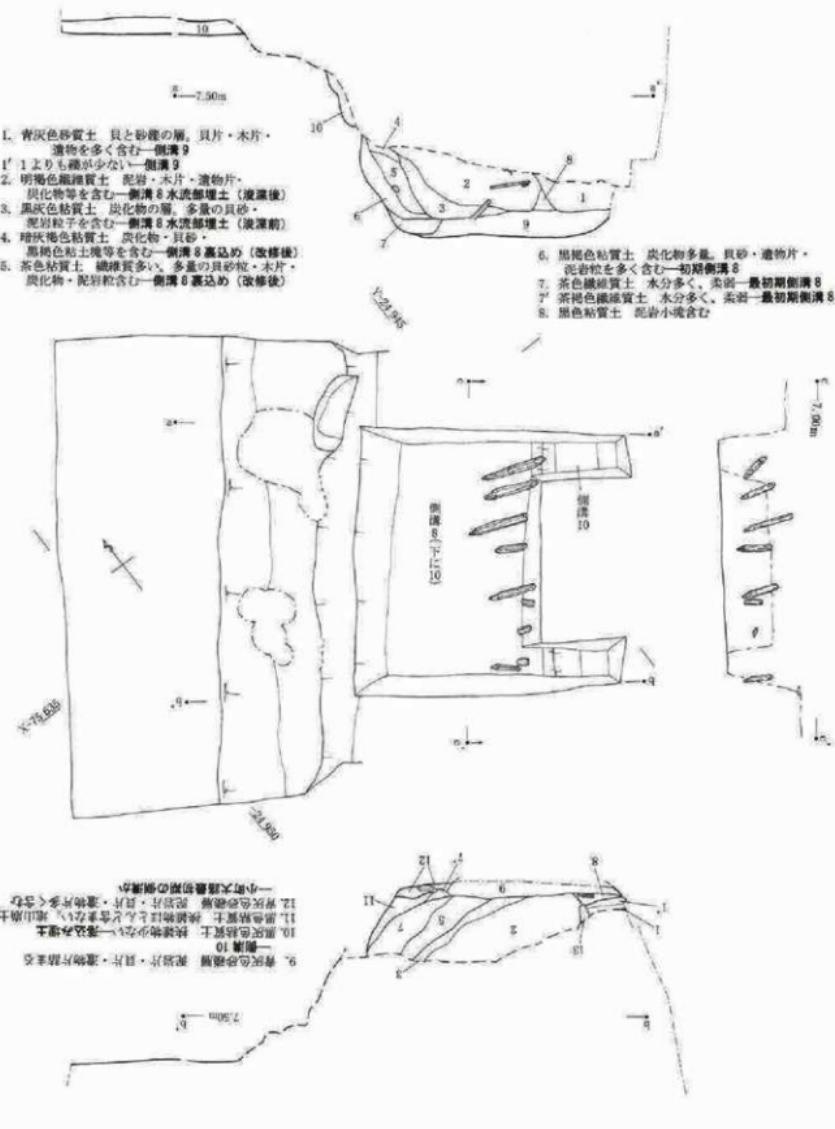


図 21 造構全図 (6) 一側溝 8・9・10 と関連造構

位 置 : X-75 632 ~ -75 640 Y-24 942 ~ -24 951 規 模 : 東西幅 220 cm以上(底面幅 175 cm以上) × 深さ(平坦面から) 225cm 以上(最下標高約 5.95m) 断面形: 逆台形 流下方向: 北→南 主軸方位: N-38° -E 充填土: 図に記載 重複関係: 側溝 9 に切られ、同 10 を切る 出土遺物(図 20): 後述 特記事項: この下にさらに初期の大路側溝が見えているので(「側溝 10」)、初期から 2 期目の側溝にあたる。側溝 10 に木材は検出されておらず、この側溝 8 の時期に小町大路側溝ははじめて角材を使った護岸を備えたことになる。調査区東壁際で辛うじて確認できた東岸の立ち上がりからすると、底面幅は約 2.3m となる。溝内には護岸の部材が多数出土した。西岸沿いの部材の検出高は約 6.2 ~ 7.2m、東側は約 6.0 ~ 6.7m 内に集中している。2 ないし 3 時期の改修あるいは浚渫が観察される。

年代は、大路側溝 9・10 と遺物が弁別できていないため決めがたいが、側溝 7 との相対関係から、12世紀末~13世紀第1四半期頃としたい。

側溝 9(図 20・21)

位 置 : X-75 635 ~ -75 639 Y-24 943 ~ -24 947 規 模 : 東西幅 105 cm以上(底面幅 65 cm以上) × 深さ(平坦面から) 210cm 以上(最下標高約 6.10m) 断面形: 逆台形 流下方向: 北→南 主軸方位: N-38° -E 充填土: 図に記載 重複関係: 側溝 8・10 を切る 出土遺物(図 20): 後述 特記事項: 8 の東側を切った側溝。東側調査区外に大半の部分が出ており、実際の大きさは不明。側溝 8 との関係では短い切合部分の観察からひとまず本址が新しいとみたが、断定するにはもう少し周辺の調査例の増加を俟ちたいところである。大路東側溝との対比が難しいので、これが大路全体の東側への移動か、あるいは規模の縮小化についてもわからないが、ともかくもこの時期に小町大路側溝西岸は東に移行した、ということはできる。

年代は 13 世紀第 1 四半期ごろであろう。

側溝 10(図 20・21)

位 置 : X-75 634 ~ -75 639 Y-24 944 ~ -24 948 規 模 : 東西幅 235 cm以上(底面幅 205 cm以上) × 深さ(平坦面から) 245cm 以上(最下標高約 5.75m) 断面形: 逆台形 流下方向: 北→南 主軸方位: N-37° -E 充填土: 図に記載 重複関係: 側溝 8・9 に切られる 出土遺物(図 20): 後述 特記事項: 検出された一群の小町大路西側溝のうち、層位的に最古に位置づけられる。南壁際では安全上の観点から底面までの掘削を断念したが、北壁際は完掘し基盤層を確認した。したがってこれ以下にさらに古い側溝が存在することはまず考えられない。大路反対側の東側溝が古来の自然流路を利用していることが確認されているのに対し(馬淵・伊丹 2007)、この点は異なっている。大半を上層溝に削り取られているので全形は窺えないものの、残存部の形状からみておおむね逆台形として大過ない。当初から側溝として作られたものだろう。

年代は 12 世紀第 4 四半期、すなわち鎌倉時代のごく初期と考えたい。

側溝 8・9・10 出土遺物(図 20)

先述のように、この 3 条の側溝については当初 1 本との認識で掘削したために、遺物が混りあつてしまつた。ここではまとめて提示する。

土師器皿 T 種(42 ~ 44)・土師器皿 R 種(45 ~ 48)・涅美焼(49)・白磁端反碗(50)・竜泉窑青磁画花文碗(51)・平瓦(52)・漆器椀(53)・部材(54)・不明木製品(55)・箸状木製品(56・57)・棒状木製品(58)・不明木製品(59) 特記事項: 全体に鎌倉時代前期までの様相を示しているが、

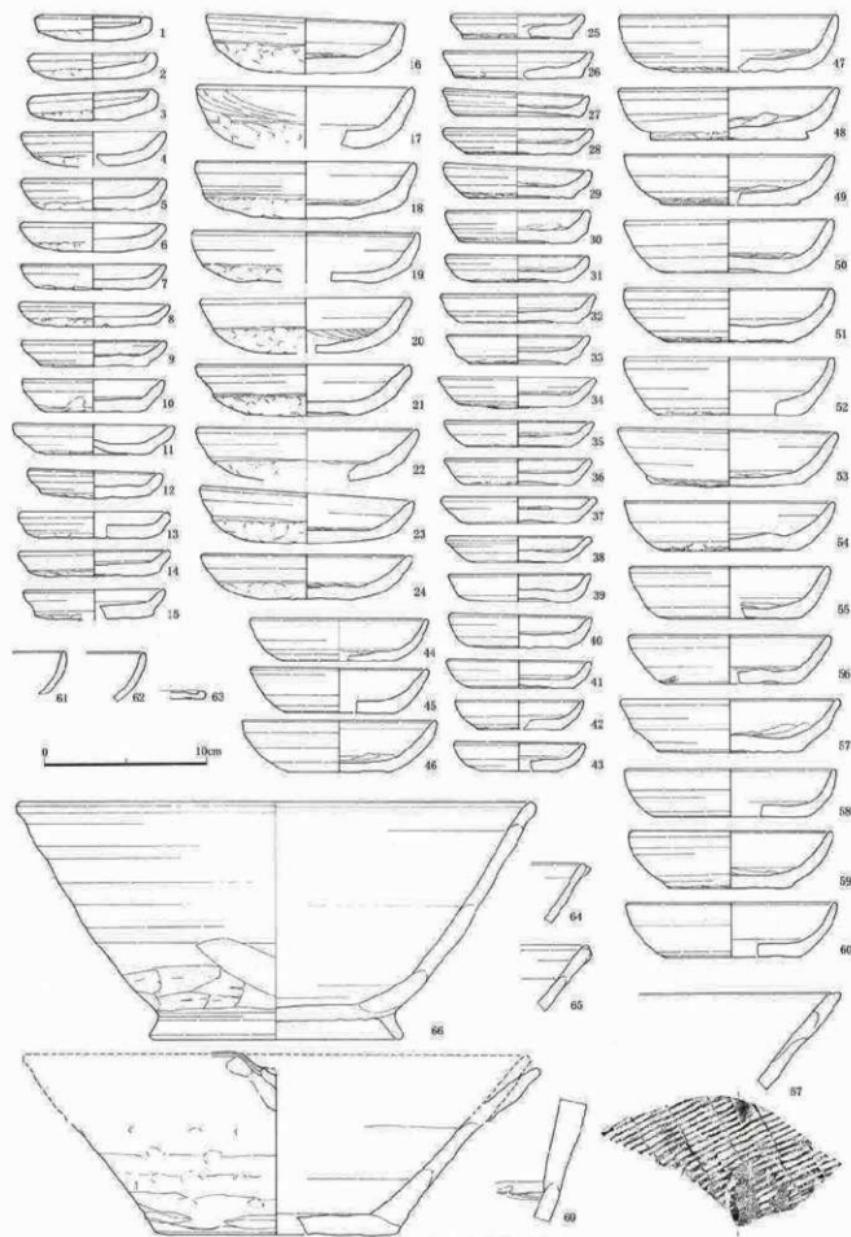


图 22 倒溝一括出土遺物 (1)

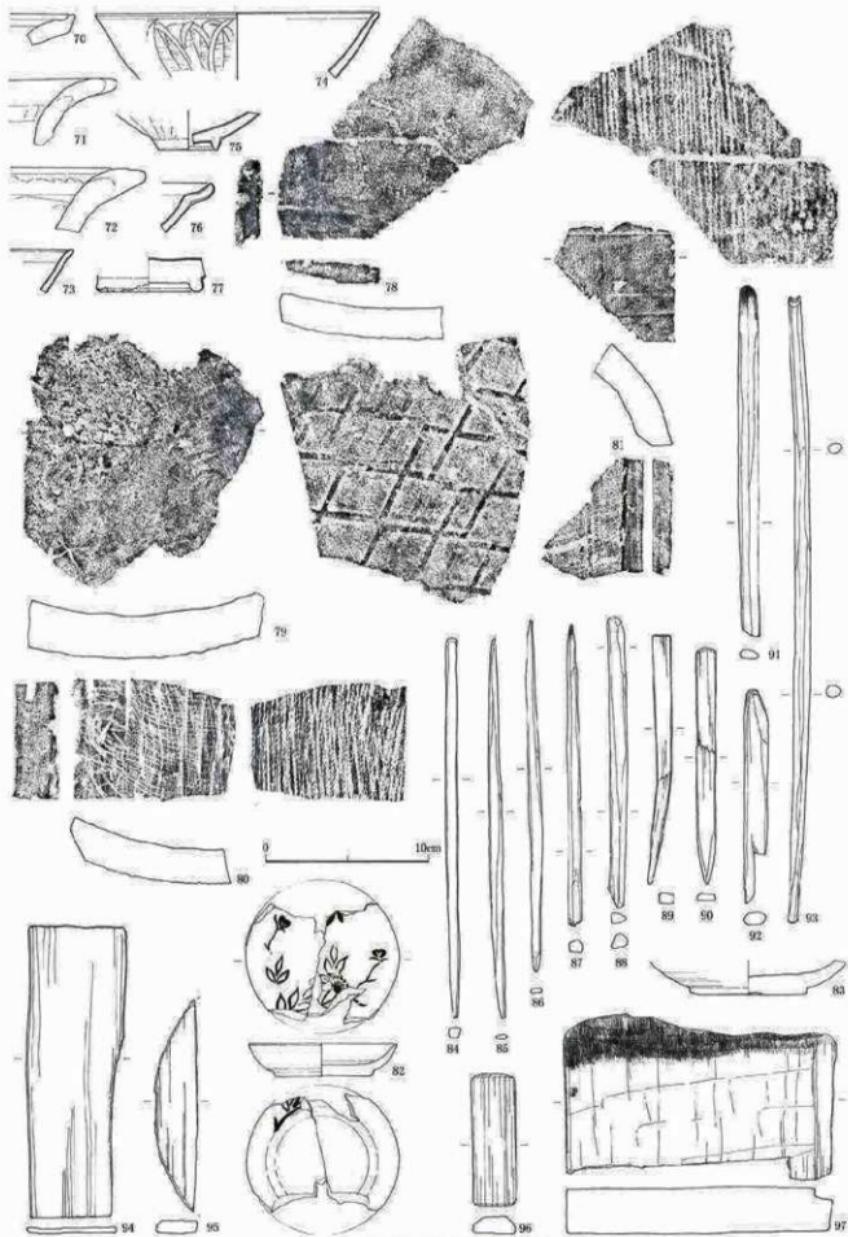


図23 側溝一括出土遺物(2)

51 は竜泉黒青磁画花文碗のうちでも古式の、12世紀後半に属する（亀井 1992による年代観）。43・44 の土師器皿 T 種は扁平な底部を持ち、全体に薄く硬く焼きしまっている。これも鎌倉時代初期の様相を示す。

7. 側溝一括出土遺物（図 22・23）

小町大路側溝掘削時、帰属が混乱したものを一括した。おおむね側溝 7 かそれ以下に属する。

土師器皿 T 種（図 21-1～24）・土師器皿 R 種（25～60）・白色系土師器皿 T 種（61・62）・瓦器小皿（63）・常滑片口鉢 I 類（64～66）・常滑片口鉢 II 類（68）・涅美甕（69・図 22-71・72）・白磁碗（73）・竜泉窯青磁錦連弁文碗（74・75）・竜泉窯青磁折縁鉢（76）・竜泉窯青磁画花文碗（77）・平瓦（78・79）・東海系平瓦（80・81）・漆器皿（82）・漆器椀（83）・箸状木製品（84～86）・串状木製品（87・89）・ヘラ状木製品（88・90・92）・棒形木製品（91・93）・折敷（94）・木製円板（95）・不明木製品（96）・部材（97） 特記事項：全体に鎌倉時代前期に属するものが多いが、白色系土師器皿 T 種 61・62 や竜泉窯青磁 74～77 は中～後期の様相を呈している。漆器 82・83 は分厚い底部の、鎌倉時代前期の特徴的なかたちをしている。皿 82 は柄文が手描きされている。

8. 中世以前の遺物（図 24）

土師器坏（1）・須恵器坏（2・3）

9. 遺構外探集遺物（図 24）

土師器皿 R 種（4）・東遠系山皿（5）・銅鍋（6）・南伊勢系土鍋（7）・涅美甕（8・9）・下駄齒（10）・部材（11） 特記事項：銅鍋の 6 は伊勢産の可能性がある。

（鍛冶屋・松原・馬淵）

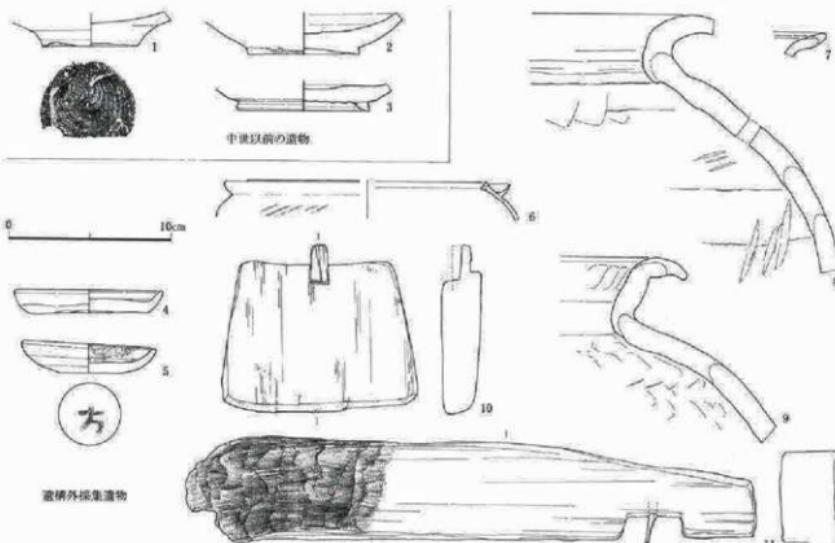


図 24 中世以前・遺構外探集遺物

表1 出土遺物観察表(1)

埋蔵番号	出土遺構	種別	備考
國5-1	側溝1・2	土師器底T種 小型	口径(8.5)cm 器高1.76m 内底部ナデ 色土は肌色、赤色粒子・砂粒・海綿骨芯を含む
2	側溝1・2	土師器底T種 小型	口径(8.65)cm 器高1.8cm 右回転口クロ 底面系切刃 外底部板状圧痕 内底部ナデ 色土は肌色、赤色粒子・砂粒・海綿骨芯・白色粒子を含む
3	側溝1・2	土師器底T種 小型	口径(8.30)cm 器高1.4cm 器高1.1cm 右回転口クロ 底面系切刃 外底部板状圧痕 内底部ナデ 色土は肌色、赤色粒子・砂粒・白色粒子を含む
4	側溝1・2	土師器底T種 小型	口径(8.30)cm 器高(4.45)cm 器高2.1cm 右回転口クロ 底面系切刃 外底部板状圧痕 内底部ナデ 色土は肌色、赤色粒子・砂粒・白色粒子を含む
5	側溝1・2	土師器底T種 中型	口径(10.2)cm 器高(6.4)cm 器高2.7cm 右回転口クロ 底面系切刃 外底部板状圧痕 内底部ナデ 色土は淡灰褐色・色砂粒土、赤色粒子・砂粒・海綿骨芯を含む
6	側溝1・2	土師器底T種 大型	口径(13.1)cm 器高(7.5)cm 器高3.3cm 右回転口クロ 底面系切刃 内底部ナデ 色土は淡灰褐色・赤色粒子・砂粒・海綿骨芯を含む
7	側溝1・2	白色系土器 蓋T種大型	口縁部断片 色土は乳白色粉質質良好
8	側溝1・2	瓶戸形花入子	口縁部 ロクロ成形而削込みを入れ輪花 素土は明灰褐色 口縁内側に自然輪
9	側溝1・2	青白磁碗	口縁部断片 蓋地は灰白色、黒色微粒子含む 素土は灰色を帯びた水色半透明
國7-1	側溝3	土師器底T種 小型	口径(9.8)cm 器高1.3cm 内底部ナデ 色土は淡褐色、赤色粒子・海綿骨芯を含む
2	側溝3	土師器底T種 小型	口径(8.85)cm 器高2.1cm 内底部ナデ 色土は淡黄灰色、白色粒子・赤色粒子・海綿骨芯を含む
3	側溝3	土師器底T種 大型	口径(13.05)cm 器高3.0cm 内底部ナデ 色土は肌色、砂粒・赤色粒子・海綿骨芯を含む
4	側溝3	土師器底T種 小型	口径(9.2)cm 肩径(7.0)cm 器高1.65cm 右回転口クロ 底面系切刃 内底部ナデ 色土は淡橙色、砂粒・赤色粒子・海綿骨芯を含む
5	側溝3	土師器底T種 小型	口径(9.25)cm 流行(7.5)cm 器高1.65cm 右回転口クロ 底面系切刃 内底部ナデ 色土は肌色、砂粒・赤色粒子・海綿骨芯を含む
6	側溝3	土師器底T種 大型	口径(11.2)cm 肩径(7.4)cm 器高2.9cm 右回転口クロ 底面系切刃 内底部ナデ 色土は褐色、白色粒子・海綿骨芯・砂粒を含む 流行付着
7	側溝3	土師器底T種 大型	口径(11.1)cm 流行(9.4)cm 器高3.6cm 右回転口クロ 底面系切刃 色土は淡橙色、白色粒子・赤色粒子・海綿骨芯・砂粒を含む
8	側溝3	常滑 山形窯	口縁部断片 素土は灰褐色、石英含む
9	側溝3	瓶戸灰釉鉢皿	底の片 断土は灰色、硬質、灰釉
10	側溝3	電気窯青釉碗 蓋T文鏡	直径(6.4)cm ロクロ成形 覆蓮瓣文 刷毛出高台 素地は明灰色、素土は黄褐色 素土は灰褐色半透明
11	側溝3	平瓦	厚さ2.0cm 素土は砂粒・繊維含み明灰色、表面は褐色、凹面は離れ砂
12	溝2	土師器底T種 小型	口径(8.8)cm 器高1.5cm 内底部ナデ 色土は肌色、砂粒・赤色粒子・海綿骨芯を含む砂質土
13	溝2	土師器底T種 小型	口径(9.25)cm 器高1.85cm 内底部ナデ 色土は淡橙色、白色粒子・赤色粒子を含む砂質土
14	溝2	土師器底T種 大型	口径(11.7)cm 器高3.5cm 内底部ナデ 色土は淡褐色、白色粒子・赤色粒子・砂粒・海綿骨芯を含む
15	溝2	土師器底T種 大型	口径(13.5)cm 深さ2.9cm 内底部ナデ 外底部板状圧痕あり 色土は淡褐色、白色粒子・赤色粒子・海綿骨芯を含む
16	溝2	土師器底T種 小型	口径(9.3)cm 肩径(7.7)cm 器高1.65cm 右回転口クロ 底面系切刃 外底部板状圧痕 内底部ナデ 色土は淡褐色、赤色粒子・海綿骨芯を含む
17	溝2	土師器底T種 小型	口径(8.55)cm 肩径(6.4)cm 器高1.8cm 右回転口クロ 底面系切刃 外底部板状圧痕 内底部ナデ 色土は淡褐色、砂粒・赤色粒子・海綿骨芯を含む
18	溝2	撫美焼	口縁部断片 素土は灰褐色、白色粒子含む、外側刷毛あり、内側は厚い灰灰土に上りざらつく
19	溝2	撫美焼	肩・脚部断片 素土は淡褐色、白色粒子含む、肩周に厚い砂灰、18と同じ体形・斜めに交叉する筋肋・輪郭の明き目あり
20	溝2	軒丸瓦	瓦頭部断片 巴瓦、素土は灰褐色から淡褐色、白色粒子・砂粒含む
21	溝3	土師器底T種 小型	口径(11.75)cm 器高1.0cm 内底部ナデ 色土は肌色、赤色粒子・砂粒を含む
22	溝3	土師器底T種 大型	口径(13.4)cm 器高3.0cm 内底部ナデ 色土は肌色、赤色粒子・砂粒を含む
23	溝3	土師器底T種 大型	口径(13.0)cm 器高(3.05)cm 内底部ナデ 色土は淡橙色、白色粒子・赤色粒子・砂粒含む砂質土
24	溝3	土師器底T種 小型	口径(11)cm 肩径(9.3)cm 底径(8.0)cm 器高1.9cm 右回転口クロ 底面系切刃 色土は淡褐色、赤色粒子・砂粒を含む
25	溝3	撫美焼	脚部断片 素土は灰褐色、表面に刷毛格子の印字あり
26	溝3	白磁ローハ皿	口縁部断片 ロクロ成形 素地は灰白色 素土は淡青灰色透明
27	溝3	電気窯青釉碗 蓋T文鏡	口縁部断片 ロクロ成形 素地は灰白色 素土は青灰色透明
28	溝3	平瓦	厚さ1.7cm 素土は砂粒・繊維含み深灰色、凸面は蓮瓣文の刻溝、凹面は同文の陰刻
29	溝3	平瓦	厚さ1.9cm 素土は白色粒子・繊維含み深灰色、凸面は縞目
30	溝3	平瓦	厚さ1.8cm 素土は灰褐色・淡褐色、白色粒子・黑色粒子・微細砂を含む 凸面は縞目、凹面は縞目の後ヘラでなぐる?
31	溝3	滑石鋼製用品	残存長(3.7)cm 残幅(4.3)cm 長大厚1.2cm 鎌状色 3面に擦過痕多数、加工途中又は既石として使用か
國8-1	土師器底集中 部1	土師器底T種 大型	口径12.0cm 器高3.0cm 内底部ナデ 色土は淡褐色、赤色粒子・海綿骨芯・砂粒・配石を含む
2	土師器底集中 部1	土師器底T種 大型	口径12.0cm 器高13.0cm 内底部ナデ 色土は肌色、赤色粒子・海綿骨芯・砂粒を含む

表2 出土遺物観察表(2)

埋蔵番号	出土遺物	種別	備考
3	土師器皿中 部1	土師器皿T種 大型	口径12.5cm 器高3.0cm 内底部ナデ 脇土は赤褐色・赤色粒子・海綿骨芯・白色粒子を含む
4	土師器皿中 部1	土師器皿T種 大型	口径12.4cm 器高2.8cm 内底部ナデ 脇土は褐色・赤色粒子・海綿骨芯・白色粒子・砂粒を含む砂質土
5	土師器皿中 部1	土師器皿T種 大型	口径12.5cm 器高3.8cm 内底部ナデ 脇土は褐色・赤色粒子・海綿骨芯・白色粒子・砂粒を含む
6	土師器皿中 部1	土師器皿T種 大型	口径12.5cm 器高3.4cm 内底部ナデ 脇土は淡褐色・赤色粒子・砂粒を含む砂質土
7	土師器皿中 部1	土師器皿T種 大型	口径12.6cm 器高3.05cm 内底部ナデ 脇土は灰褐色・赤色粒子・砂粒・海綿骨芯を含む
8	土師器皿中 部1	土師器皿T種 小型	口径(7.6cm) 底径4.9cm 器高1.4cm 右回転クロロ 底面系切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 脇土は淡褐色・赤色粒子・海綿骨芯・砂粒を含む砂質土
9	土師器皿中 部1	土師器皿T種 小型	口径8.2cm 底径6.3cm 器高1.8cm 右回転クロロ 底面系切り 内底部ナデ 脇土は灰褐色・白色粒子・海綿骨芯・砂粒を含む砂質土
10	土師器皿中 部1	土師器皿T種 小型	口径9.0cm 底径7.4cm 器高1.6cm 右回転クロロ 底面系切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 脇土は褐色・白色粒子・赤色粒子・海綿骨芯・砂粒を含む砂質土
11	土師器皿中 部1	土師器皿T種 大型	口径12.7cm 底径9.6cm 器高2.9cm 右回転クロロ 底面系切り 内底部ナデ 脇土は灰褐色・白色粒子・海綿骨芯・砂粒を含む砂質土
12	土師器皿中 部1	土師器皿T種 大型	口径(12.3cm) 底径(8.6cm) 器高3.4cm 右回転クロロ 底面系切り 内底部ナデ 外底部板状圧痕 脇土は赤褐色・白色粒子・赤色粒子・砂粒を含む砂質土
13	土師器皿中 部1	土師器皿T種 大型	口径12.8cm 底径9.0cm 器高3.4cm 右回転クロロ 底面系切り 内底部ナデ 外底部板状圧痕 脇土は淡褐色・白色粒子・赤色粒子・砂粒を含む砂質土
14	土師器皿中 部1	土師器皿T種 大型	口径13.0cm 底径8.5cm 器高3.3cm 右回転クロロ 底面系切り 内底部ナデ 外底部板状圧痕 脇土は褐色・白色粒子・赤色粒子・砂粒を含む砂質土良質
15	土師器皿中 部1	蓋美濃 部1	口径部7.7cm 脇土は灰褐色・白色粒子を含む 砂質土・鉛錠の印見刀刃
16	土師器皿中 部1	平瓦	厚31.8cm 平土砂粒・白色粒子を含む灰褐色 平面鏡口 未発見1期
図9-1	建物1 P.2	土師器皿T種 大型	口径11.5cm 底径8.8cm 器高3.1cm 右回転クロロ 底面系切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 脇土は褐色・白色粒子・海綿骨芯・砂粒を含む
2	建物1 P.2	土師器皿T種 大型	口径13.5cm 底径8.4cm 器高3.5cm 右回転クロロ 底面系切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 脇土は褐色・白色粒子・海綿骨芯・砂粒を含む砂質土
図10-1	P.2	土師器皿T種 小型	口径9.0cm 器高1.9cm 内底部ナデ 脇土は灰褐色・白色粒子・砂粒を含む 内・外側とも半分以上に採択材有
2	P.6	白色素・土師器 皿T種 小型	口径(7.9cm) 脇土は乳白色
3	P.6	土師器皿T種 小型	口径8.2cm 器高2.0cm 内底部ナデ 脇土は淡褐色・赤色粒子・海綿骨芯・砂粒を含む
4	P.6	土師器皿T種 小型	口径(9.8cm) 底径(8.2cm) 器高1.6cm 右回転クロロ 底面系切り 内底部板状圧痕 内底部ナデ 脇土は褐色・白色粒子・砂粒を含む砂質土
5	P.6	土師器皿T種 大型	口径(12.5cm) 器高(2.2cm) 脇土は淡褐色・赤色粒子・海綿骨芯を含む
6	P.6	土師器皿T種 大型	口径(14.7cm) 脇土は褐色・白色粒子・砂粒・礫を含む
7	P.6	土師器皿T種 大型	口径(11.7cm) 底径(8.5cm) 器高2.9cm 右回転クロロ 底面系切り 内底部ナデ 脇土は淡褐色・白色粒子・白色粒子・海綿骨芯・砂粒を含む
8	P.19	土師器皿T種 大型	口径(14.4cm) 器高3.0cm 内底部ナデ 脇土は淡褐色・海綿骨芯・白色粒子・白色粒子・砂粒を含む
9	P.19	土師器皿T種 大型	口径(8.7cm) 底径(6.4cm) 器高1.7cm 右回転クロロ 底面系切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 脇土は淡褐色・白色粒子・海綿骨芯・砂粒を含む 砂質土
10	P.25	土師器皿T種 小型	口径(7.9cm) 底径(6.5cm) 器高0.9cm 内底部ナデ 脇土は淡褐色。粉質粘土質
11	P.25	電気窯青磁透 光文鏡	高台径(7.0)cm クロコ成形 置地は淡灰色 裏は青緑色半透明、細かい質入 内側に施用した強烈な焼成の跡あり 内側に施用した強烈な焼成の跡あり
12	P.36	土師器皿T種 大型	口径(13.5cm) 器高2.9cm 内底部ナデ 脇土は淡褐色・白色粒子・赤色粒子・海綿骨芯・砂粒を含む
13	P.36	土師器皿T種 大型	口径(12.5cm) 底径(8.7cm) 器高2.4cm 右回転クロロ 底面系切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 脇土は褐色・白色粒子・赤色粒子・砂粒を含む
14	P.46	電気窯青磁透 光文鏡	口縁部分 クロコ成形 置地は淡褐色 裏は青灰色不透明 外側は片彫り蓮瓣文、花弁の中心に楕円はない
15	P.57	土師器皿T種 小型	口径9.3cm 器高1.7cm 内底部ナデ 脇土は淡褐色・白色粒子・海綿骨芯・砂粒を含む砂質土 全体に火を受け付けて變色
16	P.59	土師器皿T種 小型	口径7.8cm 器高6.0cm 器高1.3cm 右回転クロロ 底面系切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 脇土は赤褐色・白色粒子・赤色粒子・海綿骨芯・砂粒を含む砂質土
17	P.59	土師器皿T種 大型	口径(12.8cm) 底径(8.2cm) 器高2.8cm 右回転クロロ 底面系切り 内底部ナデ 脇土は褐色・白色粒子・赤色粒子・海綿骨芯・砂粒を含む砂質土
18	P.62	土師器皿T種 小型	口径(9.8cm) 底径(7.4cm) 器高1.5cm 右回転クロロ 底面系切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 脇土は淡褐色・赤色粒子・海綿骨芯・砂粒を含む砂質土。クロコ成形後全体に指紋で形を整えたような観あり
19	P.62	電鍍漆	底径(10.8cm) 輪縁み形成 脇土・器質は灰褐色→灰褐色・黒色粒子含む 二次成形の強い火熱で全体に火質が掛かっていいる
20	P.66	蓋美濃	口縁部分 輪縁み形成 黒褐色に発色した灰輪をハケ塗りした後、厚く自然剥離する。脇土は灰→灰黒色で、岩石質に焼き付いている
図11-1	圓溝4-5	土師器皿T種 大型	口径13.8cm 器高3.0cm 内底部ナデ 脇土は肌色・赤色粒子・砂粒・白色粒子を含む
2	圓溝4-5	土師器皿T種 小型	口径(9.6)cm 底径(8.0cm) 器高1.8cm 右回転クロロ 底面系切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 脇土は淡褐色・黑色粒子・海綿骨芯・砂粒・白色粒子を含む

表3 出土遺物観察表(3)

件名番号	出土遺物	種別	備考
3	側溝4・5 青花葉青磁頭 花文輪	口縁部片口ロクロ成形 素地は淡灰褐色 軸は淡緑灰色透明 貫入りあり 内側は二又片刃による分割線 外側は無文	
4	側溝4・5 青花葉青磁頭 花文輪	口縁部片ロクロ成形 素地は灰白色 軸は水色半透明 内側は二又片刃による分割線の内側に複数文、外側は無文	
5	側溝4・5 木製軸被織部 材	残存長(10.4)cm 幅1.2cm 厚み1.5cm 斜面状の切れが入る 一端は炭化している	
6	側溝4・5 円板状木製品	残存長(16.6)cm 短幅(3.4)cm 厚み0.3cm 絹目材 海苔	
7	側溝5	土師器皿T種 小型	口径(6.3)cm 高さ1.5cm 内底部ナデ 脱土は肌色、赤色粒子・白色粒子を含む
8	側溝5	土師器皿T種 大型	口径(13.6)cm 高さ3.2cm 内底部ナデ 脱土は肌色、白色粒子・赤色粒子を含む
9	側溝5	土師器皿T種 大型	口径(13.2)cm 高さ3.2cm 内底部ナデ 脱土は肌色、白色粒子・赤色粒子・砂粒を含む
10	側溝5	土師器皿T種 大型	口径(8.9)cm 底径8.2cm 高さ2.0cm 右回転ロクロ 底面斜切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 脱土は淡褐色、赤色粒子・海綿骨芯・砂粒を含む
11	上部器集中 部2	土師器皿T種 小型	口径(9.9)cm 高さ1.0cm 脱土は淡褐色、赤色粒子・海綿骨芯を含む
12	上部器集中 部2	土師器皿T種 大型	口径(12.9)cm 高さ2.5cm 内底部ナデ 脱土は淡褐色、海綿骨芯・泥炭を含む
13	上部器集中 部2	土師器皿T種 大型	口径(13.8)cm 高さ3.2cm 内底部ナデ 脱土は淡褐色、赤色粒子・海綿骨芯を含む
14	上部器集中 部2	土師器皿T種 大型	口径(14.3)cm 高さ2.8cm 内底部ナデ 脱土は肌色、白色粒子・赤色粒子を含む
15	上部器集中 部2	土師器皿T種 小型	口径(6.8)cm 底径(6.0)cm 高さ2.0cm 右回転ロクロ 底面斜切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 脱土は肌色、白色粒子・赤色粒子・海綿骨芯を含む
図13-1	側溝5-6	土師器皿T種 小型	口径(9.25)cm 高さ1.65cm 内底部ナデ コースター型 脱土は淡褐色、赤色粒子・海綿骨芯・黄目要・砂粒を含む 側面斜切
	2	土師器皿T種 小型	口径8.2~8.6cm 高さ2.1cm 内底部ナデ 脱土は淡褐色、白色粒子・海綿骨芯を含む
	3	土師器皿T種 小型	口径(9.75)cm 高さ2.05cm 内底部ナデ 脱土は淡褐色、海綿骨芯を含む
	4	土師器皿T種 大型	口径13.0cm 高さ2.95cm 内底部ナデ 脱土は淡褐色、赤色粒子・海綿骨芯を含む
	5	土師器皿T種 大型	口径13.3cm 高さ2.9cm 内底部ナデ 脱土は淡褐色、白色粒子・赤色粒子・海綿骨芯を含む
	6	土師器皿T種 小型	口径8.6cm 底径6.9cm 高さ1.9cm 右回転ロクロ 底面斜切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 脱土は淡褐色、赤色粒子・海綿骨芯を含む
	7	土師器皿T種 小型	口径(6.6)cm 高さ1.6cm 右回転ロクロ 底面斜切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 脱土は淡褐色、赤色粒子・海綿骨芯・砂粒を含む
	8	土師器皿T種 大型	口径(12.2)cm 底径8.2cm 高さ3.3cm 右回転ロクロ 底面斜切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 脱土は淡褐色、白色粒子・赤色粒子・海綿骨芯を含む
	9	土師器皿T種 大型	口径(13.6)cm 高さ1.9cm 右回転ロクロ 底面斜切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 脱土は淡褐色、白色粒子・赤色粒子・海綿骨芯を含む
	10	側溝5-6 青花葉	輪轉式成形 脱土は灰色、青色・淡灰色を含む 継縫切口 厚さ2.1cm 脱土は灰色、表面に金雲母片・白雲石は斜め切り・格子切口・凹面は斜め切り
	11	側溝5-6 平底	厚さ2.1cm 脱土は灰色、表面に金雲母片・白雲石は斜め切り・格子切口・凹面は斜め切り
	12	側溝5-6 不明木製品	厚4.6cm 幅4.65cm 厚3.9cm 滾轉型に形成されている
	13	側溝5-6 円板状木製品	最大幅(1.0)cm 厚0.9cm 滚轉型14cm前後 絹目材 一端が炭化
14	側溝5-6	円板状木製品	最大長(17.6)cm 最大幅(8.5)cm 厚0.9cm 滚轉型14cm前後 絹目材 一端が炭化 13と同一個体か?
15	側溝5-6	棒状木製品	長さ24.3cm 幅1.0cm 最大幅0.5cm 片方の端部が尖る 穀串か
16	側溝5-6 △棒状木製品	△棒状木製品	長さ28.5cm 最大幅0.5cm 最大厚さ2.4cm 刃根か
図14-1	側溝6	土師器皿R種 小型	口径(6.0)cm 高さ1.9cm 内底部ナデ 脱土は肌色、赤色粒子・海綿骨芯を含む
	2	土師器皿T種 小型	口径(9.1)cm 高さ(1.45)cm 内底部ナデ 脱土は淡褐色、白色粒子・砂粒を含む 細砂質
	3	側溝6 土師器皿T種 小型	口径9.0cm 高さ1.9cm 脱土は淡褐色、赤色粒子・海綿骨芯・白色粒子・砂粒を含む
	4	側溝6 土師器皿T種 大型	口径13.0cm 高さ3.4cm 外底部薄く板状圧痕あり 内底部ナデ 脱土は肌色、赤色粒子・海綿骨芯・砂粒・泥炭を含む 細砂質
	5	土師器皿T種 大型	口径13.3cm 高さ3.2cm 内底部ナデ 脱土は淡褐色、赤色粒子・海綿骨芯・白色粒子を含む
	6	土師器皿T種 小型	口径(7.5)cm 底径6.4cm 高さ1.7cm 右回転ロクロ 底面斜切り 内底部ナデ 脱土は淡褐色、赤色粒子・白色粒子を含む
	7	土師器皿T種 小型	口径(7.7)cm 底径(5.8)cm 高さ1.6cm 右回転ロクロ 底面斜切り 内底部ナデ 脱土は淡褐色、赤色粒子・白色粒子・砂粒を含む 細砂質
	8	土師器皿T種 小型	口径9.2cm 底径7.2cm 高さ1.9cm 右回転ロクロ 底面斜切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 脱土は淡褐色、赤色粒子・白色粒子・砂粒を含む
	9	土師器皿T種 大型	口径12.45cm 底径7.9cm 高さ3.4cm 右回転ロクロ 底面斜切り 内底部ナデ 脱土は肌色、赤色粒子・海綿骨芯・白色粒子を含む
	10	土師器皿R種 大型	口径12.7cm 底径8.7cm 高さ2.8cm 右回転ロクロ 底面斜切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 脱土は淡褐色、白色粒子・赤色粒子・海綿骨芯・砂粒を含む
	11	土師器皿R種 大型	口径12.5cm 底径(8.3)cm 高さ3.15cm 右回転ロクロ 底面斜切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 脱土は淡褐色、赤色粒子を含む
	12	側溝6 青花葉青磁頭 花文輪	高さ15.6cm ロクロ成形 素地は淡灰色、黑色微粒子含む 軸は緑色透明 内底部に片側花文、海綿痕あり 削り出花口

表4 出土遺物観察表(4)

件名番号	出土遺構	種別	備考
13	倒溝6	窓乳頭有輪文陶器	口縁部片 ロクロ成形 壁地は淡灰色 色はオリーブ色透明 大きめの貫入 内側は二叉片刀による分割線 外側は無文
14	倒溝6	軒丸瓦	筋土は白色土・微砂を含む灰色土 巴文の周りに扁平な残株を巡らす
15	倒溝6	円板状木製品	径21.9cm 厚1.9cm 片側は木目と直交方向に中央から筋部に向かって次第に薄くなる 中央に径5.5mmの円孔があわられ、中に棒が詰まっている。つまり部分の取れた名残か 片面と側面の一部に墨跡状のもの付着 模あるいは彫等の痕
16	倒溝6	折敷	長28.9cm 稲穂(6.3cm) 厚0.5cm 板目材 一端は薄く削られており、6箇所の小穴の一部には木綿織物のものが残る 斜折底部
17	倒溝6	桟木柱頭	長18.7cm 幅0.85cm 厚0.5cm 斜面方形、両端を切り落す
18	倒溝6	桟木柱足	長20.4cm 幅0.8cm 厚0.4cm 口元管
19	倒溝6	桟木柱足	残存長(20.7cm) 最大幅0.9cm 厚0.5cm 一端を尖らす 面赤か
20	倒溝6	桟木柱頭	残存長(19.7cm) 幅2.1cm 厚1.3cm 斜面橈円形、両側斜面に凹取り
21	倒溝6	桟木柱足	長25.5cm 幅1.2cm 厚0.6cm 一端が焼化
22	倒溝6	桟木柱足	残存長(31.0cm) 幅2.4cm 厚1.0cm 斜面長方形、一端が焼化
23	倒溝6	桟木柱足	長15.6cm 幅1.2cm 厚0.6cm 斜面橈円形、一端を尖らす
24	倒溝6	桟木柱足	長11.6cm 最大幅0.9cm 厚0.7cm 一端が焼化
図15-1 漢溝6西岸上	土師器皿下盤	小型	口径8.8cm 器高1.85cm 内底部ナデ 着土は淡赤褐色、赤色粒子・海綿骨芯・砂粒を含む
	土師器皿下盤	大型	口径(9.3)cm 器高1.8cm 内底部ナデ 着土は淡赤褐色・海綿骨芯・砂粒を含む
	土師器皿下盤	小型	口径8.6cm 器高1.8cm 内底部ナデ 着土は淡赤褐色、赤色粒子・海綿骨芯・砂粒を含む
	土師器皿下盤	大型	口径9.1cm 器高1.85cm 内底部ナデ 着土は淡赤褐色、赤色粒子・海綿骨芯・砂粒を含む
	土師器皿下盤	大型	口径10.1cm 器高1.85cm 内底部ナデ 着土は淡赤褐色、赤色粒子・海綿骨芯・砂粒を含む
	土師器皿下盤	大型	口径10.5cm 器高2.9cm 内底部ナデ 着土は淡赤褐色、白色粒子・砂粒を含む 砂質
	土師器皿下盤	大型	口径12.5cm 器高(2.2)cm 内底部ナデ 着土は淡赤褐色、赤色粒子・海綿骨芯・褐色粒子を含む
	土師器皿下盤	大型	口径(12.8)cm 器高2.8cm 内底部ナデ 着土は淡赤褐色、赤色粒子・海綿骨芯・褐色粒子を含む
	土師器皿下盤	大型	口径(8.9)cm 器高(7.1)cm 器高2.0cm 回転ロクロ 底面系切0 外底部板状圧痕 内底部ナデ 着土は淡赤褐色、赤色粒子・海綿骨芯・砂粒を含む
	土師器皿下盤	大型	口径(12.6)cm 器高(8.4)cm 器高2.8cm 右回転ロクロ 底面系切0 着土は淡赤褐色、赤色粒子・海綿骨芯・砂粒を含む
	土師器皿下盤	大型	口径(12.6)cm 通径(8.0)cm 器高2.8cm 右回転ロクロ 底面系切0 外底部板状圧痕 内底部ナデ 着土は淡赤褐色、赤色粒子・海綿骨芯・白色粒子・砂粒を含む
	漢溝6西岸上	常滑片口跡1 烟	口縁部片 稲穂み成形 着土は灰色、長石含む 着表は暗灰色
	倒溝6西岸上	陶火燭	口縁部片 稲穂み成形 着土は灰色
	倒溝6西岸上	鬼瓦	最大厚3.2cm 着土は白色微粒を含む灰褐色で緻密 永福寺1期
	倒溝6西岸上	丸瓦	厚1.8cm 着土は白色微粒・砂粒を含む灰褐色 上凸は調節一部撹で削り、凹面は布目底が残る 永福寺1期
図16-1 土師器皿集中	土師器皿下盤	小型	口径8.9cm 器高1.8cm 内底部ナデ 着土は淡赤褐色、赤色粒子・海綿骨芯・砂粒を含む
	土師器皿下盤	小型	口径(9.8)cm 器高2.0cm 内底部ナデ 着土は淡赤褐色、赤色粒子・砂粒を含む
	土師器皿下盤	小型	口径(8.4)cm 器高1.5cm 内底部ナデ 着土は淡赤褐色、赤色粒子・海綿骨芯・砂粒を含む
	土師器皿中	大型	口径9.0cm 通径(8.1)cm 器高2.5cm 内底部ナデ 着土は淡赤褐色、赤色粒子・海綿骨芯・砂粒を含む
	土師器皿中	大型	口径(13.5)cm 通径(8.9)cm 器高2.5cm 内底部ナデ 着土は淡赤褐色、赤色粒子・海綿骨芯・砂粒を含む 口縁部一部打ち欠け、外側付着
	土師器皿中	大型	口径(13.2)cm 器高3.3cm 内底部ナデ 着土は淡赤褐色、赤色粒子・海綿骨芯・砂粒を含む
	土師器皿下盤	大型	口径12.7cm 器高2.8cm 内底部ナデ 着土は淡赤褐色、赤色粒子・海綿骨芯・砂粒を含む
	土師器皿下盤	大型	口径13.2cm 器高3.1cm 内底部ナデ 着土は淡赤褐色、赤色粒子・海綿骨芯を含む 粉質
	土師器皿中	大型	口径(12.4)cm 器高2.4cm 内底部ナデ 着土は淡赤褐色、赤色粒子・砂粒を含む 粉砂質 口縁部に油煤付着
	土師器皿下盤	大型	口径(13.6)cm 器高3.2cm 内底部ナデ 着土は淡赤褐色、赤色粒子・海綿骨芯・砂粒を含む
	土師器皿中	大型	口径(8.6)cm 器高(7.4)cm 器高1.6cm 右回転ロクロ 底面系切0 外底部板状圧痕 内底部ナデ 着土は淡赤褐色、赤色粒子・白色粒子・砂粒を含む
	土師器皿中	大型	口径(9.8)cm 器高(7.8)cm 器高2.0cm 回転ロクロ 底面系切0 外底部板状圧痕 内底部ナデ 着土は淡赤褐色、赤色粒子・白色粒子・砂粒を含む
	土師器皿中	大型	口径(12.8)cm 器高8.5cm 器高2.9cm 右回転ロクロ 底面系切0 外底部板状圧痕 内底部ナデ 着土は淡赤褐色、赤色粒子・海綿骨芯・砂粒を含む
	土師器皿中	大型	口径(12.4)cm 通径8.6cm 器高3.8cm 右回転ロクロ 底面系切0 外底部板状圧痕 内底部ナデ 着土は淡赤褐色、赤色粒子・白色粒子・砂粒を含む
	土師器皿中	大型	口径(12.4)cm 通径8.6cm 器表は灰白色、釉上灰綠色半透明 内側は斑花文、外側は無文
図17-1 松穴4.P.1	青白磁小皿	口縁	口縁・体部片 ロクロ成形 壁地は灰白色、諸品質 着土は水色半透明

表5 出土遺物観察表(5)

件番号	出土遺物	種別	備考
2	柱穴鉢 P.4	軸面系茶碗	口縁部斜 ロクロ成形 粘土は灰色、気孔多い 構成良好
3	柱穴鉢 P.3	土師器皿T種 小型	口径8.7cm 高1.8cm 内底部ナゲ 粘土は褐色、海綿骨芯・砂粒を含む
4	柱穴鉢 P.3	舟形木製品	残存長10.3cm 残幅(3.9)cm 厚1.9cm
5	P.68	土師器皿T種 小型	口径8.9cm 底深7.0cm 高2.0cm 右回転クロロ 軸面系切り 外底部板状圧痕 内底部ナゲ 粘土は淡褐色、白色粒子を含む 砂質
6	P.68	土師器皿T種 大型	口径(13.4)cm 底深7.2cm 高3.1cm 右回転クロロ 軸面系切り 外底部板状圧痕 内底部ナゲ 粘土は灰色、海綿骨芯・砂粒を含む 砂質
7	P.73	土師器皿T種 小型	底深長(4.2)cm 残幅(2.3)cm 厚0.6cm 黒色粘板岩 板舟を持つ 線脚には波文の模刻を施す
8	P.73	土師器皿T種 小型	口径(8.9)cm 高1.9cm 内底部ナゲ 粘土は淡褐色、白色粒子・泥岩粒・砂粒を含む
9	側溝7上層	土師器皿T種 小型	口径9.0cm 高1.4cm 内底部ナゲ 粘土は淡褐色、・白色系・砂粒を含む
2	側溝7上層	土師器皿T種 小型	口径8.7cm 高2.1cm 内底部ナゲ 粘土は淡褐色、素色粒子・砂粒を含む 砂質
3	側溝7上層	土師器皿T種 大型	口径14.4cm 底深8.2cm 高3.6cm 外底部板状圧痕 内底部ナゲ 粘土は淡褐色、白色粒子・砂粒を含む
4	側溝7上層	土師器皿T種 大型	口径(14.6)cm 高2.7cm 内底部ナゲ 粘土は淡褐色、砂粒を含む 砂質
5	側溝7上層	土師器皿T種 小型	口径8.5cm 底深6.2cm 高1.7cm 右回転クロロ 軸面系切り 外底部板状圧痕 内底部ナゲ 粘土は淡褐色、白色粒子・砂粒を含む 砂質
6	側溝7上層	土師器皿T種 小型	口径8.6cm 底深6.7cm 高1.8cm 右回転クロロ 軸面系切り 外底部板状圧痕 内底部ナゲ 粘土は淡褐色、白色粒子・砂粒を含む
7	側溝7上層	土師器皿T種 小型	口径9.3cm 底深7.6cm 高1.9cm 右回転クロロ 軸面系切り 外底部板状圧痕 内底部ナゲ 粘土は淡褐色、海綿骨芯・砂粒を含む
8	側溝7上層	土師器皿T種 大型	口径11.1cm 底深8.8cm 高3.1cm 右回転クロロ 軸面系切り 外底部板状圧痕 内底部ナゲ 粘土は淡褐色、素色粒子・白い粒子・砂粒を含む 砂質
9	側溝7上層	土師器皿T種 大型	口径12.7cm 底深8.6cm 高2.9cm 右回転クロロ 軸面系切り 外底部板状圧痕 内底部ナゲ 粘土は淡褐色、素色粒子・海綿骨芯・砂粒を含む
10	側溝7上層	南部系山茶碗	高脚 粘土は淡褐色、質重 貼り付け膏合
11	側溝7上層	斑葉系山茶碗	口縁部斜 斑葉は淡褐色 クロロ成形 内側に降灰 図17-2同一軸部か
12	側溝7上層	常滑片口鉢 I	高台径(14.9)cm 輪積み成形 粘土は灰色、白色粒子含む内底面は使用による磨耗激しく透疊状物質少し付る
13	側溝7上層	常滑片口鉢 I	高台径(12.8)cm 輪積み成形 粘土は淡灰色、長石・大きめの黒色骨含む 内底面は使用により磨耗激し滑らか
14	側溝7上層	常滑片口鉢 I	高台径(17.3)cm 輪積み成形 粘土は灰色、長石含む 内底面は使用により滑らかに磨耗
15	側溝7上層	常滑窓	口縁部斜 輪積み成形 粘土は淡褐色、長石・砂粒含む 粘土は明灰色
16	側溝7上層	窓葉裏	口縁部斜 輪積み成形 粘土は淡褐色、長石・砂粒含む 粘土は暗灰色～灰緑色
17	側溝7上層	窓葉裏	口縁部斜～肩部 輪積み成形 粘土は明灰褐色、素色粒子・白色粒子・微細骨含む 口縁部内側釉崩毛端し、肩部には薄い灰釉が吹き抜けかかるつく
18	側溝7上層	糞便塊	口縁部斜～肩部 輪積み成形 粘土は灰色、長石・石英含む
19	側溝7上層	糞便塊	口縁部斜～肩部 輪積み成形 粘土は灰色、長石・石英含む 粘土は暗灰色
20	側溝7上層	糞便 塵	口縁部斜～肩部 輪積み成形 粘土は灰色、長石・白色粒子含む 地刷毛通りの上に降灰だらつく
21	側溝7上層	糞便塊	肩部斜 輪積み成形 粘土は淡褐色、素色粒子・白色粒子・微細骨含む 粘土は暗灰色 菊瓣・叩き目あり
22	側溝7上層	平瓦	厚1.8cm 粘土は淡褐色、素色粒子・白色粒子・微細骨含む 白面・圓面とへつ跡など
23	側溝7上層	瓦瓦	厚1.8cm 粘土は灰褐色～灰褐色、白色微細骨含み灰褐色模様ある 白面自然模、圆面和目
24	側溝7上層	輪羽口	厚3.3cm 粘土は灰褐色骨質土、白色粒子・多量の砂礫を含む
25	側溝7上層	不明金属製品	鉄製品 厚0.15mm 径3.0mmの丸貫通
26	側溝7上層	鉄釘	長10.8cm 幅0.5cm 厚0.4cm
27	側溝7上層	鉄釘	長12.5cm 幅0.7cm 厚0.5cm
28	側溝7上層	灰ならら?	残存長4.4cm 幅9.2cm 厚0.7cm 片面が一部焼化
29	側溝7上層	下駄	長17.4cm 幅8.79cm 厚3.2cm
30	側溝7上層	下駄靴	底高(4.9)cm 最大幅(9.2)cm 厚2.5cm 鉄釘1本残存
31	側溝7上層	不明木製品	長14.0cm 幅4.4cm 厚0.9cm 残木目
32	側溝7上層	漆器皿	無高台 内・外とも墨塗り、内面に朱漆で蓋の文様
33	側溝7上層	柳枝木製品	長35.4cm 幅2.4cm 厚2.0cm 圓柱状成形、両端も丸めてある 残断一箇所残存、貫通した小孔も一個所、打の跡?痕か
34	側溝7上層	柳枝木製品	口縁部斜 ロクロ成形 粘土は淡褐色灰、底緑色灰角ハケ添り
35	側溝7上層	柳枝木製品	長15.8cm 幅0.9cm 厚0.3cm
36	側溝7上層	漆	長15.9cm 幅0.7cm 厚0.4cm 圓口
37	側溝7上層	漆	長17.6cm 幅0.5cm 厚0.45cm 片口
38	側溝7上層	柳枝木製品	長24.8cm 幅0.9cm 厚1.0cm
39	側溝7上層	漆	長29.2cm 幅0.6cm 厚0.6cm
40	側溝7上層	無材	長14.8cm 幅7.1cm 厚4.4cm
41	側溝7上層	無材	長15.95cm 幅7.4cm 厚0.6cm 残木目
42	側溝8-9上	土師器皿T種 小型	口径8.8cm 高1.7cm 内底部ナゲ 粘土は淡褐色、海綿骨芯・砂粒を含む 口縁部に施様の付着と打ち欠きあり
43	側溝8-9上	土師器皿T種 大型	口径13.8cm 高2.7cm 内底部ナゲ 粘土は淡褐色、白色粒子・砂粒を含む 内側の半分間に透疊付着

表 6 出土遺物観察表 (6)

部品番号	出土遺物	種別	備考
44	側溝8-9-10	土師器皿T種 大型	口径14.0cm 器高3.0cm 内底部ナデ 脱土は淡褐色、赤色粒子・海綿骨芯・砂粒を含む
45	側溝8-9-10	土師器皿 R種 小型	口径8.4cm 底径6.8cm 器高2.1cm 右回転ロクロ 底面系切り 外底部板状底 内底部ナデ 脱土は褐色、白色粒子・海綿骨芯・砂粒を含む
46	側溝8-9-10	土師器皿R種 小型	口径9.0cm 底径8.8cm 器高1.4cm 右回転ロクロ 底面系切り 外底部板状底 内底部ナデ 脱土は褐色、白色粒子・砂粒を含む
47	側溝8-9-10	土師器皿R種 小型	口径8.9cm 底径8.9cm 器高1.7cm 右回転ロクロ 底面系切り 外底部板状底 内底部ナデ 脱土は褐色、白色粒子・砂粒を含む
48	側溝8-9-10	土師器皿R種 大型	口径14.6cm 底径9.7cm 器高3.0cm 右回転ロクロ 底面系切り 外底部板状底 内底部ナデ 脱土は褐色、白色粒子を含む
49	側溝8-9-10	瓶	口縁部片 縦積み成形 脱土は灰色
50	側溝8-9-10	白磁反復	口径19.5cm ロウア式形 壁厚1.8cm 黒色瓶底子含む 脱土淡青灰色不透明で気泡・貫入あり
51	側溝8-9-10	電球底骨瓶	縦縫～体感片 ロウア式形 基地は灰褐色、釉面淡緑色半透明 内側に丸みひと筋目による所要文
52	側溝8-9-10	瓦片	厚2.0cm 脱土は白色粒子を含む灰色織密土 古面は網目、凹面は圓周のら凧で削し
53	側溝8-9-10	漆漆刷	黒漆刷9.1cm 内側に火漆で鳥の翼部分が墨される文様、外側に同じく鳥の翼部分が文様焼かれる
54	側溝8-9-10	刷	残存長16.0cm 幅1.2cm 厚2.3cm 紋封日本酒残
55	側溝8-9-10	不明木製品	長11.35cm 幅1.5cm 厚0.6cm 一端は斜めに切断 小孔1貫通
56	側溝8-9-10	筆	長21.2cm 幅0.7cm 厚0.6cm両口
57	側溝8-9-10	筆	長18.5cm 幅0.6cm 厚0.4cm両口
58	側溝8-9-10	棒状木製品	長20.5cm 幅1.4cm 厚0.6cm
59	側溝8-9-10	串棒状木製品	長37.7cm 幅1.2cm 厚0.35cm 先端は炭化
60	側溝7西添	土師器皿T種 大型	口径14.3cm 器高3.1cm 内底部ナデ 脱土は淡褐色、海綿骨芯・砂粒を含む
61	p. 98	土師器皿T種 小型	口径8.4cm 器高1.2cm 内底部ナデ 脱土は淡褐色、雲母片・砂粒を含む
62	p. 98	漆漆刷	底面部片 縦積み成形 脱土は灰色、長右毛 内底面に焼灰
63	p. 98	漆漆刷	口径8.15cm 器高1.55cm 内折れ 内底部ナデ 脱土は褐色、赤色粒子・砂粒を含む
図22-1 領溝一括			
1	側溝一括	土師器皿T種 小型	口径7.3cm 器高1.6cm 内折れ 内底部ナデ 脱土は褐色、赤色粒子・海綿骨芯・砂粒を含む
2	側溝一括	土師器皿T種 小型	口径7.3cm 器高1.65cm 内折れ 内底部ナデ 脱土は褐色、赤色粒子・砂粒を含む
3	側溝一括	土師器皿T種 小型	口径7.3cm 器高1.65cm 内折れ 内底部ナデ 脱土は褐色、赤色粒子・海綿骨芯・砂粒を含む
4	側溝一括	土師器皿T種 小型	口径8.55cm 器高2.1cm 内底部ナデ 脱土は淡褐色、海綿骨芯を含む
5	側溝一括	土師器皿T種 小型	口径8.5cm 器高1.95cm 内底部ナデ 脱土は褐色、赤色粒子・海綿骨芯を含む
6	側溝一括	土師器皿T種 小型	口径8.6cm 器高1.75cm 内底部ナデ 脱土は淡褐色、海綿骨芯・砂粒を含む
7	側溝一括	土師器皿T種 小型	口径8.7cm 器高1.55cm 内底部ナデ 脱土は褐色、白色粒子・海綿骨芯を含む
8	側溝一括	土師器皿T種 小型	口径9.0cm 器高1.45cm 内底部ナデ 脱土は淡褐色～褐色、赤色粒子・海綿骨芯を含む
9	側溝一括	土師器皿T種 小型	口径8.8cm 器高1.6cm 内底部ナデ 脱土は褐色～赤褐色、海綿骨芯含む
10	側溝一括	土師器皿T種 小型	口径8.5cm 器高1.85cm 内底部ナデ 脱土は淡褐色、赤色粒子・海綿骨芯・砂粒を含む
11	側溝一括	土師器皿T種 小型	口径9.8cm 器高1.85cm 内底部ナデ、内底面波状に変形 脱土は淡褐色、赤色粒子、白色粒子・微砂粒を含む
12	側溝一括	土師器皿T種 小型	口径9.7cm 器高1.7cm 内底部ナデ 脱土は褐色、赤色粒子・海綿骨芯・白色粒子を含む
13	側溝一括	土師器皿T種 大型	口径9.9cm 器高1.85cm 内底部ナデ 脱土は淡褐色、赤色粒子・砂粒を含む
14	側溝一括	土師器皿T種 小型	口径9.05cm 器高1.6cm 内底部ナデ 脱土は淡褐色、白色粒子・海綿骨芯含む
15	側溝一括	土師器皿T種 小型	口径8.4cm 器高1.65cm 内底部ナデ 脱土は淡褐色、赤色粒子・砂粒を含む
16	側溝一括	土師器皿T種 大型	口径11.7cm 器高3.4cm、外底部板状底 内底部ナデ 脱土は褐色、赤色粒子・海綿骨芯・砂粒を含む
17	側溝一括	土師器皿T種 大型	口径13.2cm 器高3.4cm 内底部ナデ 脱土は淡褐色、赤色粒子・海綿骨芯を含む
18	側溝一括	土師器皿T種 大型	口径13.2cm 器高3.4cm 内底部ナデ 脱土は淡褐色、赤色粒子・海綿骨芯含む
19	側溝一括	土師器皿T種 大型	口径13.6cm 器高3.0cm 内底部ナデ 脱土は淡褐色、赤色粒子・海綿骨芯・砂粒を含む
20	側溝一括	土師器皿T種 大型	口径12.6cm 器高2.9cm 内底部ナデ 脱土は淡褐色、赤色粒子・海綿骨芯を含む
21	側溝一括	土師器皿T種 大型	口径12.8cm 器高3.15cm 内底部ナデ 脱土は褐色、赤色粒子・海綿骨芯・白色粒子含む
22	側溝一括	土師器皿T種 大型	口径13.3cm 器高3.2cm 内底部ナデ 脱土は淡褐色、赤色粒子・海綿骨芯・砂粒を含む
23	側溝一括	土師器皿T種 大型	口径12.85cm 器高3.1cm 内底部ナデ 脱土は淡褐色、赤色粒子・海綿骨芯・白色粒子含む
24	側溝一括	土師器皿T種 大型	口径12.6cm 器高2.75cm 内底部ナデ 脱土は淡褐色、赤色粒子・海綿骨芯・砂粒・赤色大粒砂を含む 口縁部に油焼付着

表7 出土遺物觀察表(7)

桿番号	出土遺構	種別	備考
25	側溝一括	土師器皿R種 小型	口径7.9cm 底径6.8cm 器高1.5cm 右回転クロ 収面系切り 内底部ナデ 磁土は淡褐色、赤色粒子・海綿骨芯・砂粒を含む。
26	側溝一括	土師器皿R種 小型	口径9.0cm 底径7.8cm 器高1.7cm 収面系切り 内底部ナデ 磁土は淡褐色、赤色粒子・海綿骨芯・微砂粒を含む。
27	側溝一括	土師器皿R種 小型	口径8.75cm 底径7.8cm 器高1.5cm 右回転クロ 底面系切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 磁土は淡褐色、赤色粒子・海綿骨芯・砂粒を含む。
28	側溝一括	土師器皿R種 小型	口径8.7cm 底径8.6cm 器高1.6cm 右回転クロ 収面系切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 磁土は淡褐色、赤色粒子・海綿骨芯・微砂粒を含む。
29	側溝一括	土師器皿R種 小型	口径8.7cm 底径8.6cm 器高1.5cm 右回転クロ 収面系切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 磁土は淡褐色、赤色粒子・海綿骨芯・白色粒子を含む。
30	側溝一括	土師器皿R種 小型	口径8.5cm 底径7.2cm 器高2.0cm 右回転クロ 収面系切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 磁土は淡褐色、赤色粒子・海綿骨芯・含む。
31	側溝一括	土師器皿R種 小窓	口径8.5cm 底径8.5cm 器高1.7cm 右回転クロ 収面系切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 磁土は淡褐色、赤色粒子・海綿骨芯・含む。
32	側溝一括	土師器皿R種 小窓	口径8.3cm 底径7.8cm 器高1.75cm 右回転クロ 収面系切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 磁土は淡褐色、赤色粒子・海綿骨芯・砂粒を含む。
33	側溝一括	土師器皿R種 小窓	口径8.4cm 底径6.0cm 器高1.8cm 右回転クロ 収面系切り 内底部ナデ 磁土は淡褐色、赤色粒子・海綿骨芯・砂粒を含む。
34	側溝一括	土師器皿R種 小窓	口径8.3cm 底径6.7cm 器高1.9cm 右回転クロ 収面系切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 磁土は淡褐色、白色粒子・含む。
35	側溝一括	土師器皿R種 小型	口径8.95cm 底径6.8cm 器高1.6cm 右回転クロ 収面系切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 磁土は淡褐色、赤色粒子・海綿骨芯・砂粒を含む。
36	側溝一括	土師器皿R種 小型	口径8.9cm 底径6.6cm 器高1.6cm 右回転クロ 収面系切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 磁土は淡褐色、微砂粒・白色粒子・含む。
37	側溝一括	土師器皿R種 小型	口径8.15cm 底径7.0cm 器高1.65cm 右回転クロ 収面系切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 磁土は淡褐色、赤色粒子・白色粒子・白色粒子・含む。
38	側溝一括	土師器皿R種 小型	口径8.6cm 底径6.6cm 器高1.6cm 右回転クロ 収面系切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 磁土は淡褐色、赤色粒子・白色粒子・白色粒子・含む。
39	側溝一括	土師器皿R種 小型	口径8.4cm 底径6.4cm 器高1.7cm 右回転クロ 収面系切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 磁土は淡褐色、赤色粒子・白色粒子・白色粒子・含む。
40	側溝一括	土師器皿R種 小型	口径8.5cm 底径6.7cm 器高2.0cm 右回転クロ 収面系切り 内底部ナデ 磁土は淡褐色、赤色粒子・白色粒子・白色粒子・含む。
41	側溝一括	土師器皿R種 小型	口径8.6cm 底径6.7cm 器高1.7cm 右回転クロ 収面系切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 磁土は淡褐色、赤色粒子・海綿骨芯・白色粒子・砂粒を含む。
42	側溝一括	土師器皿R種 小型	口径7.9cm 底径6.4cm 器高2.3cm 右回転クロ 収面系切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 磁土は淡褐色、赤色粒子・砂粒を含む。
43	側溝一括	土師器皿R種 小型	口径7.8cm 底径4.8cm 器高1.8cm 右回転クロ 収面系切り 内底部ナデ 磁土は淡褐色、赤色粒子・白色粒子・白色粒子・含む。
44	側溝一括	土師器皿R種 中窓	口径10.6cm 底径8.8cm 器高2.6cm 右回転クロ 収面系切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 磁土は肌色、赤色粒子・白色粒子・微砂粒を含む。
45	側溝一括	土師器皿R種 中窓	口径10.6cm 底径8.8cm 器高2.8cm 右回転クロ 収面系切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 磁土は淡褐色、赤色粒子・白色粒子・砂粒を含む。
46	側溝一括	土師器皿R種 中窓	口径11.7cm 底径8.6cm 器高3.2cm 右回転クロ 収面系切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 磁土は淡褐色、赤色粒子・白色粒子・砂粒を含む。
47	側溝一括	土師器皿R種 大型	口径13.2cm 底径9.6cm 器高3.5cm 右回転クロ 収面系切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 磁土は淡褐色、赤色粒子・白色粒子・砂粒を含む。
48	側溝一括	土師器皿R種 大型	口径13.2cm 底径9.5cm 器高3.15cm 右回転クロ 収面系切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 磁土は淡褐色、赤色粒子・白色粒子・砂粒を含む。
49	側溝一括	土師器皿R種 大型	口径12.6cm 底径9.8cm 器高3.1cm 右回転クロ 収面系切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 磁土は淡褐色、赤色粒子・白色粒子・砂粒を含む。
50	側溝一括	土師器皿R種 大型	口径12.6cm 底径9.6cm 器高3.2cm 右回転クロ 収面系切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 磁土は淡褐色、赤色粒子・白色粒子・砂粒を含む。
51	側溝一括	土師器皿R種 大型	口径12.3cm 底径9.5cm 器高3.15cm 右回転クロ 収面系切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 磁土は肌色、赤色粒子・海綿骨芯・白色粒子・含む。
52	側溝一括	土師器皿R種 大型	口径12.5cm 底径9.5cm 器高3.55cm 右回転クロ 収面系切り 内底部ナデ 磁土は淡黄灰色、赤色粒子・白色粒子・砂粒を含む。
53	側溝一括	土師器皿R種 大型	口径13.8cm 底径9.4cm 器高3.5cm 右回転クロ 収面系切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 磁土は淡褐褐色、赤色粒子・海綿骨芯・砂粒・白色粒子を含む。
54	側溝一括	土師器皿R種 大型	口径12.9cm 底径9.4cm 器高3.1cm 右回転クロ 収面系切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 磁土は淡褐色、赤色粒子・白色粒子・砂粒を含む。
55	側溝一括	土師器皿R種 大型	口径12.0cm 底径8.5cm 器高3.2cm 右回転クロ 収面系切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 磁土は淡褐色、赤色粒子・海綿骨芯・砂粒を含む。
56	側溝一括	土師器皿R種 大型	口径12.05cm 底径7.8cm 器高3.0cm 右回転クロ 収面系切り 内底部ナデ 磁土は淡褐色、赤色粒子・白色粒子・砂粒を含む。
57	側溝一括	土師器皿R種 大型	口径13.1cm 底径8.8cm 器高3.3cm 右回転クロ 収面系切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 磁土は淡褐色、赤色粒子・海綿骨芯・白色粒子・砂粒を含む。
58	側溝一括	土師器皿R種 大型	口径12.2cm 底径9.4cm 器高2.85cm 右回転クロ 収面系切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 磁土は淡褐色、赤色粒子・海綿骨芯・砂粒を含む。
59	側溝一括	土師器皿R種 大型	口径12.15cm 底径7.7cm 器高3.6cm 右回転クロ 収面系切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 磁土は淡褐色、赤色粒子・海綿骨芯・砂粒を含む。
60	側溝一括	土師器皿R種 大型	口径12.1cm 底径8.6cm 器高3.3cm 右回転クロ 収面系切り 内底部ナデ 磁土は淡褐色、赤色粒子・海綿骨芯・砂粒を含む。
61	側溝一括	白色土師器皿 T種大型	口縁部 施白乳白色 脊に塗墨少墨付着
62	側溝一括	白色土師器皿 T種大型	口縁部 施白乳白色 脊に塗墨少墨付着
63	側溝一括	瓦絃小皿	器高0.35cm 外底部指痕 内所れ 磁土は明灰色、器表は灰褐色

表8 出土遺物観察表(8)

標番号	出土遺物	種別	備考
64	側溝一括	常滑口鉢I類	口縁部 輪積み成形 色土は明灰色、長石・砂粒含む
65	側溝一括	常滑口鉢I類	口縁部 輪積み成形 色土は灰褐色、白色微粒子含み散在
66	側溝一括	常滑口鉢I類	口径(31.1)cm・高台径(10.0)cm 器高14.7cm 輪積み成形 色土は灰褐色、長石・石英・黑色微粒多く含む 内底面は使用により少し剥離する
67	側溝一括	常滑口鉢II類	口縁部 輪積み成形 色土は暗灰褐色、長石・石英・黑色微粒多く含む 器表茶褐色
68	側溝一括	常滑口鉢II類	口径(29.3)cm・高台径(14.9)cm 器高11.3cm 輪積み成形 色土は暗灰褐色、長石含む 器表面茶褐色 内側全体に厚めの降灰
69	側溝一括	陶瓦焼	輪積部 色土は灰褐色、器表は暗灰褐色 格子叩き目
823-70	側溝一括	常滑焼	輪積部 色土は灰褐色、白色粒子・気泡含む 器表茶褐色 内底面に薄灰
71	側溝一括	段差焼	口縁部 輪積み成形 色土は灰褐色、白色粒子少々含む 器表灰褐色
72	側溝一括	段差焼	口縁部 輪積み成形 色土は淡灰褐色、白色粒・気泡含む 器表茶褐色
73	側溝一括	白磁焼反彌	口縁部 ロクロ成形 薄地は白色、黑色微粒子含む 色は青灰灰白色透明
74	側溝一括	白磁焼反彌 窓井又窓	口径(17.2)cm ロクロ成形 薄地は灰褐色 色は淡青色透明
75	側溝一括	電氣窯青磁壺 余文瓶	底径3.6cm ロクロ成形 削り出し高台、器み付きのみ輪積 薄地は淡灰褐色 大き目の貫入
76	側溝一括	電氣窯青磁壺 綠縁	ロクロ成形 素地は明灰色、黑色粒子含む 色は灰褐色不透明
77	側溝一括	電氣窯青磁壺	花文または大字府日漸窓 底径6.0cm ロクロ成形 削り出し高台、器み付きより内側は露胎 薄地は灰色、黑色粒多々含む 色は淡灰綠色半透明
78	側溝一括	平底	厚1.9cm 色土は明灰色、砂質・鐵を含む 色面は網目、防歎は布且のら萬で削し
79	側溝一括	平底	厚2.7cm 色土は白色灰・黒色灰・鐵を含む灰褐色 色面は格子叩き目、画面は粗目少し残る
80	側溝一括	鰐鱗系平底	厚2.2cm 色土は板状灰褐色、白色微粒子含み堅く焼き締まる。白地は膜耳、画面に粗目
81	側溝一括	鰐鱗系平底	厚2.0cm 色土は淡灰褐色、白色粒・砂粒を含み、堅く焼き締まる 表面は明茶褐色 白面は布目のみナフ削し、画面は布目
82	側溝一括	彌谷器皿	口径8.9cm・底径6.0cm 厚0.6cm 黒邊削り、平高台で外延まで施す 内・外とも生地で織文を擦ぐ
83	側溝一括	油器碗	底径1.1cm 黑邊削り、織文 平高台で外底面は木地、擦耗してテコボシしている
84	側溝一括	蓋	長23.2cm 幅0.65cm 厚0.6cm 片口
85	側溝一括	蓋	厚23.3cm 幅0.7cm 厚0.7cm 口凹
86	側溝一括	蓋	長21.6cm 幅0.7cm 厚0.3cm 口凹
87	側溝一括	車状木製品	残存長(18.5)cm 幅0.9cm 厚0.7cm 一端が尖り、炭化している
88	側溝一括	ヘーベル製品	残存長(17.9)cm 幅0.9cm 厚0.7cm
89	側溝一括	車状木製品	長15.4cm 幅0.9cm 厚0.6cm
90	側溝一括	ヘーベル製品	長14.6cm 幅1.1cm 厚0.4cm
91	側溝一括	神社木製品	長21.5cm 幅1.2cm 厚0.5cm 一端は斜めに切断 反対の端は丸く削りを施した化
92	側溝一括	ヘーベル製品	残存長(13.1)cm 幅1.4cm 厚0.7cm
93	側溝一括	神社木製品	長35.8cm 幅1.0cm 厚0.8cm 一端にU字型の削り
94	側溝一括	折鉢	長18.6cm 幅5.7cm 厚0.3cm 継目材
95	側溝一括	円筒状木製品	直径(21.1cm) 幅(2.4)cm 厚(0.8)cm 継目材
96	側溝一括	不明木製品	長8.1cm 幅2.6cm 厚1.0cm 断面直錐型
97	側溝一括	木材	長(9.4)cm 幅16.4cm 厚2.8cm 一部炭化
四24-1	中世以前	土師壺	底径8.9cm・右側面ロクロ 底面余切引 内底部ナデ 色土は灰褐色、雲母片・白色粒子・砂粒を含む
2	中世以前	羽根焼	底径8.6cm・右側面ロクロ 底面余切引 色土は灰褐色、白色粒子・砂粒を含む
3	中世以前	羽根焼	高台径(7.8)cm 回転ロクロ 端付け高台 色土は灰褐色、白色粒子を含み堅膜
4	遺構外探集	土師壺R種	口径8.9cm・底径3.3cm 高さ1.4cm 右側面ロクロ 底面余切引 外底部板状圧痕 内底部ナデ 色土は灰褐色、赤色粒子・白色粒子・砂粒を含む質土
5	遺構外探集	東邊系山腹	口径8.0cm・底径3.8cm 右側面ロクロ 底面余切引 色土は明灰褐色、黑色粒子・白色粒子少々含み堅膜あり 外底面に焼成銀盤
6	遺構外探集	西牆	口径(14.6)cm 色土は黄灰褐色 膜部にサクラ状工具痕、極木脊
7	遺構外探集	南伊勢石綿	口縁部 色土は淡灰褐色、白色粒子・砂粒を多く含む 膜表は肌色～乳白色
8	遺構外探集	御美焼	瓶頭～前部片 輪積み成形 色土は灰褐色、白色粒子・黒色粒子含む 膜表は暗灰色、叩き目あり
9	遺構外探集	御美焼	口縁部～瓶肩部 輪積み成形 色土は灰褐色、白色粒子・黒色粒子含む 膜表は元色、叩き目あり
10	遺構外探集	下駄膚	長10.3cm 幅12.0cm 厚2.4cm
11	遺構外探集	部材	長(30.0)cm 幅6.1cm 厚3.4cm 角丸い頭の部分に鋸ぐぎ残存 一部炭化

第4章　まとめと考察

1. 遺構の変遷について

本地点調査で発見された遺構について、その変遷をあらためてまとめておきたい。ただし平坦面の方はほとんど基盤層近くまで後世に削りとられているため、残存遺構についても構築年代の詳細はわからず、年代別に面の変遷を追うこともできない。結局、本項記述の主体は小町大路側溝とその関連遺構についてのものとなる。検出した10条の側溝に関しては、それが全面的な改修であるのかあるいは浚渫程度のものなのかという判断はつきかねるため、ここではすべての側溝を同等に扱う。

なお、以下で小町大路幅を推測する場合に本地点対岸として引き合いに出す「地点27」(図1 地点番号)は、「若宮大路周辺遺跡群」小町二丁目402番9地点(馬淵・伊丹2007)を指す。

大路の東西側溝間の距離は、側溝中心軸間の数値である。側溝間の距離を測定する主目的は大路幅を知ることにある。中世日本各地の都市計画を比較するためにも、これは不可欠の作業であると考えるが、それに統一的な測定法が前提となる。道路幅の測定には、都城でおこなわれているような築地または土壌の中心軸間の距離を使うのも有効であろう。しかし、鎌倉においては現在までに大路そのものはもちろん、築地や土壌の痕跡も検出されていないため、ここではかねて筆者が若宮大路においておこなったと同様(馬淵1987/馬淵ほか1996)、側溝中心軸間の距離を用いる。なお、本調査においては、大半の側溝の東岸が東側調査区外にあり、全体を把握できた例は少ない。そのため、数値の多くは推計によったことを了解していただきたい。

中世Ⅰ期

小町大路側溝10の時期が相当する。調査区の限りでこれより古い側溝はなく、大路反対側の(東側)地点27で発見されたような自然流路も存在しない。おそらく源頼朝入部直後、鎌倉時代の最初の大路側溝であろう。地点27では「第2期」(「3面」)が対応する。なお、若宮大路の側溝でいえば、やはり当初は逆台形を呈しており、本址との年代的な共通性は注意を要する。

上部幅は現況で235cm以上、おそらく3m近くに復元される。深さは平坦面から2.5mほどもある逆台形の大溝である。護岸設備については、ほとんどを後世の側溝に削られているためか、存否はわからない。大路東側溝のうち鎌倉時代初期のものとの間隔は、中心軸で22m前後である。

中世Ⅱ期

小町大路側溝8の時期になる。本址に特定される遺物を欠くため年代判定は困難だが、前後の側溝との相対的な関係から、12世紀末～13世紀第1四半期に位置づけたい。断面形は逆台形のままで変わらないが、側溝10より10～20cmほど底が上がり、幅も底面で175cm程度と大幅に縮小される。また、側板こそ残っていないものの、東岸には杭がよく残っており、護岸の施設のあったことがわかる。10の浚渫というより、大路側溝の全面的な改修と考えるべきであろう。

大路反対側の地点27調査との対比ではやはり「第2期」に相当する。側溝個別の対応関係の判断には困難がともなうので厳密な数値は得づらいが、地点27「第2期」とされる「第3面」検出の側溝との間隔は、概測で22～23mとなる。

中世Ⅲ期

小町大路側溝9の時期が相当する。先章で述べたとおり、8との新旧関係の判定には微妙なところ

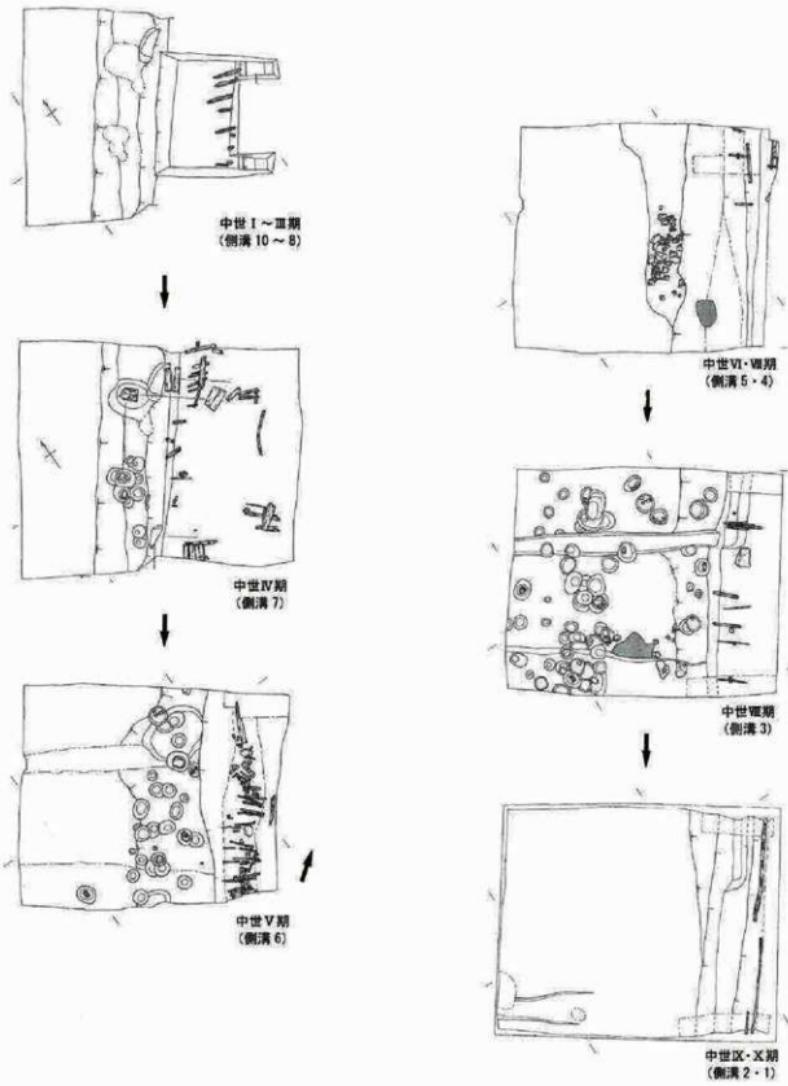


図 25 遺構変遷図

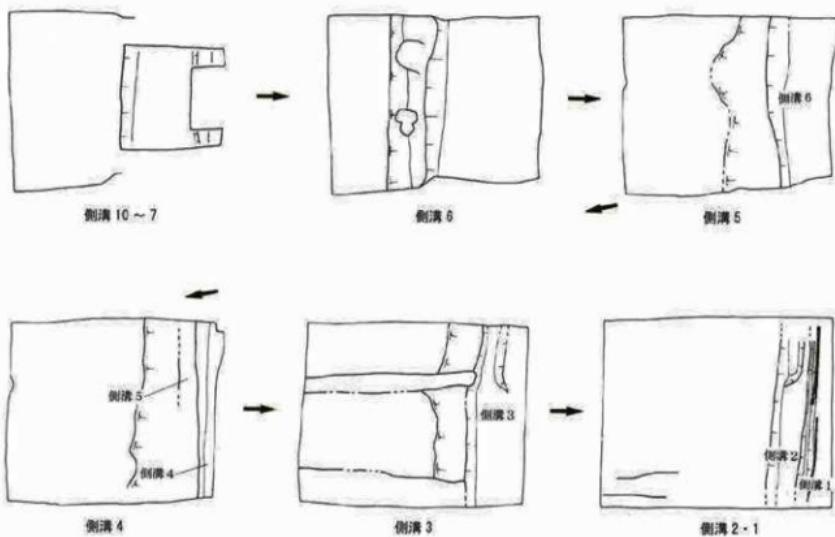
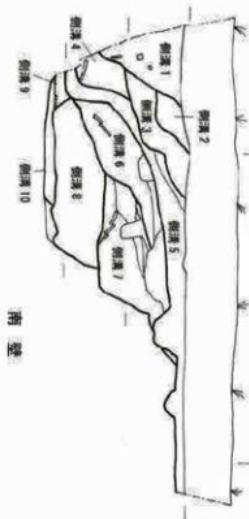
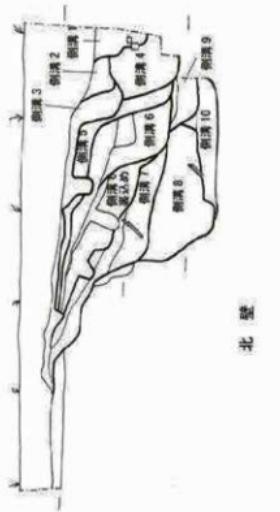


図 26 小町大路側溝変遷模式図

ろがあるものの、ここでは本址が新しいと判断した。年代は、これも前後の相対関係から 13 世紀第 1 四半期を充てたい。深さは平坦面から 2.1m ほどもあり、幅はわからないが、これも相当な規模があると推測できる。大路東側の調査地点 27 との対比では依然「第 2 期」に含まれる。

地点 27 檜出溝との対応関係は難しいが、第 2 期の側溝のうち層位的に中位のものとあえて組み合わせれば、ほぼ 23m 前後となる。

中世IV期

小町大路側溝 7 の時期が該当する。溝幅は 2.5m になり、深さは 185cm と、幅に比べ浅くなる。断面はそれ以前の逆台形と異なって箱形に近くなり、上層溝に削られて遺存状態こそよくないものの、この時点でしっかりと木枠を持つようになる。木枠の幅は、東半部が調査区外にあり正確にはわからないが、3m ほどになるのではないか。

年代は 13 世紀第 1 四半期～第 2 四半期。若宮大路側溝が、やはりこの時期箱形の断面で木枠を備えるようになる。共通性に注意する必要があろう。この点については後述する。

地点 27 の大路東側との対比は相変わらず難しいが、年代からいって「第 3 期」に相当すると考えたい。側溝といえば東側にも木枠の一部を残すものがあり（馬淵・伊丹 2007, 196 頁図 15）、対応関係が認められる。このとき東西側溝間の距離はもっとも大きく、推定で約 24m である。

橋脚が検出されていることに注目したい。この時期にこの場所に東西の道路が敷設されたことになる。つまり、あらたな街割区画がここに出現したことを意味する。これはきわめて重大な事実であり、背景については後論する。

中世V期

小町大路側溝 6 の時代である。平坦面からの深さ 2m を超え、幅は調査区内でも 180 cm を測る。土層堆積状況から推測すれば幅は 3m ほどにもなろう。護岸設備については、側板の遺存状態は良好ではないが、杭などの部材がよく残っているので、断面箱形の木枠を備えていたことが推測できる。規模は鎌倉時代中期～後期の最盛期若宮大路側溝に匹敵し、護岸にも共通性が認められる。ただし本址といえば、出土遺物に土師器皿 T 種や竜泉窯青磁画花文碗などが多く含まれている。これらはかねて筆者が主張しているように、13 世紀第 2 四半期前半までに姿を消すとみられるところから（馬淵 1998 ほか）、ここでの年代も 13 世紀第 2 四半期としておきたい。

小町大路東西側溝の間隔は、前代よりも若干縮小し、約 22m となる。

中世VI期

側溝 4 が該当する。大半削られているので幅は 1m ほどしか残っていない。しかし深さは、上半部を失ってもなお平坦部から 2m 近くあり、若宮大路側溝に匹敵する。溝の西半部しかとらえられなかつたが、西岸護岸施設の木製部材が確認された。底面標高から推測して雪ノ下一丁目 400 番 1 地点（図 1 地点 4）の「側溝 3」に相当する可能性が高く、両者の軸線を延長させて計測すると側溝幅は約 3m になる。

位置的には大幅に東（小町大路側）に移行しており、地点 27 の小町大路東側溝との間隔は、27 の方にぶれ幅が小さいことを勘案すれば推定で 21m 前後となる。

掘削時の錯誤から下層の側溝 6 と遺物の混入があった。そのため年代はやや流動的であるが、出土遺物のみでいえば、2 点の竜泉窯青磁画花文碗の存在、土師器皿 T 種の存在と同 R 種の形状から、ひとまずこれも前代と変わらず、13 世紀前半としておく。

中世Ⅷ期

側溝 5 の時期を充てたい。後世の側溝にほとんどを削り取られ、本来の姿をうかがい得ない。現況遺存部分は深さ 1m 稲と浅く、断面は皿形を呈する。本址にともなう橋脚は確認できなかったが、平坦面からの落ち際に大小泥岩の集積が見られるのは、あるいは道路の痕跡かもしれない。

側溝 5 出土遺物は混亂しているが、年代は大きくみてこれも 13 世紀前半に属する。

中世Ⅸ期

側溝 3 の時期が相当する。当該面西域の平坦部にはいくつもの柱穴がみられる。これは基盤層まで後世の削平がおよんでいてほとんどが同一面で検出されたためである。したがって、本来この層に帰属するのではない柱穴も含まれている可能性もある。

側溝 3 はこれまでのものに比べ、平坦面からの深さ 1m と浅くなる。側溝底面には護岸構造の東柱らしい杭が水流と直交方向に倒れていた。西側の平坦面には東西方向に 2 本の溝が平行して通じ、この間にある帶状の平坦面が道路である可能性が高い。これが道路であることは、その延長上の大路側溝中に橋脚の礎板らしい平たい凝灰岩が存在していることからも理解される。

このとき大路東西の側溝の間隔はおよそ 22m である。

側溝 3 の年代は 13 世紀中葉前後であるが、帶状平坦部の範囲内にある土師器集中部は同第 2 四半期とみられることから、全体としては 13 世紀前半～中葉としておきたい。

中世Ⅹ期

側溝 2 が相当する。多くを後代の側溝 1 に削られているが、幅 100 cm 以上、深さ 85cm 以上を残す。側溝 1 に据えられた木枠などの控えにかかる施設の可能性も消えないが、側溝 1 より 70cm ほども浅く、やはり独立した側溝とみるのが自然であろう。大路東側地点 27 検出の側溝との間隔は、21 ～ 22m となる。

側溝 1 との遺物区分が厳密ではないが、図 5 にみる年代は 13 世紀後半～14 世紀前半の典型的な鎌倉時代後期の様相を呈している。1 が鎌倉時代いっぱいまで存続するとすれば、2 は相対的な位置づけから、13 世紀末ごろまでとしたい。

中世Ⅺ期

側溝 1 の時期になる。本地点に残る最後の小町大路側溝である。これより上部は後世に削り取られてほとんど残っていない。これまで最も東に寄っており、大半が調査区外にある。調査区内には西側根太しか見えていない。幅は調査区内で 122 cm を超え、深さ 143cm 以上。深さはおそらく 1.5m ほどになるのだろう。小町大路西側溝で同様の根太を持つ側溝は、地点 4（雪ノ下一丁目 400 番 1 地点）でも検出されている。地点 4 では層位的に同時期とみられる大路西側溝の東層部分を検出した。本地点と地点 4 それぞれの根太を延長して算出した溝の間隔は約 3m である。これがこの時期の小町大路側溝とすれば、若宮大路側溝と同規格の溝を擁していたことになる。

北側の根太にはホゾ穴があるが、南側にはない。前代までこの位置には橋があり、この時期にも見つかってはいないものの存在していた可能性は低くない。その点で他と異なる構造を持っていたのかもしれない。平坦部は後代に削られ、ほとんどの遺構が失われているが、東西溝 1 から道路の存在が推測できる。

年代は 13 世紀後半～14 世紀前半、すなわち鎌倉時代後期いっぱいとしておきたい。

2. まとめ

調査成果の要点を以下のように整理し、まとめとする。

小町大路側溝の形態変化について

鎌倉時代初期、小町大路側溝はまず、逆台形の深い溝として現れ（「中世Ⅰ期」側溝10）、位置をいくらか変えつつ、13世紀第1四半期ごろまでその形状を保ちながら推移する（側溝8・9）。そして、13世紀第1四半期から同第2四半期にかけて形を大きく変える（「中世Ⅳ期」）。すなわち、幅に比べ深さが浅く、断面箱型の木枠を持つようになる（側溝7）。そして以後箱型の木枠は、鎌倉時代後期を通じて維持される。つまり、側溝7の出現は、この地点の側溝構造における明白な画期を示している。

この点に関して注目すべきは、若宮大路側溝においても、この時期同様の変化が見られることである。すなわち、若宮大路東側の側溝において、それまで逆台形もしくはV字形の断面を持っていたのが、13世紀前半、箱型の木枠を備えるようになる。

かつて馬淵は、図1地点8（「北条小町邸跡」雪ノ下一丁目377番7地点）の調査において、街割基本寸法の変化と年代からこの現象を、第三代執権北条泰時による街区再編事業の一環と考えたことがある（馬淵ほか1996）。このとき木枠で示される溝幅はほぼ3m（「溝5・6」）、同時期に大路西側の側溝も同様の構造に整備される。この状況は少なくとも二ノ鳥居近くまでおよぶ。側溝と側溝の間隔は約33m、年代的には大きくなって13世紀前半代に始まる。そして、この溝にともなう面上の建物柱間は、それまでの約210cm前後とは異なって一律に200cm弱に統一される。ここに見られるのは強力な規制によって街区が一新される状況であり、それは権力によってはじめて可能な事業であろう。年代からいってもこれこそが、嘉禄元年（1225）以後、新執権北条泰時がおこなった街区再編の具体的表現と考える。

とすると、本地点における木枠溝の出現も、その一環ととらえることができるのではないか。木枠の幅については、厳密な数値を欠くものの、3mほどになると推定される。この数値は若宮大路側溝のそれに匹敵する。しかし、小町大路のすべてにおよぶのか、執権亭あるいは第3次幕府（「若宮大路御所」）の存在したことが確実なこの200m四方の区画のみにとどまるのかについては、現段階では判断を保留したい。

橋脚の出現とその意味

側溝7以後、小町大路側溝に橋が架けられるというあらたな要素がこの地に加わる。それはすなわち、この場所に東西の街路、すなわち街割の区画が敷設されたということでもある。年代は13世紀第1四半期から第2四半期。この時期ここに街路を敷設する意味とは何だろうか。

嘉禄元年（1225）7月11日政子が死ぬと、百ヶ日も経まないうちに北条泰時は御所移転を計画する。はやくも12月、あらたな御所が宇津宮辻子に完成し、20日には將軍九条頼經移徒の儀がおこなわれた。新御所の場所は、方違のために大御堂前の伊賀朝行亭を仮の本所とし、そこから西に256条5尺、南に61条の地を新御所の北西角とする。松尾剛次はその位置について図示しており、それによればやはり従来の推測どおりの場所に収まっている（松尾1993）。ただし問題は、測距の起点である「大御堂前」という伊賀朝行亭の位置であって、この点で松尾の推定にはいさか問題なしとしない（馬淵2003）。

さて、かねて想定されてきた宇津宮辻子御所（幕府）の北辺とは、調査区の南側を通る東西道に

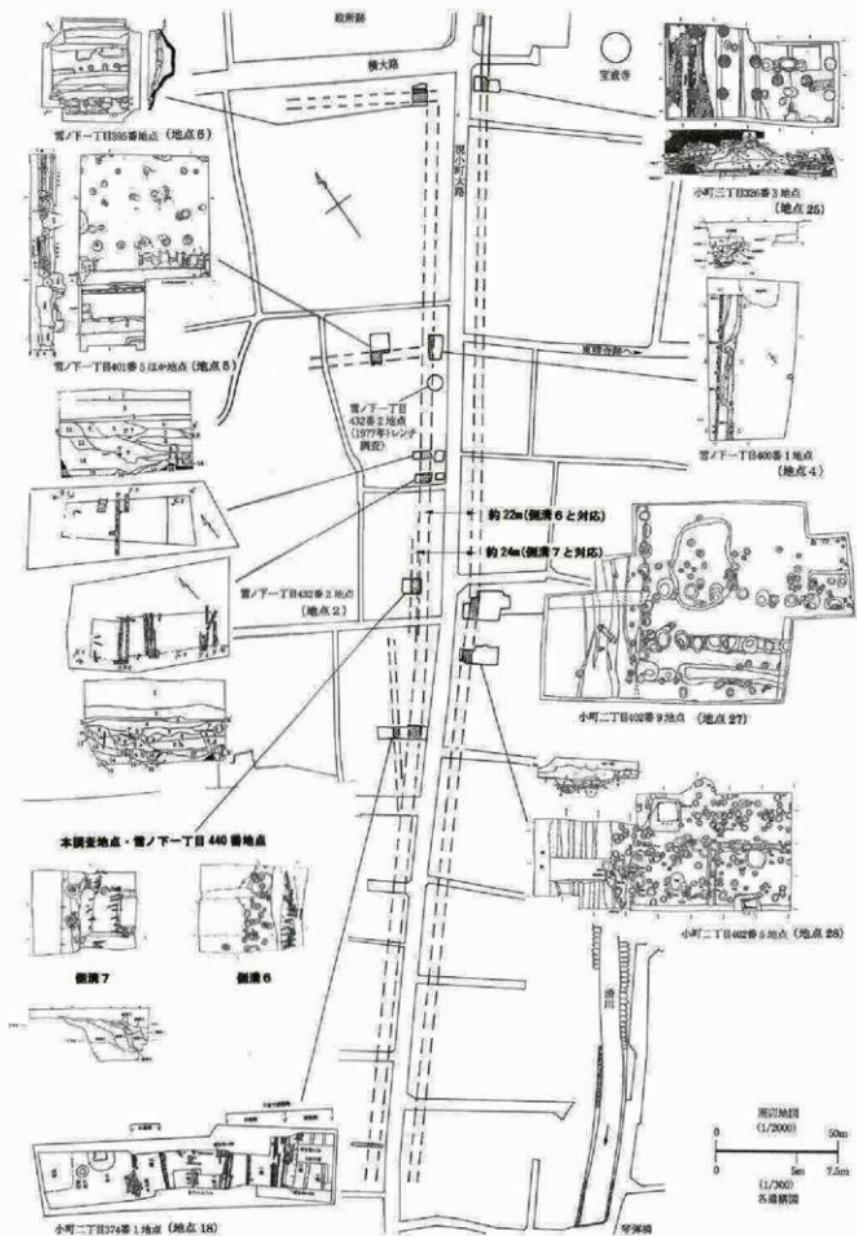


図 27 小町大路側溝対比図

ほかならない。本調査で発見された橋脚は、東西道の最初の姿であろう。側溝7にみられる構造変化の背景に北条泰時による街区再編があるとすれば、それとともにう橋脚を持つ道もまた、その時のものということになる。この橋脚は、宇津宮辻子御所が設置されたときにその北限とされた道のものと考える。

小町大路の幅について

本地点はかねて調査された地点27の大路を挟んだ対面位置に当たり、側溝が検出されたことによってこの場所での大路幅の推測が可能になった。先述のように道幅測定の基点とすべきものは鎌倉においてはまず側溝しかなく、ここでも本地点側溝と大路対面位置にある地点27検出の側溝中心軸間の距離によった。それによれば最小で21m(側溝4の時代)、最大で24m(側溝7の時代)となる。おそらく22~23mが平均的な数値であろう。

この数値は、近年筆者が算出した鶴岡八幡宮前の東西道(「横大路」か)や二階堂大路の20~21mとほぼ同等である(馬淵2003・馬淵2008)。もう少し資料増加に期待したいところだが、ひとまずは小町大路や二階堂大路あるいは横大路など、鎌倉内で若宮大路に次ぐ高規格の街路は20m強の幅員を持つ、といつておこう。これはあるいは22mであって、若宮大路大路の三分の二という規格の存在を示唆しているのかもしれない。

引用・参考文献

- 松尾剛次 1993 『中世都市鎌倉の風景』吉川弘文館
馬淵和雄 1987 「北条時房・頼時跡: 雪ノ下一丁目233番9地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』3
馬淵和雄 1998 『鎌倉大仏の中世史』新人物往来社
馬淵和雄 2002 「北条小町跡跡: 雪ノ下一丁目400番1地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』18(第2分冊)
馬淵和雄 2003 「北条小町跡跡: 雪ノ下一丁目401番5外地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』19
馬淵和雄 2008 「大倉幕府周辺遺跡群(No.49)の発掘調査—雪ノ下天神前562番30地点—」『第19回 鎌倉市遺跡調査・研究発表会 発表要旨』鎌倉考古学研究所・鎌倉市教育委員会
馬淵和雄ほか 1996 「北条小町跡跡(泰時・時賴忽跡): 雪ノ下一丁目377番7地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』12
馬淵和雄・伊丹まどか 2007 「若宮大路周辺遺跡群 小町二丁目409番9外地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』23(第2分冊)

(馬淵)

第5章 北条小町邸跡の花粉化石

鈴木 茂 (パレオ・ラボ)

1. はじめに

北条小町邸跡（鎌倉市雪ノ下一丁目 440 番）において行われた発掘調査で、小町大路側溝と確認される溝が少なくとも 7 条検出された。この側溝埋積土を中心に調査区北壁セクションより土壤試料が採取された。以下にこの土壤試料について行った花粉分析の結果を示し、北条小町邸跡周辺の植生変遷について検討した。

2. 試料

試料は、調査区北壁の上段セクションおよび下段セクションより採取された 24 試料である。これら 24 試料の採取層準を図 1 に示した。以下に各試料について簡単に記す。

上段セクション（試料 1 ~ 12）：試料 1 はオリーブ黒色の砂質粘土、試料 2 は暗灰褐色の砂質粘土、試料 3 は黒色の砂質粘土で、土丹小片が散在している。試料 4 も黒色の砂質粘土で、小礫が認められる。試料 5 はやや砂質の黒色粘土、試料 6 ~ 9 はやや砂質の黒～黒褐色有機質粘土である。試料 10 は黒色の砂質シルト、試料 11 は黒色シルト、試料 12 は黒～黒褐色の有機質粘土である。これらのうち、試料 1 ~ 3 が側溝 1 に、試料 4 が側溝 4 に、試料 5 が側溝 5 に当たり、試料 6, 7 は側溝 6 の埋土、試料 8, 9 は側溝 6 の裏込め土で、試料 12 は側溝 9 に当たる。また、年代は側溝 1 が 13 世紀後半～14 世紀前半、側溝 4 および側溝 5 が 13 世紀前半、側溝 6 が 13 世紀第 2 四半期と考えられている。

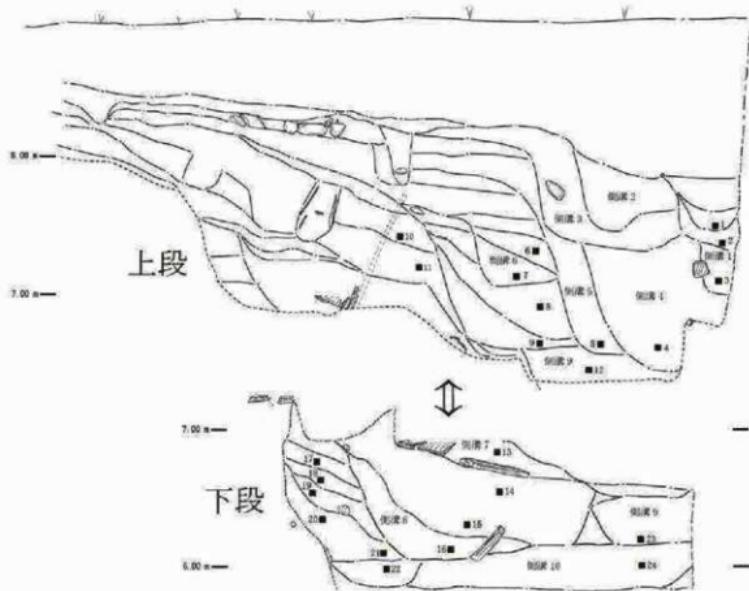


図 1 試料採取地点付近の土層断面（調査区北壁）と試料採取層準（■）

下段セクション(試料 13 ~ 24) : 試料 13 はやや砂質の黒~黒褐色粘土、試料 14 は黒褐色の有機質粘土、試料 15 ~ 18 はやや泥炭質の黒褐色粘土である。試料 19 は黒褐色の泥炭質粘土、試料 20, 21 はやや砂質の黒~黒褐色有機質粘土、試料 22 は黒褐色の植物遺体で、黒色粘土が混入している。試料 23 はやや砂質の黒~黒褐色有機質粘土、試料 24 は黒色の有機質粘土がわずかに混じる砂礫である。これらのうち、試料 13 が側溝 7 に、試料 14 ~ 22 が側溝 8 に、試料 23 が側溝 9 に、試料 24 が側溝 10 に当たる。また、年代は側溝 7 が 13 世紀第 1 四半期~第 2 四半期、側溝 8 が 12 世紀末~13 世紀第 1 四半期、側溝 9 が 13 世紀第 1 四半期と考えられており、側溝 10 は鎌倉時代の最初の大路側溝と推測されている。

3. 分析方法

上記した 24 試料について以下のような手順にしたがって花粉分析を行った。

試料(湿重約 3 ~ 5g、試料 24 は 30g)を遠沈管にとり、10% の水酸化カリウム溶液を加え 20 分間湯煎する。水洗後、0.5mm 目の篩にて植物遺体などを取り除き、傾斜法を用いて粗粒砂分を除去する。次に 46% のフッ化水素酸溶液を加え 20 分間放置する。水洗後、比重分離(比重 2.1 に調整した臭化亜鉛溶液を加え遠心分離)を行い、浮遊物を回収し、水洗する。水洗後、酢酸処理を行い、続けてアセトリシス処理(無水酢酸 9 : 1 濃硫酸の割合の混酸を加え 3 分間湯煎)を行う。水洗後、残渣にグリセリンを加え保存用とする。検鏡はこの残渣より適宜プレパラートを作製してを行い、その際サフランにて染色を施した。

4. 分析結果

検出された花粉・胞子の分類群数は、樹木花粉 43、草本花粉 42、形態分類を含むシダ植物胞子 4 の総計 89 である。これら花粉・シダ植物胞子の一覧を表 1(上段セクション)、表 2(下段セクション)に、それらの分布を図 2(上段セクション)、図 3(下段セクション)に示した。なお、分布図の樹木花粉は樹木花粉総数を、草本花粉・シダ植物胞子は全花粉・胞子総数を基数とした百分率で示してある。表および図においてハイフンで結んだ分類群はそれら分類群間の区別が困難なものを示し、クワ科・ユキノシタ科・バラ科・マメ科の花粉には樹木起源と草本起源のものとがあるが、各々に分けることが困難なため便宜的に草本花粉に一括して入れてある。また、試料 5 ~ 7, 9, 10, 14 ~ 16, 22, 24 の 10 試料については樹木花粉の検出数が少なく、それを基数として算出すると検出された樹木花粉が異常に高率で示されてしまうことから分布図として示すことをひかえた。

上段セクション(図 2) : 草本花粉の占める割合が高く、最も低い試料 1 でも 75% を越えている。その草本花粉ではイネ科が圧倒的に多く、全試料 40% 以上を示しており、分布図で示した試料のなかでは試料 2 が 73% と非常に高い出現率を示している。次いで多く得られているのはヨモギ属であるが、出現率は 10% 前後である。アカザ科ヒニ科やカヤツリグサ科が 5% 前後を示しており、ソバ属は上部試料で連続して検出されている。その上部試料でオオバコ属がほぼ連続して得られており、その他、つる植物のヘクソカズラ属や水生植物のガマ属、オモダカ属などが若干検出されている。樹木花粉ではスギが多く検出されているが、上部に向かい減少している。15% 前後を示しているコナラ属アカガシ属も上部試料において急速に出現率を下げており、コナラ属コナラ属にも同様の傾向が認められる。反対にマツ属複葉管束葉属(アカマツ、クロマツなどのいわゆるニヨウマツ類)は上部試料で急増しており、同様の傾向がツガ属にも認められる。その他、針葉樹ではモミ属やイチイ科イヌガヤ科ヒノキ科(以後ヒノキ類と略す)、落葉広葉樹のクマシデ属アサダ属やニレ属ケヤキ属、常緑広葉樹のシノキ属マテバシイ属(以後シノキ類と略す)などが観察されている。

下段セクション(図 3) : やはり草本花粉の占める割合は高く、多くの試料で 80% 以上を示している。その大半がイネ科で占められ、図に示すことができなかった試料 22 では出現率が約 95% に達している。次いで多く観察されている

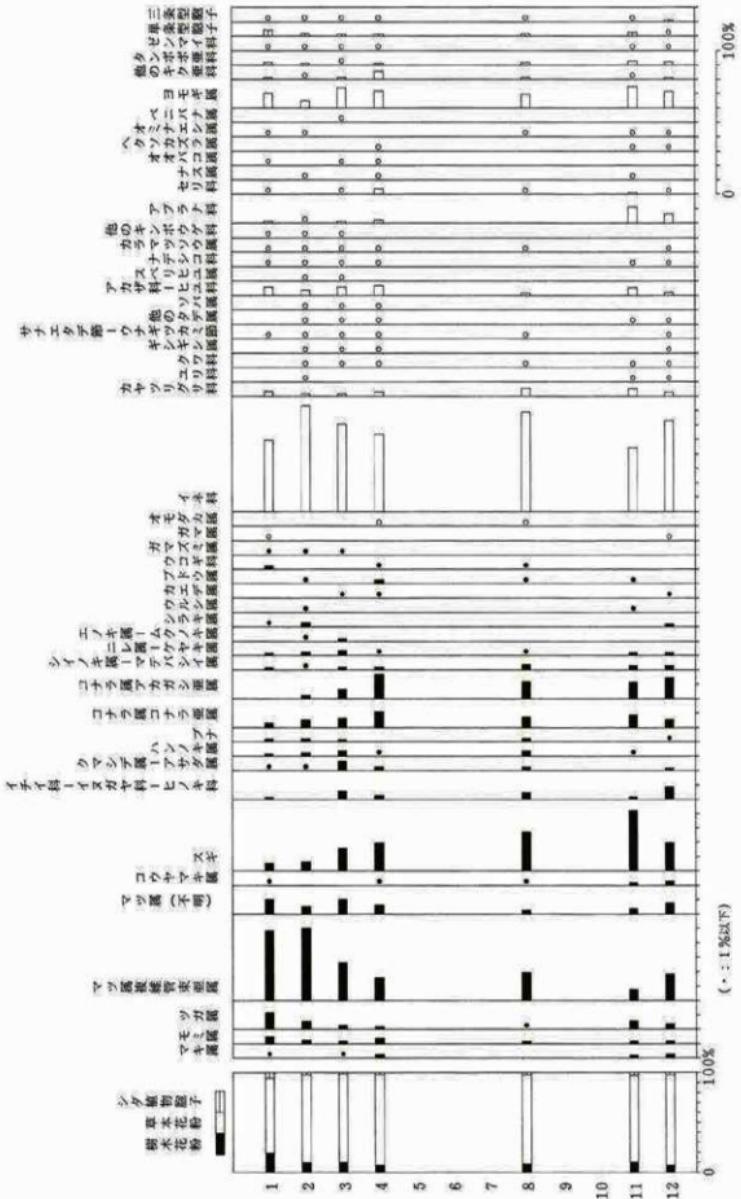


図2 北条小町跡調査区北壁上段セクションの主要花粉化石分布図
(樹木花粉は樹木花粉總数、草本花粉、粒子は花粉・粒子總数を基として百分率で算出した)

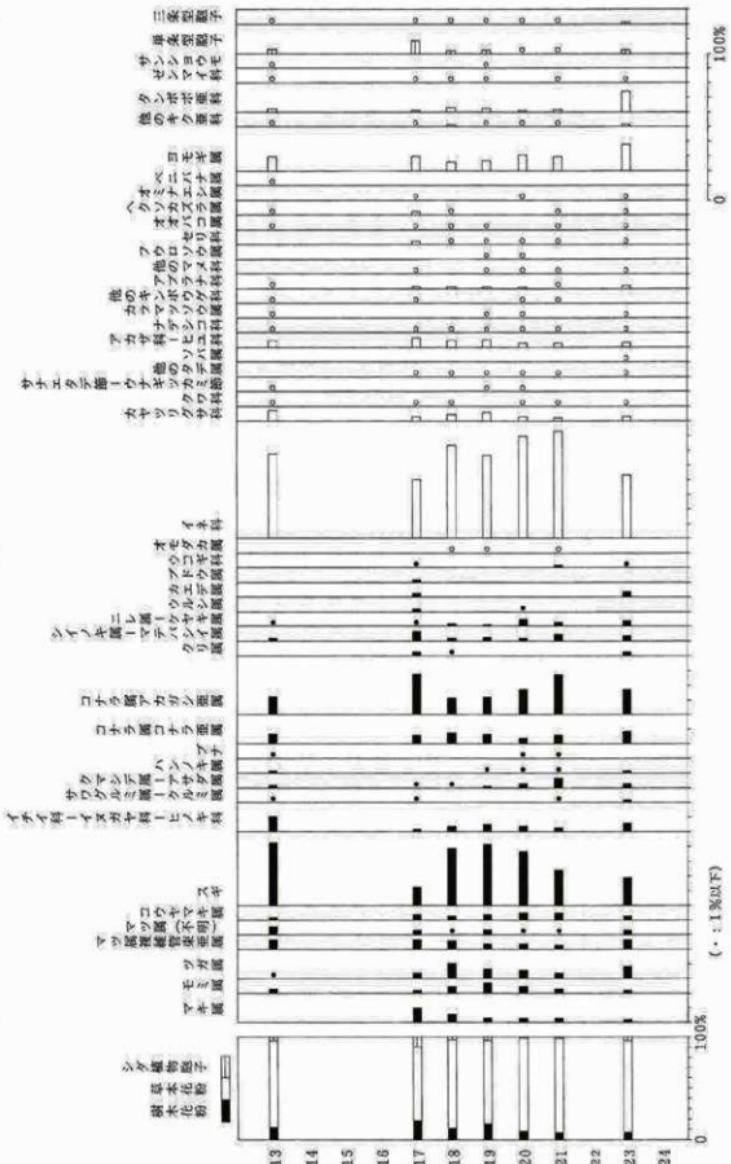


図3 北条小町邸跡調査区北壁下段セクションの主要花粉化石分布図
(樹木花粉は樹木花粉総数、草本花粉・孢子は花粉・孢子総数を基数として百分率で算出した)

のはヨモギ属であるが、多くは10%に達していない。カヤツリグサ科やアカザ科-ヒユ科が5%前後を示しており、タンボボ亜科は試料23で突出した出現を示している。その他、オオバコ属やヘクソカズラ属が多くの試料で観察されている。樹木花粉ではスギが最も多く、試料13や19では40%を越えている。次いでアカガシ亜属が多く、大半の試料が10~20%の出現率を示している。また、ニヨウマツ類が上部に向かい漸増しており、マキ属にも同様の傾向が認められる。その他、針葉樹のモミ属、ツガ属、コウヤマキ属、ヒノキ属、広葉樹のコナラ亜属、シイ類が5%前後の出現率を示している。

5. 北条小町邸跡周辺の古植生

上記した花粉分析結果および検出された各側溝の年代から北条小町邸跡周辺の植生変遷について検討を試みた。

12世紀末から13世紀初め頃(図3: 試料13~24)の鎌倉周辺丘陵部では斜面部を中心にスギ林が成立していたと推測される。またアカガシ亜属やシイ類を中心とした照葉樹林も丘陵の尾根部に林分を広げていたとみられ、マキ属、モミ属、コウヤマキ属、ヒノキ類といった針葉樹類や落葉広葉樹のクマシデ属-アサダ属、コナラ亜属、ニレ属-ケヤキ属なども一部に生育していたと推測される。さらにニヨウマツ類の二次林も一部に成立しており、分布を拡大しつつあったとみられる。一方、試料採取地点周辺ではイネ科、カヤツリグサ科、アカザ科-ヒユ科、アブラナ科、セリ科、ヨモギ属、タンボボ亜科、シダ植物などの雑草類が多く生育していたものと推測される。さらに道端雑草のオオバコ属も生育していたとみられる。

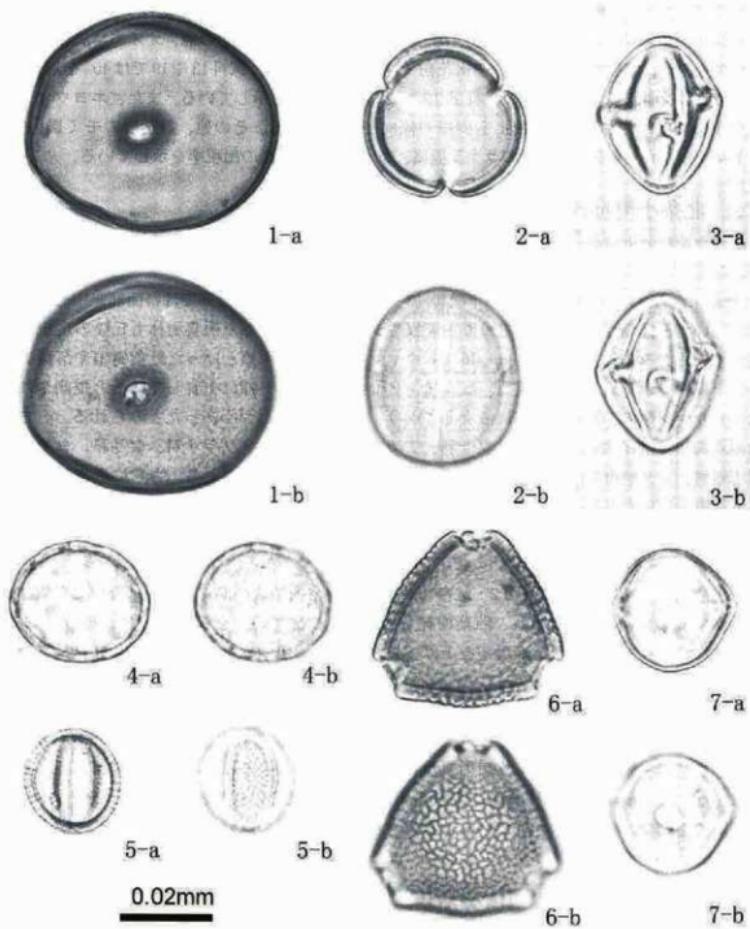
13世紀初めから13世紀中頃(図2: 試料4~12)の鎌倉周辺丘陵部では斜面部を中心に依然としてスギ林が成立していたと推測され、照葉樹林も丘陵の尾根部に林分を広げていたとみられる。また、先の時期に比ベニヨウマツ類が出現率を上げており、鎌倉周辺の丘陵部においてニヨウマツ類の二次林が分布域をやや広げたとみられる。

13世紀後半~14世紀前半頃(図2: 試料1~3)になると、それまで広く見られたスギ林や照葉樹林は急速に林分を狭め、ニヨウマツ類の二次林が広く成立するようになったと推測される。こうした様相は鎌倉市内の多くの遺跡で行われた花粉分析においても認められており(鈴木, 2001など)、北条小町邸跡でも同様の変化が示されていると推察される。この頃の試料採取地点では先の時期と同様にイネ科、カヤツリグサ科、アカザ科-ヒユ科、ヨモギ属、タンボボ亜科、シダ植物などの雑草類が多く生育していたと推測される。さらに道端雑草のスペリヒユ属やオオバコ属も生育していたとみられる。

なお、試料22はおおむね植物遺体で、その花粉分析結果は大半がイネ科花粉であった。こうしたことから、この植物遺体はイネ科植物の可能性が高いと推察され、稻藁やその他のイネ科植物が刈られ捨てられたことによりイネ科花粉が大量に供給されたのではないかと思われる。北条小町邸跡の多くの試料は有機質や泥炭質であり、これはイネ科植物が捨てられたことによる可能性が考えられ、多くの試料でイネ科花粉が多く検出されているのは、一つはこうしたことによる可能性が高いと思われる。

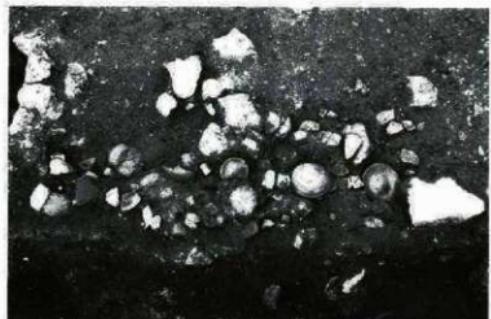
引用文献

鈴木 茂(2001)高徳院周辺遺跡の花粉化石、鎌倉大仏周辺発掘調査報告書、鎌倉市教育委員会, 26-33.



図版 北条小町跡の花粉化石

- | | |
|--------------------------------|-----------------------------|
| 1 : イネ科 PLC.SS 4098 No.22 | 5 : アブラナ科 PLC.SS 4092 No.11 |
| 2 : タデ属 PLC.SS 4096 No.11 | 6 : ノアズキ属 PLC.SS 4093 No.11 |
| 3 : ナス属 PLC.SS 4097 No.20 | 7 : 他のマメ科 PLC.SS 4095 No.11 |
| 4 : アカザ科-ヒユ科 PLC.SS 4094 No.11 | |



1. 土師器集中部 1 南から



3. 側溝 5 南から



2. 建物 1 P.2



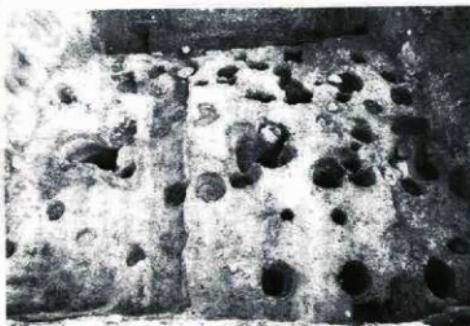
4. 側溝 5 と関連造構 西から



5. 側溝 5 と関連造構 西から ▶



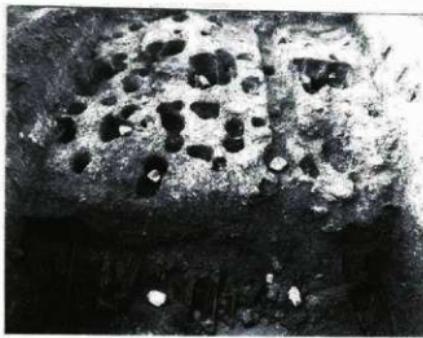
1. 土師器集中 3 南から



4. 側溝 7 と関連遺構 西から



2. 側溝 6 肩部 東から



3. 側溝 7 と関連遺構 東から



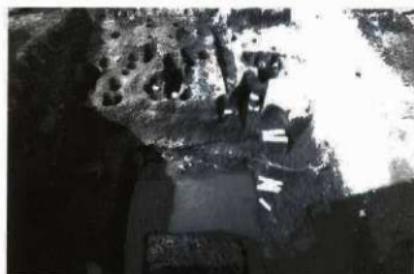
5. 側溝 7 と関連遺構 北から



1. 側溝8 木材出土状況 南から



4. 側溝9 東から



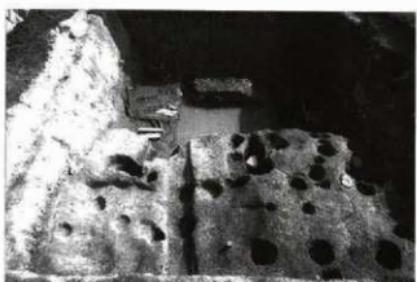
2. 側溝9と関連遺構 東から



5. 側溝9 南から



3. 側溝9西岸上 大型礎板 南から



6. 側溝9 西から

図版4



◀ 調査区北壁東側土層断面
(上段)



◀ 同
(下段)

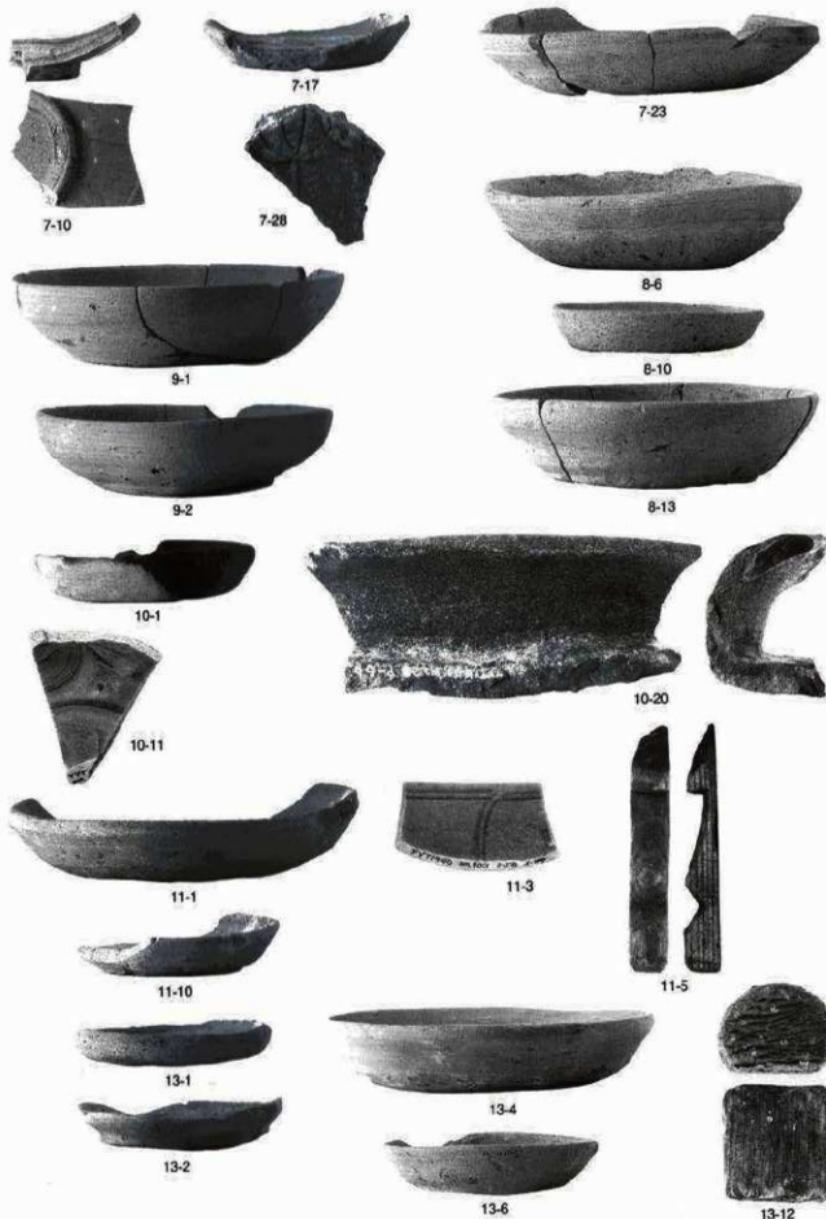
調査区南壁東側土層断面 ▶
(上段)



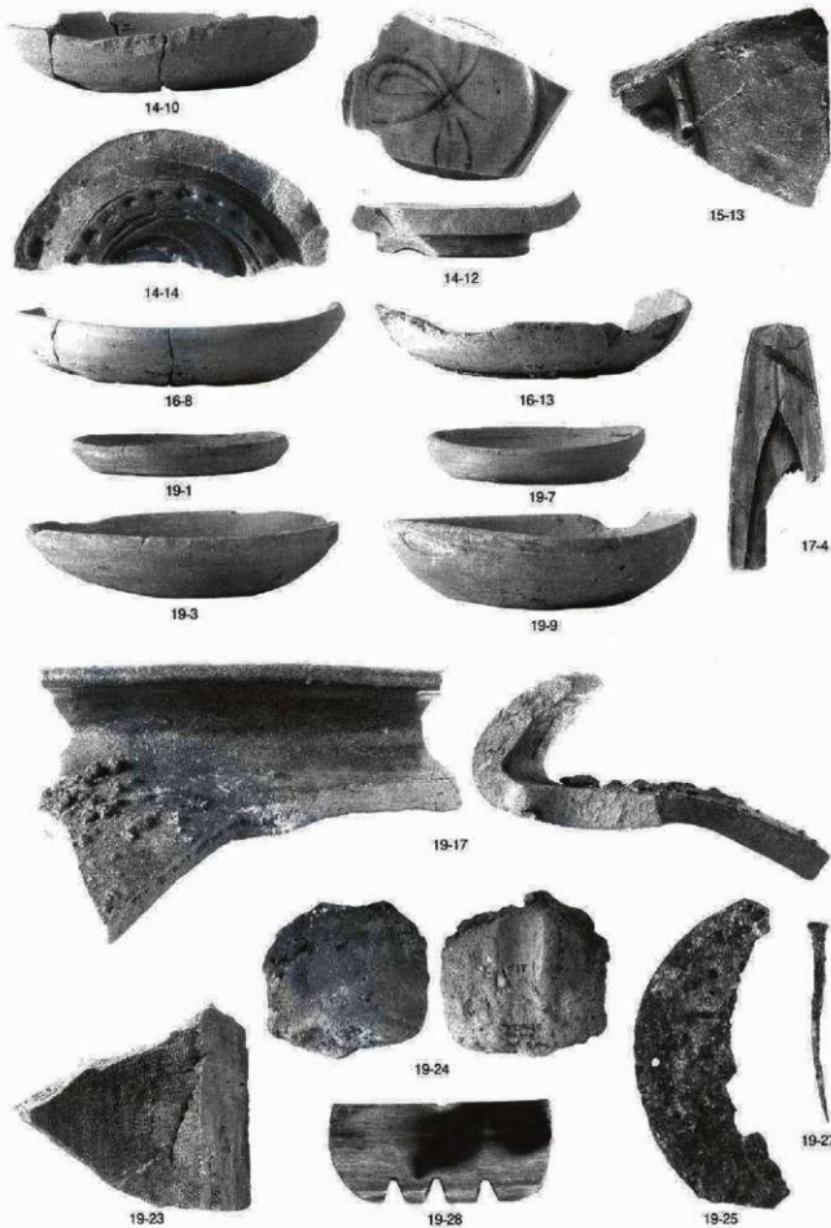
同 ▶
(下段)



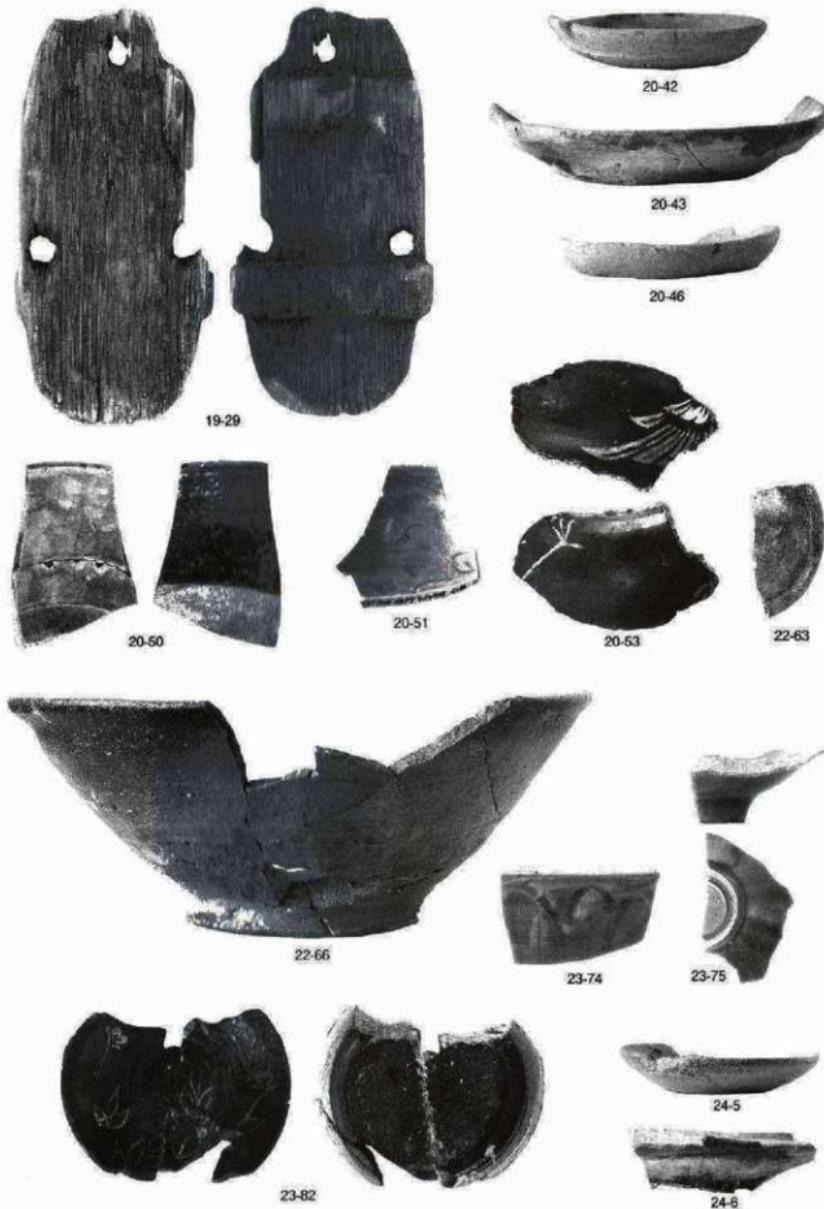
図版5



図版6



图版 7



下馬周辺遺跡 (No. 200)

由比ヶ浜二丁目39番14

例　　言

1. 本報は、下馬周辺遺跡の鎌倉市由比ヶ浜二丁目 39 番 14 地点における自己用店舗併用住宅に伴う埋蔵文化財発掘調査の報告である。
2. 発掘調査は、平成 16 年 5 月 11 日～同年 5 月 31 日にかけて、調査面積 20.0 m² を対象に鎌倉市教育委員会が実施した。
3. 調査体制は、以下の通りである。
調査担当者：原 廣志
調査員：須佐直子・太田美智子・須佐仁和・久保田裕美・梅岡ケイト
調査補助員：宇都洋平・山口正紀・野崎美帆
協力 機関：(社) 鎌倉シルバー人材センター・鎌倉考古学研究所
4. 本報の執筆は、第 1 ～ 3 章を原が執筆し、第 4 章については調査員協議のもと原が稿を草した。
また挿図・写真図版作成には須佐（直）・梅岡・山口・小野が実施した。
5. 本報の掲載写真は、全景・個別遺構を原、宇都があたり、出土遺物は須佐（仁）が撮影した。
6. 発掘調査における出土遺物、図面・写真類は、鎌倉市教育委員会が一括保管している。
7. 本報の凡例は、以下の通りである。
 - ・図版縮尺 全測図：1/40 遺構図：1/30 遺物図：1/3
 - ・遺構図 遺構図のレベルは海拔標高の数値を示している。
 - ・遺物図 一・二・三は軸測範囲を示す。黒塗は主にかわらけ灯明皿付着の油煤煙や漆器の朱塗文様を表現している。遺物観察表における手捏ねかわらけの外底径計測値は外底指頭痕と口縁部との塊、即ち後部の数値を表している。
 - ・使用名称 本報中の「土丹」は三浦・葉山岩層の泥岩のことである。
8. 現地調査及び資料整理においては、多くの方々からご助言、並びにご協力を戴いた。記して感謝の意を表したい。(敬称略、五十音順)。
秋山哲雄・伊丹まさか・河野眞知郎・菊川 泉・菊川英政・古田戸俊一・汐見一夫・玉林美男・宗臺秀明・宗臺富貴子・鈴木絵美・鈴木弘太・手塚直樹・福田 誠・松尾宣方・馬淵和雄

本文目次

第1章 遺跡の位置と歴史的環境	187
1. 調査地点の位置	187
2. 遺跡の歴史的環境	188
第2章 調査の概要	190
1. 調査の経過	190
2. 測量軸の設定	190
3. 層序と生活面	193
第3章 検出遺構と出土遺物	194
1. 第1面の遺構・遺物	194
2. 第2面の遺構・遺物	198
第4章 まとめ	214

挿図目次

図1 調査地点と周辺遺跡	187
図2 調査区設定図	191
図3 国土座標の位置・グリッド配置図	191
図4 土層堆積図	192
図5 第1面全測図	194
図6 第1面上包含層出土遺物	195
図7 第1面a層出土遺物	196
図8 第1面b層出土遺物	197
図9 第2面全測図	199
図10 第2面建物・木組遺構	200
図11 第2面建物1出土遺物	201
図12 第2面木組土留遺構出土遺物	202
図13 第2面構造遺構出土遺物	203
図14 第2面遺構外出土遺物	204

表目次

表1 遺物観察表(1)	206
表2 遺物観察表(2)	207
表3 遺物観察表(3)	208
表4 遺物観察表(4)	209
表5 遺物観察表(5)	210
表6 遺物観察表(6)	211
表7 遺物観察表(7)	212
表8 遺物分類別出土数量・比率表	213

図版目次

図版 1	1. 第1面全景(南から) 2. 第2面全景(南から)	215
図版 2	1. 第2面 建物1・木組土留遺構検出状況(南東から) 2. 同上(北東から)	
	3. 木組土留遺構(東から)	216
図版 3	1. 第2面 木組土留遺構完掘状況(南東から) 2. 木組土留遺構北側(東から)	
	3. 同上南側(東から)	217
図版 4	1. 第2面 建物1内礎板 東壁際(西から) 2. 同左南壁際(北から) 3. 調査区南壁上層堆積(北から) 4. 調査区西壁土層堆積(東から)	218
図版 5	1. 第1面上包含層 2. 第1面下a層	219
図版 6	1. 第1面下a層出差し錢	220
図版 7	1. 第1面下b層 2. 第2面建物1柱穴 3. 第2面木組土留裏込	221
図版 8	1. 第2面溝状遺構 2. 第2面遺構外	222
図版 9	1. 第2面遺構外	223

第1章 遺跡の位置と歴史的環境

1. 調査地点の位置

調査地点は鎌倉市由比ヶ浜二丁目39番14に所在する地点で下馬周辺遺跡（県遺跡台帳No.200）の一角に位置する。鎌倉市の旧市街地は北の鶴岡八幡宮を頂点とする南の相模湾に面した三角形状の沖積地、



及び砂浜地があり、それを取り巻く丘陵の谷戸地、朝比奈に源を発し東北丘陵の裾を流れた滑川低地から形成されている。その三角形状の沖積地中央を鶴岡八幡宮から由比ヶ浜へ向かって南北に貫くのが都市鎌倉の基本軸となった若宮大路である。若宮大路と直交する道路は「下馬」と呼称され三ヶ所でのみで接続するもので、三つの下馬は北端が鶴岡八幡宮社頭の横大路との交差点（上ノ下馬）、現二ノ鳥居のあたり（中ノ下馬）南端が現在の下馬四ツ角にあたり大町大路との交差点（下ノ下馬）が考えられる。この下馬四ツ角をさらに南へ進むと若宮大路と東西道路が交差するが、この道路が名越方面へ抜ける「車大路」にあたり旧東海道と想定される。さらに交差点の西方、道沿に60mほど進んだ江ノ電踏切の手前、道路の南側に面して位置するのが調査地点である。地形的には、由比ヶ浜の海浜砂丘帯の裏側に位置し、滑川と佐助川が合流する下馬四ツ角付近から車大路周辺にかけては市街地でも最も海拔高の低い地域である。調査地点の現地表の標高は6mほどであり、砂丘帯頂部に建っている現在の一ノ鳥居より3mほど低い標高を示している。

2. 遺跡の歴史的環境

若宮大路は寿永元（1182）年、源頼朝は妻政子の安産祈願のため海浜から八幡宮へいたる真っすぐな参詣道を造成した。先に述べたように若宮大路には北から順に「上ノ下馬」「中ノ下馬」「下ノ下馬」と呼ばれた三ヶ所が設けられ、何れかの下馬をへて若宮大路へ通行するのである。若宮大路の北部でニノ鳥居から八幡宮社頭間の両側の大路沿いでは再開発に伴う相当数の発掘調査が実施されており、東西両側溝から道幅と側溝の規模や構造などの状況がほぼ判明しつつある。しかしニノ鳥居以南の状況については十分な調査結果が得られていないが、中世の絵図である『善宝寺寺地図』（鎌倉国宝館 1969）や近世の『鶴岡八幡宮境内図』（鎌倉国宝館 1968）などによると、大路中央の段葛がニノ鳥居からさらに南方の下ノ下馬近辺まで存在したように描かれている。なお下馬四ツ角の交差点付近から車大路交差点までの発掘調査によって河川合流や低湿地で現地表の標高が4～5mほどであるのに対し、現一ノ鳥居の砂丘頂部から由比ヶ浜にかけて海浜飛砂による厚い砂層が堆積した地域では標高が7～9mと異なる様相が認められる。その中で注目される調査結果としては図1の前者が調査地点1～4、後者の地点5が挙げられる。

地点1（大三輪・齊木ほか 1991・齊木 1993）では、若宮大路修景事業に先立つ試掘調査が行われ現在の歩道より巨大な鳥居脚柱の根方が発見された。根方覆土に伴う遺物は鎌倉期の資料ではなく戦国時代の陶器・土器で16世紀代所産のものであった。鶴岡八幡宮供膳の日記『快元僧都記』には天文22（1553）年に北条氏綱が鳥居造替の記事があり、この修理の際にあたると推定されている。浜の大鳥居の造立記録をみると、治承4（1180）年頼朝の造立に始まり、寛元3（1245）年、延文3（1358）年、応永20（1413）年などそれ以前にも連続して造替されていたことが知られるが、現在の石造一ノ鳥居はこの地点より南約180mに位置し、寛文8（1668）年に建てられたものである。地点1に南隣して『吾妻鏡』にみえる車大路と推定される道が東西方向に走っており、この地点が記事にある連続して造替られた浜ノ大鳥居の場所と想定され、中世都市鎌倉の中心部と周縁部の境であった可能性が考えられる。

次に地点1の近隣で交差点のすぐ南東に位置した地点2（大河内 1998）は、海浜砂丘の北側裾にあたり約50m東には滑川が流れ閑魔橋が架けられている。調査では13世紀前半～14世紀中頃までの性格が異なる三時期の遺構が検出された。I期（13世紀前半頃）は沼状の窪地が存在し、遺物に紺絆・鎧塔婆の大量投棄という行為が鎌倉時代前期のこの場を考える上で重要な意味が含まれている。II期（13世紀中頃）は生活の営みが認められる場へ変化、溝や段で区画した敷地に掘立柱建物や井戸、土坑が点

在した。屋敷地が想定されているⅢ期（13世紀後葉～14世紀中葉頃）は人々の生活が最も活況を呈した時期で多数の堅穴建物・井戸・通路や多くのゴミ穴土坑を検出し多量の豊富な種類の遺物が発見されており、この場が町屋へと変貌した。地点5（佐藤・原ほか、1993）では、13世紀後葉～14世紀中葉頃を主体とした通路で区画した遺構の大型堅穴建物・井戸・土坑や墓跡などが占められており、鎌倉時代後期の浜地は倉庫群を中心とした町屋の様相を呈していたと想定されよう。以上のように本調査地点の周辺は、中世鎌倉の繁栄と共に鎌倉時代後期～南北朝期にかけておびただしい堅穴建物が造られており、基本的に町屋と化した場と解釈できる。それ以前についてはまとまった調査成果が得られた調査は少ないが、『吾妻鏡』の記事をみると鎌倉時代前期に御家人が屋地を所有していたことが知られており、中世都市鎌倉における周縁景観の形成とその発展過程を理解する上でも周辺調査が望まれるところである。

引用・参考文献

- 大河内勉 1998 『下馬周辺遺跡発掘調査報告書—鎌倉女学院地点一』 下馬周辺遺跡発掘調査団
大三輪龍彦 1989 「鎌倉都市計画—政治都市・軍事都市として—」『よみがえる中世3 武士の都 鎌倉』平凡社
大三輪龍彦・齊木秀雄・ほか 1991 『若宮大路遺跡発掘調査報告書』V 史跡若宮大路遺跡発掘調査団
齊木秀雄 1993 『若宮大路遺跡発掘調査報告書』VII 史跡若宮大路遺跡発掘調査団
鎌倉国宝館 1968 「鎌倉の古絵図Ⅰ」『鎌倉国宝館図録』第15集 鎌倉市教育委員会
鎌倉国宝館 1969 「鎌倉の古絵図Ⅲ」『鎌倉国宝館図録』第16集 鎌倉市教育委員会
河野眞知郎 1995 「中世都市鎌倉 遺跡が語る武士の都」講談社
河野眞知郎 2004 『政権都市「鎌倉」—考古学研究のこの十年—』中世都市研究会編
『中世都市研究9 政権都市』新人物往来社
宗臺秀明・宗臺富貴子 1992 『下馬周辺遺跡発掘調査報告書—東京電力鎌倉営業所改築に係る発掘調査報告書一』下馬周辺遺跡発掘調査団
齐藤直子 1992 「13～19世紀鎌倉海岸部における潟湖の変貌」『国立歴史民族博物館研究報告』
第81集 国立歴史民族博物館
佐藤仁彦・原廣志・ほか 1993 「由比ヶ浜中世集団墓地遺跡（No.327）由比ヶ浜二丁目1034番1他地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』9
高橋慎一朗 2005 『日本史リブレット21 武家の古都鎌倉』山川出版社

第2章 調査の概要

1. 調査の経過

調査地点は、下馬四ツ角の南西に所在し、稻村ヶ崎方面から海沿いに由比若宮（元八幡）、名越を経て三浦半島方面へ抜けていく旧東海道筋にあたり琵琶小路とも呼称されている。この小路と若宮大路との交差点で発見された天文年間の北条氏康再建という浜の大鳥居（図1-地点1）からは西へ120m程の距離で南側に面した場所に位置する。本調査地点は、個人専用住宅で鋼管杭打ちを作り基礎工事であったため、事前に鎌倉市教育委員会による造構確認の試掘調査が実施された。その結果、地表下約120cmより中世前期の遺構・遺物を確認したため発掘調査を実施することとなった。現地調査は平成16年5月11日から工事範囲内約20.0m²を対象に発掘調査するに至った。

現地調査は、5月11日よりまず造構確認調査の資料結果を受けて表土を重機掘削することから開始され、その後は入力により掘り下げを行なった。調査期間中は脆い砂質土と多量の湧水に悩まされながらの調査作業ではあったが、13世紀後半～14世紀前半にかけて鎌倉時代後期を中心とした2時期以上の生活面と、それに伴う遺構・遺物が多数発見された。同年5月31日までの間に緊急調査に必要な記録保存を行ない調査機材の撤収を含め、現地調査を無事に終了することができた。

2. 測量軸の設定

調査に際して使用した測量軸の設定は、図2・3に示した国土地標の数値を用いた。設定は調査地点北側を東西に走る琵琶小路の路面上に鎌倉市道路管理課が設置した市3級都市基準点（第1座標系）のR 047（X=-76,336,387 Y=-25,662,569）とR 048（X=-76,342,984 Y=-25,611,455）が確認された。このR 047・048を国土地標の基準点として図2に示したようにR 047から敷地内に測量基準点にあたる原点1（A-3杭：X=-76,340,540 Y=-25,681,523 Z=6.430m）、原点2（E-3杭：X=-76,348,505 Y=-25,682,495 Z=6.630m）をそれぞれ設置した。なお方眼軸線は測量の便利性と、予想される検出遺構の軸方位を優先させる方法で調査区の形状に即した配置にしたために、国土地標とは一致していない。

調査区の測量軸は、図3に示すように基準点のA-3杭からE-3杭の南北軸線（距離8m）を設けて、そこから東西と南北をそれぞれ2m間隔の軸線を配して方眼を設定を行なった。東西軸線はアルファベットで北からA-E、南北軸線には算用数字で西から1-5を充てて、各グリッドの名称は北西角の交差軸点をグリッド名として呼称している。なお市3級都市基準点のR 047・048及び任意点のa点、A-3杭・E-3杭の国土地標数値は図3に示した通りである。

図中の方位はすべて真北を採用しており、南北軸線はN-6° 58' 48"-Eである。

海拔標高の水準原点移動に関しては、若宮大路と琵琶小路の交差点南西付近、鎌倉女学院正門前の歩道橋基礎に設置された鎌倉市三角水準点：L=6.330mから調査地点のA-3杭上：L=6.430mに仮水準点を移動したものである。文章中及び挿図に記載されたレベル数値はこれを基準とした海拔標高を表わしている。

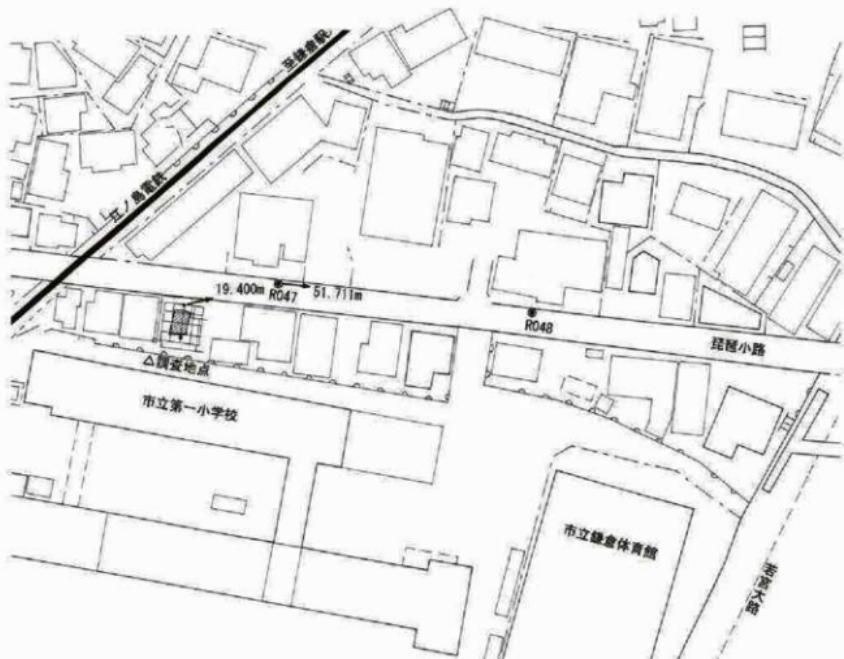


図2 調査区設定図

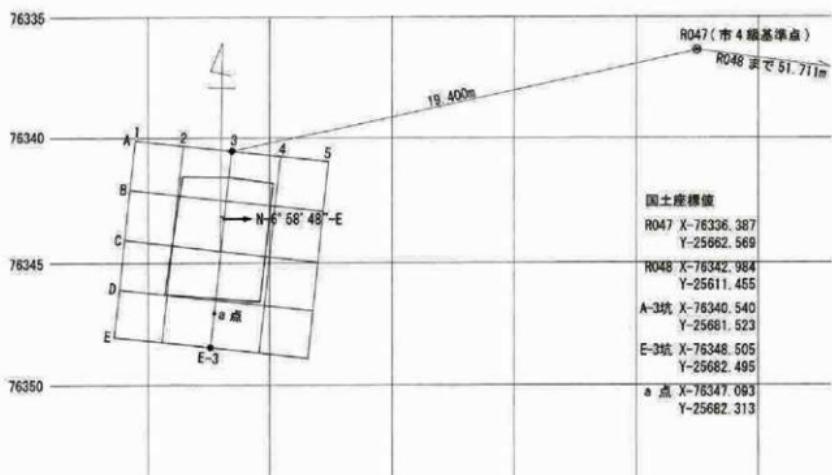
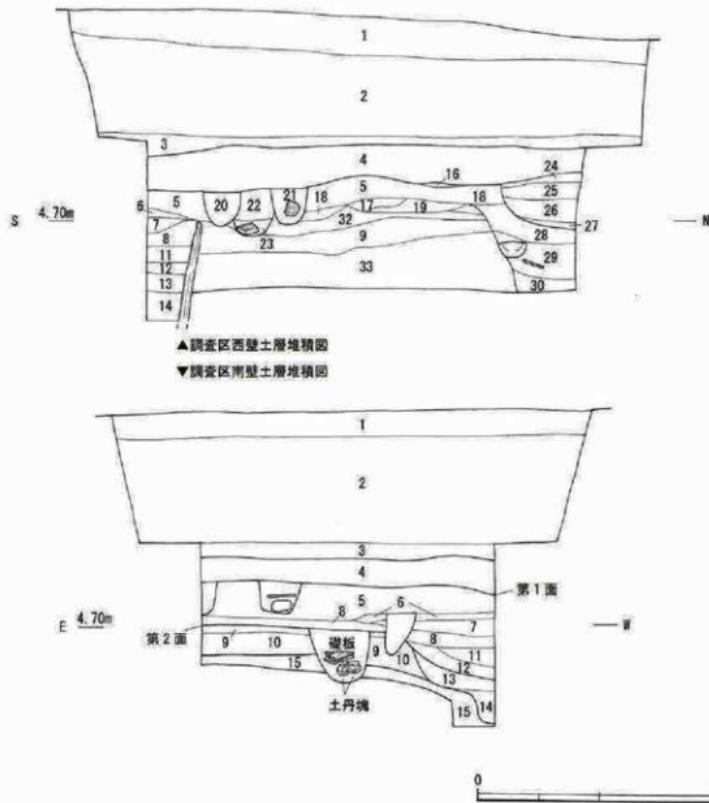


図3 国土座標・グリッド配置図



調査区南壁・西壁土層堆積注記

1. 壱土
2. 壱葉土上：大小不規則による埴立土
3. 暗褐色の粘質土：水田耕作土
4. 明褐色砂質土：土丹・貝殻粉、炭化物多量
5. 明褐色砂質土：土丹・貝殻粉、炭化物多量 強い縁り第1面
6. 明褐色砂質土：有機物腐敗土 縁り無し
7. 灰褐色砂質土：貝殻粉多量に含む砂質
8. 明褐色砂質土：有機物腐敗土 砂質多量 縁り無し
9. 暗褐色砂質土：貝殻粉多量 第1縁りで上面礫化 第2面
10. 明褐色砂質土：砂質、木片を多く含む 中や縁り有り
11. 黒褐色腐植物土：木片多量 縁り無し
12. 黑褐色腐植物土：砂質ブロック、木片多く含む 縁り無し
13. 灰褐色砂質土：貝殻粉多量の灰白色砂質、輕風土
14. 黑褐色粘質土：木片多く含む粘土 土丹塊
15. 黑褐色粘質土：木片多量
16. 黑褐色粘質土：貝殻粉少量含む 細粒・縁り無し
17. 黑褐色粘質土：貝殻粉多量 細粒・縁り有り
18. 黑褐色粘質土：貝殻粉多量 細粒・縁り有り
19. 黑褐色粘質土：貝殻粉少量 細粒・縁り有り
20. 黑褐色粘質土：貝殻粉多量 細粒・縁り有り
21. 黑褐色粘質土：貝殻粉少量 細粒・縁り有り
22. 黑褐色粘質土：貝殻粉多量 細粒・縁り有り
23. 黑褐色粘質土：貝殻粉多量 細粒・縁り有り
24. 黑褐色粘質土：貝殻粉多量 細粒・縁り有り
25. 黑褐色粘質土：貝殻粉多量 細粒・縁り有り
26. 黑褐色粘質土：貝殻粉多量 細粒・縁り有り
27. 黑褐色粘質土：貝殻粉多量 細粒・縁り有り
28. 黑褐色粘質土：貝殻粉多量 細粒・縁り有り
29. 黑褐色粘質土：貝殻粉多量 細粒・縁り有り
30. 黑褐色粘質土：貝殻粉多量 細粒・縁り有り
31. 黑褐色粘質土：貝殻粉多量 細粒・縁り有り
32. 黑褐色粘質土：貝殻粉多量 細粒・縁り有り
33. 黑褐色粘質土：貝殻粉多量 細粒・縁り有り

図4 調査区壁土層堆積図

3. 層序

調査地点の現地表は、海拔標高が 6.4 m 前後でほぼ平坦な地形を呈している。図 4 の土層堆積図を観察するように地表下約 115cm のまで近・現代の埋立て造成土と水田耕作土が調査区全体を覆っていた。この厚い土層を除去すると、海拔高約 5.3 m から中世の遺物や遺構を含んだ堆積土層が検出された。

1 層は茶褐色粘質土の厚さ 20 ~ 30cm の中世遺物包含層でこれを除去すると、ある一定の厚みと拡がりをみせる炭化物層を挟んで標高 4.7 m 前後で第 1 面が表出した。この面の構築土の 2 層は茶褐色粘質土の大小泥岩塊を混入したやや粗い地業層で土坑や柱穴などの遺構を確認している。また調査区北東域の部分的な範囲だけに泥岩を突き固めて版築した様子が確認できた。

第 2 面は厚さ 20 ~ 30cm の第 1 面構築土の下から間層を挟まずに認められた。第 2 面を構成する土層のうち、3 層の暗黄褐色粘質土は小型泥岩の版築層で調査区東半部を中心に確認されたが厚みは場所によりかなり異なるもので、西側では包含層のような脆弱な堆積土（4 層：暗茶褐色粘質土）へと変化していた。この土層の少し下、標高 4.7 m 前後にもう一枚の泥岩地業面（5 層：暗黄褐色粘質土）が認められた。これは上層の版築層とは場所によって一枚の生活面に集約されるので、時間的な差があまりなく下層地業上に張増した版築層と捉え、一括で第 2 面として調査した。

第3章 検出遺構と出土遺物

1. 第1面の遺構・遺物

第1面は、調査区北西端で現地表から約145cmの深度に検出したが、表土は南に向かって緩やかに傾斜して低くなる。これは前章で触れたように、現在の一の鳥居が建つ辺りは海拔標高約10mの海岸砂丘頂部であり、下馬四角の交差点の辺りは海拔標高約3.6mの鎌倉中心部では最も低い場所であり、調査

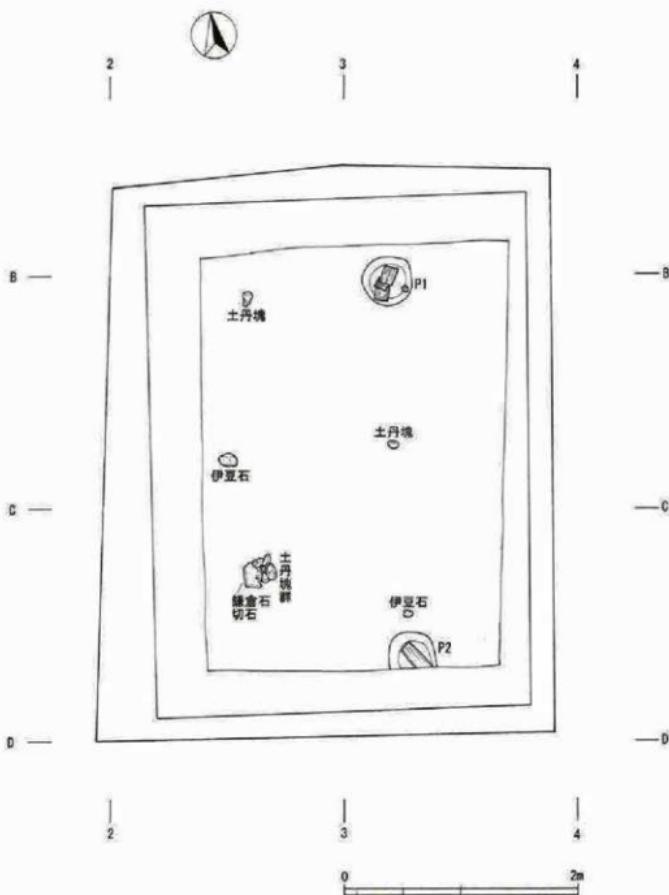


図5 第1面全測図

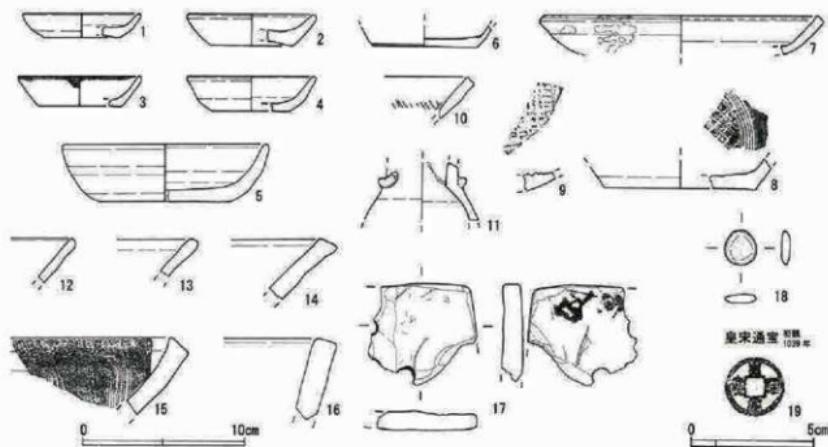


図6 第1面上包含層出土遺物

地点周辺をみると、第一小学校側の南から北側の道路へ緩やかに傾斜した地形であり、第1面も地表と同じ傾斜を呈していた。この面の造構は柱穴2穴と、土丹塊の集積したものなどが確認されただけであり、検出された造構からみると、この場は造構密度の低い閑散とした状況が伺える（図5・6）。

P1: B-3杭の東隣に位置している。平面形はほぼ円形を呈し、規模は径45cm、造構面からの深さ32cmを測る。造構確認の精査時に柱の抜き取り痕跡が確認でき、底面には礎板3枚を重ねて据えていた。礎板は概ね長さ10~16cm、幅13cm、厚さ2cmである。覆土は暗褐色砂質土で貝殻や玉砂利を多く含む締まりの弱いものである。遺物は図示できるものはないがロクロ整形のかわらけ小片や木片が少量出土している。

P2: C-3グリッドに位置し、調査区外南に拡がるため全容不明である。規模は東西径42cm、南北径30cm以上、造構面からの深さ28cmを測り、平面形は梢円形と思われる。底面には鎌倉石の切石片と、その上に礎板1枚が据えられており、切石片は15cm程の方形で厚さ8cmを測り、礎板は長方形で長さ32cm、幅12cmである。覆土は暗褐色砂質土で貝殻や有機物腐植土ブロックが交じる締まりの弱いもの。図示可能な遺物は出土していない。

集石：調査区南西に位置し、面上に鎌倉石製切石1個と大小土丹塊5個からなっている。鎌倉石片は長さ23cm、幅15cm、厚さ5cm、土丹塊は不整形で8~15cm程の大きさである。本跡から北側1mの距離に安山岩製の伊豆石が検出され、礎石建物の一部かと思われたので面上精査を実施したがそれ以上の拡がりを示す礎石や掘り方などは確認できなかった。図示可能な遺物は出土していない。

第1面上包含層出土遺物（図6、図版5）

第1面上包含層に伴う遺物は232点であり、その内訳はかわらけ113点、船載品2点、国産陶器80点、土製品（火鉢）3点、石製品5点、銭1点などの他、骨・貝等が25点とある程度の量が出土している。

上面遺物のうち、実測掲載し得た資料は図6-1~19だけである。1~5はロクロ成形のかわらけ大小皿、3は口縁部内外に煤が付着した灯明皿である。6は白磁口元皿で、復元底径6.3cmである。7~10は瀬戸窯の灰釉卸皿で、7が復元口径16.8cm、8が復元底径9.4cmを測り、内底面に鏡による荒い鉄目

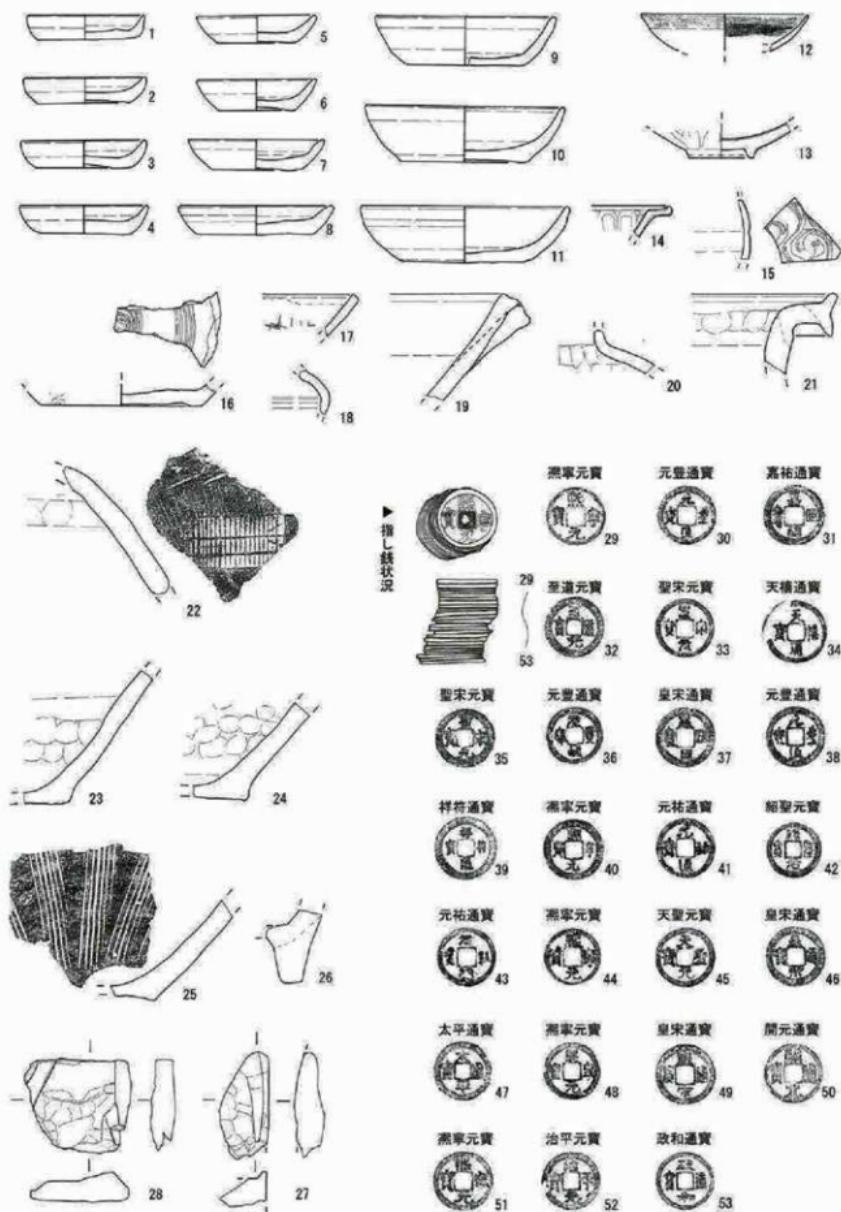


図7 第1面下a層出土遺物

を施す。11は瀬戸窯製品の仏華瓶で双耳付もので、12は南部系山茶碗の口縁部小片である。13・14は常滑窯製品で片口鉢・類の口縁部である。15は備前窯の摺鉢で内面に数状一単位の筋目帯を有する。16は瓦質火鉢の口縁部、17は温石で滑石鍋の体部を転用加工したものである。18は径2.1～2.5cmの橢円形を呈した偏平な基石の黒石である。19は北宋錢の「皇宋通宝」である。

第1面下a層出土遺物（図7、図版1）

この土層に伴う遺物は297点が出土している。その内訳をみると、かわらけ156点、舶載品6点、国产陶器88点、土製品（火鉢）2点、石製品2点、金属製品が銭24点・釘1点、木製品5点などの他、骨・貝が18点とある程度の量がまとまって出土している。

1～11はロクロ成形のかわらけであり、1～8は小皿、9は中皿、10・11は大皿である。小皿は1～4が口径7.2～7.8cm、底径5.4～6.0cm、器高1.5～1.7cmを測り、低い器高で比較的に口径と底径の比率が小さめの一群であり、5～7が口径7.2～8.2cm、底径4.6～4.8cm、器高1.7～1.9cmを測り、口径と底径の比率がやや大きな一群である。8は口径8.2cm、底径7.0cm、器高1.9cmと一回り大型で低い器高の口径と底径の比率が小さめである。9の中型品は口径11.0cm、底径7.2cm、器高2.9cm、10・11の大型品は口径12.2～12.6cm、底径7.8～7.4cm、器高約3.4cmを測り、大中型とともに薄手の器壁で高めの器高をもつ。12は瓦器碗である。13～15は貿易磁器で13が龍泉窯系青磁の連弁文碗（復元高径4.0cm）と14の内面に連弁文もつ折縁皿、15は景德鎮窯系青白磁梅瓶の胸部片である。

16～18は瀬戸窯製品であり、16が復元底径10.1cmの灰釉折縁皿、17が灰釉卸皿、18が小型の灰釉仏花瓶である。19～24は常滑窯所産品、19が片口鉢II類、20が舟口壺の頸・肩部、21～24が壺口縁・底部である。25は備前窯の摺鉢で内面に6状一単位の筋目帯を有する。26は瓦質火鉢の脚部、27・28は石製品で27が硯で赤間石製か。29～53は図7に示した状況で25枚が重なって出土しており、指し

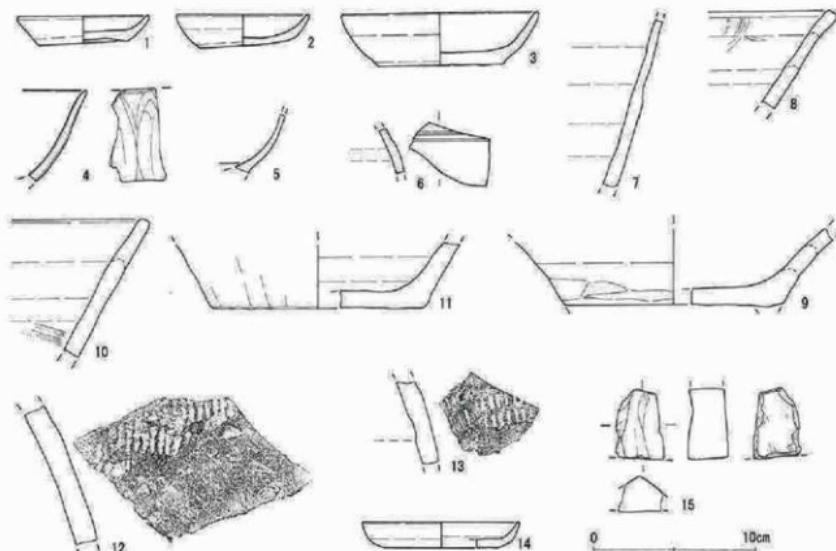


図8 第1面b層出土遺物

錢の一部と思われる。

錢種銘別の出土数をみると、熙寧元宝（北宋 1068 年）が 5 点、皇宋通宝（北宋 1038 年）・元豐通宝（北宋 1078 年）が各 3 点、元祐通宝（北宋 1078 年）・聖宋元宝（北宋 1101 年）が各 2 点、開元通宝（唐 845 年）・太平通宝（北宋 976 年）・至道元宝（北宋 995 年）・祥符通宝（北宋 1009 年）・天禧通宝（北宋 1017 年）・天聖元宝（北宋 1023 年）・嘉祐通宝（北宋 1056 年）・治平元宝（北宋 1064 年）・紹聖元宝（北宋 1094 年）・政和通宝（北宋 1111 年）が各 1 点の内訳である。

第 1 面下 b 層出土遺物（図 8、図版 2）

1～3 はロクロ成形のかわらけで 1・2 の小皿と 3 の大皿である。小皿は口径 8cm・底径 5.5cm・器高 1.9cm 余り、大皿は口径 12.2cm・底径 7.8cm・器高 3.2cm を測り、ともに薄手器壁をもつ口径と底径の比率が大きいものである。

4～7 は貿易陶磁器で、4 が龍泉窯系青磁の鍋連弁文碗、5 は白磁の口元碗体部過半、6・7 は褐釉壺胴部である。8～13 は常滑窯製品であり、8・9 が片口鉢 類口縁・底部片と 10・11 の片口鉢 類口縁・底部片である。14 は漆器皿で復元口径 9.6cm・底径 7.0cm・器高 1.5cm を測り薄手木地に黒色系漆塗りの無文皿である。15 は上野産砥石の中砥である。

2. 第 2 面の遺構・遺物

第 2 面の遺構は、現地表下 1.7m、海拔標高 4.7m 前後で検出された貝殻粒が多く含んで褐鉄分が染み込んだ表面が硬化する暗灰褐色砂質土（9 層）の上面で確認している。ここで検出した遺構は掘立柱建物、道路・木組土留遺構、溝 1、柱穴 12 口、礎板などが認められた。調査区内では区画された居住域が広がる空間であったことが想像される。遺物は多量のロクロ成形によるかわらけ他、貿易陶磁器、瀬戸・常滑窯製品、瓦質製品、金属製品、石製品、漆・木製品などがあげられる。

建物 1（図 9～11、図版 2～4・7）

調査区範囲が狭い関係で限られた中での遺構規模の確認となつたが、上面は褐鉄分で硬化した生活面から底面に礎板を据えた建物跡と推測される柱穴列が発見された。調査区内では P 1～P 3 の柱穴 3 口が確認された。規模は P 1 が上幅径 40～55cm、深さ 37cm の楕円形を呈しており、底面に礎板 4 枚（長 10～15cm、幅 8～12cm、厚 1.5～3cm）が設置されていた。P 3 が上幅径約 50cm、深さ 43cm の円形を呈し、底面に礎板 1 枚（長 16cm、幅 13cm、厚 3cm）が遺存する。

P 2 は上記 2 口に比べ一回り小型なもので上幅径約 23～32cm、深さ 28cm 程で礎板も遺存していない。柱穴の間隔は、礎板の中心距離で P 1 から P 3 が 206cm を測り、間柱と推定される P 2 までの距離が約 112cm である。柱通りの南北軸方位は、N-39° 40' -E をなしている。この南北軸方位は木組み土留や道路、溝と同じ軸方向を示した柱通りであり、掘立柱建物跡と考えられ東側に広がると想定したいところである。

図 11-1 は P 1 から出土した宋錢の元豐通宝（北宋 1078 年）で、2 は P 2 に伴う常滑窯底部片である。3・4 は P 3 から出土したロクロ成形のかわらけ大皿、口径 12.5cm、底径 6.6～6.8cm、器高 3.3cm を測り、ともに高めの薄手器壁をもつ、4 は内面に煤付着し灯明皿と思われる。

木組土留遺構（図 11・13～17、図版 3～5・7）

木組土留の護岸構造は、板材の束柱杭と土留めの側板からなりいわゆる「しがらみ」が組まれてたるものである。束柱杭は角柱を縦に削った材で長さ 1m 以上、幅 7～9cm、厚 3～5cm の板状材が 45～60cm の間隔で地中に打ち込まれている。この束柱杭に長さ 2m 前後、幅 9～15cm、厚 1.5～2cm 程の

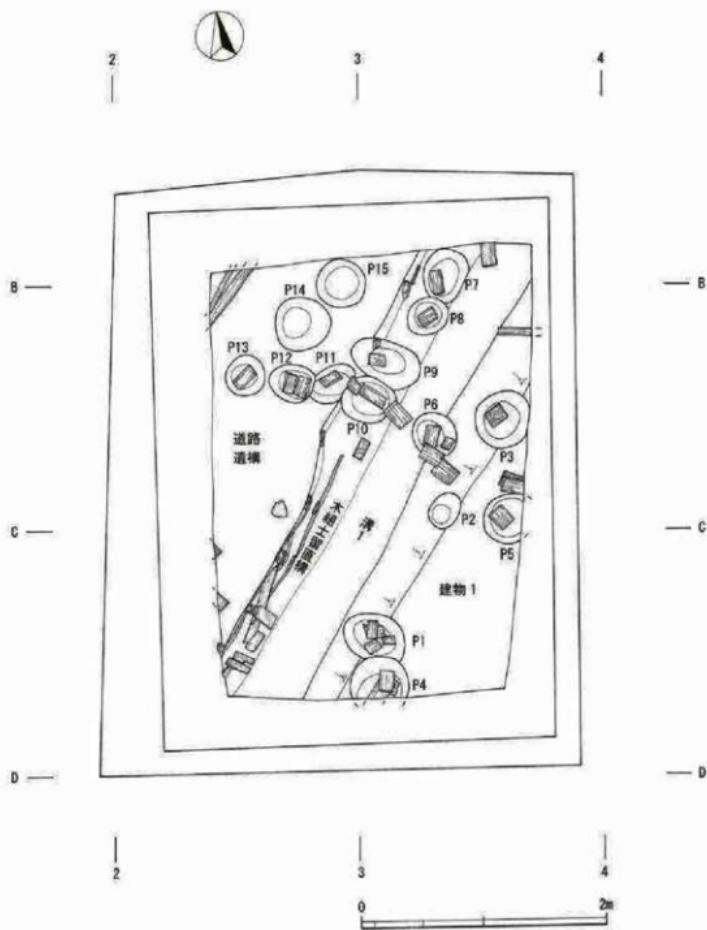


図9 第2面全測図

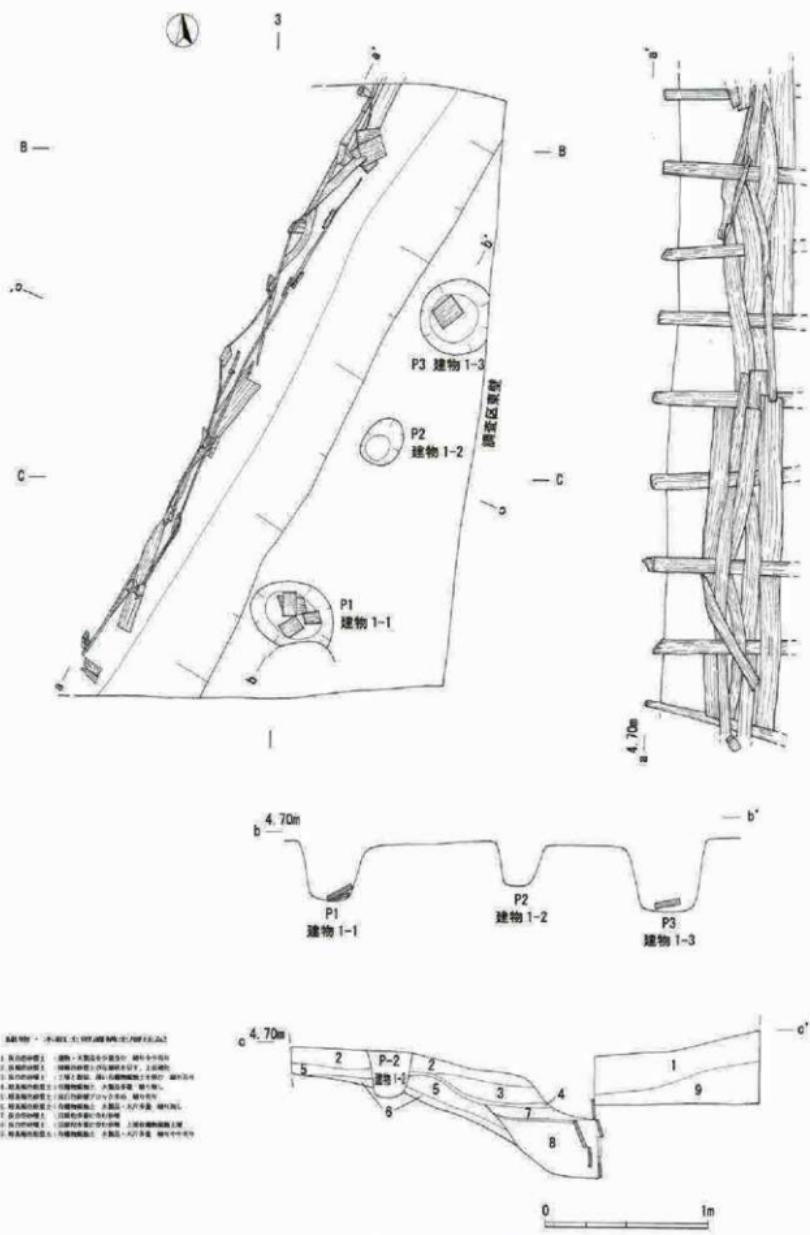


图 10 第 2 面建物 1・木相土留造構

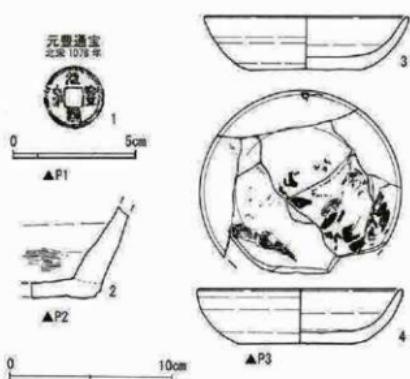


図 11 建物 1 出土遺物

8.8cm、器高 3.2cm を測り薄手の器壁で開いた立ち上がりである。9-11 は常滑窯製品であり、9 が片口鉢・類口縁部片であり、10・11 が甕口縁部片である。12 は伊勢系土鍋口縁部である。

13-29 は木製品である。13 は折敷の薄板を切り加工して鳥帽子を被った横向きの人形代で、下部は先端が尖るになる。14 は板目材を断面半月形を呈したもので小刀の柄片側と思われ破片、15-17 は片側先端を尖らし気味で薄くなるように加工したヘラ様のものである。18-29 は箸で長さ 19.5-25.5cm、径 4-7mm の断面多角形の棒状に削り、端部を尖らせた両口加工を施している。

上記のような木組みによる「しがらみ」護岸の良好な発掘調査事例については、米町遺跡（大町二丁目 2235 番 3 地点）から 13 世紀前半に位置づけられる溝の護岸に用いられた遺存状態の好例が知られる。この例では、板状の東杭に側板を内と外に交互に表れるように組み込んだもので、6 段の積み重ねられている。本例と同じく釘を使用せず「しがらみ」構造で強度が維持されているが、さらに補強材として不定の位置に細い杭を差し込んだり、全体を 2 本の大型角柱で内側への土圧倒壊を支える構造が用いられていた（馬淵和雄・鎌治屋勝二・松原康子・鈴木弘太 2008 「米町遺跡大町二丁目 2235 番 3 地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 平成 19 年度発掘調査報告』24）。

溝 1 (図 11・13-17、図版 3-5)

道路・木組土留護岸遺構の東側に敷設された側溝である。この溝は上部が後世の削平で欠失しているが調査区の南壁面と中央部に設けた土層観察ベルトからその規模などを窺うことができる。確認されたのは上幅 45cm、深さ約 30cm の浅い掘り方である。底部海抜標高は調査区北壁で 4.16m、調査区南壁で 4.22m を測り短い距離ではあるが南から北へと溝底面は低くなっている。覆土は木片を多く含んだ茶褐色弱粘質土の 2 層から構成されるものである。有機物腐蝕土が混入しており、最後はゴミ捨てによって埋没した様子が観察される。

出土遺物は図 13-1-23 が溝 1 に伴うものである。1-10 は糸切底のロクロ成形かわらけで、1-4 は小型の皿、5-10 は大型の皿になる。小皿は口径 7.5-8.0cm、底径 5.1-5.6cm、器高 1.5-1.8cm を測り、背が低めで器壁が開いた立ち上がりである。大皿は 5-6 が口径 11.6-11.8cm、底径 7.3-7.2cm、器高 3.0-2.9cm で、7-10 が口径 12.0-12.4cm、底径 7.0-7.9cm、器高 3.05-3.3cm を測り、内湾気味に立ち上がる器壁のものである。11-12 は常滑窯製品であり、11 が片口鉢・類底部片で内面に

細長い板材が杭の内外に交互に編むように組み込まれ、遺存状態の良好なところでみると 5 段の積み重ねが確認されている。興味深いのは側板を東杭に組み込む際に一段毎に上下逆に編んだ「しがらみ」構造にしており、強度を増したものと推測される。この木組土留の調北西城に平行して走る道路状遺構の護岸と考えるのが妥当であろう。なお護岸に東隣して側溝にあたる溝 1 が存在している。

南北軸方位は、N 39° 40' E をなし建物 1 と同一軸方位を示している。

出土遺物は図 12-1-29 である。1-7 は小型糸切りかわらけ、口径 7.7-8.8cm、底径 5.1-6.8cm、器高 1.4-1.8cm を測り、背が低く器壁の薄い開きながら立ち上がる資料が主体をなし、8 の大型糸切底かわらけは口径 12.8cm、底径

は使用による著しい摩滅痕、12が櫛肩部片で外面の叩き目痕は矩形内に×状の交差線を組合せたものによる。13は漆器皿で、口径8.4cm、底径5.0cm、器高1.0cmに復元される。黒色系漆地塗りした後に内外面に花文スタンプで施文する。14～23は木製品である。14は金剛草履の片足分の板芯である。半月状の薄板を中心で二枚合わせたもので、鼻緒を取り付けるために先端に2口の小穴、側面に切れ込みがあり表裏面には葉状の植物圧痕が認められる。15・16は先細り状に断面円形になるように丁寧に加工した木栓であろう。17は長さ20cmを超えた丸棒状の多角形に加工した菜箸とおもわれ、18も箸で断面多角形の棒状で端部を尖り気味に両口削り加工を施す。19は九棒状の片端を耳搔き皿風に削り、横断面が「く」の字形に削り仕上げされ、皿部に煤が付着する。20は断面長方形の用材で片上面のL字形に加工した端面に3カ所の穿孔が見られ、表面は焼け焦げて煤ける。21～23は薄板の加工品であるが用途不明である。

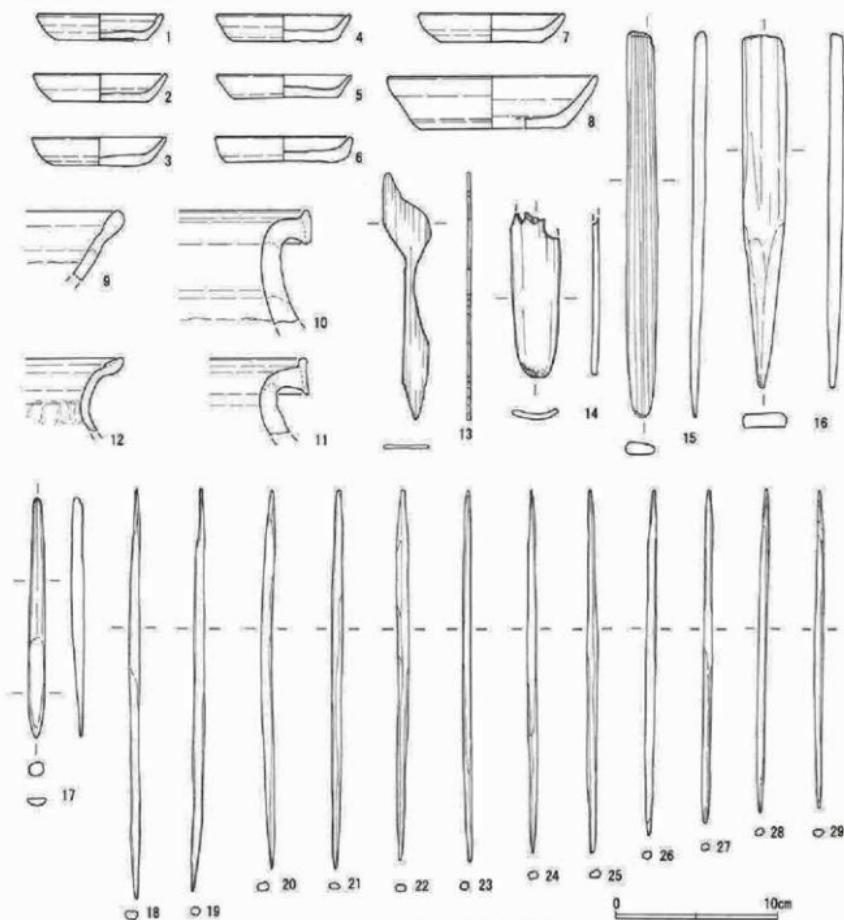


図12 第2面木組土留裏込出土遺物

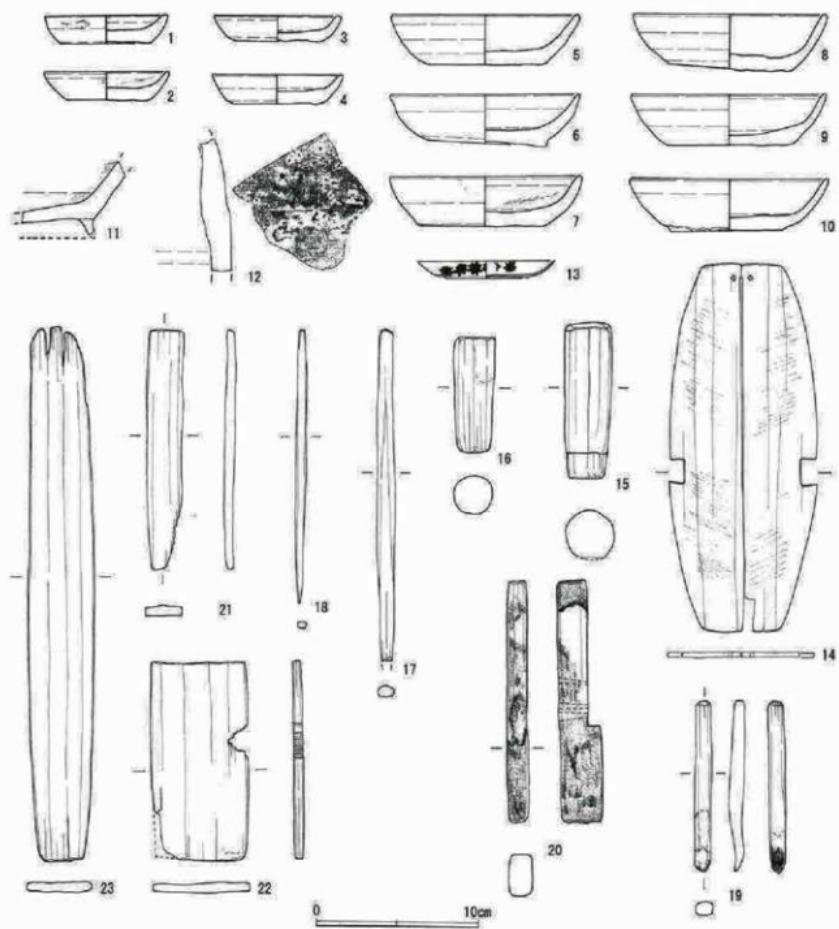


図13 第2面溝1道構出土遺物

道路状造構(図11・13～17、図版3～5)

道路の東には木組み護岸と側溝が設けられている南北方向の道路(通路状の可能性も)と考えられる。調査区内での規模は長さ3.8m確認しており、南北両方向に延伸することは調査区土層壁面において確認できる。調査区内では幅1.5mまで検出されたが、より西へと拡がることが土層観察にやはり確認できる。確認した路面の最上層には厚さ20cm前後の灰白砂層を積み上げて路床を構築している。調査区北西塁から2枚の板材が木組護岸と同じ方向で検出され西岸の護岸の木組の倒壊した痕跡とも推定されたが、灰白砂層を積み上げ路床の拡張が観察されるので断言はできない。この造構伴う図示可能な遺物は出土していない。

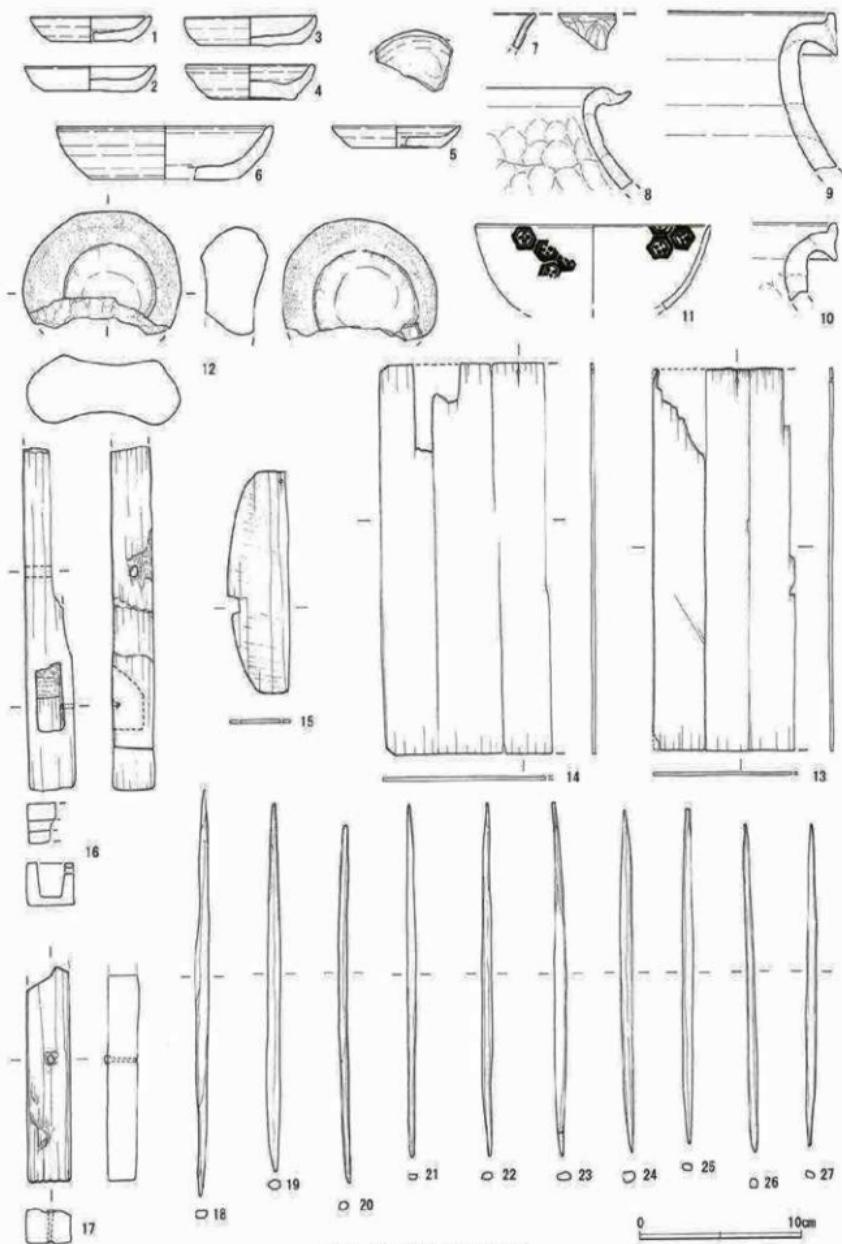


図 14 第2面遺構外出土遺物

第2面遺構外出土遺物（図14、図版9）

1～6はクロ成形の糸切底かわらけで1～5は小皿、6は大皿である。小皿は口径7.5～8.2cm、底径は3の6.4cm以外が5.0～5.5cm、器高1.5～2.1cm、6の大皿は口径13.3cm、底径9.1cm、器高3.2cmでともに低い器高で比較的に口径と底径の比率が小さめで内彎した器形である。5は内底面に兔風の戲画みられる。7は貿易磁器で龍泉窯系青磁蓮弁文碗の口縁部片である。8～10は常滑窯所産品で瀬口縁一類部片である（常滑窯中野編年5～6型式）。11は漆器椀で復元口径14.5cmで、黒色系漆地塗り後に朱漆による亀甲文スタンプで施文する。12は石製品の座石で上面中央が円形に掘り窪む。13～27は木製品である。13・14は経木製の折敷片であり、15は小型の金剛草履の板芯で表面に薺状の压痕を残す。16・17は釘穴や抉りの痕跡から組物部材の破片と考えられる。18～27は箸で長さ20.1～25.3cm、径3～5mmの断面多角形の棒状に削り、端部を尖らせた両口加工を施している。

以上のように第2面に伴う遺物は、遺構及び遺構外を併せて543点と最も多く、出土比率は全体の約50%を占めている。その内訳をみると、かわらけ224点、船載品1点、国産陶器48点、土製品3点、石製品2点、金属製品1点、木・漆製品212点とある程度の量まとまってみられ、その他に骨・貝が49点出土している。

表1 遺物観察表(1)

図番号	層位・遺構	種別	観察項目
図6-1	1面上包含層	かわらけ 小型	口径(7.2) 底径(4.6) 器高1.5 ロクロ成形で外底回転糸切痕、板状圧痕 胎土は黄灰色で微砂・白色針状・雲母のやや多い弱砂質土
2	1面上包含層	かわらけ 小型	口径(7.7) 底径(5.0) 器高1.9 ロクロ成形で外底回転糸切痕、板状圧痕 胎土は黄灰色で微砂・白色針状・雲母の多い砂質土
3	1面上包含層	かわらけ 小型	口径(7.4) 底径(5.1) 器高1.8 ロクロ成形で外底回転糸切痕、板状圧痕 胎土は黄灰色で微砂・赤色粒・白色針状・雲母を含む 煤付着
4	1面上包含層	かわらけ 小型	口径(7.8) 底径(4.8) 器高2.1 ロクロ成形で外底回転糸切痕、板状圧痕 胎土は黄橙色で赤色粒・白色針状・雲母を含む弱粉質土
5	1面上包含層	かわらけ 大型	口径(12.6) 底径(8.0) 器高3.4 ロクロ成形で外底回転糸切痕、板状圧痕 胎土は黄橙色で微砂・赤色粒・白色針状・雲母を含む砂質土
6	1面上包含層	白磁 口兀皿	底部片 ロクロ成形素地は灰白色の粘質で緻密 軸は乳白色薄手
7	1面上包含層	瀬戸 卸皿	口径(16.8) 器高(2.4) ロクロ成形 胎土は明灰色粘質緻密土 軸は白濁気味の灰緑色、二次焼成で釉剥落あり
8	1面上包含層	瀬戸 卸皿	底径(9.4) ロクロ成形 胎土は灰白色粘質緻密土 軸は白濁気味の淡緑色薄い刷毛塗り
9	1面上包含層	瀬戸 卸皿	底部片 ロクロ成形 胎土は灰白色粘質緻密土 軸は半透明な淡緑色
10	1面上包含層	瀬戸 卸皿	口縁部片 ロクロ成形 胎土は明灰色粘質緻密土 軸は半透明な淡黄緑色 内面に摩滅痕
11	1面上包含層	瀬戸 仏華瓶	ロクロ成形 双耳貼付け 胎土は灰白色粘質緻密土 軸は不透明な暗灰緑色 古瀬戸中期様式か
12	1面上包含層	南部系 山茶碗	口縁部片 ロクロ成形 胎土は明灰色で石粒を多く含む粗土 内面摩滅痕
13	1面上包含層	常滑 片口鉢Ⅰ類	口縁部片 輪積成形胎土は灰色で長石・石英粒を多く含む粗土 小片のため内面使用痕は不明
14	1面上包含層	常滑 片口鉢Ⅱ類	口縁部片 輪積成形胎土は赤褐色で長石・石英粒を含む 小片のため内面使用痕は不明
15	1面上包含層	備前 撥鉢	口縁部片 輪積成形胎土は淡赤灰色で長石粒を含む粘質土で表面茶褐色 内面撥条線 備前Ⅲ期様式か
16	1面上包含層	瓦質 火鉢	口縁部片 内面を横方向のヘラナデ 胎土は灰色で微砂・白色粒内面が二次焼成で赤変色し荒肌
17	1面上包含層	滑石製 温石	長(6.1) 幅(6.6) 厚1.4 方板状加工で二カ所に円孔をもつ 煤付着
18	1面上包含層	石製品 基石	径2.1~2.5厚0.5 橢円形の偏平なもの 産地不明の黒色系安山岩質
19	1面上包含層	銭 皇宋通寶	外径2.5 内径1.9 厚0.1 北宋 初鑄1039年
図7-1	1面下a層	かわらけ 小型	口径7.2 底径6.0 器高1.5 ロクロ成形で外底回転糸切痕、板状圧痕 胎土は黄灰色で赤色粒・白色針状・雲母のやや多い弱砂質土
2	1面下a層	かわらけ 小型	口径7.4 底径5.8 器高1.6 ロクロ成形で外底回転糸切痕、板状圧痕 胎土は黄灰色で微砂・白色針状・雲母を含む弱砂質土
3	1面下a層	かわらけ 小型	口径(7.6) 底径(6.0) 器高1.7 ロクロ成形で外底回転糸切痕、板状圧痕 胎土は黄橙色で微砂・白色粒・白色針状・雲母を含む弱砂質土
4	1面下a層	かわらけ 小型	口径7.6 底径5.4 器高1.7 ロクロ成形で外底回転糸切痕、板状圧痕 胎土は黄灰色で微砂・白色針状・雲母の多い砂質土
5	1面下a層	かわらけ 小型	口径(7.2) 底径(4.8) 器高1.7 ロクロ成形で外底回転糸切痕、板状圧痕 胎土は黄橙色で赤色粒・白色針状・雲母を含む弱粉質土
6	1面下a層	かわらけ 小型	口径(7.2) 底径4.8 器高1.9ロクロ成形で外底回転糸切痕、板状圧痕 胎土は淡黄橙色で赤色粒・白色針状・雲母を含む粉質土

表2 遺物観察表(2)

図番号	層位・造構	種別	観察項目
図7-7	1面下a層	かわらけ 小型	口径8.2 底径4.8 器高1.9 ロクロ成形で外底回転糸切痕、板状圧痕 胎土は黄橙色で赤色粒・白色針状・雲母を含む弱粉質土
8	1面下a層	かわらけ 小型	口径(9.1) 底径7.0 器高1.8 ロクロ成形で外底回転糸切痕、板状圧痕 胎土は黄灰色で微砂・白色針状・雲母の多い弱粉質土
9	1面下a層	かわらけ 中型	口径(11.0) 底径(7.2) 器高2.9 ロクロ成形で外底回転糸切痕、板状圧痕 胎土は淡黄橙色で微砂・赤色粒・白色針状・雲母を含む粉質土
10	1面下a層	かわらけ 大型	口径(12.2) 底径(7.8) 器高3.4 ロクロ成形で外底回転糸切痕、板状圧痕 胎土は黄灰色で微砂・赤色粒・雲母のやや多い弱粉質土
11	1面下a層	かわらけ 大型	口径(12.6) 底径7.4 器高3.5 ロクロ成形で外底回転糸切痕、板状圧痕 胎土は黄橙色で赤色粒・白色針状・雲母を含む粉質土
12	1面下a層	瓦器 土碗	口径(10.2) ロクロ成形 胎土は明灰色で口縁部内外側が黒灰色
13	1面下a層	龍泉窯系青磁 織籠弁文碗	底径(4.0) ロクロ成形 高台断面が三角形 素地は明灰色の緻密釉は灰緑色半透明 高台内施釉で笠付露胎
14	1面下a層	龍泉窯系青磁 折縁皿	口縁部片 ロクロ成形 内面蓮弁文 素地は明灰白色の緻密 釉は灰緑色半透明で厚手に施釉
15	1面下a層	景德鎮窯系 青白磁梅瓶	胴部片 ロクロ成形 外面唐草文 素地は明白色粘質で緻密 釉は水青色透明の薄い施釉 内面露胎
16	1面下a層	瀬戸 折縁皿	口径(10.1) ロクロ成形 内底の中央と外周に櫛描円文 胎土は灰白色粘質緻密土 釉は半透明な淡灰緑色の灰釉を刷毛塗り
17	1面下a層	瀬戸 卵皿	口縁部片 ロクロ成形 内面へラで荒く即目を刻む 胎土は灰白色緻密釉は淡緑色の灰釉を刷毛塗り
18	1面下a層	瀬戸 華瓶	胴部片 ロクロ成形 胎土は灰白色粘質土で緻密 釉は外面に灰緑色
19	1面下a層	常滑 片口鉢II類	口縁部片 輪積成形 胎土は暗灰色で長石・石英粒を含む 器表褐色小片のため内面使用痕は不明
20	1面下a層	常滑 蔷口壺	頸～肩部片 輪積成形 胎土は灰色で長石・石英粒をやや多く含む 器表赤褐色肩部に一束凹線
21	1面下a層	常滑 壶	口縁部片 輪積成形 胎土は暗灰色で長石・石英粒を多く含む 自然降灰釉
22	1面下a層	常滑 壺	肩部片 輪積成形 格子目状の叩き痕胎土は灰色で長石・石英粒を多く含む 器表赤褐色
23	1面下a層	常滑 壺	胴部～底部片 輪積成形 砂目底 胎土は灰色で長石・石英粒が多い
24	1面下a層	常滑 壺	胴部～底部片 輪積成形 砂目底 胎土は灰色で長石・石英粒が多い
25	1面下a層	備前 擙鉢	口縁部片 輪積成形 胎土は淡赤灰色で長石粒を含む粘質土で器表茶褐色 内面の櫛描朱線は6条一単位の筋目
26	1面下a層	瓦質 火鉢	脚部片 脚部は別粘土で貼付 灰色で白色粒・黒色微砂・雲母を含む 表面灰黒色の蠟状を呈す
27	1面下a層	石製品 琥珀	長(6.2) 幅(3.0) 厚(1.9) 赤褐色真岩質で赤間石製か?
28	1面下a層	石製品 不明	長(5.6) 幅(6.6) 厚(1.8) 緑泥片岩質の石材
29	1面下a層	銭 黑率元寶	外径2.4 内径2.0 北宋 初鑄1068年
30	1面下a層	銭 元豐通寶	外径2.5 内径1.9 北宋 初鑄1078年
31	1面下a層	銭 真祐通寶	外径2.4 内径1.8 北宋 初鑄1056年
32	1面下a層	銭 至道元寶	外径2.4 内径1.9 北宋 初鑄955年

表3 遺物観察表(3)

図番号	層位・遺構	種別	観察項目
図7-33	1面下a層	錢 聖宋元寶	外径2.4 内径1.9 北宋 初鑄1101年
34	1面下a層	錢 天禧通寶	外径2.5 内径2.0 北宋 初鑄1017年
35	1面下a層	錢 聖宋元寶	外径2.4 内径1.8 北宋 初鑄1101年
36	1面下a層	錢 元豐通寶	外径2.3 内径1.8 北宋 初鑄1078年
37	1面下a層	錢 皇宋通寶	外径2.3 内径1.9 北宋 初鑄1038年
38	1面下a層	錢 元豐通寶	外径2.4 内径1.8 北宋 初鑄1078年
39	1面下a層	錢 祥符通寶	外径2.5 内径1.9 北宋 初鑄1009年
40	1面下a層	錢 熙寧元寶	外径2.5 内径1.8 北宋 初鑄1068年
41	1面下a層	錢 元祐通寶	外径2.5 内径1.9 北宋 初鑄1086年
42	1面下a層	錢 紹聖元寶	外径2.2 内径1.7 北宋 初鑄1094年
43	1面下a層	錢 元祐通寶	外径2.4 内径1.9 北宋 初鑄1086年
44	1面下a層	錢 熙寧元寶	外径2.3 内径1.9 北宋 初鑄1068年
45	1面下a層	錢 天聖元寶	外径2.5 内径2.0 北宋 初鑄1023年
46	1面下a層	錢 皇宋通寶	外径2.5 内径1.9 北宋 初鑄1038年
47	1面下a層	錢 太平通寶	外径2.4 内径1.8 北宋 初鑄967年
48	1面下a層	錢 熙寧元寶	外径2.4 内径1.8 北宋 初鑄1068年
49	1面下a層	錢 皇宋通寶	外径2.4 内径2.0 北宋 初鑄1038年
50	1面下a層	錢 開元通寶	外径2.4 内径2.0 唐 初鑄621年
51	1面下a層	錢 熙寧元寶	外径2.4 内径2.0 北宋 初鑄1068年
52	1面下a層	錢 治平元寶	外径2.4 内径2.0 北宋 初鑄1064年
53	1面下a層	錢 政和通寶	外径2.4 内径2.0 北宋 初鑄1111年
図8-1	1面下b層	かわらけ 小型	口径8.0 底径5.5 塚高1.8 ロクロ成形で外底回転糸切痕、板状圧痕 胎土は橙色で赤色粒・白色針状・雲母を含む弱砂質土
2	1面下b層	かわらけ 小型	口径8.1 底径5.6 塚高1.9 ロクロ成形で外底回転糸切痕、板状圧痕 胎土は橙色で赤色粒・白色針状・雲母・微砂を含む弱砂質土
3	1面下b層	かわらけ 大型	口径12.2 底径(7.8) 塚高3.2 ロクロ成形で外底回転糸切痕、板状圧痕 胎土は黄褐色で赤色粒・白色針状・雲母・微砂を多く含む砂質
4	1面下b層	龍泉窯系青磁 鎮蓮弁文鏡	口縁～体部片 ロクロ成形 口縁端反気味 素地は灰白色粘質の緻密釉は灰緑色不透明 厚手施釉
5	1面下b層	白磁 口兀皿	ロクロ成形 素地は白色粘質で緻密 釉は乳白色の薄手
6	1面下b層	褐釉 盞	肩部片 ロクロ成形 胎土は黄褐色で粘質精良の緻密 釉は暗褐色
7	1面下b層	褐釉 盞	脚部片 ロクロ成形 胎土は黄灰色で粘質精良の緻密 釉は茶褐色

表4 遺物観察表(4)

図番号	層位・造構	種別	観察項目
図8-8	1面下b層	常滑 片口鉢I類	口縁～体部片 輪積成形 胎土は灰色で長石・石英粒・砂を多く含む粗土 内面使用の摩滅痕
9	1面下b層	常滑 片口鉢I類	体部下～底部片 輪積成形 貼付高台が剥離 胎土は灰色で長石・石英粒を多く含む粗土 内面使用の著しい摩滅痕
10	1面下b層	常滑 片口鉢II類	口縁～体部片 輪積成形 胎土は暗灰色で石粒・砂粒を含むやや粗土 器表は灰褐色 内面使用の摩滅痕
11	1面下b層	常滑 片口鉢II類	輪積成形 砂目底 胎土は暗灰色で石粒・砂粒を含む 器表褐色 器表は灰褐色 内面使用の摩滅痕
12	1面下b層	常滑 壺	肩部片 輪積成形 格子叩き目痕 胎土は灰色で石粒・砂粒を含む
13	1面下b層	常滑 壺	肩部片 輪積成形 格子叩き目痕 胎土は灰色で石粒・砂粒を含む
14	1面下b層	漆器 皿	口径(9.6) 底径(7.0) 器高1.5 ロクロ成形 薄手木地 黒色系漆のみの無文
15	1面下b層	石製品 砕石	長(4.4) 幅(2.6) 厚(2.4) 底面は上下面に使用痕 淡緑色凝灰岩製 上野産の中磁か
図11-1	2面建物1 P1	鏡 元豊通寶	外径2.5 内径2.1 北宋 初鑄1078年
2	2面建物1 P2	常滑 壺	底部片 輪積成形 砂目底 胎土は暗灰色で石粒・砂粒を多く含む 内面に自然降灰
3	2面建物1 P3	かわらけ 大型	口径(12.6) 底径6.6 器高3.3 ロクロ成形で外底回転糸切痕、板状圧痕 胎土は黄橙色で白色針状・雲母・微砂を含む弱砂質土
4	2面建物1 P3	かわらけ 大型	口径12.5 底径6.8 器高3.3 ロクロ成形で外底回転糸切痕、板状圧痕 胎土は黄橙色で赤色粒・白色針状・雲母を含む 内面に煤付着
図12-1	2面木組土留	かわらけ 小型	口径7.7 底径6.6 器高1.7 ロクロ成形で外底回転糸切痕、板状圧痕 胎土は黄灰色で微砂・赤色粒・白色針状・雲母を含む砂質土
2	2面木組土留	かわらけ 小型	口径8.1 底径7.8 器高1.7 ロクロ成形で外底回転糸切痕、板状圧痕 胎土は黄橙色で赤色粒・白色針状・雲母を含むやや粉質土
3	2面木組土留	かわらけ 小型	口径8.3 底径5.1 器高1.8 ロクロ成形で外底回転糸切痕、板状圧痕 胎土は黄灰色で白色粒・白色針状・雲母を含む弱砂質土
4	2面木組土留	かわらけ 小型	口径(8.3) 底径(6.1) 器高1.7 ロクロ成形で外底回転糸切痕、板状圧痕 胎土は淡黄褐色で赤色粒・白色針状・雲母を含む粉質土
5	2面木組土留	かわらけ 小型	口径8.3 底径6.3 器高1.4 ロクロ成形で外底回転糸切痕、板状圧痕 胎土は黄灰色で赤色粒・白色針状・雲母を含む弱粉質土
6	2面木組土留	かわらけ 小型	口径8.3 底径6.9 器高1.6 ロクロ成形で外底回転糸切痕、板状圧痕 胎土は橙色で微砂・白色針状・雲母をやや多く含む砂質土
7	2面木組土留	かわらけ 小型	口径(8.9) 底径6.3 器高1.8 ロクロ成形で外底回転糸切痕、板状圧痕 胎土は橙色で微砂・白色粒・白色針状・雲母を含む弱砂質土
8	2面木組土留	かわらけ 大型	口径(12.8) 底径(8.8) 器高3.2 ロクロ成形で外底回転糸切痕、板状圧痕 胎土は橙色で微砂・赤色粒・白色針状・雲母を多く含む砂質土
9	2面木組土留	常滑 片口鉢I類	口縁部片 輪積成形 胎土は灰色で石粒・砂粒を多く含む 内面摩滅痕
10	2面木組土留	常滑 壺	口縁部片 輪積成形 胎土は暗灰色で石粒・砂粒を含む自然降灰 中野編年6型式
11	2面木組土留	常滑 壺	口縁部片 輪積成形 胎土は灰色で石粒・砂粒を多く含み粗い 器表暗赤褐色 中野編年6型式
12	2面木組土留	伊勢系 土鍋	口縁～頸部片 輪積成形 薄手器壁で口端部を内側に折り曲げ 胎土は暗褐色で黒色微砂・雲母を多く含む砂質土 外面に煤付着
13	2面木組土留	木製品 人形代	長15.3 幅0.4～2.8 厚0.2 折敷様の薄板を切って鳥帽子を冠った整形の横向き人形代 下部は先端が尖る加工を施す

表5 遺物觀察表(5)

図番号	層位・遺構	種別	観察項目
図12-14	2面木組土留	木製品 納か	長(10.3) 幅3.0 厚0.4 板目材で断面半月状で小刀の鞘を再加工か
15	2面木組土留	木製品 ヘラ状	長23.7 幅1.9 厚0.7 優平加工の用材の片端部を両側面から削り下し、さらに上面を先端に向け薄く削り仕上げする
16	2面木組土留	木製品 ヘラ状	長21.8 幅2.7 厚0.9 断面が長方形偏平な用材粗く削り先端を尖らす仕上げ
17	2面木組土留	木製品 ヘラ状	長14.9 幅1.0 厚0.5 断面丸棒の棒状に加工した用材 片端部を両側面から削り尖らし、さらに片面を先端に向け削り仕上げする
18	2面木組土留	木製品 箸	長25.5 幅0.7 厚0.5 断面多角形の棒状に削り端部を尖す両口加工
19	2面木組土留	木製品 箸	長25.0 幅0.6 厚0.4 断面多角形の棒状に削り端部を尖す両口加工
20	2面木組土留	木製品 箸	長23.5 幅0.7 厚0.5 断面多角形の棒状に削り端部を尖す両口加工
21	2面木組土留	木製品 箸	長23.5 幅0.6 厚0.4 断面多角形の棒状に削り端部を尖す両口加工
22	2面木組土留	木製品 箸	長23.0 幅0.6 厚0.4 断面多角形の棒状に削り端部を尖す両口加工
23	2面木組土留	木製品 箸	長23.0 幅0.5 厚0.4 断面多角形の棒状に削り端部を尖す両口加工
24	2面木組土留	木製品 箸	長22.5 幅0.5 厚0.4 断面多角形の棒状に削り端部を尖す両口加工
25	2面木組土留	木製品 箸	長22.4 幅0.7 厚0.5 断面多角形の棒状に削り端部を尖す両口加工
26	2面木組土留	木製品 箸	長21.5 幅0.5 厚0.4 断面多角形の棒状に削り端部を尖す両口加工
27	2面木組土留	木製品 箸	長20.5 幅0.5 厚0.4 断面多角形の棒状に削り端部を尖す両口加工
28	2面木組土留	木製品 箸	長20.0 幅0.5 厚0.5 断面多角形の棒状に削り端部を尖す両口加工
29	2面木組土留	木製品 箸	長19.5 幅0.6 厚0.4 断面多角形の棒状に削り端部を尖す両口加工
図13-1	2面溝状	かわらけ 小型	口径7.5 底径5.6 器高1.6 ロクロ成形で外底回転糸切痕、板状圧痕 脱土は黄灰色で微砂・白色針状・雲母を含む砂質土 煤付着の灯明皿
2	2面溝状	かわらけ 小型	口径7.7 底径5.1 器高1.7 ロクロ成形で外底回転糸切痕、板状圧痕 脱土は黄褐色で赤色粒・白色針状・雲母を含む 煤付着の灯明皿か
3	2面溝状	かわらけ 小型	口径7.7 底径5.1 器高1.5 ロクロ成形で外底回転糸切痕、板状圧痕 脱土は黄褐色で赤色粒・白色針状・雲母を含むやや粉質土
4	2面溝状	かわらけ 小型	口径8.0 底径5.5 器高1.8 ロクロ成形で外底回転糸切痕、板状圧痕 脱土は黄灰色で微砂・赤色粒・白色針状・雲母を含むやや砂質土
5	2面溝状	かわらけ 大型	口径11.6 底径7.3 器高3.0 ロクロ成形で外底回転糸切痕、板状圧痕 脱土は黄褐色で微砂・赤色粒・白色針状・雲母を含むやや砂質土
6	2面溝状	かわらけ 大型	口径11.8 底径7.2 器高2.9 ロクロ成形で外底回転糸切痕、板状圧痕 脱土は褐色で微砂・赤色粒・白色針状・雲母を含む
7	2面溝状	かわらけ 大型	口径12.0 底径7.9 器高3.0 ロクロ成形で外底回転糸切痕、板状圧痕 脱土は黄褐色で微砂・赤色粒・白色針状・雲母を多く含む粗土
8	2面溝状	かわらけ 大型	口径12.1 底径7.7 器高3.3 ロクロ成形で外底回転糸切痕、板状圧痕 脱土は黄褐色で赤色粒・白色針状・雲母を含むや砂質土
9	2面溝状	かわらけ 大型	口径12.3 底径7.8 器高3.1 ロクロ成形で外底回転糸切痕、板状圧痕 脱土は黄灰色で赤色粒・白色針状・雲母を含むや粉質土
10	2面溝状	かわらけ 大型	口径12.4 底径7.0 器高3.2 ロクロ成形で外底回転糸切痕、板状圧痕 脱土は褐色で微砂・赤色粒・白色針状・雲母を含む粉質土

表6 遺物観察表(6)

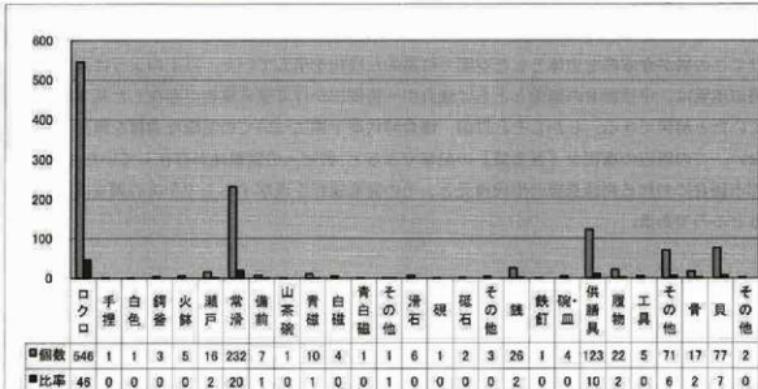
図番号	層位・構造	種別	観察項目
図13-11	2面溝状	常滑 片口鉢 I類	体部下半～底部片 輪積成形胎土は灰色で石粒・砂粒を多く含む 内面使用痕の審しい摩滅
12	2面溝状	常滑 壺	胴部片 輪積成形 叩き目は矩形内に×状と交差線の組み合せ 胎土は暗灰色で石粒・砂粒を多く含み粗い 器表茶褐色
13	2面溝状	漆器 盆	口径(8.4) 底径(5.0) 器高1.0 ロクロ成形 本地が極薄手 黒色系漆の地塗りに赤色漆で内外面に花文スタンプの施文
14	2面溝状	木製品 草履 板芯	長22.7 幅9.1 厚0.3 半月状の薄板を中心縫で二枚を合わせて片足分 葉状の植物圧痕残る金剛草履
15	2面溝状	木製品 桁状	長9.7 径2.3～3.0 円形の先細り状へと縦位の削り施し先端部は丁寧な削り仕上げ
16	2面溝状	木製品 桁状	長7.2 径2.0～2.4 円形の先細り状に縦位の丁寧な削りで仕上げる
17	2面溝状	木製品 菓等	長(20.6) 幅9.1 厚0.3 先端欠失 砂目材を縱割り後、丸棒状の多角形に削り加工
18	2面溝状	木製品 箸	長16.8 幅0.4 厚0.3 断面多角形の棒状に削り端部を尖す両口加工
19	2面溝状	木製品 耳搔き状	長10.7 幅1.0 厚0.8 断面丸棒の著状に加工した用材で片端部を耳搔皿底に削り仕上げたもの 底部に煤付着
20	2面溝状	木製品 部材	板状用材の片面をJ字形に削り加工し側面中央部に3カ所の縦列穿孔あり 表面焼け焦げ黒ずむ
21	2面溝状	木製品 不明	長14.6 幅2.2 厚0.4 板状用材の先端片側を刃先状に斜めに削る
22	2面溝状	木製品 不明	長12.3 幅6.0 厚0.3 長方形の板材の片側にV字形切り込みを入れる
23	2面溝状	木製品 不明	長32.8 幅4.0 厚0.4 細長い板状で両側がやや細く丸味もつ仕上げ
図14-1	2面遺構外	かわらけ 小型	口径(7.5) 底径(5.0) 器高1.5 ロクロ成形で外底回転糸切痕、板状 圧痕 胎土は黄灰色で微砂・白色針状・雲母を含む弱砂質土
2	2面遺構外	かわらけ 小型	口径(8.1) 底径(5.5) 器高1.5 ロクロ成形で外底回転糸切痕、板状 圧痕 胎土は灰橙色で微砂・赤色粒・白色針状・雲母を含む弱砂質土
3	2面遺構外	かわらけ 大型	口径(8.2) 底径(8.4) 器高1.5 ロクロ成形で外底回転糸切痕、板状 圧痕 胎土は黄灰色で白色針状・雲母を含む弱砂質土
4	2面遺構外	かわらけ 小型	口径(7.9) 底径(5.2) 器高2.1 ロクロ成形で外底回転糸切痕、板状 圧痕 胎土は黄橙色で微砂・白色針状・雲母を含む弱砂質土
5	2面遺構外	かわらけ墨書き 小型	口径(7.8) 底径(5.5) 器高1.4 ロクロ成形で外底回転糸切痕、板状 圧痕 胎土は灰橙色で白色針状・雲母を含む 内底面に兔風の墨書きあり
6	2面遺構外	かわらけ 大型	口径(13.3) 底径(9.1) 器高3.2 ロクロ成形で外底回転糸切痕、板状 圧痕 胎土は黄橙色で微砂・赤色粒・白色針状・雲母を多く含む粗土
7	2面遺構外	龍泉窯系青磁 籠蓮弁文鏡	口縁部片 ロクロ成形 口縁外反気味素地は灰白色粘質緻密 鞘は灰緑色の不透明
8	2面遺構外	常滑 壺	口縁～頸部片 輪積成形 胎土は暗灰色で石粒・砂粒を多く含み粗い 器表褐色 内外面に自然降灰 中野編年5型式
9	2面遺構外	常滑 壺	口縁～頸部片 輪積成形 胎土は灰褐色で石粒・砂粒を多く含み粗い 器表暗褐色口縁内に自然降灰 中野編年6型式
10	2面遺構外	常滑 壺	口縁～頸部片 輪積成形 胎土は暗灰色で石粒・砂粒を多く含み粗い 器表暗褐色内外面に自然降灰 中野編年6型式
11	2面遺構外	漆器 椗	口径(14.5) ロクロ成形 黒色系漆の地塗りに赤色系漆を用い、内外面に龜甲文スタンプで施文
12	2面遺構外	石製品 磐石	径9.7 中央厚2.9 端面厚4.0前後 上下面是中央部が円形に窪む彫り、加工を施す凝灰岩質

表7 遺物観察表(7)

図番号	層位・遺構	種別	観察項目
図14-13	2面遺構外	木製品 折敷	長23.7 幅(3.8) 厚0.2 横目取りに極薄へぎ経木製の折敷 周囲に縁を継ぐための小孔を穿つ
14	2面遺構外	木製品 折敷	長24.1 幅(10.1) 厚0.1 横目取りに極薄へぎ経木製の折敷 軽く隅を切り落とす 折敷周囲の縁を継ぐ小孔を穿つ
15	2面遺構外	木製品 草履 板芯	長13.8 幅3.7 厚0.2 半月状の薄板で二枚を合わせて片足分としたものの半分 表面葉状の植物圧痕残る 金剛草履
16	2面遺構外	木製品 組物部材	長(21.2) 幅2.9 厚2.8 角材を用い中央部に釘穴状の孔、片端近くにU字形のぼぞ穴風の抜りを施す 用途不明
17	2面遺構外	木製品 不明	長(13.5) 幅2.8 厚1.9 角材で中央部に鉄釘1本が打ち込まれ残存
18	2面遺構外	木製品 着	長25.3 幅0.4 厚0.3 断面多角形の棒状に削り端部を尖す両口加工
19	2面遺構外	木製品 着	長22.9 幅0.5 厚0.4 断面多角形の棒状に削り端部を尖す両口加工
20	2面遺構外	木製品 着	長22.2 幅0.3 厚0.3 断面多角形の棒状に削り端部を尖す両口加工
21	2面遺構外	木製品 着	長22.0 幅0.5 厚0.4 断面多角形の棒状に削り端部を尖す両口加工
22	2面遺構外	木製品 着	長22.0 幅0.4 厚0.3 断面多角形の棒状に削り端部を尖す両口加工
23	2面遺構外	木製品 着	長22.0 幅0.4 厚0.3 断面多角形の棒状に削り端部を尖す両口加工
24	2面遺構外	木製品 着	長21.4 幅0.4 厚0.3 断面多角形の棒状に削り端部を尖す両口加工
25	2面遺構外	木製品 着	長20.8 幅0.3 厚0.3 断面多角形の棒状に削り端部を尖す両口加工
26	2面遺構外	木製品 着	長20.5 幅0.3 厚0.3 断面多角形の棒状に削り端部を尖す両口加工
27	2面遺構外	木製品 着	長20.1 幅0.3 厚0.2 断面多角形の棒状に削り端部を尖す両口加工

表8 遺物分類別出土数量・比率表

出土地種類	1面上	1面下a層	1面下b層	2面	その他	合計	比率(%)
かわらけ	ロクロ	113	156	53	224	0	546
	手捏	0	0	1	0	0	1
	白色	0	1	0	0	0	1
土製品	飼養	0	0	0	3	0	3
	火鉢	3	2	0	0	0	5
	瀬戸	8	6	1	1	0	16
	常滑	69	77	38	48	0	232
国産陶器	備前	2	5	0	0	0	7
	山茶碗	1	0	0	0	0	1
	青磁	2	4	3	1	0	10
舶載陶磁器	白磁	3	0	1	0	0	4
	青白磁	0	1	0	0	0	1
	その他	0	0	1	0	0	1
	滑石	4	0	0	2	0	6
石製品	硯	0	1	0	0	0	1
	砥石	0	1	1	0	0	2
	その他	1	0	0	2	0	3
	鉄	1	24	0	1	0	26
金属品	鉄釘	0	1	0	0	0	1
	碗・皿	0	0	1	3	0	4
	供膳具	0	0	0	122	1	123
	覆物	0	0	1	21	0	22
漆・木製品	工具	0	0	0	5	0	5
	その他	0	5	2	61	3	71
	骨	5	3	4	4	1	17
	貝	18	10	3	45	1	77
自然遺物	その他	2	0	0	0	0	2
	合計	232	297	110	543	6	1188
	比率(%)	19	25	9	46	1	



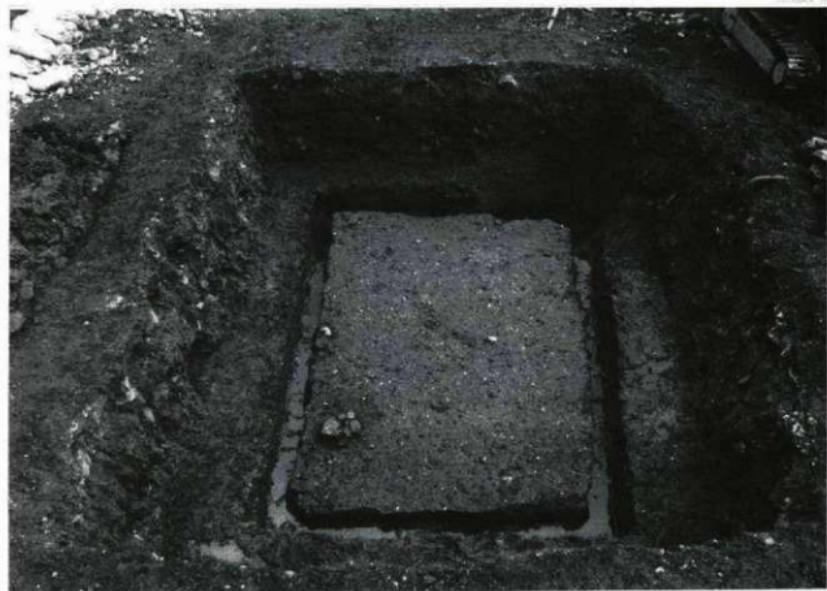
第4章　まとめ

下馬周辺遺跡内における今回の調査地点（由比ヶ浜二丁目39番14）では、調査面積の狭さや湧水に伴う崩落の危険性から掘削深度の制約があり限定された範囲内の遺構検出や出土遺物に留まっており、遺構の性格や敷地の空間的な様相を明確にすることはできなかった。ここでは前章までに記した調査の成果について概観すると共に、近辺の調査地点との関係などを簡単に触れてまとめてかえたい。

本調査地点は由比ヶ浜の海浜砂丘帯の裏側に位置し滑川や佐助川が合流する下馬四ツ角付近から車小路近辺にかけては鎌倉市街地中でも最も海拔標高の低い地域で現地表の海拔高6m程を測るものであり、南側の砂丘帯頂部に建っている現在の石造浜ノ大鳥居より3mも低い標高を示している。第1面は地表下約1.4mで検出されたた弱い地形層による遺構密度の低い生活面で明確な建物を示す柱穴や礎石は確認されていない。出土遺物からみて概ね14世紀代の所産と考えらる。

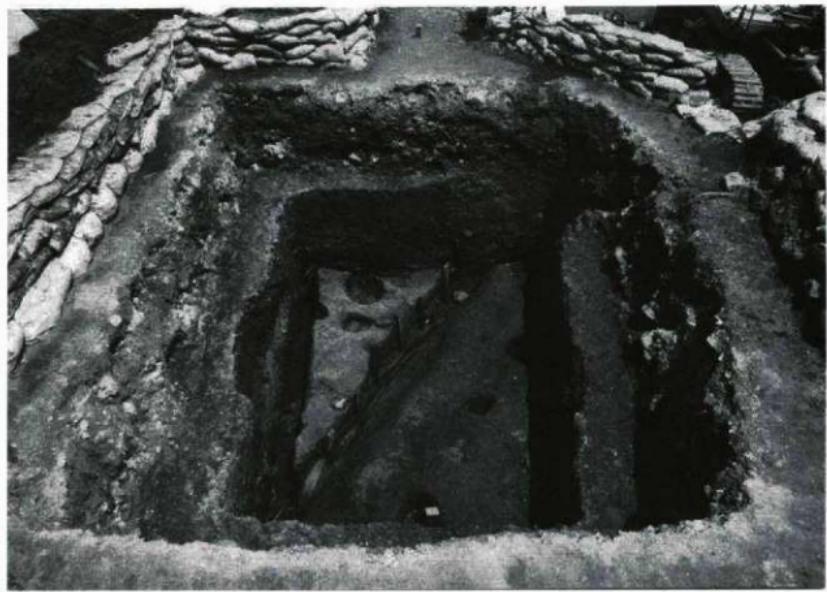
第2面は海拔高4.7m前後で貝殻粒を多く含み褐鉄分が染み込んだ硬化面であった。この上面では掘立柱建物、道路（通路）・木組みの土留遺構柱穴、溝などが検出された。この面に伴う出土遺物からみて概ね13世紀後葉～14世紀初頭頃の所産と考えらる。

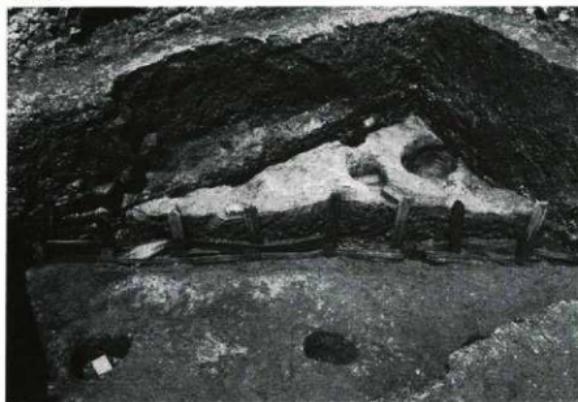
本遺跡の発掘調査では今までのところ、まとめた調査成果が得られた事例が少ないが、若宮大路修景事業に伴う発掘調査で車小路と若宮大路が交差する図1（地点位置は本図参照）の地点1からは天文年間頃の造替を想する浜ノ大鳥居になる西側脚柱の根方が発見され鎌倉時代からほぼ同じ場所での鳥居造立が行なわれたと想定され、中世都市鎌倉の中心部と周縁部を分かつ境であった可能性が考えられる。海浜砂丘の北側裾部に位置する地点2の調査では鎌倉時代を主体とした三時期の遺構・遺物が発見された。最下層遺構の13世紀前半頃は沼のような湿地の産地が存在しており、それに伴う遺物は柿絞・桟塔婆などと多量投棄した特殊な行為が確認され生活臭の少ない鎌倉前期のこの場を考える上でこれらの遺物が重要な意味を含んでいると思われる。次の時期、13世紀中頃は生活の営みが認められる空間へと変化、溝や段で区画された中に掘立柱建物・井戸・ゴミ穴の土坑が点在し屋敷地が想定される。さらに13世紀後葉～14世紀中頃では人々の生活が最も活況に満ちた時期で堅穴建物・井戸・通路と、多くのゴミ穴土坑が発見され、それに伴い豊富な種類の多量な遺物が出土しており、この場が町屋的な空間に変貌したと考えられる。地点5などの砂丘頂部の南側に拡がる前浜の浜地からは通路で区画した中に頻繁に建て替えられた大型の堅穴建物や井戸、土坑墓跡などが密集しており、鎌倉後期～南北朝期にかけてこの場が倉庫群を主体とした空間で町屋的な様相を呈していた。以上のように本調査地点を含めた周辺地域は、中世鎌倉の繁栄とともに鎌倉中～後期にかけて堅穴建物が存在した基本的に町屋が展開していたと解釈できる。しかしそれ以前、鎌倉時代前半期についての明瞭な遺構を検出した調査事例は少ない。この周辺の様相を『吾妻鏡』の記事でみると、御家の屋敷地が存在していたことが知られ、中世都市鎌倉における周縁景観の形成復元と、その発展過程を理解する上で今後の調査成果の蓄積が望まれるところである。



▲ 1. 第1面全景（南から）

▼ 2. 第2面全景（南から）

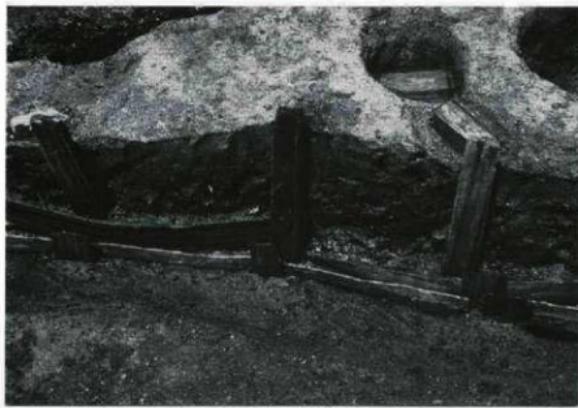




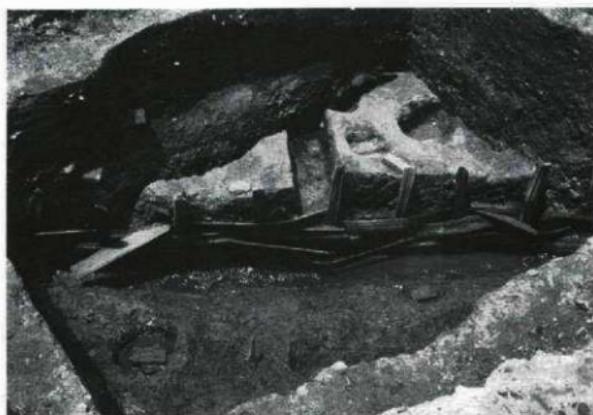
◀ 1. 第2面
建物1・木組土留遺構
検出状況（南東から）



◀ 2. 同上（南東から）



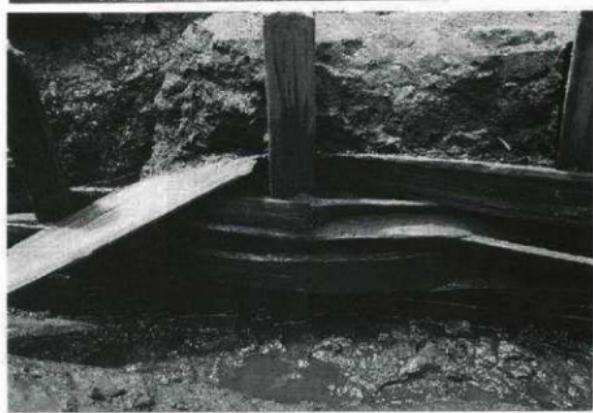
◀ 3. 木組土留遺構
(東から)



◀ 1. 第2面
木組士留遺構
完掘状況（南東から）



◀ 2. 木組士留遺構
北側（東から）



◀ 3. 同上
南側（東から）

図版 4



▲ 1. 第2面 建物内襍板 東壁際（西から）



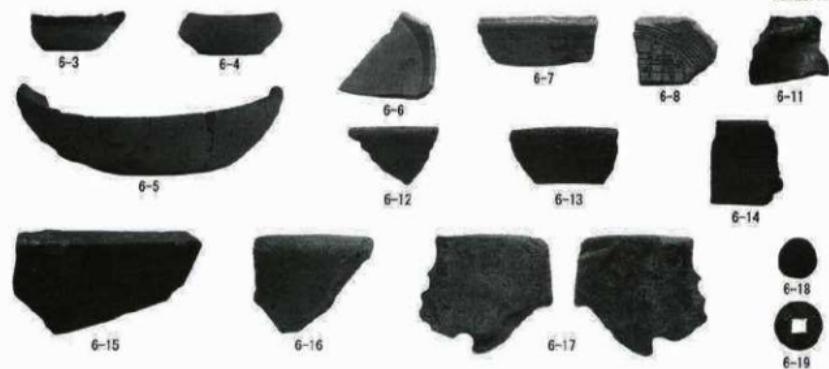
▲ 2. 同左 南壁際（北から）



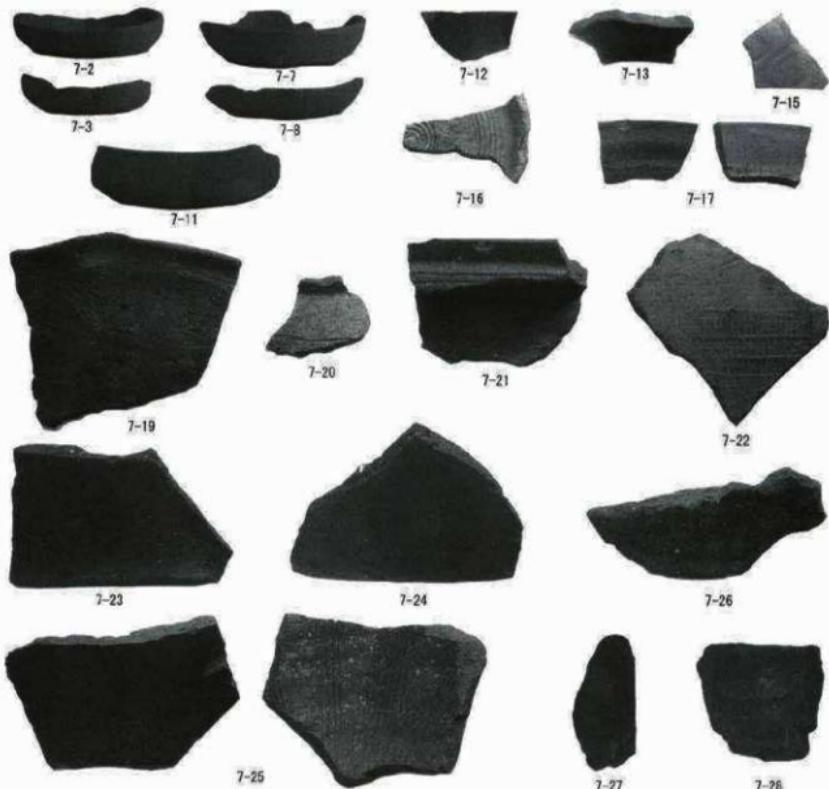
▲ 3. 調査区南壁土層堆積（北から）

▼ 4. 調査区西壁土層堆積（東から）





▲ 1. 第1面上包含层



▲ 2. 第1面下a层



▲
第1面下
さし銭
a層出土



7-29



7-30



7-31



7-32



7-33



7-34



7-35



7-36



7-37



7-38



7-39



7-40



7-41



7-42



7-43



7-44



7-45



7-46



7-47



7-48



7-49



7-50



7-51



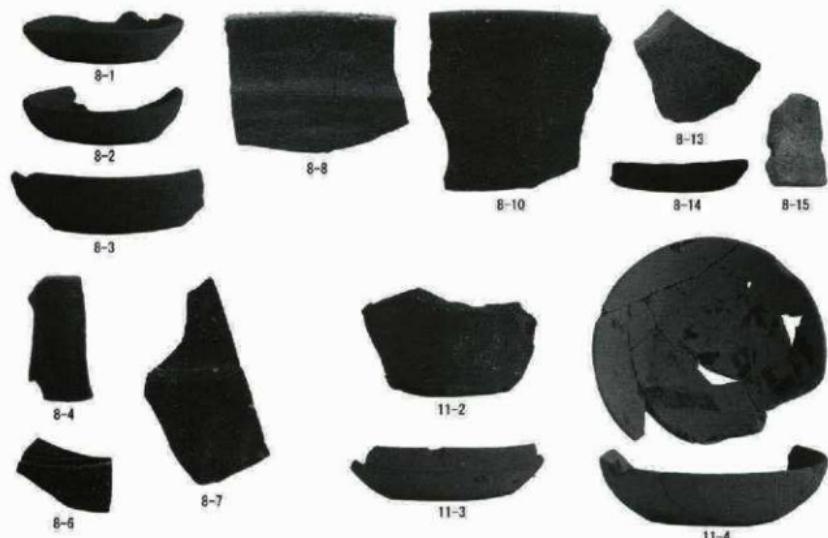
7-52



7-53



1 目録
1cm

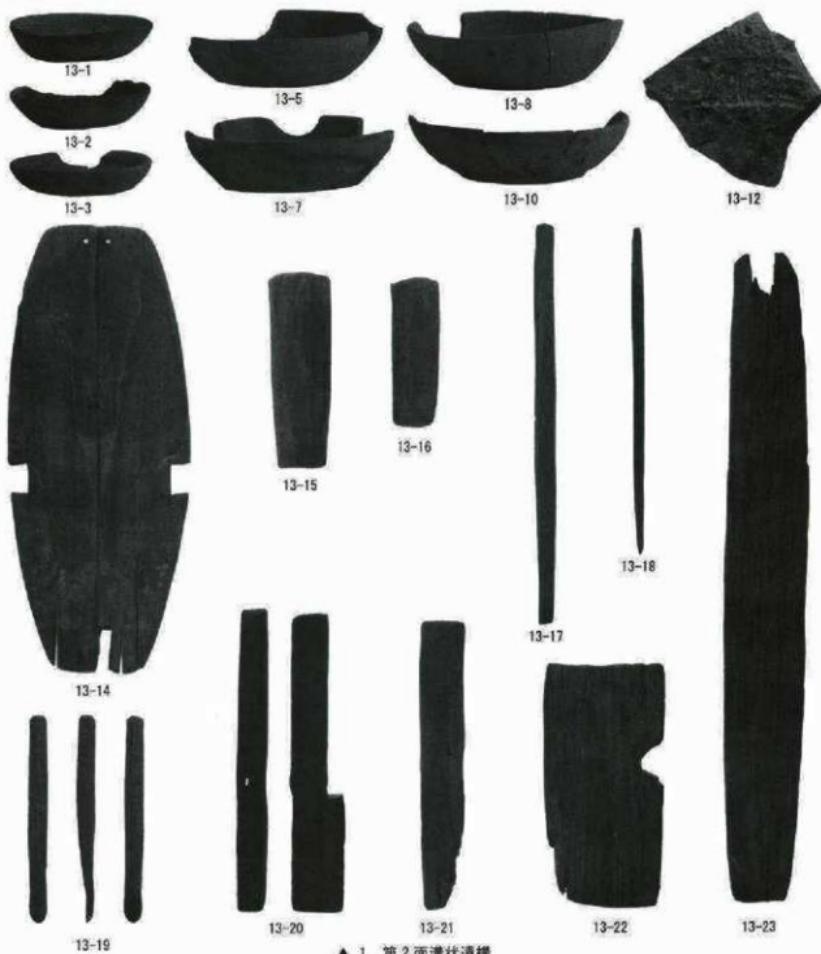


▲ 1. 第1面下 b 層

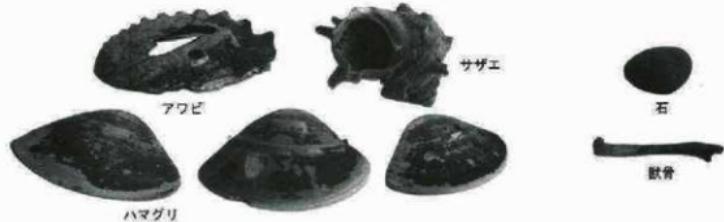
▲ 2. 第2面建物 1 柱穴



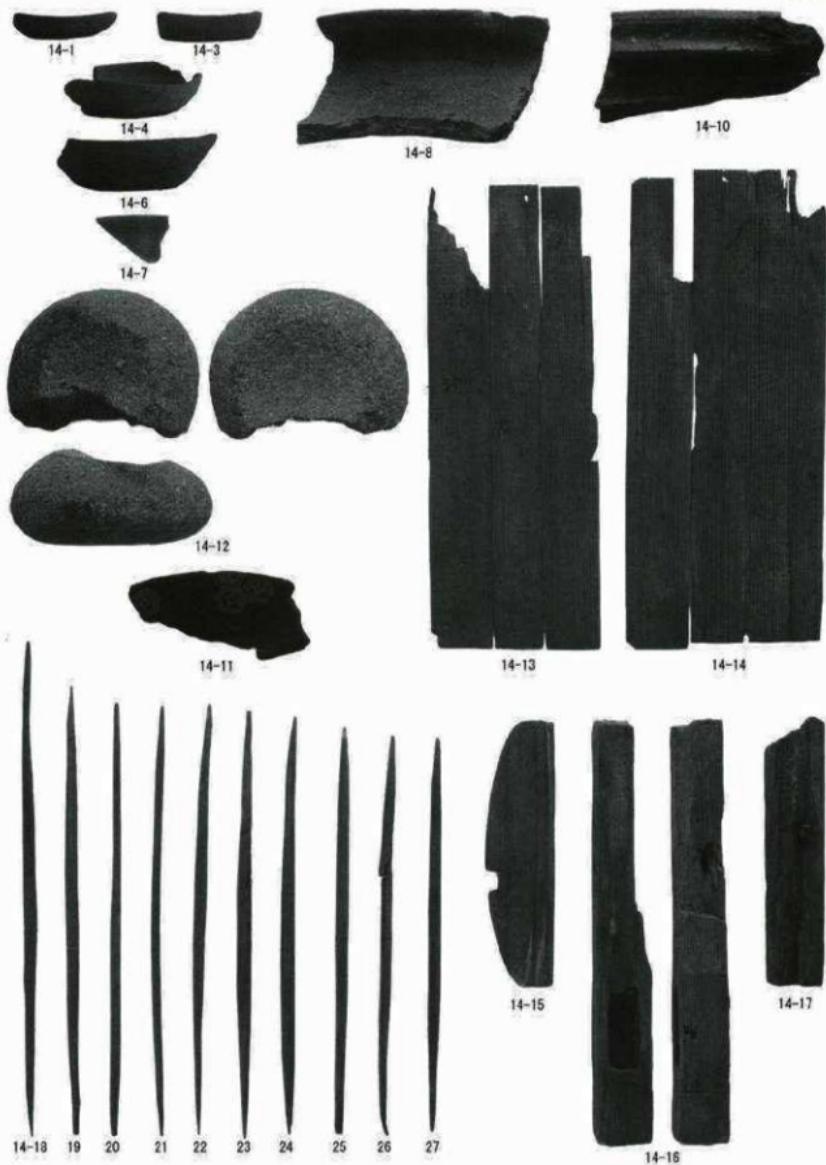
▲ 3. 第2面木組士留裏込



▲ 1. 第2面溝状造構



▲ 2. 第2面造構外



▲ 1. 第2面造模外

かく おん じ きゅうけいだい い せき
覺園寺旧境内遺跡 (No. 435)

二階堂字会下351番3外

例　　言

1. 本報告は鎌倉市二階堂字金下351番3外地点に所在する個人専用住宅建設に伴い実施された。覺園寺旧境内遺跡（県遺跡台帳No.435）の緊急調査報告である。
2. 発掘調査は、平成16年10月27日から同年12月10日にかけて鎌倉市教育委員会が実施した。
3. 調査・整理作業体制は以下の通りである。
調査担当者：伊丹まどか
調査員：石元道子・宇都洋平・須佐仁和・須佐直子・鈴木絵美・本城裕・吉田桂子
調査補助員：白石哲也（明治大学）・早川智・井上朔太郎・北畠剛史（鶴見大学）
調査作業員：片山直文・河原龍雄・清水政利・田口康應・渡辺輝彦（社）鎌倉市シルバー人材センター
協力機関名：（社）鎌倉市シルバー人材センター・鎌倉考古学研究所
4. 遺物実測・観察は宇都。遺物・遺構トレイスは吉田が作成した。図版作成は伊丹・須佐（直）。執筆・編集は伊丹が行った。
5. 遺構写真は鈴木が、遺物は須佐（仁）が撮影した。
6. 発掘調査における出土遺物・図面類・写真などの資料は、鎌倉市教育委員会が保管している。
7. 凡例は以下の通りである。
図版縮尺：全測図：1/60　　遺構図：1/60　　遺物図：1/3
遺構実測図において焼痕の残る箇所。および、遺物実測図において油煤が付着した箇所は黒く塗りつぶして表わしている。
法量表…復元実測を行った場合は、法量の数値に（ ）を付してある。括弧は、直径を表わす。
8. 現地調査および資料整理においては、多くの方からご指導、並びにご援助を賜った。記して感謝の意を表わします。（敬称略・50音順）
井関文明・押木弘己・菊川英政・斎木秀雄・汐見一夫・鈴木次郎・原廣志・福田誠・降矢順子
松尾宜方・馬淵和雄

本文目次

第1章 遺跡の位置と歴史的環境	228
1. 遺跡の位置と歴史的環境	228
第2章 調査の概要	231
1. 調査の経緯と経過	231
2. 堆積土層	231
第3章 発見した遺構と遺物	233
1. 第1面の遺構と遺物	233
2. 第2面の遺構と遺物	233
3. 第3面の遺構と遺物	236
4. 第4面の遺構と遺物	241
5. 第5面～第7面	245
第4章 まとめ	247
法量表	249

挿図目次

図1 遺跡地周辺・調査地位置図	230
図2 調査区国土座標位置図	231
図3 調査区壁堆積土層図	232
図4 第2面全測図	233
図5 第2面個別遺構図	234
図6 第2面遺構・構成土出土遺物	235
図7 第3面全測図	237
図8 第3面個別遺構図	237
図9 遺構47出土遺物	237
図10 第3面構成土出土遺物(1)	238
図11 第3面構成土出土遺物(2)	239
図12 第3面構成土出土遺物(3)	240
図13 第4面全測図	241
図14 第4面個別遺構図	242
図15 第4面遺構出土遺物	243
図16 第4面上・構成土出土遺物	244
図17 第5面～7面確認トレンチ位置図	245
図18 第5面構成土出土遺物	245
図19 第6面構成土出土遺物	246
第7面構成土出土遺物・表探遺物	246

図版目次

図版1 第1面全景・第2面全景・第2面遺構・第3面全景・第3面遺構	254
図版2 第4面全景・第4面遺構・最終トレンチ・調査区北壁堆積状況	255
図版3 第2面遺構出土・第2面上出土・第2面構成土出土遺物	256
図版4 第3面構成土出土遺物	257
図版5 第4面遺構出土・第4面上出土・第4面構成土出土遺物	258
図版6 第5面構成土出土・第6面構成土出土・第7面構成土出土・表探遺物	259

第1章 遺跡の位置と歴史的環境

1. 遺跡の位置と歴史的環境

調査地は、JR鎌倉駅から北西に1.7kmの地点。薬師堂ヶ谷（覚園寺ヶ谷）と呼ばれる谷戸内に位置する。この薬師堂ヶ谷の入り口には明治二年に建立された鎌倉宮（大塔宮）があるが、元は東光寺（山号医王山、臨濟宗。開山・創建・廃絶年次などは不明）があった地とされる。鎌倉宮から谷戸を約400m奥に入った地点が調査地である。さらに約300m行った谷戸最奥には、谷戸名の由来になる鷲峯山真言院覚園寺（開山・智海心慧。開基・北条貞時。元は四宗兼学だったが明治初年に一寺一宗と定められ、古義真言宗とした。京都泉涌寺末）がある。

覚園寺の前身は北条義時が建保六年（1218）七月に建立し、同年十二月に薬師如来を安置供養した大倉薬師堂（新御堂）であった。寛元元年（1243）二月二日に火災に遭い、弘長三年（1263）三月十日、北条時宗が当堂を修造している。この薬師堂は、泉涌寺系の法系である北京律系の人々が関与し、貞応三年（1224）泉涌寺開山俊房が関東に下向してからは、北京律系の関東弘通の拠点になっていたことが推定されている。大倉薬師堂を寺に改めて覚園寺としたのは、永仁四年（1296）北条貞時である。当寺開創の目的は覚園寺僧申状案（県史三）によると、「為降伏異國、鎮護朝廷」とあり、元寇撃退と朝廷鎮護の祈願にあった。また、覚園寺裏山の山号にもなる鷲峯山の南斜面一帯には「覚園寺百八やぐら」と呼ばれるやぐら群があるが、そのうちの1穴である「彫出地蔵やぐら」と呼ぶやぐらは、奥壁中央に半肉彫の地蔵菩薩坐像を掘り出して本尊とし、三方に低壇をもち、その上に五輪等や宝鏡印塔が置かれ、そのうちの2基の銘文から文和（1252～56）・応永（1391～1428）の両度の覚園寺大修造に活躍した仏師正祐・朝祐父子の墓窟であったことが明らかになっている。

覚園寺は、大倉薬師堂創建以来北条氏の庇護の下に寺勢を誇ってきた寺であるが、北条氏が滅亡した元弘三年（1333）以降は後醍醐天皇の勅願所が置かれ、その後足利尊氏の祈願所となり、建武四年（1337）・文和三年（1353）の火災の際も足利尊氏の助力により復興を遂げている。また、小田原城主北条氏も歴代にわたり相応の保護を加え、豊臣秀吉・徳川家康ともに寺領を寄進した。歴代の権力者の庇護の下に置かれた寺であったが、元禄十六年（1703）の大地震・文政十三年（1830）の庫院消失などを経て寺運は次第に衰退ていき、幕末には無住の時期を経て現在に至っている。

現在国指定遺跡となっている境内地には、元禄十六年の大震災後に古材を使用して再建した薬師堂を始め、地蔵堂・愛染堂・祖師堂・庫裏などが立ち並び、鎌倉十井の一つである「棟立ノ井」がある。

遺跡地を含む薬師堂ヶ谷は奥に向かって約700mの距離があるが、谷戸幅は現在でも谷戸内を走る河川・道路を挟んで20～80mと、狭く細長い谷戸である。『吾妻鏡』の記事に、「薬師堂ヶ谷辺に淨密なる僧の住む坊の前庭に優曇華が咲いたので鎌倉中の人々が見物に出かけ、將軍実朝も家来に見に行かせたところ芭蕉の花であったらしい」（貞応二年（1223）七月九日条）。「當谷の丹波良基宅に將軍頼經室の二棟の奥方（大宮殿）が産氣のため大倉から移った」（延応元年（1239）十一月二十日条）。「當谷が焼死し二階堂大路の南辺まで延焼」（建長三年（1251）十月七日条）。「將軍宗尊親王が大悲寺供養に出席するための方違の場所として、佐々木泰綱の薬師堂ヶ谷山荘が定められ、九月三十日に山荘に移った」（正嘉元年（1257）八月十八日条）。「北条教時亭が當谷にあった」（文永三年（1266）七月四日条）。などが記されている。

現在までに覚園寺境内内の調査としては、昭和四十一年に行われた宝鏡印塔解体修理。昭和五十四

年、県指定重要文化財旧内海家住宅の移築予定地の試掘調査。その結果を受けての昭和五十四年から昭和五十五年にかけて防災設置箇所に関して、20箇所にわたるトレンチ発掘調査があるが、覚園寺旧境内遺跡地内の調査としては、谷戸内のやぐらを含め多くはない。(図1参照)

参考文献

- 『覚園寺境内発掘調査報告書』 覚園寺境内遺跡発掘調査団 河野真知郎 1982年3月
『会下山西やぐら発掘調査報告書』「会下山西やぐら」二階堂会下312番 田代郁夫 1987年3月
『平成5年度鎌倉市内急傾斜地崩壊対策事業に伴う発掘調査報告書』「天王寺跡やぐら」二階堂中村381番1番 田代郁夫 1995年3月
『No.331遺跡内やぐら』「平成5年度鎌倉市急傾斜地崩壊対策事業に伴う発掘調査報告書」 田代郁夫 東国歴史考古学研究所 1995年3月
『中世石窟造構の調査II』平成6年度鎌倉市内急傾斜地崩壊対策事業に伴う発掘調査報告書 東国歴史考古学研究所調査報告第7集 「天王寺跡やぐら」二階堂中村地区内 田代郁夫 1996年3月
『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書12-2』「覚園寺旧境内遺跡」鎌倉市二階堂字平子412番地1外地点 汐見一夫 1996年3月
『中世石窟造構の調査II』平成5年度鎌倉市内急傾斜地崩壊対策事業に伴う発掘調査報告書 東国歴史考古学研究所調査報告第15集 「天王寺跡やぐら」 田代郁夫 1998年3月
『中世石窟造構の調査II』平成5年度鎌倉市内急傾斜地崩壊対策事業に伴う発掘調査報告書 東国歴史考古学研究所調査報告第15集 田代郁夫 1998年3月
『覚園寺総門跡東やぐら群』二階堂428番イ (財)かながわ考古学財団 宍戸信吾 2001年11月
『覚園寺総門跡東やぐら群II』(財)かながわ考古学財団 鈴木次郎 2002年10月
『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書20-2』「横小路周辺遺跡」二階堂字会下323番外 2004年3月 福田誠
『鎌倉廃寺事典』1980年 有隣堂 貢達人・川副武胤
『鎌倉市史』総説編 1959年 吉川弘文館 高柳光壽
『鎌倉市史』考古編 1967年 吉川弘文館
『鎌倉事典』 1987年 東京堂出版 白井永二
『中世の出土銭』 1994年 永井久美男



図1 調査地点と近辺の遺跡

第2章 調査の概要

1. 調査の経緯と経過(図2)

本調査は個人専用住宅建設に伴い実施した。調査期間は平成16年10月27日から同年12月10日である。調査面積は約50m²。表土は重機により地表より約40~60cmを除去し、これ以下を人力によって掘削・廃土処理を行い、遺構の発見・遺物採集を実施。測量・写真撮影などの記録保存を行った。遺構検出に伴う廃土を調査区外に搬出できなかったことや、多量の湧水を排水する設備が整わなかった等の悪条件から調査は困難を極め、最終的には平面調査を断念しトレーニによる土層観察のみの調査になったことは遺憾である。

調査に際しては調査区の形状に沿って任意に測量用の基本杭を設定し、これを元に光波測量機によって遺構等の記録を行った。任意で設けた基準杭には、鎌倉市4級基準点を元に国土座標軸を算出して座標値を与えてある(図2)。なお、調査軸は磁北から21° 27' 30"西に振れる。

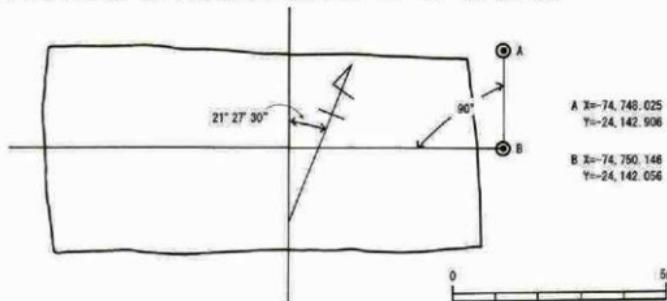


図2 調査区国土座標位置図

2. 堆積土層(図3)

調査区南・西壁で確認した土層堆積図から、堆積状況を上層より説明する。

本調査地点の現地表の海拔高は約25.30mである。第1面までは大きく搅乱で削平されていた部分を含み、約60cmと厚く堆積していた表土を取り除き、破碎泥岩の地業上(第2層)を第1面として検出作業を行った。

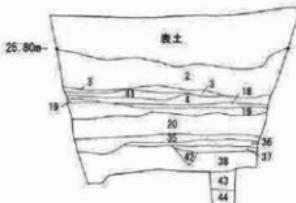
第1面は破碎泥岩の地業である。(海拔25.80m) 破碎泥岩の地業は60~40cmと厚く堆積していた。地業上に敷穴のピットを確認したが、いずれも表土によって削平・搅乱を受けており、中世の生活面として捉えることができず、堆積土層図のみの記録である。

第2面は南北に走る溝・土坑・柱穴・礎板・開炉裏を発見した。発見した遺構からは建物の存在を推測することはできたが、建物の規模等を確認することはできなかった。第2面構成土は暗褐色弱粘質土。破碎泥岩・炭化物・有機質土を含む。(海拔25.10~25.20m)。第2面としている地業面では、遺構の切り合いでその観察から少なくとも2時期の生活面の作り替えが行われたようである。

第3面は礎板を伴う柱穴を発見している。青灰色弱粘質土。破碎泥岩・有機質土・炭化物を含むやや脆弱な地業であった。上層に炭化物を多く含む層が薄く堆積しており、火災等でこの生活面を造り変えた様子である。(海拔24.80m)

1a	赤褐色砂質土	炭酸鈣・炭化物(少)
1b	赤褐色弱粘質土	炭酸鈣・泥炭・灰質土・砂質土(少)・亞鐵風化土
2	暗褐色弱粘質土	炭酸鈣(少)・有機質土(少)・鐵風化土
3	暗褐色弱粘質土	炭酸鈣(少)・泥炭(少)・炭化物(少)・砂質土(少)(第2面構成)
4	褐色炭化物弱粘質土	炭酸鈣(少)・有機質土(少)・鐵風化土(少)・砂質土(少)・炭化物(少)
5	暗褐色弱粘質土	炭酸鈣(少)・有機質土(少)
6	暗褐色弱粘質土	炭酸鈣(少)・泥炭(少)・有機質土(少)
7	暗褐色弱粘質土	炭酸鈣(少)・泥炭(少)・有機質土(少)・鐵風化土
8	褐色炭化物弱粘質土	炭酸鈣(少)・有機質土(少)・鐵風化土(少)・砂質土(少)
9	褐色炭化物弱粘質土	炭酸鈣(少)・有機質土(少)・鐵風化土(少)・砂質土(少)
10	褐色炭化物弱粘質土	炭酸鈣(少)・有機質土(少)・鐵風化土(少)・砂質土(少)
11	褐色炭化物弱粘質土	炭酸鈣(少)・有機質土(少)・鐵風化土(少)・砂質土(少)
12	褐色炭化物弱粘質土	炭酸鈣(少)・有機質土(少)・鐵風化土(少)・砂質土(少)
13	褐色炭化物弱粘質土	炭酸鈣(少)・有機質土(少)・鐵風化土(少)・砂質土(少)
14	褐色炭化物弱粘質土	炭酸鈣(少)・有機質土(少)・鐵風化土(少)・砂質土(少)
15	褐色炭化物弱粘質土	炭酸鈣(少)・有機質土(少)・鐵風化土(少)・砂質土(少)
16	褐色炭化物弱粘質土	炭酸鈣(少)・有機質土(少)・鐵風化土(少)・砂質土(少)
17	褐色炭化物弱粘質土	炭酸鈣(少)・有機質土(少)・鐵風化土(少)・砂質土(少)
18	褐色炭化物弱粘質土	炭酸鈣(少)・有機質土(少)・鐵風化土(少)・砂質土(少)
19	褐色炭化物弱粘質土	炭酸鈣(少)・有機質土(少)・鐵風化土(少)・砂質土(少)
20	褐色炭化物弱粘質土	炭酸鈣(少)・有機質土(少)・鐵風化土(少)・砂質土(少)
21	暗褐色弱粘質土	炭酸鈣(少)・有機質土(少)・鐵風化土(少)・砂質土(少)
22	暗褐色弱粘質土	10mから40mの深度層・暗褐色弱粘質土(少)・鐵風化物・有機質土(多)・泥炭(少)
23	暗褐色弱粘質土	炭酸鈣(少)・有機質土(少)・鐵風化土(少)・砂質土(少)
24	暗褐色弱粘質土	炭酸鈣(少)・有機質土(少)・鐵風化土(少)・砂質土(少)
25	暗褐色弱粘質土	炭酸鈣(少)・有機質土(少)・鐵風化土(少)・砂質土(少)
26	暗褐色弱粘質土	炭酸鈣(少)・有機質土(少)・鐵風化土(少)・砂質土(少)
27	暗褐色弱粘質土	炭酸鈣(少)・有機質土(少)・鐵風化土(少)・砂質土(少)
28	暗褐色弱粘質土	10mから20mの深度層 堆積深度による地盤強度・泥炭・泥炭質
29	褐色炭化物弱粘質土	炭酸鈣(少)・有機質土(少)・鐵風化土(少)・砂質土(少)
30	褐色炭化物弱粘質土	炭酸鈣(少)・有機質土(少)・鐵風化土(少)・砂質土(少)
31	褐色炭化物弱粘質土	炭酸鈣(少)・有機質土(少)・鐵風化土(少)・砂質土(少)
32	褐色炭化物弱粘質土	炭酸鈣(少)・有機質土(少)・鐵風化土(少)・砂質土(少)
33	褐色炭化物弱粘質土	炭酸鈣(少)・有機質土(少)・鐵風化土(少)・砂質土(少)
34	褐色炭化物弱粘質土	炭酸鈣(少)・有機質土(少)・鐵風化土(少)・砂質土(少)
35	褐色炭化物弱粘質土	炭酸鈣(少)・有機質土(少)・鐵風化土(少)・砂質土(少)
36	褐色炭化物弱粘質土	炭酸鈣(少)・有機質土(少)・鐵風化土(少)・砂質土(少)
37	褐色炭化物弱粘質土	炭酸鈣(少)・有機質土(少)・鐵風化土(少)・砂質土(少)
38	褐色炭化物弱粘質土	炭酸鈣(少)・有機質土(少)・鐵風化土(少)・砂質土(少)
39	褐色炭化物弱粘質土	炭酸鈣(少)・有機質土(少)・鐵風化土(少)・砂質土(少)
40	褐色炭化物弱粘質土	炭酸鈣(少)・有機質土(少)・鐵風化土(少)・砂質土(少)
41	褐色炭化物弱粘質土	炭酸鈣(少)・有機質土(少)・鐵風化土(少)・砂質土(少)
42	褐色炭化物弱粘質土	炭酸鈣(少)・有機質土(少)・鐵風化土(少)・砂質土(少)
43	褐色炭化物弱粘質土	炭酸鈣(少)・有機質土(少)・鐵風化土(少)・砂質土(少)
44	褐色炭化物弱粘質土	炭酸鈣(少)・有機質土(少)・鐵風化土(少)・砂質土(少)
45	褐色炭化物弱粘質土	炭酸鈣(少)・有機質土(少)・鐵風化土(少)・砂質土(少)

〈調査区東壁土層図〉



〈調査区南壁土層図〉

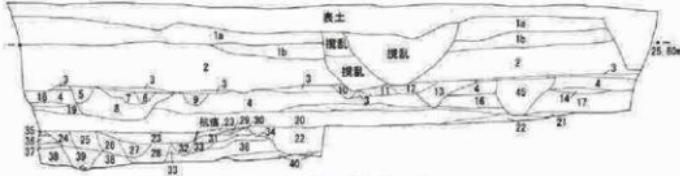


図3 調査区壁堆積土層図

第4面は頻繁に生活面の作り替えが行われた様子が伺え、建物址・溝・柱穴・土坑など多くの遺構を発見している。第4面構成土は炭化物・土丹粒を含む暗褐色弱粘質土。(海拔 24.40m)

第5面から第7面までの生活面は、第4面終了時に調査区東側にトレンチ坑を設け確認した。

調査区の西側では第4面下層は山裾の岩盤を削り出していた様子が観察できたが、地業等の生活面としての痕跡は確認できなかった。トレンチ坑を設けた東側は第4面下層においても生活面を確認しており、第4面の生活面を作るとときに大きく山側を削り西側に地所を広げた様子が伺えた。

第5面は暗褐色弱粘質土、炭化物層との互層に地業し生活面を造成していた。(海拔 23.90m) 第6面は暗褐色弱粘質土。上層に薄く炭化物層が堆積。(海拔 23.80m) 第7面は泥岩粒・炭化物・砂質土・有機質土を含む暗褐色弱粘質土。炭化物層と弱粘質土の互層で地業されている。(海拔 23.60m) 第7面下層遺構では、西側山裾に当たる岩盤面の削り出しを確認している(海拔 23.50m)が、調査区西側では第4面構成土下層、海拔 24.50mで西側山裾に繋がる岩盤を確認している。

第3章 発見した遺構と遺物

本報では調査によって発見した遺構・遺物を上層より順を追って報告している。遺構に付した番号は、確認作業の際に便宜的に付したものであり、遺構の新旧・性格に伴うものではない。個別に図示しなかつた遺構については、文章中に計測値等の説明を加えている。それぞれの遺構の位置は全体図を参照していただきたい。遺構の計測値は（長軸×短軸×深さcm）で示した。

出土遺物の内、実測不可能であったものは、法量表の最後に出土遺構と破片数を掲載した。

1. 第1面の遺構と遺物

第2面とした生活面を確認する前に、その上層海拔約25.80mで破碎泥岩による地業層を確認していくが、掘削の手違いから第1面に相当する層の殆どを重機によって取り除いてしまった。數穴のピットを発見したが第1面での遺構検出・記録はできなかった。第1面構成土からの遺物出土は確認できなかつたが、第1面に相当すると考えられるピット等の遺構擾土からは近世遺物（瓦）と共に中世遺物（かわらけ細片・箸・折敷等の木製品）が出土している。

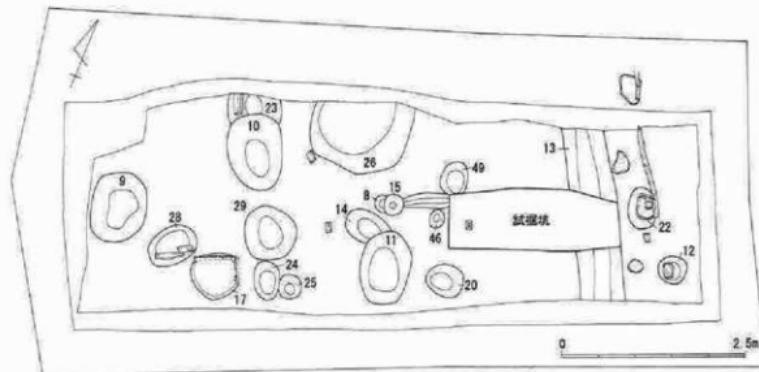


図4 第2面全測図

2. 第2面の遺構と遺物（図4～図6）

第2面は約50cmの厚さで堆積していた第1面構成土を取り除き、破碎泥岩を含む青灰色弱粘質土上面で確認した。（海拔約25.20m）第2面上層全体に炭化物層が広がる。第1面の地業によって削平を受け、遺構の遺存状態は良好ではなかったが、南北に延びる溝1条・土坑6基・ピット9穴・囲炉裏1基・礎板・礎石を確認した。

調査区の西側では、礎板・礎板を伴う柱穴、囲炉裏を発見し建物の存在が考えられたが、上層の地業に壊されたためか建物址の範囲・規模等は不明である。調査区東側では、礎石の据えられた柱穴上に柱を組むための枘を切った木材が南北に置かれており、遺構22内の礎石上には、遺存状態は悪かったが柱も残っていた。この遺構22から約3m東の位置に現在は河川が流れおり、南北に通された木材を

建物址の一部（根太？）と考えるには、調査地東側に流れる河川までの幅を考えると、やや東西幅が狭いようと思われ、橋（堀）等の施設の一部であったかもしれない。この柱穴列の西側に、同じく南北に延びる溝（遺構 13）を確認している。同様に区画の施設（溝と堀）であったと考えている。

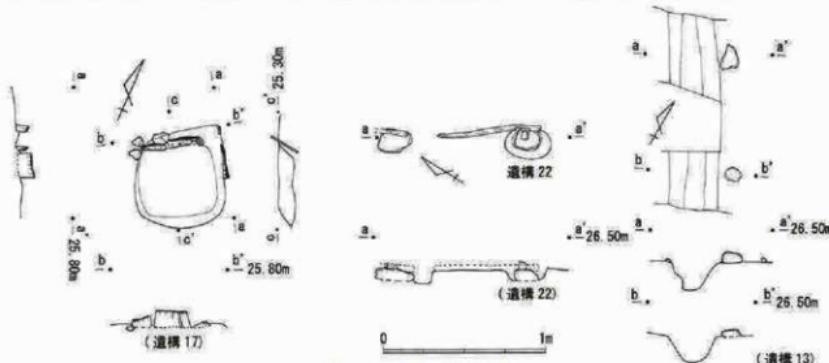


図 5 第2面個別遺構図

・遺構 8（図 4）

幅 20 cm・深さ 7 cm の浅いピット。上層の遺構 15 に埋されていたが、ほぼ円形を呈する。遺構覆土は暗褐色弱粘質土・褐色砂質土・泥岩粒を含む。

・遺構 8 出土遺物（図 6）

2 は轆轤成形かわらけ。

・遺構 13（図 4・5）

調査区東側で発見した南北に延びる溝である。幅約 60cm・深さ約 45cm、やや逆台形を呈する。底面のレベルはほぼ平坦であった。遺構覆土は青灰色弱粘質土・炭化物・砂質土を含む。

・遺構 13 出土遺物（図 6）

1 は轆轤成形かわらけ。

・遺構 17（図 4・5）

囲炉裏。遺構内側の土には灰が多量に堆積していた。粘土と灰が混入した縮まりある土。板囲い外側に焼痕が認められ、火災等によって消失したと思われる。板囲い外側は泥岩によって支えて（補強）いたようである。遺構内からの出土遺物は発見できなかった。

・遺構 24（図 4）

54 × 35 × 35 cm。遺構覆土は青灰色弱粘質土。泥岩粒・炭化物・有機質土・炭化物を含む。

・遺構 24 出土遺物（図 6）

3 は常滑窯壺胴部片。同一個体と思われる破片がこの他に 4 点出土。

・遺構 22（図 4・5）

56 × 40 × 22 cm。黒褐色弱粘質土。破碎泥岩・泥岩粒を含む。底面に据えられていた礎石上には遺存状態が悪く、採集はできなかったが柱が残っていた。また、礎石には焼痕が認められた。遺構内からの出土遺物は、発見できなかった。

・遺構 26（図 4）

140 × 95 以上 × 22 cm。遺構覆土は灰褐色弱粘質土。

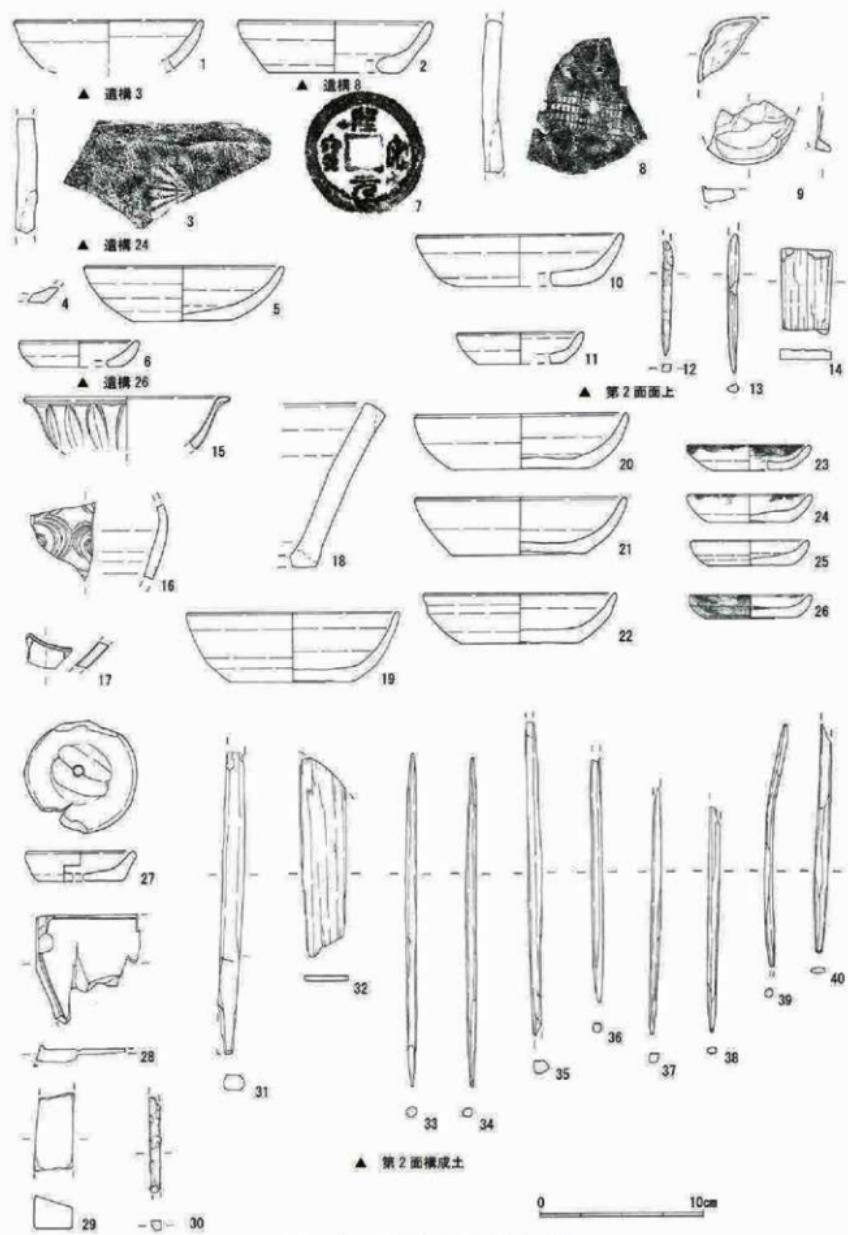


図6 第2面造構・構成土出土遺物

・遺構 26 出土遺物（図 6）

4 は縁軸陶器片。底部露胎。5・6 は轆轤成型かわらけ。

- ・第 2 面で確認した、個別に図示していない遺構の計測値と遺構覆土の観察である。それぞれの遺構の位置については全体図（図 4）を参照していただきたい。

遺構 9 は $75 \times 95 \times 9$ cm。黒色粘質土・多量の炭化物混入。上層の遺構か。遺構 10 は $103 \times 74 \times 49$ cm。青灰色弱粘質土・破碎泥岩・泥岩粒・炭化物を多量に含む。遺構 11 は $98 \times 70 \times 25$ cm。青灰色砂質土・泥岩粒・灰褐色砂質土を含む。遺構 12 は $40 \times 39 \times 20$ cm。底面に礎板が据えてあった。黒褐色粘質土・炭化物・泥岩・破碎泥岩を多く含む。遺構 14 は青灰色砂質土。破碎泥岩・褐色粘質土を含む。約 $62 \times 43 \times 18$ cm。遺構 11 に切られる。遺構 16 は青灰色弱粘質土。多量の炭化物・破碎泥岩・有機質土・砂質土を含む。遺構 19 は $48 \times 36 \times 16$ cm。青灰色弱粘質土。破碎泥岩・泥岩粒を含む。遺構 21 を切る。遺構 20 は $50 \times 45 \times 27$ cm。青灰色弱粘質土。遺構 19 覆土に近似。遺構 21 は青灰色弱粘質土。破碎泥岩・泥岩粒を含む。上層の地業の際に壊され形状は不明。深さ 10 cm。遺構 23 は青灰色弱粘質土。泥岩粒・炭化物を含む。上層の遺構 10 に切られ正確な形状は不明。幅 75 cm・深さ 35 cm。遺構底面の中心からは外れるが礎板が出土している。遺構 25 は青灰色弱粘質土。泥岩粒を含む。33 × 32 × 23 cm。ほぼ円形を呈する。遺構 27 は灰褐色弱粘質土。破碎泥岩・泥岩粒を多量に含む。72 × 72 × 22 cm。遺構 28 は灰褐色弱粘質土。破碎泥岩・灰褐色弱粘質土を多く含む。底面に礎板が据えられていた。70 × 49 × 約 10 cm。また第 2 面で発見した遺構覆土全体に、微量ながらも炭化物が混入していた。

・第 2 面面上出土遺物（図 6）

- 7 は銭・聖宋元宝。8 は常滑胴部片。9 は石製品・硯。10・11 は轆轤成型のかわらけ。12 は鉄製品・釘。13・14 は木製品。13 は箸。14 は用途不明。

・第 2 面構成土出土遺物（図 6）

- 15 は竜泉窯・青磁鑄蓮弁文折縁皿。16 は青白磁・梅瓶。17 は竜泉窯・青磁鑄蓮弁文碗。18 は土器質火鉢。19～27 は轆轤成型かわらけ。23・24 は口唇部・内面に油煤付着。26 は口唇部・外面油煤付着。27 は底面に穿孔あり。28・29 は石製品。28 は硯。29 は砥石・中砥。30 は鉄製品・釘。31～40 は木製品。31 は部材。32 は曲物。33～39 は箸。40 は籠状木製品。

3. 第 3 面の遺構と遺物（図 7～図 11）

第 3 面は有機質土・木片を含む暗褐色弱粘質土上面で確認した。（海拔 24.80 m）

湧水の影響もあり地業は弱く、発見した遺構は柱穴 5 穴・土坑 1 基と数少ない。柱穴は南北方向に並んでいるように見えるが、それぞれの柱穴の芯の距離に統一性がなく、同一の建物を構築するための柱間とは言い切れない。第 3 面構成土下層には、木器層とも言えるほどに多くの木片と炭化物を含んだ茶色有機質土が堆積していた。

・遺構 30・31（図 8）

遺構 30・31 は柱穴である。建物の範囲・規模等は確認できなかった。遺構 30 は $37 \times 37 \times 9$ cm。暗青灰色弱粘質土。有機質土・炭化物多量・泥岩粒を含む。底面に礎板あり。遺構 31 は $34 \times 34 \times 12$ cm。暗褐色青灰色弱粘質土。有機質土・炭化物多量・泥岩粒を含む。後で述べる遺構 29 と覆土近似。柱間は芯芯で 202 cm。遺構内からの出土遺物は無い。

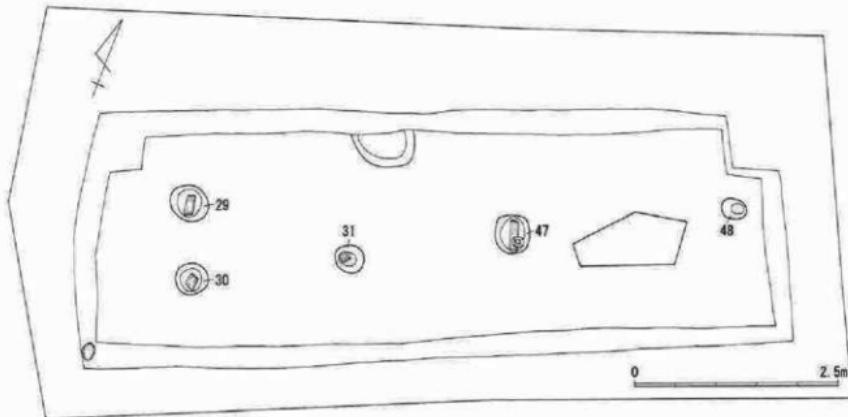


図7 第3面全測図

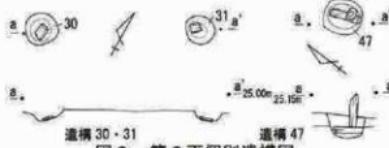


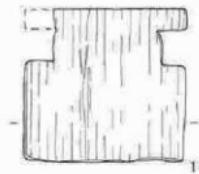
図8 第3面個別造構図

・造構 47 (図8)

46 × 43 × 25 cm。造構底面に据えられていた礎板の上に柱が残る。柱穴内で礎板がずれないように補強したのか、杭状の木が礎板脇に打ち込まれていた。造構覆土は破碎泥岩を含む暗褐色弱粘質土。

・造構 47 出土遺物 (図9)

1は木製品・用途不明。大型の組み物の部材か?



・第3面で確認した、個別に図示していない造構の計測値と造構覆土の観察である。それぞれの造構の位置については全体図 (図7) を参照していただきたい。

造構 26は幅 78 cm、深さ 23 cm。調査区外に造構が伸びてしまっているため正確な形状は不明。青灰色弱粘質土。炭化物を少量含む。造構 29は 49 × 42 × 14 cm。暗青灰色弱粘質土。有機質土・炭化物少量・泥岩粒を含む。底面に礎板あり。造構 29・30・31は覆土近似。造構 48は 31 × 24 × 13 cm。青灰色弱粘質土。泥岩粒を少量含む。

図9 造構 47 出土遺物

・第3面構成出土遺物 (図10～図12)

1は白磁口兀皿。2は褐釉壺。3・5は常滑窯片口鉢1類。4は瀬戸窯水注。6は滑石鍋。7は常滑窯壺。8は土器質火鉢。9は白かわらけ。10は滑石鍋。11～39は轆轤成型かわらけ。32・35は内外面口唇部油煤付着。33は内外面に油煤付着。40・41は鉄製品・釘。42～108は木製品。42～44・46・47・49～52・55・56は用途不明。45・57・58は板折敷。48は部材。釘痕あり。53は箸。54は織機。59・61～65は曲物底板。60は曲物蓋? 中央に2穴の穿孔あり。62は梢円形を呈する。66～104は箸。105～108は串状製品。

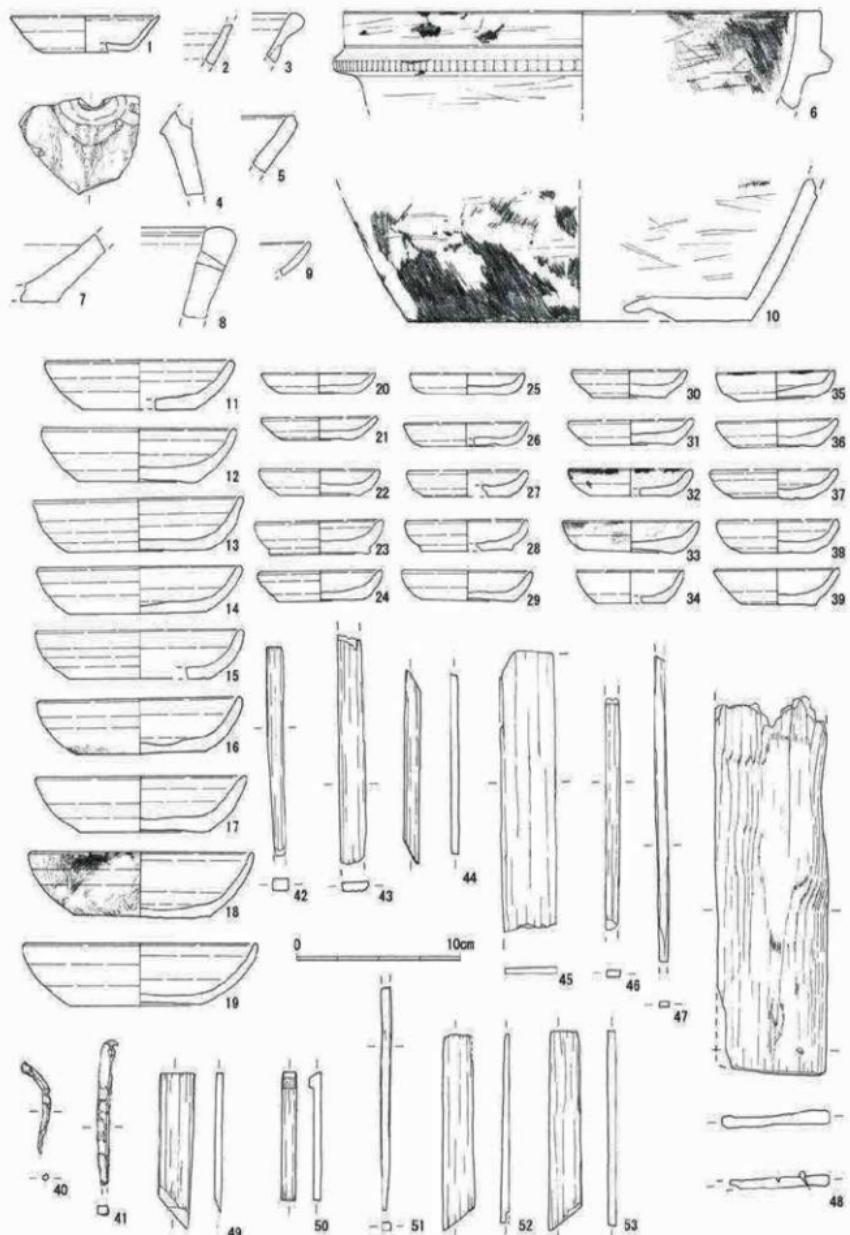


図 10 第3面構成土出土遺物（1）

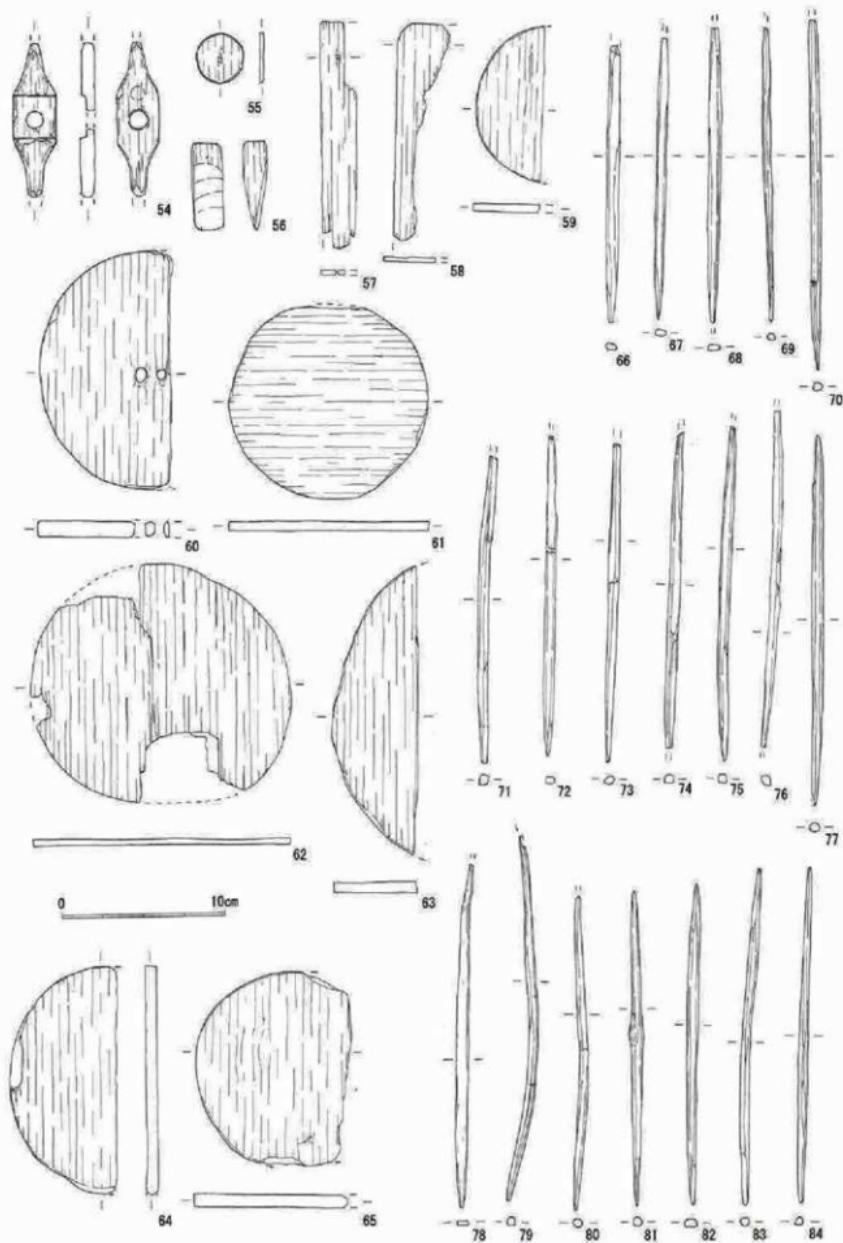


図11 第3面構成土出土遺物（2）

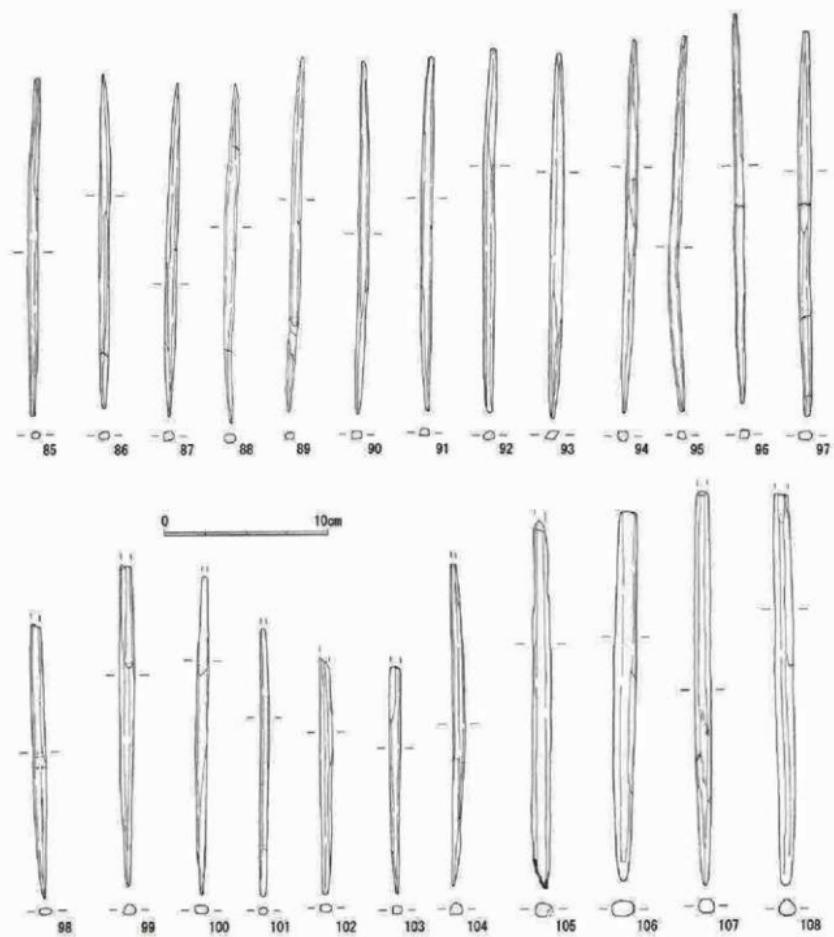


図12 第3面横成土出土遺物(3)

4. 第4面の遺構と遺物（図13～図16）

第4面は破碎泥岩と有機質土を含む茶褐色弱粘質土の粗い地業上で確認した。（海拔24.40m）発見した遺構は溝2条・土坑3基・ピット20穴・杭穴37穴。

調査区西側で不規則に並んだ杭痕を確認しており、そのうちの数穴には杭が遺存していた。上層の第3面、あるいは第4面の生活面を地業する際の土留めであったのではないかと考えている。杭は2本で一組を基本として打たれていたようである。遺存していた杭は丸杭で直径3cmから8cmと均一ではなく、土中の先端部分は尖らせていた。

調査区東では、南北方向の溝状の遺構を2条確認した。西側の溝（遺構60）は溝壁の護岸と考えら

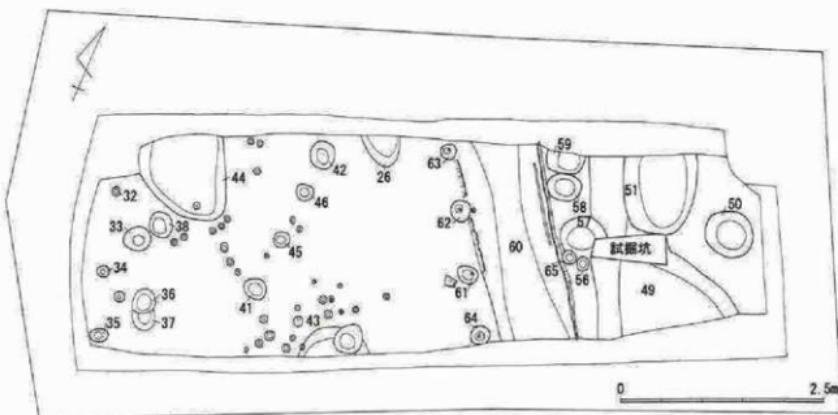


図13 第4面全測図

れる杭と縦板が遺存していた。遺構60の西には芯芯で70～80cmの間隔で、溝に沿って柱穴が並ぶ。

東側の溝（遺構49）は、遺構の南側が大きく崩れてしまい、北側は上層の土坑によって切られ当初の形状を残していないが、遺構49を廃棄した後に遺構60を造り替えたことが、土層断面の観察から窺えた。また、遺構60を境に東側では粗い破碎泥岩でしっかりととした地業が成されていた。通路（道路）の可能性を考えている。

- ・遺構42（図13）

33×30×7cm。遺構覆土は暗灰褐色弱粘質土。褐色砂質土・少量の炭化物を含む。

- ・遺構42出土遺物（図15）

1～4は常滑窯・片口鉢I類。

- ・遺構49（図13）

南北に延びる溝である。上層の遺構によって壊されてしまい正確な形状を留めていないが、調査区壁の土層観察では逆台形を呈していた事が分かる。底面レベルはほぼ平坦であった。第2面で発見した構13と同位置にあり、遺構13同様に区画のための溝であったのかもしれない。

- ・遺構49出土遺物（図15）

2は白磁口兀皿。3～5は常滑窯。3は壺口縁部片。4は片口鉢I類。5は壺口縁部片。6は滑石製

鍋。7～17は輪軸成型かわらけ。18・19は木製品・箸。

・遺構 50 (図 13)

60×60×15 cm。遺構覆土は暗褐色弱粘質土。炭化物・有機質土を多く含む。

・遺構 50 出土遺物 (図 15)

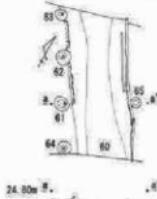
20～23は輪軸成型かわらけ。

・遺構 51 (図 13)

調査区外に遺構が延びてしまっているため正確な形状は不明。幅 90 cm。深さ 22 cm。遺構 49(溝)を切る。黒褐色弱粘質土。炭化物・有機質土を多く含む。

・遺構 51 出土遺物 (図 15)

24は常滑窯片口鉢 I 類。内外面に薄く油膜痕。25～27は輪軸成型かわらけ。



・遺構 60 (図 14)

調査区内を西から東に下がる斜面に平行して南北方向に板が並んでいる事。建物(板壁圍い)にしては左右の板にレベル差が有ることなどから土留めも想定していたが、土留めにしては伴う杭が無いこと。板が薄すぎることなどの疑問点があり、建物の板壁(2軒ぶんか?)。あるいは東西の縦板が90 cmの幅で延びているところから、縦板で両脇を囲って地業した道路(通路)の可能性もあると考えている。調査区外に延びてしまっているため、正確な形状は不明。南北方向に 250 cm。東西方向に 90～100 cm の幅を観察した。調査区南壁に残る遺構断面の観察では深さ 30 cm であったが、全体に 20～30 cm のだらだらとした浅い掘り込みを確認している。

遺構 60 の西側に並ぶピット 61・62・63・64 には、ピット内に杭状の木質痕が観察できた。通路(遺構 60)に伴う櫛の痕跡ではないかと考えている。遺構覆土は暗茶褐色弱粘質土。大小の破碎泥岩を多量に含む。

・遺構 60 出土遺物 (図 15)

28は竜泉窯・青磁折縁皿。29は褐釉壺。30は常滑窯・片口鉢 II 類。31・32は輪軸成型かわらけ皿。33は木製品・箸。

・以下は第4面で確認した、個別に図示していない遺構の計測値と遺構覆土の観察である。それぞれの遺構の位置については全体図(図 13)を参照していただきたい。

遺構 32 は 11×11×20 cm。杭痕か? 暗灰褐色弱粘質土。炭化物・砂質土を含む。遺構 33 は 35×30×20 cm。暗灰褐色弱粘質土。炭化物・砂質土・泥岩粒を含む。遺構 34 は 13×16×11 cm。暗灰褐色弱粘質土。遺構 32 覆土に近似。杭痕か? 遺構 35 は 22×16×10 cm。暗褐色弱粘質土。遺構 32 覆土に近似。杭痕か? 遺構 36 は 29×29×10 cm。暗茶褐色弱粘質土。砂質土を多く含む。実測不可能なかわらけ小片を多く含む。覆土内に杭痕あり。遺構 37 は 遺構 36 に切られ正確な形状は不明。幅 28 cm。深さ 15 cm を測る。暗茶褐色弱粘質土。遺構 36 覆土に近似。遺構 38 は 30×30×11 cm。暗灰褐色弱粘質土。炭化物・有機質土を含む。遺構 41 は 30×25×21 cm。暗灰褐色弱粘質土。泥岩粒・炭化物・有機質土を含む。遺構 43 は 調査区外に遺構が延び、上層の遺構に切られ正確な形状は不明。深さ 10 cm の浅い土坑。暗灰褐色弱粘質土。泥岩粒・炭化物・有機質土を含む。遺構 44 は 調査区外に遺構が延びており正確な形状は不明。幅 106 cm 以上。深さ 8 cm の浅い土坑。灰褐色粘質土。覆土内に木質が残る。杭痕か? 遺構 45 は 20×20×6 cm。

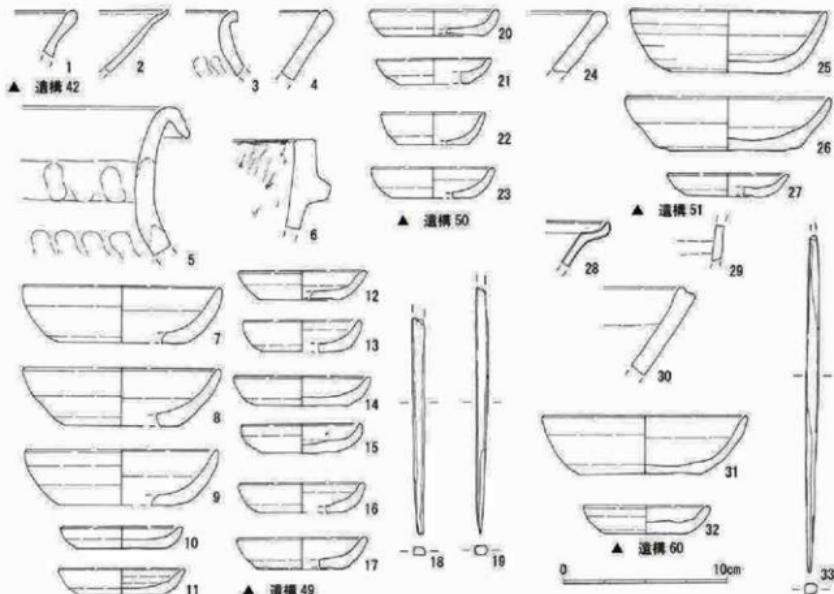


図 15 第4面遺構出土遺物

暗灰褐色弱粘質土。泥岩粒・砂質土を含む。遺構 46 は $22 \times 20 \times 6$ cm。暗灰褐色弱粘質土。泥岩粒・炭化物・有機質土を含む。遺構 56 は $16 \times 15 \times 10$ cm。暗褐色弱粘質土。泥岩粒・炭化物・有機質土を含む。遺構 57 は $59 \times 55 \times 9$ cm。暗褐色弱粘質土。泥岩粒・炭化物・有機質土を含む。遺構 56 覆土に近似。遺構 58 は $42 \times 35 \times 11$ cm。暗褐色弱粘質土。泥岩粒・炭化物・有機質土を含む。遺構 56 覆土に近似。遺構 59 は調査区外に遺構が伸びていて正確な形状は不明。幅 48 cm。深さ 13 cm。暗褐色弱粘質土。泥岩粒・炭化物・有機質土を含む。遺構 56 覆土に近似。遺構 61・62・63・64 は遺構 60 の西側に並ぶ柱穴。それぞれの遺構覆土は近似しており、暗褐色粘質土。覆土内に木質が残る。遺構 61 は $25 \times 22 \times 11$ cm。遺構 62 は $24 \times 24 \times 18$ cm。遺構 63 は $20 \times 20 \times 11$ cm。遺構 64 は $24 \times 22 \times 10$ cm。遺構 65 は $17 \times 17 \times 17$ cm。暗褐色粘質土。遺構 60 の西に並ぶ遺構 61～54 に覆土は近似していた。杭痕か？

その他に通路と考えている遺構 60 より西には、杭痕と思われる小さなピット群と杭を発見しているが、用途および性格は不明である。

・第4面上出土遺物（図 16）

1・3・4 は軸輪成型かわらけ。1 は二次焼成のためか白く変色。2 は泉州窯系綠釉陶器・盤。5～10 は木製品。5・6・10 は用途不明。7～9 は箸。

・第4面構成土出土遺物（図 16）

11 は青白磁水注。12 は白磁・壺。13 は褐釉・壺。14 は瀬戸窯・天目茶碗。15・16 は常滑窯。15 は片口鉢 II 類。16 は甕口縁部片。17～27 は軸輪成型かわらけ。21 は内外面口唇部に油煤痕。27 は内底

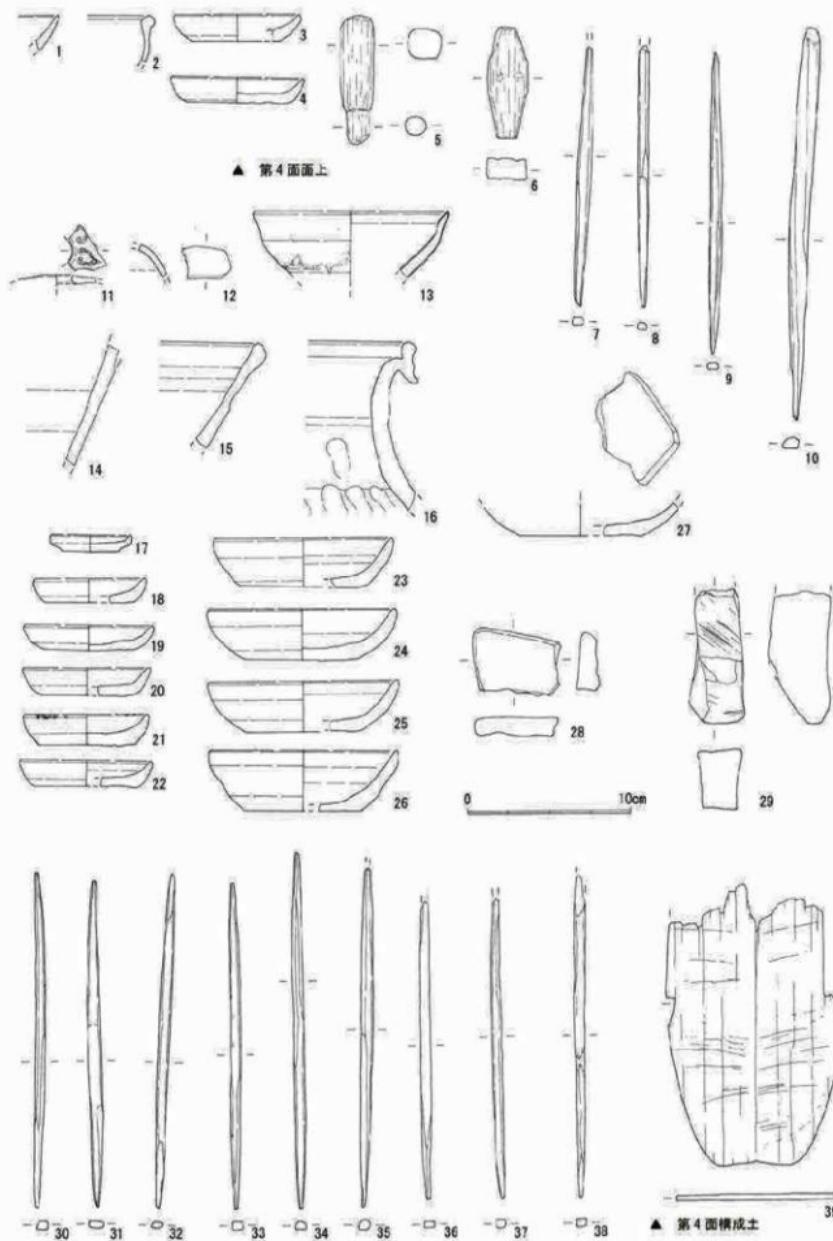


図16 第4面面上・構成土出土遺物

面に赤色の色素付着。28は常滑窯・甕。転用品。断面部分磨耗。29は石製品・砾石。30～39は木製品。30～38は箸。39は板草履。

5. 第5面～第7面（図17）

第4面より下層の調査は、多量の湧水を排出する設備が整わなかつた事、調査に伴う廃土を調査区内で処理することができなくなつた等の条件から、平面的に調査を行うことが出来なくなつたため、調査区を二分割し西側に廃土置き場を設置。東側にトレーンチ坑を設け、下層の生活面・遺構等の確認作業を行つた。第5面から第7面までは、トレーンチ坑の壁で堆積層を確認し平面調査は実施していない。

・第5面（図17）

第5面は粗い砂質泥岩による地業。上層に有機質土・炭化物を含む層と破碎泥岩を含む暗褐色弱粘質土が互層に堆積している。（海拔23.90m）

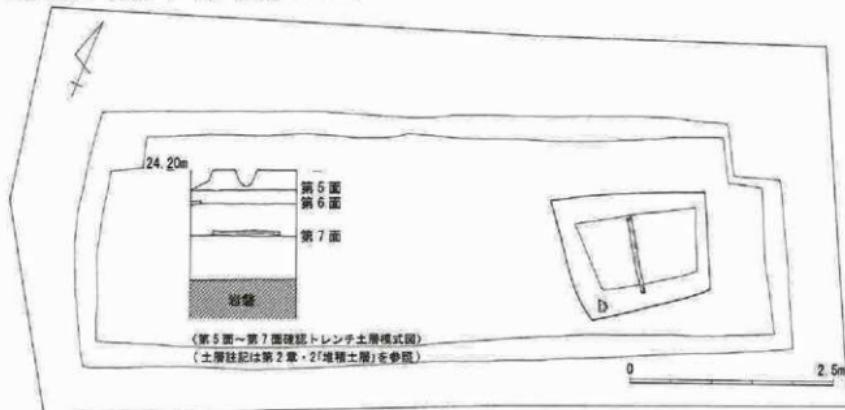


図17 第5面～7面確認トレーンチ位置図

・第5面構成土出土遺物（図18）

1は竜泉窯・青磁鏡裏弁文碗。2・3・5・6は常滑窯片口鉢1類。5・6は内面油煤痕。4は常滑窯・甕。7～9は木製品。7は用途不明品。8は板折歛。9は板草履。

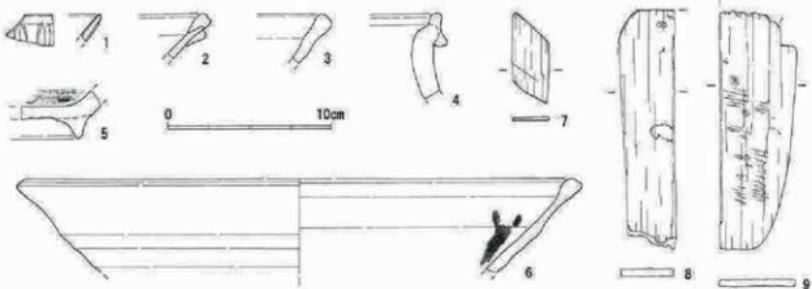


図18 第5面構成土出土遺物

・第6面(図17)

暗褐色弱粘質土の地業上層に炭層が厚く堆積していた。トレンチ坑壁で焼痕のある板材を確認した。(海拔 23.80 m)

・第6面構成土出土遺物(図19)

1~4は轆轤成型かわらけ。2は内外面口唇部油煤痕。5~8は木製品。5は玩具。6~8は用途不明。7は箸。

第7面(図17)

泥岩粒・炭化物などを含む暗褐色弱粘質土と炭化物層との互層で地業されていた。南北に延びる側板出土。(海拔 23.60 m) 第7面の地業下層、海拔 23.50m で岩盤を確認している。

・第7面構成土出土遺物(図19)

9は白磁口兀碗。10は白磁口兀皿。11は瀬戸窯・皿。12~16は轆轤成型かわらけ。17~23は木製品。17は板草履。18は用途不明。19~21は箸。22~23は串状製品。

・表採出土遺物(図19)

24は常滑窯・片口鉢1類。25は瀬戸窯・盤。26~27は轆轤成型かわらけ。

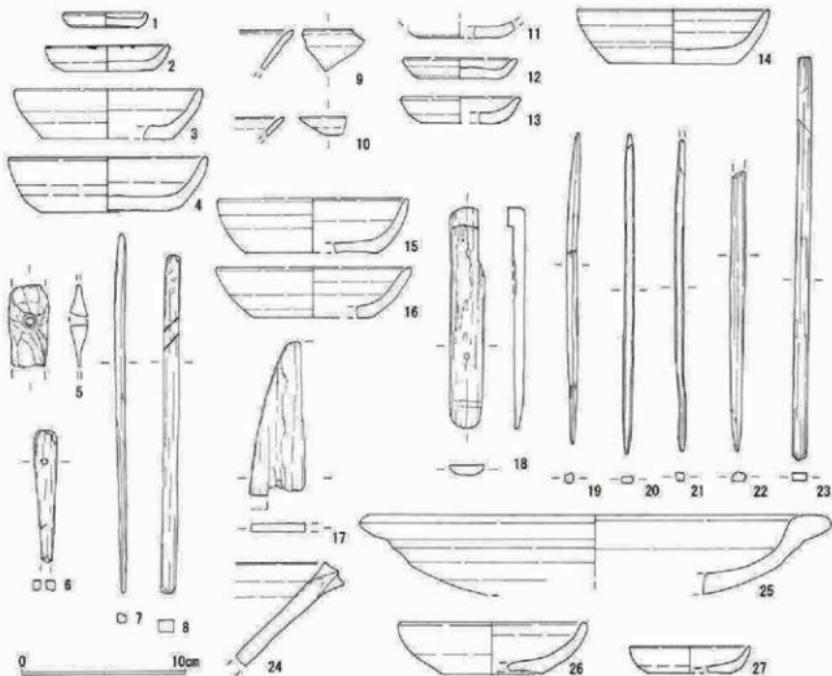


図19 第6面構成土出土遺物

第4章 まとめ

調査地点は、薬師堂ヶ谷（覚園寺ヶ谷）の最奥に所在する覚園寺に向かう参道の西側に位置する。参道沿いには閑静な住宅地が並ぶが、ここ数年住宅建設に伴うやぐらを含む谷戸内の開発が進み、多くの調査成果をあげつつある。

本調査は、湧水を排水する設備や廃土を処理する場所を確保できないなどの悪条件が重なったために、満足な調査を行うことが困難となり、下層の調査はトレントによる地業層の確認のみとなってしまった。

以下、発見した遺構・遺物について簡単なまとめを行いたい。

検出した遺構

第1面から第7面までの生活面（地業）を確認している。それぞれの生活面で遺構の重複があり、同一地業上で造成が繰り返されていることを、遺構の切り合い・調査区壁の土層観察等で確認した。

第7面から第5面までの生活面は、比較的しっかりととした地業がなされていたが、前述した悪条件から平面的な調査が不可能となり、調査区東側に設けたトレント壁の堆積土層で観察・確認したため、遺構の種類・性格・範囲等を確認することはできなかった。

第7面、第6面に相当する土層からは、板壁張り建物、あるいは溝側壁の護岸の板か？と思われる側板が南北方向に出土している。第7面で発見した側板には火災のためか焼痕が残っていた。後述する第4面以降で、ほぼ同位置に南北に走る溝を発見しており、この側板も溝の側壁の板であった可能性を考えている。

第5面の構成土は、厚く堆積した炭化物層と泥岩層の互層で形成される。

第7面から第5面の構成土は、炭化物と泥岩の互層で形成されており、どの期も火災などの事故により生活面を再構築せざる得なくなり、炭化した建造物などの廃材を含んだ土を、新しい生活面を構築する埋め立ての際に利用したのではないだろうか。

第7面から第5面に相当する堆積層を、調査区の西側では確認していない。調査区西側では、第4面を確認した面より約40cm下層は岩盤面となる。

第5面の生活面を何らかの理由で廃棄した後に、調査区西側の山裾を削り谷戸の拡張を行い、谷戸内の土地利用を大きく変えていった時期が第4面以降の生活面となる。

第4面では、南北に走る溝を発見した。溝の西側には、溝に沿って杭を伴う柱穴が並ぶ。西側は湧水のために地業自体が弱く、土留めの杭と思われる杭痕が多く発見された。溝の東側は、破碎泥岩を用いしっかりととした地業がされていた。

第3面・第2面では、礎板を伴う柱穴を数穴発見している。建物範囲・規模等は不明である。

第2面では、第4面等で発見した溝とほぼ同位置で、南北に走る溝を発見している。

第7面から第2面で、ほぼ同一の位置で発見した南北に走る溝を、現在の参道に沿って走る小河川の原型、あるいは参道に伴う側溝と考えているが、溝西側に延びる建物址の敷地区画の溝であった可能性もある。

第3章で述べた理由で、第1面の遺構・遺物についての記録は無いが、破碎泥岩によるしっかりとした地業、中世および近世後期の遺物と共にピットを確認している。

出土した遺物

本調査で出土した遺物はテンバコ数にして計8箱である。出土した遺物は、かわらけ・舶載磁器（青磁・青白磁・白磁）・国産陶磁器（常滑窯・瀬戸窯）・褐釉陶器・綠釉陶器・石製品（硯・砥石・滑石製鍋）・火鉢（土器質）・鉄製品（釘）・木製品（箸・曲げ物・板折敷・筭・串状製品・織機部材・板草履・玩具・用途不明品）・漆器（椀・皿）・錢である。

破片で出土した遺物を含めて、大半はかわらけであった。

第7面から第2面までの出土遺物を観察すると、おおよそ13世紀半ばから14世紀初頭の遺物が含まれている。

遺跡の変遷

調査地前の道路を北に向かって進んでいくと、薬師堂ヶ谷最奥の鷲峰山真言院覺園寺に突き当たる。覺園寺を含む谷戸辺の景観や寺領の規模を推定できる資料として、「覺園寺古図」等がある。この古図は年代的にかなり下った史料であるため、覺園寺開山時の13世紀初頭、および盛隆を誇った14世紀代の覺園寺を示すものではないが、往時の谷戸内の景観を表わす一資料と考えれば、調査地は覺園寺門前の位置にあたる。

最終面の第7面から第5面の生活面は、出土遺物の観察から13世紀半ばから13世紀第3四半期に比定される遺物を含む地業層・遺構であると判断しているが、狭いトレンチ坑内での観察のため遺構の性格・様相などを推測することは困難である。このトレンチ坑では、海拔約23.40mで本調査地西側山裾に繋がる岩盤面を確認しているが、調査区の西側では海拔約24.50mの高さで岩盤面を確認し、第7面から第5面に相当する生活面の発見は無い。第4面の生活面を造成した時期から、山裾を削り谷戸内の拡張・造成を行ったと思われる。第4面は13世紀第4四半期の年代を与えており、この頃には頻繁に遺構の造り替えも行われたようであり、覺園寺の盛隆期に一致する。第3面廃絶時より遡っての遺構（生活面）廃棄の原因は、炭化物層の堆積状況などから何度かの火災が考えられる。第2面は、遺構出土遺物が少量であったことや、第1面の地業によって壊されていたために、概ね14世紀代と考えている。第1面は現代の境乱による削平を大きく受けしており、判断しにくいが15世紀初頭の年代を与えており、第1面の構成土は厚さ約50cmの破碎泥岩による堆積を確認しており、第4面の13世紀第4四半期と第1面の15世紀初頭以降に、大きく谷戸内の造成・開発が行われたことが推察される。

*参考文献は第1章末にまとめて記載。

法量表

(単位はcm)

回版No.	No.	出土地	種別	口径(長さ)	底径(幅)	器高(厚み)	備考
6	1	遺構3	かわらけ	(11.4)			
2	遺構8	かわらけ	(11.6)	(8.0)	3.1		
3	遺構24	常滑窯 調部片					
4	遺構26	綠釉陶器片					底部露胎
5	遺構26	かわらけ	(12.1)	(5.95)	3.35		
6	遺構26	かわらけ	(7.0)	(5.6)	1.6		
7	第2面面上	銭	聖宋元宝 初鋤 1101年				
8	第2面面上	常滑窯 調部片					
9	第2面面上	石製品 硬					
10	第2面面上	かわらけ	(12.4)	(7.4)	3.15		
11	第2面面上	かわらけ	(7.6)	(5.2)	1.9		
12	第2面面上	鉄製品 鉗	(7.0)	0.55	0.45		
13	第2面面上	木製品 箸	(8.5)	(0.6)	(0.5)		
14	第2面面上	木製品 用途不明	(5.3)	(3.1)	(0.6)		
15	第2面構成土	青磁縞蓮弁文折縁碗	(12.0)				竈泉窯
16	第2面構成土	青白磁 梅瓶					
17	第2面構成土	青磁縞蓮弁文碗					竈泉窯
18	第2面構成土	土器質火鉢					
19	第2面構成土	かわらけ	(12.8)	(7.6)	4.3		
20	第2面構成土	かわらけ	(12.8)	(8.2)	3.45		
21	第2面構成土	かわらけ	12.8	8.1	3.5		
22	第2面構成土	かわらけ	(11.6)	(7.1)	3.1		
23	第2面構成土	かわらけ	(7.4)	(4.1)	1.6		口唇部・内面油煤付着
24	第2面構成土	かわらけ	(7.4)	(4.8)	1.7		口唇部・内面油煤付着
25	第2面構成土	かわらけ	(7.0)	(5.0)	1.55		
26	第2面構成土	かわらけ	7.2	5.4	1.4		口唇部・外面油煤付着
27	第2面構成土	かわらけ	6.4	5.25	1.75		底面に穿孔有
28	第2面構成土	石製品 硬					鳴瀬産
29	第2面構成土	石製品 砥石	(4.85)	(1.2)	(2.0)		中砥
30	第2面構成土	鉄製品 釘	(5.95)	0.6	0.6		
31	第2面構成土	木製品 部材	(18.4)	1.3	0.9		
32	第2面構成土	木製品 曲げ物			0.3		
33	第2面構成土	木製品 箸	20.2	0.6	0.6		
34	第2面構成土	木製品 箸	19.5	0.6	0.5		
35	第2面構成土	木製品 箸	(19.1)	0.9	0.7		
36	第2面構成土	木製品 箸	(14.8)	0.5	0.5		
37	第2面構成土	木製品 箸	(15.0)	0.55	0.5		
38	第2面構成土	木製品 箸	(13.8)	0.5	0.5		
39	第2面構成土	木製品 箸	(14.9)	0.5	0.5		
40	第2面構成土	木製品 銭?	(13.9)	0.9	0.4		
9	1	遺構47	木製品 用途不明				
10	1	第3面構成土	白磁 口兀皿	(9.0)	(5.2)	2.25	
2	第3面構成土	褐色 壺					
3	第3面構成土	常滑窯 片口鉢 I類					
4	第3面構成土	瀬戸窯 水注					
5	第3面構成土	常滑窯 片口鉢 I類					
6	第3面構成土	滑石鍋	(29.0)				
7	第3面構成土	常滑窯 壺					
8	第3面構成土	土器質火鉢					
9	第3面構成土	白かわらけ					
10	第3面構成土	滑石鍋		(11.0)			
11	第3面構成土	かわらけ	(11.2)	(6.8)	3.05		
12	第3面構成土	かわらけ	(11.6)	(7.4)	3.3		
13	第3面構成土	かわらけ	(12.6)	(8.6)	3.2		
14	第3面構成土	かわらけ	12.2	8.4	2.9		

(単位はcm)

図版No.	No.	出土地	種別	口径(長さ)	底径(幅)	器高(厚み)	備考
10	15	第3面構成土	かわらけ	(12.4)	(8.6)	3.1	
	16	第3面構成土	かわらけ	12.2	2.95	3.3	
	17	第3面構成土	かわらけ	12.6	8.2	3.35	
	18	第3面構成土	かわらけ	13.6	7.7	3.9	
	19	第3面構成土	かわらけ	14.1	8.8	3.75	
	20	第3面構成土	かわらけ	(6.8)	(4.6)	1.25	
	21	第3面構成土	かわらけ	(6.9)	(4.2)	1.4	
	22	第3面構成土	かわらけ	(7.1)	(4.9)	1.55	
	23	第3面構成土	かわらけ	(7.6)	(6.1)	2.05	
	24	第3面構成土	かわらけ	7.4	5.25	1.85	
	25	第3面構成土	かわらけ	(6.8)	(4.8)	1.3	
	26	第3面構成土	かわらけ	(7.4)	(5.2)	1.45	
	27	第3面構成土	かわらけ	(7.1)	(5.3)	(1.55)	
	28	第3面構成土	かわらけ	(7.2)	(5.6)	1.9	
	29	第3面構成土	かわらけ	7.9	5.55	1.85	
	30	第3面構成土	かわらけ	(6.8)	(4.6)	1.7	
	31	第3面構成土	かわらけ	(7.4)	(5.1)	1.5	
	32	第3面構成土	かわらけ	(7.4)	(4.8)	1.6	内外口唇部油煤付着
	33	第3面構成土	かわらけ	8.2	5.6	1.9	外外面に油煤付着
	34	第3面構成土	かわらけ	(6.4)	(4.2)	2.05	
	35	第3面構成土	かわらけ	7.1	4.7	1.7	内外口唇部油煤付着
	36	第3面構成土	かわらけ	(7.2)	(4.8)	1.65	
	37	第3面構成土	かわらけ	(7.0)	(5.6)	1.65	
	38	第3面構成土	かわらけ	(7.1)	(4.6)	2.0	
	39	第3面構成土	かわらけ	7.4	4.6	2.2	
	40	第3面構成土	鉄製品 釘	(5.8)	0.4	0.5	
	41	第3面構成土	鉄製品 釘	8.8	0.65	0.6	
	42	第3面構成土	木製品 用途不明	(12.85)	0.95	0.7	
	43	第3面構成土	木製品 用途不明	(14.1)	1.65	0.55	
	44	第3面構成土	木製品 用途不明	11.85	0.9	0.5	
	45	第3面構成土	木製品 板折敷	(17.2)	(3.2)	0.35	
	46	第3面構成土	木製品 用途不明	(14.1)	0.85	0.4	
	47	第3面構成土	木製品 用途不明	(18.6)	0.6	0.35	
	48	第3面構成土	木製品 部材	(46.2)	13.4	1.6	釘痕有
	49	第3面構成土	木製品 用途不明	9.4	2.0	0.4	
	50	第3面構成土	木製品 用途不明	7.75	0.9	0.7	
	51	第3面構成土	木製品 用途不明	12.0	1.95	0.5	
	52	第3面構成土	木製品 用途不明	12.15	2.05	0.5	
	53	第3面構成土	木製品 葵	(13.7)	0.5	0.5	
11	54	第3面構成土	木製品 執具	9.3	2.6	0.9	
	55	第3面構成土	木製品 用途不明	径3.0		2.0	
	56	第3面構成土	木製品 用途不明	5.25	1.8	1.5	櫻?
	57	第3面構成土	木製品 板折敷	(13.6)	(2.15)	0.3	
	58	第3面構成土	木製品 板折敷	(13.2)	(3.25)	0.3	
	59	第3面構成土	木製品 曲げ物底板	径 約9.4		0.5	
	60	第3面構成土	木製品 曲げ物蓋?	径 14.5		1.0	中央に2穴の穿孔
	61	第3面構成土	木製品 曲げ物底板	径 約12.0		0.6	
	62	第3面構成土	木製品 曲げ物底板	(14.5)	(15.7)	0.45	横円形を呈する
	63	第3面構成土	木製品 曲げ物底板	径 約21.2		0.7	
	64	第3面構成土	木製品 曲げ物底板	径 約14.0		0.7	
	65	第3面構成土	木製品 曲げ物底板	径 約12.0		0.8	
	66	第3面構成土	木製品 葵	(16.7)	0.7	0.4	
	67	第3面構成土	木製品 葵	(17.1)	0.5	0.4	
	68	第3面構成土	木製品 葵	(17.8)	0.7	0.4	
	69	第3面構成土	木製品 葵	(18.0)	0.45	0.4	

(単位はcm)

図版No.	No.	出土地	種別	口径(長さ)	底径(幅)	器高(厚み)	備考
11	70	第3面構成土	木製品 箕	(19.2)	0.5	0.5	
	71	第3面構成土	木製品 箕	(18.7)	0.6	0.6	
	72	第3面構成土	木製品 箕	(19.45)	0.6	0.4	
	73	第3面構成土	木製品 箕	(19.4)	0.6	0.5	
	74	第3面構成土	木製品 箕	(19.3)	0.6	0.5	
	75	第3面構成土	木製品 箕	(20.4)	0.6	0.5	
	76	第3面構成土	木製品 箕	(20.6)	0.6	0.6	
	77	第3面構成土	木製品 箕	(21.3)	0.6	0.5	
	78	第3面構成土	木製品 箕	(20.95)	0.8	0.3	
	79	第3面構成土	木製品 箕	(22.3)	0.6	0.5	
	80	第3面構成土	木製品 箕	22.7	0.5	0.5	
	81	第3面構成土	木製品 箕	19.15	0.85	0.5	
	82	第3面構成土	木製品 箕	19.5	0.6	0.5	
	83	第3面構成土	木製品 箕	20.65	0.5	0.5	
	84	第3面構成土	木製品 箕	20.4	0.45	0.45	
12	85	第3面構成土	木製品 箕	20.5	0.6	0.4	
	86	第3面構成土	木製品 箕	20.3	0.6	0.5	
	87	第3面構成土	木製品 箕	23.5	0.6	0.6	
	88	第3面構成土	木製品 箕	20.6	0.7	0.5	
	89	第3面構成土	木製品 箕	21.5	0.55	0.5	
	90	第3面構成土	木製品 箕	21.4	0.6	0.6	
	91	第3面構成土	木製品 箕	21.5	0.6	0.4	
	92	第3面構成土	木製品 箕	22.1	0.6	0.55	
	93	第3面構成土	木製品 箕	22.1	0.6	0.5	
	94	第3面構成土	木製品 箕	22.7	0.6	0.6	
	95	第3面構成土	木製品 箕	22.8	0.6	0.5	
	96	第3面構成土	木製品 箕	23.7	0.5	0.5	
	97	第3面構成土	木製品 箕	23.4	0.7	0.6	
	98	第3面構成土	木製品 箕	(16.8)	0.75	0.4	
	99	第3面構成土	木製品 箕	(19.7)	0.85	0.6	
	100	第3面構成土	木製品 箕	(19.8)	0.7	0.7	
	101	第3面構成土	木製品 箕	(16.35)	0.4	0.5	
	102	第3面構成土	木製品 箕	(14.55)	0.7	0.5	
	103	第3面構成土	木製品 箕	(13.95)	0.6	0.45	
	104	第3面構成土	木製品 箕	(19.8)	0.7	0.7	
	105	第3面構成土	木製品 串状	(22.65)	1.3	0.9	先端壺状に加工
	106	第3面構成土	木製品 串状	(22.6)	1.05	0.8	片端に焼痕
	107	第3面構成土	木製品 串状	(24.2)	0.9	0.9	
	108	第3面構成土	木製品 串状	(24.0)	1.0	0.9	片端に焼痕
15	1	遺構42	常滑窯 片口鉢 I類				
	2	遺構49	白磁 口兀皿				
	3	遺構49	常滑窯 壺口縁部片				
	4	遺構49	常滑窯 片口鉢 I類				
	5	遺構49	常滑窯 壺口縁部片				
	6	遺構49	滑石製鏡				内面油煤痕
	7	遺構49	かわらけ	(11.9)	(7.6)	3.45	
	8	遺構49	かわらけ	(11.7)	(7.0)	3.5	
	9	遺構49	かわらけ	(11.6)	(8.0)	3.55	
	10	遺構49	かわらけ	(7.3)	(5.6)	1.3	
	11	遺構49	かわらけ	(7.6)	(5.2)	1.65	
	12	遺構49	かわらけ	(7.6)	(5.2)	1.75	
	13	遺構49	かわらけ	(7.0)	(5.2)	1.9	
	14	遺構49	かわらけ	(8.2)	(5.6)	1.8	
	15	遺構49	かわらけ	(7.2)	(4.8)	1.8	

(単位はcm)

図版No.	No.	出土地	種別	口径(長さ)	底径(幅)	器高(厚み)	備考
15	16	遺構49	かわらけ	(7.4)	(5.0)	1.8	
17		遺構49	かわらけ	(7.7)	(5.0)	1.9	
18		遺構49	木製品 箸	(13.2)	0.7	0.5	
19		遺構49	木製品 箸	(14.9)	0.7	0.5	
20		遺構50	かわらけ	(7.6)	(5.0)	1.65	
21		遺構50	かわらけ	(6.9)	(4.2)	1.55	
22		遺構50	かわらけ	(6.2)	(4.4)	1.95	
23		遺構50	かわらけ	(7.3)	(5.0)	1.9	
24		遺構51 常滑窯 片口鉢Ⅰ類					外外面に薄く油膜痕
25		遺構51	かわらけ	(11.8)	(6.6)	3.8	
26		遺構51	かわらけ	(12.3)	(7.0)	3.3	
27		遺構51	かわらけ	(7.2)	(5.2)	1.45	
28		遺構60 青磁 折縁皿					竜泉窯
29		遺構60	規矩 壺				
30		遺構60	常滑窯 片口鉢Ⅱ類				
31		遺構60	かわらけ	12.3	7.5	3.5	
32		遺構60	かわらけ	(7.5)	(5.0)	1.7	
33		遺構60	木製品 箸	(20.5)	0.7	0.6	
16	1	第4面面上	かわらけ				
	2	第4面面上	綠釉陶器 盆				泉州窯系
3		第4面面上	かわらけ	(7.6)	(5.6)	1.7	
4		第4面面上	かわらけ	(8.0)	(5.9)	1.55	
5		第4面面上	木製品 用途不明	6.8	2.05	1.8	
6		第4面面上	木製品 用途不明	6.8	2.55	1.2	
7		第4面面上	木製品 箸	(15.7)	0.7	0.5	
8		第4面面上	木製品 箸	(15.8)	0.55	0.45	
9		第4面面上	木製品 箸	18.3	0.7	0.4	
10		第4面面上	木製品 用途不明	23.9	0.9	0.7	
11		第4面構成土	青白磁 水注				
12		第4面構成土	白磁 壺				
13		第4面構成土	褐釉 壺				
14		第4面構成土	瀬戸窯 天目茶碗	(11.8)			
15		第4面構成土	常滑窯 片口鉢Ⅱ類				
16		第4面構成土	常滑窯 壺口縁部辺				
17		第4面構成土	かわらけ	(4.8)	(3.4)	1.0	
18		第4面構成土	かわらけ	(6.6)	(5.4)	1.5	
19		第4面構成土	かわらけ	(7.8)	(5.6)	1.6	
20		第4面構成土	かわらけ	(7.6)	(5.3)	1.65	
21		第4面構成土	かわらけ	(7.4)	(5.8)	1.8	外外面口唇部に油膜痕
22		第4面構成土	かわらけ	(8.0)	(6.0)	1.55	
23		第4面構成土	かわらけ	(10.8)	(7.8)	2.95	
24		第4面構成土	かわらけ	(11.3)	(6.8)	3.15	
25		第4面構成土	かわらけ	(11.4)	(6.9)	3.05	
26		第4面構成土	かわらけ	(11.4)	(7.4)	3.75	
27		第4面構成土	かわらけ		(7.4)		内底面に赤色顔料付着
28		第4面構成土	常滑窯 転用品				断面磨耗
29		第4面構成土	石製品 砧石	8.3	3.3	3.5	
30		第4面構成土	木製品 箸	20.5	0.7	0.5	
31		第4面構成土	木製品 箸	19.95	0.9	0.4	
32		第4面構成土	木製品 箸	20.45	0.7	0.4	
33		第4面構成土	木製品 箸	19.95	0.8	0.5	
34		第4面構成土	木製品 箸	21.8	0.7	0.5	
35		第4面構成土	木製品 箸	(20.8)	0.75	0.6	
36		第4面構成土	木製品 箸	(18.2)	0.6	0.4	

(単位はcm)

図版No.	No.	出土地	種別	口径(長さ)	底径(幅)	器高(厚み)	備考
16	37	第4面構成土	木製品 箸	(19.4)	0.6	0.7	
	38	第4面構成土	木製品 箸	(19.6)	0.6	0.5	
	39	第4面構成土	木製品 板草履	(17.2)	(10.75)	0.35	
18	1	第5面構成土	青磁錦蓮弁文碗				童泉窯
	2	第5面構成土	常滑窯 片口鉢 I類				
	3	第5面構成土	常滑窯 片口鉢 I類				
	4	第5面構成土	常滑窯 壺				
	5	第5面構成土	常滑窯 片口鉢 I類				内面油煤痕
	6	第5面構成土	常滑窯 片口鉢 I類 (33.2)				内壁一部油煤痕
	7	第5面構成土	木製品 用途不明	5.5	2.25	0.2	
	8	第5面構成土	木製品 板折敷	(14.6)	3.3	0.45	
	9	第5面構成土	木製品 板草履	(14.5)	4.6	0.4	
19	1	第6面構成土	かわらけ	4.95	4.1	0.9	
	2	第6面構成土	かわらけ	7.4	5.45	1.55	外面部口唇部油煤痕
	3	第6面構成土	かわらけ	(11.2)	(8.0)	3.1	
	4	第6面構成土	かわらけ	12.0	8.9	3.2	
	5	第6面構成土	木製品 玩具	(4.9)	2.4	1.0	
	6	第6面構成土	木製品 用途不明	(7.1)	1.3	0.8	
	7	第6面構成土	木製品 箸	(21.9)	0.6	0.5	
	8	第6面構成土	木製品 用途不明	20.6	0.95	0.9	斜めに刻み痕
	9	第7面構成土	白磁口兀碗				
	10	第7面構成土	白磁口兀皿				
	11	第7面構成土	瀬戸窯 四		(4.8)		
	12	第7面構成土	かわらけ	(6.8)	(4.8)	1.3	
	13	第7面構成土	かわらけ	(7.0)	(4.6)	1.6	
	14	第7面構成土	かわらけ	(11.6)	(7.8)	3.25	
	15	第7面構成土	かわらけ	(11.4)	(8.0)	3.3	
	16	第7面構成土	かわらけ	(11.6)	(7.2)	3.1	
	17	第7面構成土	木製品 板草履	(9.25)	(3.3)	0.5	
	18	第7面構成土	木製品 用途不明	13.5	2.1	1.0	
	19	第7面構成土	木製品 箸	19.05	0.6	0.6	
	20	第7面構成土	木製品 箸	19.55	0.65	0.4	
	21	第7面構成土	木製品 箸	(19.0)	0.5	0.5	
	22	第7面構成土	木製品 串状	(17.15)	0.9	0.6	
	23	第7面構成土	木製品 串状				
	24	表探	瀬戸窯 瓢	(27.2)			
	25	表探	常滑窯 片口鉢 I類				
	26	表探	かわらけ	(11.2)	(6.1)	3.15	
	27	表探	かわらけ	(7.2)	(5.2)	1.6	



第1面（東から）



第2面全景（西から）



第2面 造構 22



第2面 造構 12・13・22
(北から)



第3面 調査区西侧（西から）



第3面 造構 47（北から）



第4面 調査区西側（西から）



第4面調査区東側（東から）



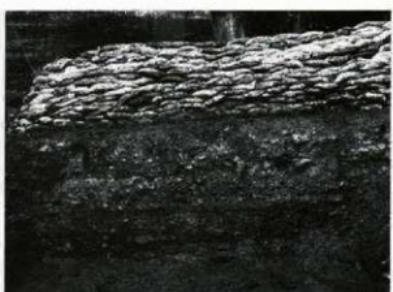
第4面 造構 60（東から）



第4面 造構 60（南から）



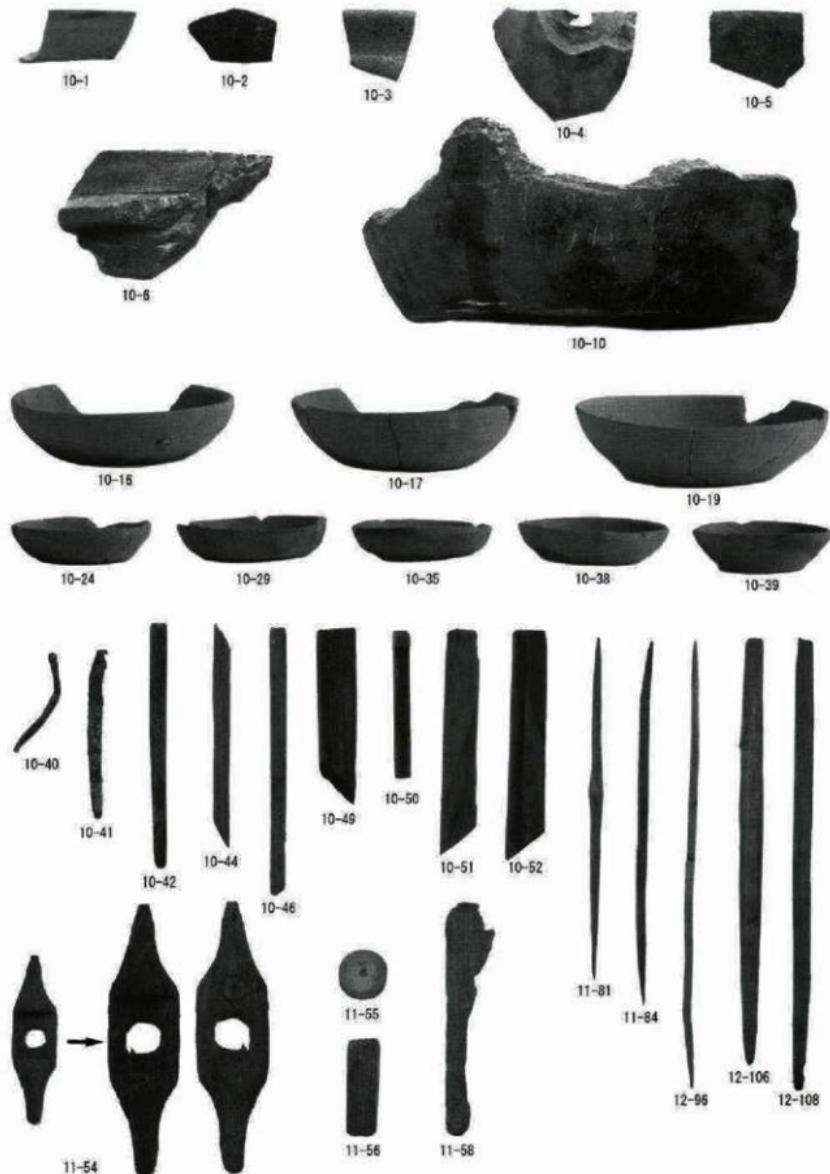
最終トレンチ（第5面～第7面）



調査区北壁堆積状況

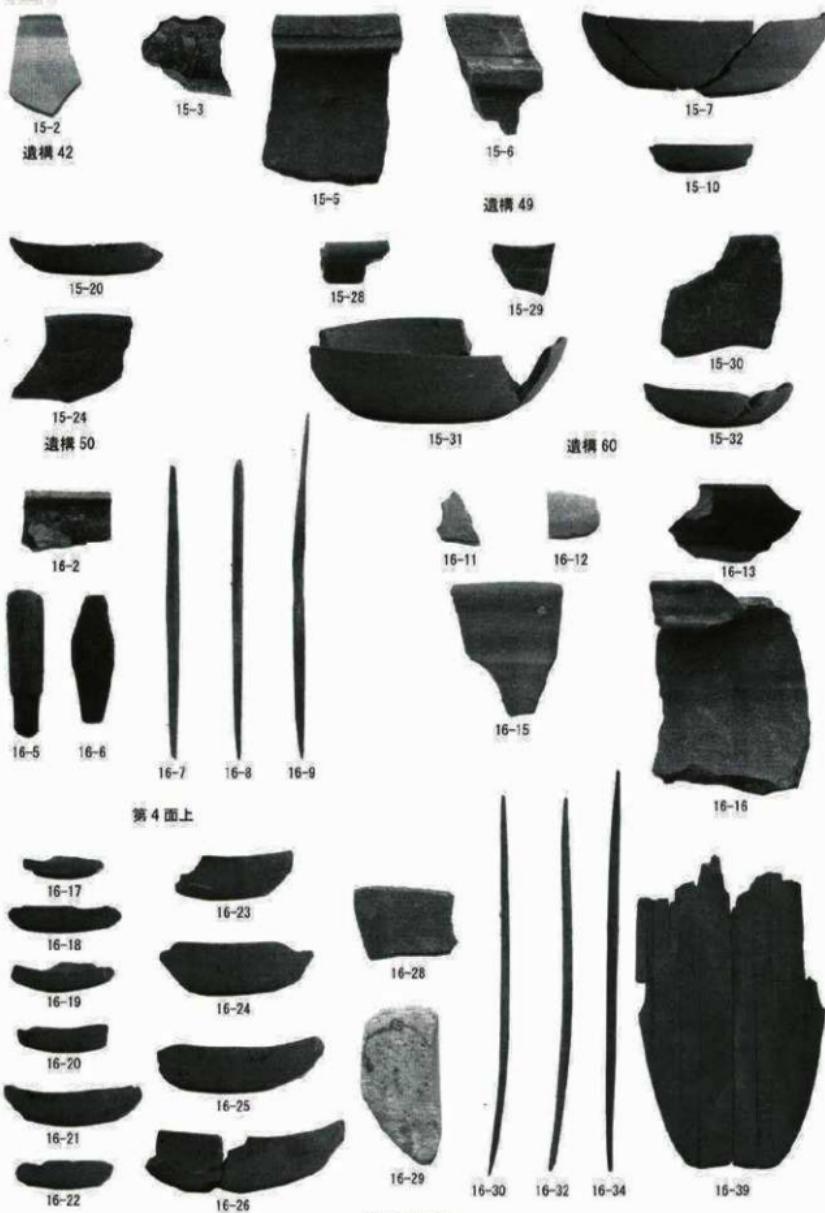
図版3





第3面構成土

図版 5



第4面構成土



第 6 面構成土

第 5 面構成土



第 7 面構成土



表土採集

報告書抄録

ふりがな	かまくらしまいぞうぶんかざいきんきゅうちょうさほうこくしょ						
書名	鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書						
副書名	平成21年度調査報告						
卷次	26(第1分冊)						
シリーズ名							
シリーズ番号							
編著者	原 廣志・宇都洋平/原 廣志/馬淵和雄・鍛治屋勝二・松原康子/ 原 廣志/伊丹まだか						
編集機関	鎌倉市教育委員会						
所在地	〒248-8686 鎌倉市御成町18番10号						
発行年月日	西暦2010年3月31日						
ふりがな	ふりがな	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
所収遺跡名	所在	地	市町村	道路番号			
宇津宮辻子幕府跡	神奈川県鎌倉市 小町二丁目 390番2外	14204	239	35° 31' 96"	139° 55' 37"	20040226 ~ 20040403	62.62 個人専用 住宅 (地下室)
北条時房・頼時邸跡	神奈川県鎌倉市 雪ノ下一丁目 236番1	14204	278	35° 32' 25"	139° 55' 34"	20040303 ~ 20040405	22.50 個人専用 住宅 (杭基礎構造)
北条小町邸跡	神奈川県鎌倉市 雪ノ下一丁目 440番の一部	14204	282	35° 32' 11"	139° 55' 56"	20040116 ~ 20040219	56.00 個人専用 住宅 (杭基礎構造)
下馬周辺遺跡	神奈川県鎌倉市 由比ガ浜二丁目 39番14	14204	200	35° 31' 47"	139° 54' 77"	20040511 ~ 20040531	20.00 個人専用 住宅 (杭基礎構造)
覚園寺旧境内遺跡	神奈川県鎌倉市 二階堂字会下 351番3	14204	435	35° 32' 91"	139° 56' 45"	20041027 ~ 20041210	30.00 個人専用 住宅 (杭基礎構造)

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
宇津宮辻子幕府跡	官衙跡	中世	方形堅穴建物跡、 井戸、土坑、柱穴等	貿易陶磁器、かわらけ、 国産陶器、金属製品	
北条時房・頼時邸跡	城館跡	中世	礎石建物跡、 苑池跡、土坑、 柱穴、溝跡等	貿易陶磁器、かわらけ、 国産陶器、木製品、 金属製品	
北条小町邸跡	城館跡	中世	掘立柱建物跡、 柱穴、土坑、溝跡等	貿易陶磁器、かわらけ、 国産陶器、木製品	
下馬周辺遺跡	都市遺跡	中世	掘立柱建物跡、 柱穴、道路跡、 溝跡等	貿易陶磁器、かわらけ、 国産陶器、瓦質製品、 石製品、金属製品、木製品等	
覚園寺旧境内遺跡	社寺跡	中世	柱穴、溝、土坑、 囲炉裏等	貿易陶磁器、かわらけ、 国産陶器、瓦質製品、 石製品、金属製品、木製品等	

報告書抄録

ふりがな	かまくらしまいぞうぶんかざいきんきゅうちょうさほうこくしょ						
書名	鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書						
副書名	平成21年度調査報告						
巻次	26(第1分冊)						
シリーズ名							
シリーズ番号							
編著者	原廣志・宇都洋平／原廣志／馬淵和雄・鍛冶屋勝二・松原康子／原廣志／伊丹などか						
編集機関	鎌倉市教育委員会						
所在地	〒248-8686 鎌倉市御成町18番10号						
発行年月日	西暦2010年3月31日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所取遺跡名	コード 市町村 遺跡番号	北緯 東經	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因	
宇津宮辻子幕府跡	神奈川県鎌倉市 小町二丁目 39番2号	14204 239	35° 31' 96"	139° 55' 37"	20040226 ～ 20040403	62.62	個人専用 住宅 (地下室)
北条時房・頼時跡	神奈川県鎌倉市 雪ノ下一丁目 236番1	14204 278	35° 32' 25"	139° 55' 34"	20040303 ～ 20040405	22.50	個人専用 住宅 (杭基礎構造)
北条小町邸跡	神奈川県鎌倉市 雪ノ下一丁目 440番の一部	14204 282	35° 32' 11"	139° 55' 56"	20040116 ～ 20040219	56.00	個人専用 住宅 (杭基礎構造)
下馬周辺遺跡	神奈川県鎌倉市 由比ガ浜二丁目 39番14	14204 200	35° 31' 47"	139° 54' 77"	20040511 ～ 20040531	20.00	個人専用 住宅 (杭基礎構造)
覚園寺旧境内遺跡	神奈川県鎌倉市 二階堂字会下 351番3	14204 435	35° 32' 91"	139° 56' 45"	20041027 ～ 20041210	30.00 50.00	個人専用 住宅 (杭基礎構造)

*令和6年1月12日報告書本文の内容に訂正(鎌倉市教育委員会)

所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
宇津宮辻子幕府跡	官衙跡	中世	方形堅穴建物跡、 井戸、土坑、柱穴等	貿易陶磁器、かわらけ、 国産陶器、金属製品	
北条時房・頼時跡	城館跡	中世	礎石建物跡、 苑池跡、土坑、 柱穴、溝跡等	貿易陶磁器、かわらけ、 国産陶器、木製品、 金属製品	
北条小町邸跡	城館跡	中世	掘立柱建物跡、 柱穴、土坑、溝跡等	貿易陶磁器、かわらけ、 国産陶器、木製品	
下馬周辺遺跡	都市遺跡	中世	掘立柱建物跡、 柱穴、道路跡、 溝跡等	貿易陶磁器、かわらけ、 国産陶器、瓦質製品、 石製品、金属製品、木製品等	
覚園寺旧境内遺跡	社寺跡	中世	柱穴、溝、土坑、 囲炉裏等	貿易陶磁器、かわらけ、 国産陶器、瓦質製品、 石製品、金属製品、木製品等	

鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 26
平成21年度発掘調査報告
(第1分冊)

発行日 平成22年3月31日

福 集 鎌倉市教育委員会
発 行

印 刷 テクノヤマモト